



# 国史跡 桜井古墳

保存整備事業報告書 調査編

2002

福島県原町市教育委員会





1 桜井古墳全景（北から）



2 桜井古墳全景（西から）



1 整備後の桜井古墳（南西から）



2 整備後の桜井古墳（北から）

## 序 文

桜井古墳は、原町市内を流れる新田川の南岸に築かれた東北地方でも有数の規模を誇る前方後方墳です。古墳は昭和31年に国の史跡に指定され、昭和63年に史跡範囲拡大の追加指定を受け、今日まで大切に保存されてきました。

原町市では、国指定史跡桜井古墳と周辺に所在する遺跡を市民の方々をはじめ、多くの人々に親しまれ、生涯学習の場としての活用を計るために、平成6年度から史跡範囲の公有化や整備計画の策定などの準備作業を行ってきました。また、平成10年度から平成12年度の3ヵ年をかけて、桜井古墳が築造された当時の姿を再現するためのデータを収集することを目的とした発掘調査を実施しました。その結果、桜井古墳の墳丘規模や構造が明らかになり、大きな成果を収めることができました。後方部3段、前方部無段で構成される墳丘の全長は74.5mを計測し、墳丘の周囲には最大幅20mを測る大規模な周溝が巡っています。後方部の墳頂部には底部穿孔二重口縁壺が並べられ、墳頂部の中央には2基の棺の痕跡が確認されました。特に前方部前線の南側の周溝部では陸橋を確認し、後方部西斜面には棺の埋葬のために使用した墓道と呼ばれる施設を確認したことにより、桜井古墳の被葬者を埋葬する際の様子が明らかになり、学術的にも貴重な成果を上げることができました。

本書は、これらの調査成果をとりまとめたものです。今後、桜井古墳の学術的な価値を多くの方々に知っていただく一助となれば幸いに存じます。

発掘調査や報告書作成を進めるにあたっては、地元の方々を始めとする市民の皆様方、保存整備指導委員会の諸先生をはじめ、関係各位より多大なるご助言、ご指導を賜りました。心より厚く御礼申し上げます。

平成14年3月

原町市長 鈴木寛林



## 例 言

- 1) 本報告書は、平成10年度から平成12年度にかけて実施した国史跡桜井古墳の発掘調査の報告書である。
- 2) 発掘調査は、国史跡桜井古墳の保存、整備を目的とした桜井古墳保存整備事業の一環として実施され、墳丘復元に関する資料を得るために実施した。
- 3) 本事業の実施にかかる経費は、文化庁国庫補助金、福島県費補助金の交付を受け、また原町市が負担した。
- 4) 本事業の実施については桜井古墳保存整備指導委員会を組織し、文化庁文化財保護部記念物課ならびに福島県教育庁文化課の指導のもとに進めた。

桜井古墳保存整備事業にかかる整備指導委員会ならびに事務局体制は以下のとおりである。

### 桜井古墳保存整備指導委員会

職 名	氏 名	担当分野	所 属
委員長	大塚 初重	考 古	明治大学教授（平成6年度～平成9年度） 明治大学名誉教授（平成9年度～）
委 員	塩田 敏志	造 園	東京農業大学教授
委 員	玉川 一郎	考 古	福島県立原町高等学校教諭 （平成6年度～平成9年度） 福島県立富岡養護学校教頭（平成13年度～）
委 員	小林 敬一	都市計画	東北芸術工科大学助教授
委 員	西 徹雄	歴 史 学	原町市教育委員会文化課 文化財保護係調査員（平成6年度）

### 指 導 ・ 助 言

氏 名	所 属	職 名	年 度
増測 徹	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成6年度
西村 健彦	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成7年度
岸本 直文	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成8年度
伊藤 正義	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成9年度
小林 克	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成9年度
磯村 幸男	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成10・11年度
本中 眞	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成12・13年度
坂井 秀弥	文化庁文化財保護部記念物課	文化財調査官	平成12・13年度
荒木 隆	福島県教育庁文化課	文化財主査	平成6・7年度
穴戸 弘治	福島県教育庁文化課	文化財主査	平成8・9・10年度
玉川 一郎	福島県教育庁文化課	文化財主査	平成10・11・12年度
長島 雄一	福島県教育庁文化課	文化財主査	平成11・12・13年度
佐藤 耕三	福島県教育庁文化課	文化財主査	平成9年度
西 徹雄	野馬追の里歴史民俗資料館 野馬追の里原町市立博物館	館 長	平成8年度 平成9年度



事 務 局 体 制

	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度
教 育 長	渡部 秀夫	渡部 秀夫	井村 寛	千葉 良則	鈴木 清身	鈴木 清身	鈴木 清身	鈴木 清身
教育次長・事務局長	中田 幸夫	横山 英夫						木幡 新一
生涯学習部長・理事			中善寺敏行	中善寺敏行	佐藤 一男	佐藤 一男	渡部紀佐夫	渡部紀佐夫
生涯学習部次長・事務局次長			佐藤 禎一	佐藤 禎一	渡部紀佐夫	阿部 敏夫	阿部 敏夫	阿部 敏夫
文化課長・文化財課長	佐藤 一男	佐藤 一男	佐藤 一男	大内 勝	阿部 敏夫			
主幹兼市史編纂室長				高倉 一夫	高倉 一夫	高倉 一夫	高倉 一夫	高倉 一夫
係 長	鈴木 吉久	高田 毅	高田 毅	高田 毅	山家 正勝	堀 耕平	堀 耕平	堀 耕平
係 員	平田 良親	木幡 雅巳	木幡 雅巳	木幡 雅巳	木幡 雅巳	山内 茂樹	山内 茂樹	渡辺 芳信
	堀 耕平	鈴木 文雄	鈴木 文雄	鈴木 文雄	鈴木 文雄	鈴木 文雄	鈴木 文雄	二本松文雄
	斎藤 直之	堀 耕平	堀 耕平	堀 耕平	堀 耕平	荒 淑人	北山 淑英	北山 淑英
	館岡 るみ	館岡 るみ	荒 淑人	荒 淑人	荒 淑人	佐藤 祐太	荒 淑人	荒 淑人
			館岡 るみ	綱川 裕子	安達 訓仁	岩谷こずえ	藤木 海	藤木 海
					久松 舞子	狭川 麻子	狭川 麻子	狭川 麻子
					綱川 裕子	小林美枝子	小林美枝子	小林美枝子

- 5) 本古墳の地形測量図作成およびトラバース測量・基準杭の設置にあたっては、㈱日建に委託した。
- 6) 本調査を実施するにあたっては物理探査を実施した。物理探査はアジア航測株式会社に委託し、赤外線航空撮影ならびに地中レーダー探査をおこなった。
- 7) 本古墳の調査において実施した空中写真撮影は、アジア航測株式会社・有限会社東邦企画に委託した。
- 8) 本報告書に掲載した遺構の写真は鈴木文雄・荒 淑人・佐藤祐太・岩谷こずえ・吉田陽一が撮影し、遺物の写真は荒 淑人が撮影した。
- 9) 本報告書に掲載した遺構の測量図は鈴木文雄・荒 淑人・安達訓仁・久松舞子・佐藤祐太・岩谷こずえ・吉田陽一が作成した。
- 10) 本報告書に掲載した遺物の整理および実測図作成・トレースは荒 淑人・狭川麻子・三瓶秀文・吉田陽一・安達訓仁・久松舞子・佐藤祐太・岩谷こずえ・阿部美智代・遠藤和子・遠藤実恵子・太田正子・木幡君子・狭川なつみ・新川幸子・寺内美智子・古谷洋子・山本恵子が行った。
- 11) 本報告書の文章は鈴木文雄・荒淑人が分担して執筆した。文責は文末に記しているが、全体的な編集は荒が行ったため、最終的な文責は荒にある。なお付章物理探査はアジア航測株式会社が行った。
- 12) 本古墳の発掘調査に際しては、3度の現地説明会を開催し現地説明会資料を配布したが、調査に係る事実記載については、本報告書の内容を優先する。
- 13) 発掘調査並びに報告書刊行にあたっては、次の方々及び機関よりご指導・ご協力頂いた。記して感謝の意を申し上げる。

文化庁文化財部記念物課（文化庁文化財保護部記念物課）・独立行政法人文化財研究所奈良

文化財研究所（奈良国立文化財研究所）・福島県教育庁文化課・福島県立博物館・兵庫県神戸市教育委員会・京都府綾部市教育委員会・京都府加悦町教育委員会・静岡県静岡市教育委員会・藤枝市郷土博物館・浜松市博物館・伊場遺跡資料館・岩手県水沢市埋蔵文化財調査センター・岩手県胆沢町教育委員会・宮城県涌谷町教育委員会・東京工業大学・東北学院大学考古学ゼミナール・古環境研究所・東北芸術工科大学・原町市高見町行政区・原町市上洪佐行政区・洪佐地区は場整備施工委員会

青山弘樹／甘粕 健／有馬義人／猪狩忠雄／石野博信／石見和泰／飯村 均／遠藤 等／大谷 基／大西智和／大平 聡／岡田茂弘／岡田清一／小黑智久／小野田義和／上村俊雄／亀井宏司／川田 強／菊地芳郎／菊地倫征／岸本直文／木本元治／工藤 博／工藤雅樹／黒田篤史／近藤義郎／今野 徹／木幡進太郎／齋藤美穂／佐藤公保／佐藤伝司／三瓶秀文／嶋原靖彦／島田綾子／鈴木 啓／鈴木芳英／関根達人／早田 勉／高橋聖絵／高橋 満／玉川一郎／丹治篤嘉／辻 秀人／仲野 浩／中村五郎／中村直子／西 徹雄／寺島文隆／平岡和夫／藤沢 敦／藤原紀敏／古谷 毅／本田泰貴／松田隆嗣／松田敏也／松本和子／松本 茂／森 浩一／森 幸彦／柳沼賢治／安田 稔／柳原知子／吉田博行／渡辺清子

(敬称略)

- 14) 本古墳の発掘調査に際しては以下の作業員が参加した。

発掘作業

青田 翠／阿部定雄／天野クニ子／五十嵐フミ子／岩井幸男／宇佐美實／宇佐美茂子  
遠藤紀子／大石順二郎／小川美紀子／押野己之助／大内スミ子／大竹裕一／大野利雄  
小此木越雄／加賀田勇一／北原 洋／草野ヤイ子／桑折 忠／木幡一征／木幡春江  
酒井和秋／佐藤 昭／(故) 佐藤時雄／(故) 佐藤敏雄／佐藤フクイ／佐藤文江  
佐藤正三／志賀愛子／志賀セツ子／志賀秀夫／新開光子／杉浦桂子／鈴木清身  
鈴木孝雄／鈴木康雄／鈴木伸子／鈴木時江／諏佐忠男／高井孝子／高玉 親／武山民男  
但野十九／但野好子／新妻順子／新妻孝子／西 幸吉／西 敏子／番場秀秋／藤田正司  
星 祐教／益山富士子／三坂サダイ／門馬竹子／門馬トミ／門馬 誠／門馬正光  
山田英子／山田春雄／山邊瑞秋／山本邦己／渡部和子

整理作業

遠藤和子／遠藤実恵子／新川幸子／狭川なつみ／三瓶秀文／太田正子／寺内美智子／野沢成子／古谷洋子／山本恵子／吉田陽一

- 15) 本古墳の調査にかかる一切の資料は、原町市教育委員会が保管している。  
16) 本報告書作成に際し参考並びに引用した文献については、巻末にまとめて記載した。

## 凡 例

- 1) 本書の遺構図及び遺物図の用例は次のとおりである。
  - (1) 方位 図中の方位は真北を示す。
  - (2) 縮尺 遺構の縮尺率は古墳全体図を1/400、トレンチ配置図を1/400、各トレンチは1/100・1/200遺物の出土状況図を1/20で記載した。  
遺物の縮尺率は1/1・1/2・2/3・1/3で記載し、それぞれの挿図の縮尺率とスケールを下に示した。
  - (3) 遺構断面図に示した水系レベルは海拔高度を示す。
  - (4) 古墳全体図で示した実線は等高線・一点鎖線は削平による傾斜変換線・点線は傾斜変換線を表し、遺構の実測図中で示した実線は傾斜変換線を表し、一点鎖線は旧表土層を表している。
  - (5) 土層断面図の層位は11・12のアラビア数字で表示した。
  - (6) 土器の実測図において使用したスクリーントーンは以下の内容を示す。



赤彩範囲  
(アミ20%)



黒色処理  
(アミ40%)



陶器断面  
(アミ20%)



須恵器断面  
(黒ベタ)

# 目 次

序 文  
例 言  
凡 例  
目 次  
挿図目次  
図版目次

第1章 調査に至る経過 .....	1
第1節 保存整備計画 .....	1
第1項 史跡の指定 .....	1
第2項 保存計画 .....	2
第2節 調査の目的と調査要項 .....	3
第1項 調査目的 .....	3
第2項 調査要項 .....	3
第2章 桜井古墳を取り巻く環境 .....	5
第1節 原町市を取り巻く地理的環境 .....	5
第1項 地理的環境 .....	5
第2節 原町市を取り巻く歴史的環境 .....	6
第1項 歴史的環境 .....	6
第2項 原町市内の古墳時代の遺跡 .....	13
第3項 桜井古墳群 .....	16
第3章 桜井古墳の調査 .....	25
第1節 調査経過 .....	25
第1項 1次調査 .....	25
第2項 2次調査 .....	25
第2節 3次調査 .....	35
第1項 測量調査 .....	35
第2項 発掘調査 .....	36
(1) 11トレンチ .....	36
(2) 12トレンチ .....	38
(3) 13トレンチ .....	39
(4) 14トレンチ .....	41
(5) 15トレンチ .....	42
(6) 16トレンチ .....	48
(7) 17トレンチ .....	55
(8) 18トレンチ .....	62
(9) 19トレンチ .....	63
(10) 20トレンチ .....	64

(11) 21トレンチ	67
(12) 22トレンチ	70
(13) 23トレンチ	74
(14) 24トレンチ	85
(15) 25トレンチ	86
(16) 26トレンチ	87
(17) 27トレンチ	87
(18) 28トレンチ	88
(19) 29トレンチ	88
(20) 30トレンチ	90
(21) 1号土坑	91
(22) 2号土坑	92
(23) 3号土坑	92
(24) 4号土坑	92
(25) 5号土坑	92
(26) 土器埋設遺構	92
第3項 出土遺物	93
(1) 土師器	93
(2) 縄文土器	108
(3) 弥生土器	110
(4) 須恵器	113
(5) 近世陶磁器	114
(6) 打製石器	115
(7) 磨製石器	117
(8) 装身具	124
第4章 物理探査	125
はじめに	125
第1節 赤外線撮影	126
第1項 赤外線カラー空中写真撮影	126
第2項 赤外線カラー空中写真判読	129
第2節 地中レーダー探査	134
第1項 はじめに	134
第2項 作業報告	137
第3項 地中レーダー探査	138
第4項 探査結果	143
第5章 まとめ	145
第1節 墳丘構造	145
第2節 埋葬施設・墓道	155
第3節 周溝・陸橋	156
第4節 出土遺物	157

報告書抄録  
 奥 付 け

## 挿 図 目 次

図1	墳丘分布図(昭和39)	2	図35	18トレンチ全体図	59
図2	原町市地質図	4	図36	18トレンチ詳細図(1)	60
図3	原町市主要遺跡位置図	11	図37	18トレンチ詳細図(2)	61
図4	古墳時代関連遺跡位置図	17	図38	18トレンチ位置図	62
図5	桜井古墳群古墳分布図	19	図39	19トレンチ位置図	63
図6	高見町支群調査平面図	22	図40	19トレンチ全体図	63
図7	上流佐支群調査平面図	24	図41	19トレンチ詳細図	64
図8	桜井古墳墳丘測量図(1)	25	図42	20トレンチ位置図	65
図9	桜井古墳墳丘測量図(2)	26	図43	20トレンチ全体図	66
図10	桜井古墳・上流佐支群2号墳	27	図44	20トレンチ詳細図	66
図11	トレンチ配置図	29	図45	21トレンチ位置図	67
図12	調査全体図	31	図46	21トレンチ全体図	68
図13	墳丘縦断・横断図	33	図47	21トレンチ詳細図	69
図14	11トレンチ位置図	36	図48	22トレンチ位置図	70
図15	11トレンチ	37	図49	22トレンチ全体図	71
図16	12トレンチ	38	図50	22トレンチ詳細図(1)	72
図17	12トレンチ位置図	38	図51	22トレンチ詳細図(2)	73
図18	13トレンチ位置図	39	図52	23トレンチ位置図	74
図19	13トレンチ	40	図53	A区位置図	75
図20	13トレンチ土器出土状況図	41	図54	A区詳細図	76
図21	14トレンチ位置図	41	図55	B区詳細図	77
図22	15トレンチ位置図	42	図56	C区位置図	78
図23	14トレンチ	43	図57	C区詳細図	79
図24	15トレンチ全体図	45	図58	E区詳細図	83
図25	15トレンチ詳細図(1)	46	図59	24トレンチ位置図	85
図26	15トレンチ詳細図(2)	47	図60	24トレンチ詳細図	86
図27	16トレンチ位置図	48	図61	25トレンチ位置図	86
図28	16トレンチ全体図	49	図62	25トレンチ詳細図	87
図29	16トレンチ詳細図(1)	51	図63	28トレンチ詳細図	88
図30	16トレンチ詳細図(2)	53	図64	29トレンチ詳細図	89
図31	17トレンチ位置図	55	図65	30トレンチ詳細図	90
図32	17トレンチ全体図	56	図66	1号土坑詳細図	91
図33	17トレンチ詳細図(1)	57	図67	土器埋設遺構詳細図	93
図34	17トレンチ詳細図(2)	58	図68	二重口縁壺(1)	95

図69	二重口縁壺 (2)	97	図103	東側埋葬施設探査データ	139
図70	二重口縁壺 (3)	99	図104	西側埋葬施設探査データ	139
図71	底部穿孔壺 (1)	101	図105	後方部東側裾部探査データ	139
図72	底部穿孔壺 (2)	102	図106	周溝部探査データ (1)	140
図73	円形浮文土器	103	図107	周溝部探査データ (2)	140
図74	その他の土師器 (1)	105	図108	周溝部探査データ (3)	141
図75	その他の土師器 (2)	106	図109	周溝部探査データ (4)	141
図76	その他の土器	107	図110	周溝部探査データ (5)	142
図77	縄文土器	109	図111	くびれ部探査データ (1)	142
図78	弥生土器 (1)	111	図112	くびれ部探査データ (2)	143
図79	弥生土器 (2)	112	図113	探査箇所位置図	144
図80	近世陶磁器	114	図114	調査全体図 (地形)	147
図81	石鍬	115	図115	調査全体図 (コンタ)	149
図82	石斧	116	図116	墳丘復元図	153
図83	扁平片刃石斧	118	図117	二重口縁壺分類 (1)	159
図84	石庖丁	120	図118	二重口縁壺分類 (2)	161
図85	太形蛤刃石斧	121	図119	二重口縁壺分類 (3)	163
図86	石ノミ	122	図120	上法佐支群7号墳出土遺物	165
図87	石斧	123	図121	二重口縁壺出土例 (1)	166
図88	装身具	124	図122	二重口縁壺出土例 (2)	167
図89	赤外線カラー写真	125	図123	二重口縁壺出土例 (3)	168
図90	赤外線カラー写真	126	図124	桜井古墳出土土師器	169
図91	空中写真撮影コース	127	図125	高見町A遺跡出土遺物 (1)	171
図92	判読写真 (赤外線)	128	図126	高見町A遺跡出土遺物 (2)	172
図93	判読写真 (ナチュラルカラー)	129	図127	高見町A遺跡出土遺物 (3)	173
図94	判読写真	130	図128	桜井古墳出土土器	176
図95	判読写真	131	図129	桜井式土器出土例	178
図96	埋葬施設例	132	図130	桜井古墳出土土器 (1)	181
図97	探査判読全体図	133	図131	桜井古墳出土土器 (2)	183
図98	ナチュラルカラー写真	134	図132	桜井遺跡出土土器 (1)	184
図99	ナチュラルカラー写真	135	図133	天神沢遺跡出土土器 (1)	185
図100	赤外線カラー写真	136	図134	桜井遺跡出土土器 (2)	186
図101	赤外線カラー写真	137	図135	桜井遺跡出土土器 (3)	187
図102	探査箇所位置図	138			

## 図 版 目 次

<p>巻頭図版 1</p> <p>1 桜井古墳全景 (北から)</p> <p>2 桜井古墳全景 (西から)</p> <p>巻頭図版 2</p> <p>1 整備後の桜井古墳 (南西から)</p> <p>2 整備後の桜井古墳 (北から)</p> <p>図版 191 .....</p> <p>1 上空から見た桜井古墳周辺</p> <p>図版 2 .....</p> <p>1 桜井古墳全景 (南から)</p> <p>2 桜井古墳全景 (真上から)</p> <p>図版 3 .....</p> <p>1 整備後の桜井古墳 1 (西から)</p> <p>2 整備後の桜井古墳 2 (西から)</p> <p>図版 4 .....</p> <p>1 平成10年度調査状況 1 (北から)</p> <p>2 平成10年度調査状況 2 (北西から)</p> <p>図版 5 .....</p> <p>1 平成11年度調査状況 (南から)</p> <p>2 平成11年度調査状況 (北西から)</p> <p>図版 6 .....</p> <p>1 平成11年度調査状況 (真上から)</p> <p>2 平成11年度調査状況 (北東から)</p> <p>図版 7 .....</p> <p>1 平成11年度調査状況 (後方部)</p> <p>2 平成11年度調査状況 (前方部)</p> <p>図版 8 .....</p> <p>1 平成12年度調査状況 (真上から)</p> <p>2 平成12年度調査状況 (後方部)</p> <p>図版 9 .....</p> <p>1 11T 調査状況</p> <p>2 11T 調査状況</p> <p>図版 10 .....</p> <p>1 後方部北東コーナー検出状況</p> <p>2 後方部北東コーナー検出状況</p> <p>図版 11 .....</p> <p>1 12T 調査状況</p> <p>2 12T 調査状況</p>	<p>図版 12 .....</p> <p>1 14T 後方部南東コーナー検出状況</p> <p>2 14T 後方部南東コーナー検出状況</p> <p>図版 13 .....</p> <p>1 18T くびれ部検出状況</p> <p>2 18T くびれ部検出状況</p> <p>図版 14 .....</p> <p>1 15T くびれ部検出状況</p> <p>2 15T 前方部南斜面</p> <p>図版 15 .....</p> <p>1 15T 後方部西斜面 (北から)</p> <p>2 15T 後方部西斜面 (南から)</p> <p>図版 16 .....</p> <p>1 15T くびれ部堆積状況</p> <p>2 15T 礫出土状況</p> <p>図版 17 .....</p> <p>1 16T 調査状況</p> <p>2 16T 前方部西斜面</p> <p>図版 18 .....</p> <p>1 16T 前方部円形遺構</p> <p>2 16T 野馬土手基底部</p> <p>図版 19 .....</p> <p>1 16T 前方部西斜面</p> <p>2 16T 前方部西斜面</p> <p>図版 20 .....</p> <p>1 16T 前方部南斜面</p> <p>2 16T 焼土土坑</p> <p>3 16T 前方部南側周溝</p> <p>4 16T 前方部南側周溝土器出土状況</p> <p>図版 21 .....</p> <p>1 16T 前方部西側周溝内周</p> <p>2 16T 前方部西側周溝外周</p> <p>図版 22 .....</p> <p>1 17T 前方部北側墳丘ケズリ出し</p> <p>2 前方部北側前縁検出状況</p> <p>図版 23 .....</p> <p>1 17T 前方部検出状況</p> <p>2 17T 前方部周溝外周</p>
--	---



図版24	214	図版36	226
1 18T後方部西斜面下段平坦面		1 22T後方部北側斜面	
2 18T後方部西斜面第3斜面		2 22T後方部北側斜面	
図版25	215	図版37	227
1 18T後方部北西コーナー		1 22T後方部北斜面上段平坦面	
2 18T後方部西斜面		2 22T後方部北斜面上段平坦面	
図版26	216	図版38	228
1 18T後方部北斜面		1 22T後方部北斜面上段平坦面 (拡張)	
2 18T後方部北西コーナー		2 22T後方部北斜面下段平坦面 (拡張)	
図版27	217	図版39	229
1 19T前方部北側墳丘		1 22T後方部北斜面	
2 19T墳丘ヶズリ出し状況		2 22T後方部北斜面土器出土状況	
図版28	218	3 22T後方部北斜面土器出土状況	
1 19T前方部墳丘検出状況		4 23T後方部東斜面	
2 19T前方部墳頂平坦面		図版40	230
3 19T前方部墳丘斜面		1 23T後方部東側状況	
4 19T前方部墳丘斜面		2 23T作業状況	
図版29	219	図版41	231
1 20T前方部南側墳丘斜面		1 23T前方部→後方部	
2 20T前方部墳丘掘削状況		2 23T後方部→前方部	
3 21T後方部南側墳丘斜面		3 16T・23T前方部西側周溝	
4 21T後方部墳丘斜面		4 23T(A区)後方部東側周溝	
図版30	220	図版42	232
1 21T後方部南斜面		1 墳頂平坦面検出状況	
2 21T後方部墳頂平坦面		2 墳頂平坦面検出状況	
図版31	221	図版43	233
1 21T後方部墳頂平坦面		1 墳頂平坦面 掘立柱建物跡検出状況	
2 21T後方部南斜面		2 墳頂平坦面 掘立柱建物跡調査状況	
図版32	222	図版44	234
1 21T後方部南斜面		1 陥没坑と土器出土状況	
2 21T後方部南斜面		2 陥没坑と土器出土状況	
図版33	223	図版45	235
1 21T後方部南斜面掘削部		1 1号陥没坑	
2 21T後方部南斜面掘削部		2 1号陥没坑堆積状況	
図版34	224	図版46	236
1 21T後方部南側周溝		1 2号陥没坑	
2 21T後方部南側周溝		2 2号陥没坑	
図版35	225	図版47	237
1 22T後方部北側斜面		1 1号陥没坑火山灰検出状況	
2 22T後方部北側墳頂平坦面		2 墓域検出状況	

図版48 .....	238	図版60 .....	250
1 墓道検出状況		1 縄文土器 (1)	
2 墓塚検出状況		2 縄文土器 (2)	
図版49 .....	239	3 縄文土器 (3)・弥生土器 (1)	
1 墓道検出状況		4 縄文土器 (4)・弥生土器 (2)	
2 墓道断ち割り状況		5 弥生土器 (3)	
図版50 .....	240	6 弥生土器 (4)	
1 1号陥没坑検出状況		7 石器 (1)	
2 墓道検出状況 (平成11年度)		8 石器 (2)	
3 1号陥没坑調査状況		図版61 .....	251
4 墓道検出状況 (平成11年度)		1 二重口縁壺 (1)	
図版51 .....	241	2 二重口縁壺 (2)	
1 墳頂平坦面西辺		3 二重口縁壺 (3)	
2 墳頂平坦面東辺		4 二重口縁壺 (4)	
3 墳頂平坦面北辺		5 二重口縁壺 (5)	
4 墳頂平坦面南辺		6 二重口縁壺 (6)	
図版52 .....	242	7 二重口縁壺 (7)	
1 墳頂平坦面南東コーナー		8 二重口縁壺 (8)	
2 墳頂平坦面北東コーナー		図版62 .....	252
図版53 .....	243	1 二重口縁壺 (9)	
1 墳頂平坦面北西コーナー		2 二重口縁壺 (10)	
2 24T周溝外周検出状況		3 二重口縁壺 (11)	
図版54 .....	244	4 二重口縁壺 (12)	
1 墳頂平坦面墓 検出状況		5 二重口縁壺 (13)	
2 24T周溝検出状況		6 二重口縁壺 (14)	
3 墓 墓道検出状況		7 二重口縁壺 (15)	
4 28T調査状況		8 底部穿孔壺 (1)	
図版55 .....	245	図版63 .....	253
1 25T検出状況		1 二重口縁壺 (16)	
2 25T検出状況		2 底部穿孔壺 (2)	
図版56 .....	246	3 底部穿孔壺 (3)	
1 18T土器埋設遺構		4 底部穿孔壺 (4)	
2 18T土器埋設遺構		5 底部穿孔壺 (5)	
図版57 .....	247	6 底部穿孔壺 (6)	
1 墳頂平坦面土器出土状況		7 土師器壺	
2 墳頂平坦面土器出土状況		8 土師器壺	
図版58 .....	248	9 土師器壺	
1 土器出土状況		10 弥生土器壺	
2 土器出土状況		11 弥生土器甕	
図版59 .....	249	12 弥生土器壺	
1 15T 1号土坑遺物出土状況		13 弥生土器甕	
2 15T 1号土坑遺物出土状況			

图版64 ..... 254

- 1 土師器鉢
- 2 土師器杯 (1)
- 3 土師器杯 (2)
- 4 土師器器台 (1)
- 5 土師器高杯 (1)
- 6 土師器高杯 (2)
- 7 土師器高杯 (3)
- 8 土師器高杯 (4)
- 9 土師器高杯 (5)
- 10 土師器器台 (2)
- 11 土師器器台 (3)
- 12 土師器器台 (4)
- 13 土師器器台 (5)
- 14 土師器複合口緣 (1)
- 15 土師器複合口緣 (2)

图版65 ..... 255

- 1 墨書土器 (1)
- 2 墨書土器 (2)
- 3 墨書土器 (3)
- 4 墨書土器 (4)
- 5 墨書土器 (5)
- 6 墨書土器 (6)
- 7 土師器杯
- 8 土師器甕 (1)

- 9 土師器甕 (2)
- 10 土師器甕 (3)
- 11 土師器甕 (4)
- 12 須惠器壺
- 13 須惠器杯
- 14 中世陶器
- 15 弥生土器

图版66 ..... 256

- 1 近世磁器 (1)
- 2 近世磁器 (2)
- 3 近世陶器 (1)
- 4 近世陶器 (2)
- 5 近世陶器 (3)
- 6 近世陶器 (4)
- 7 近世陶器 (5)
- 8 近世陶器 (6)
- 9 近世陶器 (7)
- 10 近世陶器 (8)
- 11 近世陶器 (9)
- 12 近世陶器 (10)
- 13 近世陶器 (11)
- 14 近世陶器 (12)
- 15 玦状耳飾
- 16 管玉 (1)
- 17 管玉 (2)

# 第1章 調査にいたる経過

## 第1節 保存と保存整備計画

### 第1項 史跡の指定

桜井古墳の周辺は、昭和20年代以前はまだ雑木林で、林の中に桜井古墳を始め数十基の古墳が点在しており、地元では桜井古墳を狐塚と呼び古くから地域の人々にはその存在が知られていた。昭和20年代以降、国の植林政策・指導により、全国的に建築用材となる杉の植林が進められるようになり、民有林であった桜井古墳にも杉が植林されるようになった。

このような状況の中、地元の郷土史研究家の間で大きな古墳の存在が話題となり、1955年（昭和30年）に明治大学大塚初重氏が科学研究費の助成を受けて地形測量調査を実施した。この時の測量調査が桜井古墳の初めての調査となる。測量調査時には墳丘や古墳周囲に植林された杉はまだ幼木で、後方墳頂には白色粘土の散布が見られたことから、桜井古墳の埋葬施設は粘土槨であり、非常に浅い位置に位置していると推定された。

1956年（昭和31年）には、大塚氏が「前方後方墳の成立とその性格—東北地方の前方後方墳—」【駿台史学】6号のなかで、桜井古墳は墳丘の形態がその当時発見例が少なかった前方後方墳であり、規模も墳丘主軸長で75mを測り東北地方最大規模の前方後方墳であることを発表し、全国的な注目を受けた。なお、桜井古墳は現在の大字上洪佐に位置しているが、当時は前方部が大字桜井、後方部が大字洪佐に位置していたことから洪佐古墳とよばれたが、現在は桜井古墳と命名されている。

このような調査結果をもって、1956年（昭和31年）3月15日付けで史跡指定申請書が文化財保護委員会に提出され、同年11月7日には国の史跡に指定された。しかし、当時の桜井古墳全域は民有地であったことから、一部の地権者から史跡指定の同意が得られず史跡指定範囲は後方部と前方部の一部にとどまった。また、後方部南側には史跡指定以前に個人住宅が建設され、後方部南側の墳丘裾部は削平を受けていたため、史跡指定範囲は墳丘の削平部までとなった。翌年6月には史跡桜井古墳の管理団体として原町市が指定された。

1983年（昭和58年）には当初の史跡指定範囲ではカバーできなかった前方部前端的墳丘部及び古墳の周囲を巡ると思われる周溝部の追加指定の必要性から、玉川一郎氏による周溝の範囲確認のための確認調査が実施された。この周溝範囲確認調査の結果、桜井古墳は墳丘主軸長72m、周溝を含めた主軸長は88mの規模となり、周溝のほとんどが史跡指定範囲外に広がっており、周溝部を中心とした約5,000㎡の追加指定が必要となった。

この調査の成果をもって1988年（昭和63年）6月に前方部の未指定部と周溝範囲が追加指定され合計8285.45㎡が史跡の範囲となり保存されることとなった。

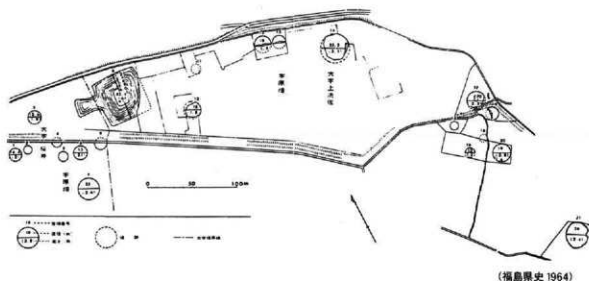


図1 墳丘分布図 (S 39)

## 第2項 保存計画

桜井古墳は4世紀に築造されたと考えられる大型の前方後方墳である。1956年(昭和31年)には国の史跡指定を受け、1988年(昭和63年)の追加指定によって史跡の指定面積は拡大された。しかし、古墳周辺の発掘調査が進むにつれ、周辺にも桜井古墳と時代を前後する古墳や住居跡が多数分布することが判明した。

この古墳時代につくられた一連の古墳群は桜井古墳群と称され、その分布する区域に応じて上渋佐支群と高見町支群と細分されている。桜井古墳は桜井古墳群の中でも最大規模の古墳であり、また唯一の前方後方墳であることから桜井古墳群の首長墓的な存在として考えられる。これまでは国の史跡に指定され、また多くの人々の努力や理解を受けて今日まで保存されてきたが、近年は当該地の市街化が著しく桜井古墳を中心とする古墳群の置かれてきた環境が大きく変貌しつつあった。そこで桜井古墳群が所在するこの地域を、改めて整備を行い遺跡の保存をより確かなものにするとともに、多くの人々が遺跡を通じ郷土の歴史に触れて理解を深めることのできる生涯学習の場にすることが望ましいと考えられた。

## 第2節 調査の目的と調査要項

## 第1項 調査目的

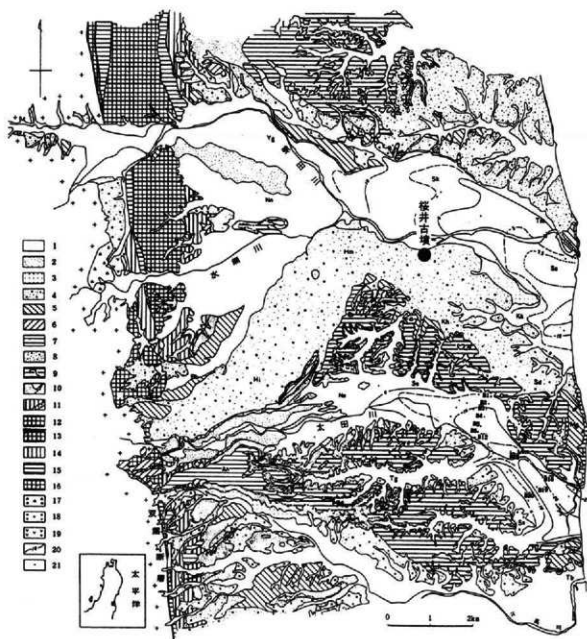
本古墳の発掘調査は、桜井古墳保存整備事業の一環として計画された。発掘調査は史跡指定範囲内においてトレンチによる調査区を設定し、桜井古墳の築造当時の姿を復元するためのデータを収集することを目的とした。発掘調査の計画や方針は「桜井古墳保存整備指導委員会」において検討され、原町市教育委員会が実施した。

## 第2項 調査要項

- 1 遺 跡 名 国指定史跡 桜井古墳
- 2 所 在 地 福島県原町市上渋佐字原畑
- 3 種 別 古墳（前方後方墳）
- 4 調 査 期 間 平成10年5月22日～平成10年11月17日  
平成11年4月9日～平成12年3月31日  
平成12年5月1日～平成13年2月9日
- 5 調 査 面 積 平成10年度980㎡・平成11年度1,350㎡・平成12年度830㎡  
合 計 3,160㎡
- 6 調 査 体 制 調査主体 原町市教育委員会  
調査担当 文化財課  
担 当 者 鈴木文雄（平成10年度）・荒 淑人（平成11・12年度）

## 7 事務局体制

	平成10年度	平成11年度	平成12年度
教 育 長	鈴木 清身	教 育 長 鈴木 清身	教 育 長 鈴木 清身
生涯学習部長	佐藤 一男	生涯学習部長 佐藤 一男	生涯学習部長 渡部紀佐夫
生涯学習部次長	渡部紀佐夫	生涯学習部次長 阿部 敏夫	生涯学習部次長 阿部 敏夫
文化課長	阿部 敏夫	文化課長 阿部 敏夫	文化課長 阿部 敏夫
市史編纂室長	高倉 一夫	市史編纂室長 高倉 一夫	市史編纂室長 高倉 一夫
文化振興係長	小田 幸夫	文化振興係長 小田 幸夫	主 査 北山 淑英
主 査	木幡 雅巳	主 査 山内 茂樹	文化振興係長 小田 幸夫
発掘調査係長	山家 正勝	発掘調査係長 堀 耕平	主 査 山内 茂樹
主 査	鈴木 文雄	主 査 鈴木 文雄	発掘調査係長 堀 耕平
主任文化財主事	堀 耕平	発掘調査員 佐藤 祐太	主 査 鈴木 文雄
発掘調査員	安達 調仁	発掘調査員 岩谷こずえ	発掘調査員 藤木 海
発掘調査員	久松 舞子	調査補助員 狭川 麻子	調査補助員 狭川 麻子
事務補助	綱川 裕子	事務補助 綱川 裕子	事務補助 小林美枝子
		事務補助 小林美枝子	



1: "沖積層", 2: 第6段丘構成層, 3: 第5段丘構成層, 4: 第4段丘構成層, 5: 第3段丘構成層, 6: 第2段丘構成層, 7: 第1段丘構成層, 8~11: 竜の口層, 8: 同c層(砂岩), 9: 同c層(シルト岩・京塚沢凝灰岩), 10: 同b層, 11: 同a層, 12~19: 基盤岩類, 12: 塩手層, 13: 小山田層, 14: 富沢層, 15: 中の沢層, 16: 新窪層, 17: 古生層, 18: 花崗岩類, 19: 脈岩, 20: 竜の口層上面標高(m), 21: ボーリング地点と孔番, Ah: 畦原, Bb: 馬場, Hi: 雲雀ヶ原, Hm: 原町市街, Ht: 東高松, Ka: 菅浜, Kh: 北原, Kk: 片倉, Mg: 間形沢, Mm: 米々沢, Nn: 長野, No: 中太田, Om: 大壑, Sd: 壺, Se: 下江井, Sk: 下北高平, So: 下太田, Ss: 下灰佐, Tb: 塚原, Tg: 鶴谷, Tm: 館前, Yg: 横上

図2 原町市地質図

## 第2章 桜井古墳をとりまく環境

### 第1節 原町市をとりまく地理的環境

#### 第1項 地理的環境

福島県原町市は、浜通り地方のいわゆる阿武隈高地東縁部東部の低地帯北方、相馬地方のほぼ中央に位置しており、東は太平洋に面し行政境としては、北は相馬郡鹿島町、南は小高町、西は飯館村・双葉郡浪江町と境界を接している。人口は約49,800人、面積は約199.66㎡で、当地方の産業及び政治面での中核都市となっている。主要交通網は南北方向に縦走するJR常磐線と国道6号線であり、仙台方面や市内などへの通勤・通学手段として利用されている。

原町市の地形は、西部域を南北方向に縦走する阿武隈高地、そこから派生する相双丘陵・常磐丘陵と称される標高100m以下の低丘陵、及び丘陵間に開析された沖積平野とで構成されている。全体として阿武隈高地にかかる西側が高く、東部にいくにつれて標高を下げている。阿武隈高地東縁部と浜通り低地帯と双葉丘陵地域（岩沼—久之浜構造線）によって地質的に明瞭に区分され、低地帯もまた断層以東の相双丘陵地域と以南の常磐丘陵地域とに区分されている。阿武隈高地は東西約50km・南北約200kmの規模を有し、古生代から新生代中頃新第三紀中新生に至る地質を有し、北上高地と並ぶ日本最古の地質構造を形成している。基盤層は古生代末期のアバラキア褶曲と中生代末期のララマイド褶曲に代表される二度に渡る世界的な造山運動の際に、古生層及び中生層に貫入した古期及び新期・最新期の花崗岩、変成岩類である。地形的には山頂がなだらかな隆起準平原を呈しており、原町市付近の標高は500～600m前後になっている。高地周辺では標高100～150m前後を測り、東延するにしたがって徐々に高度を下げ、海岸部では20～30mを測る。

阿武隈高地裾部から東に派生している低丘陵は、新生代第三紀に形成された固結度の低い凝灰岩質砂岩で構成されており、双葉断層により、上層部の相双丘陵（滝の口層）と中・下層の常磐丘陵地域とに区分されている。第四紀洪積世における氷河期と間氷期の海水準変動により、丘陵上には海成及び河成の段丘が構成され、高位より順に第1段丘、第2段丘、と命名されている。原町市内では埋没段丘を含む7段丘の存在が知られており、特に第1段丘である畦原段丘と第4段丘である雲雀ヶ原扇状地が発達しているが、他は河川上流域沿いに小規模に分布する在り方を呈している。低丘陵の間には、各河川が樹枝状に開析した谷間に土壌が埋没した沖積平野が入り込んでいる。標高は20m以下であり、縄文時代前期を中心とする海進期には海岸部の大部分が海水面下にあったと考えられており、大木2a式期の遺跡である萱浜の赤沼遺跡の調査では、海水面を標高6m前後に求めている。現在ではは場整備が進み、一面の美田地帯が形成されている。



## 第2節 原町市を取り巻く歴史的環境

### 第1項 歴史的環境

最近の原町市では、火力発電所建設や県営ほ場整備事業などの大規模開発が推進されており、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査により、従来不明であった弥生時代遺跡の在り方や、浜通り低地帯における律令期の政治動向を究明する一端となるような多大な成果が続々と報告されてきている。原町市では、これまでも分布調査や発掘調査を通じて遺跡の保存・活用に努めてきたが、今後増加の一途をたどるこれらの遺跡に対して、高一層の保存・活用の努力が求められているところである。

また、1995年（平成7年）には国指定重要無形民俗文化財「相馬野馬追」の繰り上げられる野馬追祭場地の東隣に「野馬追の里歴史民俗資料館」が建設された。1998年（平成10年）には「野馬追の里原町市立博物館」と名称変更され、当地方の歴史・民俗における生涯・社会教育の場として活動している。

原町市における旧石器時代の遺跡は現在のところ、遺跡の出土する散布地が9ヶ所知られている。立地条件を概観すると畦原A遺跡(1)、熊下遺跡(2)、袖原A遺跡(3)などは太田川流域の第1段丘面の畦原段丘上に所在し、陣ヶ崎A遺跡(4)、南町遺跡(5)、橋本町A遺跡(6)、桜井遺跡(7)などは第4段丘面の雲雀ヶ原扇状地に所在している。

縄文時代の遺跡は、早期末から前期初頭の住居跡の調査が行われた片倉の八重米坂A遺跡(8)、隣接する羽山B遺跡(9)などが阿武隈高地裾部に所在している(註1)。太田川を北に臨む第1段丘面に所在する片倉の畦原F遺跡(10)の調査(註2)では早期末から前期前葉の土坑3基が調査されている。この時期は、高地寄りに立地する遺跡がある一方で海浜側の微高地上に所在する遺跡も知られている。前期初頭大木2a式の土器片が出土した萱浜の赤沼遺跡(11)(註3)や前期前半の土器片が多量に発見された雫の犬道遺跡(12)は雲雀ヶ原扇状地の先端部の微高地上に所在しており、該期の古環境を知る上での貴重な成果を上げている。

中期の遺跡は、大木9～10式の土器片を多量に出土する押釜の前田遺跡(13)が阿武隈高地裾部の低位丘陵に立地しており、新田川流域の第3段丘面上に所在する上北高平の高松遺跡(14)周辺から西側の平坦面一帯は、末葉の大木8a～10式土器片を出土することで知られている。高松遺跡の東方約1km、同段丘面上に立地する植松A遺跡(15)では、1977年（昭和52年）の宅地造成に伴う発掘調査により、大木10式期の複式炉を伴う竪穴住居跡1棟が市内で初めて調査されている。

後期から晩期の遺跡は、大洞C1～A式期土器片を出土した片倉の羽山遺跡(16)などの遺跡が市内各地に所在している。1996年（平成8年）の宅地造成に伴う高見町A遺跡(17)の発掘調査では晩期中葉の埋設土器を伴う石囲炉の竪穴住居跡1軒が調査されている(註4)。浜通り低地帯の海岸部には多くの貝塚が所在しているが、原町市では全く確認されておらず、現在まで空白地帯となっているが、今後発見される可能性を秘めている。

弥生時代の遺跡は、東北地方南部の標式土器として使用されてきた中期末葉の桜井式土器を

出土する桜井遺跡(7) (註5) が知られていたが、最近の調査では、海岸部の丘陵の尾根部に小規模な集落を構成していた例や海浜寄りの低位丘陵中から土器や石甕丁が出土する例が報告されている。また、1993年(平成5年)に調査された高見町A遺跡(7)からは弥生時代の後期に位置付けられる十王台式土器を出土し、その北限となる竪穴住居跡が2棟発見されている(註6)。1996年(平成8年)に高平地区は場整備事業に伴う法幢寺跡(8)からは桜井式期の土器棺墓1基が調査されている。

古墳時代の遺跡では、最も古い時期の可能性が強いのが1996年(平成8年)に高平地区は場整備事業に伴う荒井前遺跡(9)の調査で発見された2基の方墳である。

古墳としては、前方後方墳として東北第4位の規模を誇る国指定史跡の桜井古墳(10)が新田川南岸の河岸段丘上に所在しており、周辺古墳と共に桜井古墳群(10)を構成している。

桜井古墳群では1969年から2000年にかけて発掘調査が行われ、この地域が弥生時代から古墳時代への変遷や古墳出現過程の解明、後期群集墳の成立過程など古墳文化を考える上で極めて重要な地域であることは判明している。

1995年(平成7年)には桜井古墳群上流佐支群の東側に隣接する前屋敷遺跡の発掘調査で、南小泉式から引田式期の住居跡が発掘され、大量の高杯と粗製小型丸型壺などが出土しており、桜井古墳群周辺では確実に古墳時代中期に人々が生活を営んでいることが確認された。

また、1996年(平成8年)には新田川北岸の低位丘陵の頂部に位置する、荷渡古墳群(11)で3基の山頂墳が調査され、いずれの主体部も割竹形木棺の直葬であることが確認されている。(註4)。その他、市内各地の丘陵上に古墳が築かれており、北泉の地藏堂古墳群(12)、江井の西谷地古墳群(13)、鶴谷の五治郎内古墳群(14)などが所在している。

太田川流域では1967年(昭和42年)に、中太田所在の主軸長約40mの前方後円墳と推定される与太郎内1号墳(15)の発掘調査が実施されたが埋葬施設などは確認されていない。

後期になると、当地方でも横穴が多く作られている。現在確認されている分布状況を見ると、鹿島町との境に近い新田川北部の上北高平には北沢横穴群(16)、京塚沢横穴群(17)、新山前横穴群(18)、北泉に大磯横穴群(19)、地藏堂横穴群(20)、太田川北部の上太田には道内迫横穴群(21)、大壺には西迫東迫横穴群(22)、幸には坂下横穴群(23)、太田川南部の高には、1965年(昭和40年)に調査された高林横穴群(24) (註9)などが河川流域の沖積平野を望む丘陵に所在しており、古墳の分布の在り方とはほぼ一致している。また、中太田の中畑横穴群(25)、羽山横穴群(26)、上大田の新橋横穴群(27)は、雲雀ヶ原扇状地を望む丘陵に所在している。この内、1973年(昭和48年)に発掘調査が行なわれた国指定史跡の羽山横穴(28)は、玄室奥壁に壁画が描かれており(註10)、調査後に保存施設を建設して年間4回の一般公開を通して社会教育に役立っている。

奈良・平安の遺跡は、律令体制のもとに行方郡家に擬定される泉原寺跡(29)や軍団跡に擬定される植松寺跡(30)が新田川北側の丘陵裾部に所在している。両遺跡についてはこれまで発掘調査による成果はなかったが、泉原寺跡では、1994年(平成6年)に、県史跡内の従来焼け米が出土する地点の西側で、宅地新築に伴う試掘調査により8～9世紀の掘立柱建物跡と礎石建物跡が検出されると共に、掘立柱建物跡から礎石建物跡への変遷が確認された。1995年(平成7

年)には県史跡の南東外側で、官衙的な色彩の強い一本柱列跡が2列発見され、1996年(平成8年)の第3次調査では掘立柱建物跡3棟、一本柱列2列などが調査されている。第4次調査では掘込地業とこれを囲む溝跡が検出され、院を構成するものと推定された(註4)。また、1998年(平成10年)には遺跡西方付近の第8次調査において八脚門を伴う柱列に区画された建物群が確認されている。同年遺跡東方付近で実施された第10次調査では、3棟の掘立柱建物跡跡とともに瓦溜1基が検出され、多量の瓦が出土している。出土した瓦は大変地区の京塚沢瓦窯跡(4)から表面採取によって同じ文様の軒丸瓦や軒平瓦が確認されていることから、泉慶寺跡への供給窯として考えられている。1999年・2000年・2001年(平成11・12・13年)の3カ年をかけて行われた調査では、1995年(平成7年)に確認された柱列跡は東西54.9m×南北約68.1mの範囲に展開していることが確認された。この柱列跡の四辺中央には建物が付属しており、門的な状況を呈していることが確認されている。またこの区画内部の中央や北よりにはいわゆる正殿に相当する建物が確認されており、計画的な建物配置とともに、これらの建物跡は複数期の建替えが行われていることから、この区画は行方郡家における群序院に相当する施設であると考えられている(註16)。また、2001年(平成13年)におこなわれた第16次調査では上幅約6mを測る大規模な溝跡が検出され、1996年(平成8年度)の第4次調査で確認された溝跡とともに正倉院を区画する区画溝であることが事実となった。この区画溝からは2点の木簡が出土しており1号木簡には墨書が確認されている。2号木簡には墨書は確認されなかったが上部2箇所にて切れ込みが確認されており、荷札木簡若しくは付札の形状を呈している。植松庵寺跡についての発掘調査は実施されていないが、植松庵寺跡出土瓦の供給窯としては1984年(昭和54年)に国土館大学により発掘調査が行われた入道畑瓦窯跡(註11)が考えられており、出土した須恵器から9世紀段階の年代が与えられている。その他、馬場の滝ノ原窯跡(5)では平安時代の須恵器窯跡3基が調査され、杯、長頸瓶などが出土している。泉慶寺跡の南西約200mに位置する広畑遺跡の発掘調査では、東西方向に軒を並べて建てられた4棟の掘立柱建物跡と溝が検出された。溝跡からは多量の土師器杯とともに多量の墨書土器が出土した。墨書土器には「厨」や「寺」などが確認されたことにより泉慶寺跡の一部である可能性が強くなり、行方郡家を考えるうえで貴重な成果をあげている。(註17)

また、海岸部の金沢丘陵の帯には大規模な製鉄遺跡(6)が所在している。1989(平成元年)から5年度までに、財団法人福島県文化センター遺跡調査課により発掘調査が進められた結果、7世紀後半から9世紀の製鉄炉跡123基・木炭窯跡140基・堅穴住居跡121棟・鍛冶炉跡16基・掘立柱建物跡10棟など全国最大の調査数を誇り、内容においても古代の鉄生産に関する技術や社会的背景などを知る上で多大な成果が報告されている(註12)。

東北電力原町火力発電所では、発電所敷地内に木炭窯と製鉄炉の保存館を建設し、年4回の一般公開を行っている。

また、太田川流域の低位丘陵上にも製鉄遺跡が所在しており工場建設に伴う川内迫製鉄遺跡群発掘調査では製鉄炉24基、木炭窯11基、住居跡9軒が確認されている。

この時期になると、土師器や須恵器を出土する集落が増えるが調査例は少ない。変化として

は新田川や太田川流域の河岸段丘の平坦面、あるいは自然堤防上など、これまで遺跡が少なかった平野部の微高地にも多くの遺跡が立地している。特に延喜式内社の押雄神社・冠嶺神社を中心とする北長野一帯、多河神社・日祭神社を中心とする大甕一帯、太田川中流域の上太田一帯、桜井の河岸段丘面に多く所在しており、かつての野馬追原を取り囲むような立地構成をしている。大甕地区は場整備事業に関連して1990年（平成2年）に範囲確認調査が実施された米々沢の竹花A遺跡<sup>④</sup>では、奈良～平安時代の堅穴住居跡3棟が確認（註13）されており、1992年（平成4年）には上北高平の高松B遺跡<sup>⑤</sup>でも奈良～平安時代と推定される堅穴住居跡2棟が試掘調査により発見されている。

中世の遺構として城館跡が挙げられるが、信田沢の内城のように現在では所在地不明のものや城館の構造が不明確のものも多い。その中でも、北泉の泉館跡<sup>⑥</sup>は、中世山城の典型的な形態をとどめている。館主は相馬氏の一族泉氏の館跡といわれ、その重要性から市指定史跡となっている。他にも、牛越城跡<sup>⑦</sup>・大甕七館の一つである明神館跡<sup>⑧</sup>・奥州下向の際、最初に相馬氏の拠点となった別所の館跡（現、相馬太田神社）<sup>⑨</sup>などが比較的良好な中世山城の形態を残しながら所在しており、在地の領主の館跡も丘陵上や平野部の各地に点在しているが、発掘調査の手続きもなされないまま、部分的な破壊を受けているものも見受けられる。

中世の村落遺跡の把握は難しいが、米々沢の谷地畑遺跡<sup>⑩</sup>はその可能性が高い。1990年（平成2年）に範囲確認調査が実施（註13）され、祥符元寶などの北宋銭が出土しており、近世にかけての遺跡と推定される。遺跡は奈良～平安時代の集落竹花A遺跡に隣接し、大田川北岸の自然堤防上に立地している。

中世末の館跡である泉平館跡<sup>⑪</sup>は、相馬一族の長、岡田氏の居城とされ、短期間に使用された館であるが、ほ場整備事業に伴い、1995年（平成7年）に主郭から南側の発掘調査が実施された。小規模な畝掘を伴う堀跡と出入口が見つかった。

近世の遺構として、初頭期の1597年（慶長2年）から1603年（同8年）に相馬氏の居城として再整備されて使用された牛越城跡や中期初頭の1666年（寛文6年）以降に築かれた野馬土手<sup>⑫</sup>及び出入口となる木戸跡がある。野馬土手は、野馬追に欠かせない野生馬の保護に力を尽くしてきた結果、増殖した馬が畑の作物を荒らしたり、放散したりしないように雲雀ヶ原扇状地を囲むように、東西約10km、南北約2.6kmに築かれたものである。大部分は土塁であるが、石垣としていた所もある。平成5年には、小高町が菖蒲沢で石垣の野馬土手の一部分を調査している。現在ではほとんど消滅してしまっており、その保護が急がれるが、1987年（昭和62年）の桜井野馬土手の範囲確認調査（註14）及び、1993年（平成5年）の牛来、歴史民俗資料館予定地における調査では、土手の規模と内側に溝を掘っていた状況が確認されている。木戸跡は、多い時で30数ヶ所が設けられていたといわれているが、現在その姿をとどめているものは市指定史跡の羽山岳の木戸跡<sup>⑬</sup>一ヶ所だけとなっている。

近世後半から近代にかけては藩営の大規模なたたらとして馬場鉄山があり、周辺の小規模なたたらとしては財団法人福島県文化センター遺跡調査課で調査された馬場の五台山B遺跡<sup>⑭</sup>、片倉の羽山B遺跡<sup>⑮</sup>が阿武隈高地の山間部に遺されている（註1）。

近年、正福寺跡<sup>58</sup>では火葬墓が調査され、法輪寺跡<sup>59</sup>、地藏堂B遺跡<sup>60</sup>ではいわゆる鍋被りを含む土坑墓が調査され、近世の葬制・墓制に関する資料も蓄積されつつある。

<参考文献・引用文献>

- 註1 1990 寺島文隆他 「原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅰ」福島県教育委員会・  
(財)福島県文化センター
- 註2 1994 武田耕平 「県道相馬浪江線付替え工事関連遺跡発掘調査報告書畦原F遺跡」  
原町市教育委員会
- 註3 1983 長島雄一 「赤沼遺跡試掘調査報告」原町市教育委員会
- 註4 1997 鈴木文雄他 「原町市内遺跡発掘調査報告書2」原町市教育委員会
- 註5 1992 竹島國基 「桜井」竹島コレクション考古図録第3集
- 註6 1996 辻 秀人他 「桜井高見町A遺跡発掘調査報告書」東北学院大学文学部史学科辻ゼミナール・  
原町市教育委員会
- 註7 1985 玉川一郎他 「国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書」原町市教育委員会
- 註8 1969 竹島國基他 「原町市高見町1号墳・与太郎内1号墳調査報告書」原町市教育委員会
- 註9 1965 竹島國基他 「原町市高林古墳群調査報告書」原町市教育委員会
- 註10 1974 渡邊一雄他 「羽山裝飾横穴発掘調査概報」原町市教育委員会
- 註11 1984 戸田有二 「考古学研究室発掘調査報告書福島県原町市・入道迫瓦窯跡」  
国士館大学文学部考古研究室
- 註12 1992 寺島文隆他 「原町火力発電所建設関連遺跡調査報告書Ⅲ」福島県教育委員会・  
(財)福島県文化センター
- 註13 1991 玉川一郎他 「原町市内遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ」原町市教育委員会
- 註14 1988 玉川一郎 「野馬土手跡範囲確認調査報告書」原町市教育委員会
- 註15 2000 佐藤祐太 「高見町A遺跡範囲確認調査報告書」福建コンサルタント・原町市教育委員会
- 註16 2001 堀・藤木 「泉庵寺跡第14次調査」「原町市内遺跡発掘調査報告書6」原町市教育委員会
- 註17 2000 荒 淑人 「広畑遺跡第3次調査」「県営高平地区ほ場整備事業関連遺跡発掘調査報告書1」  
福島県相双農林事務所・原町市教育委員会

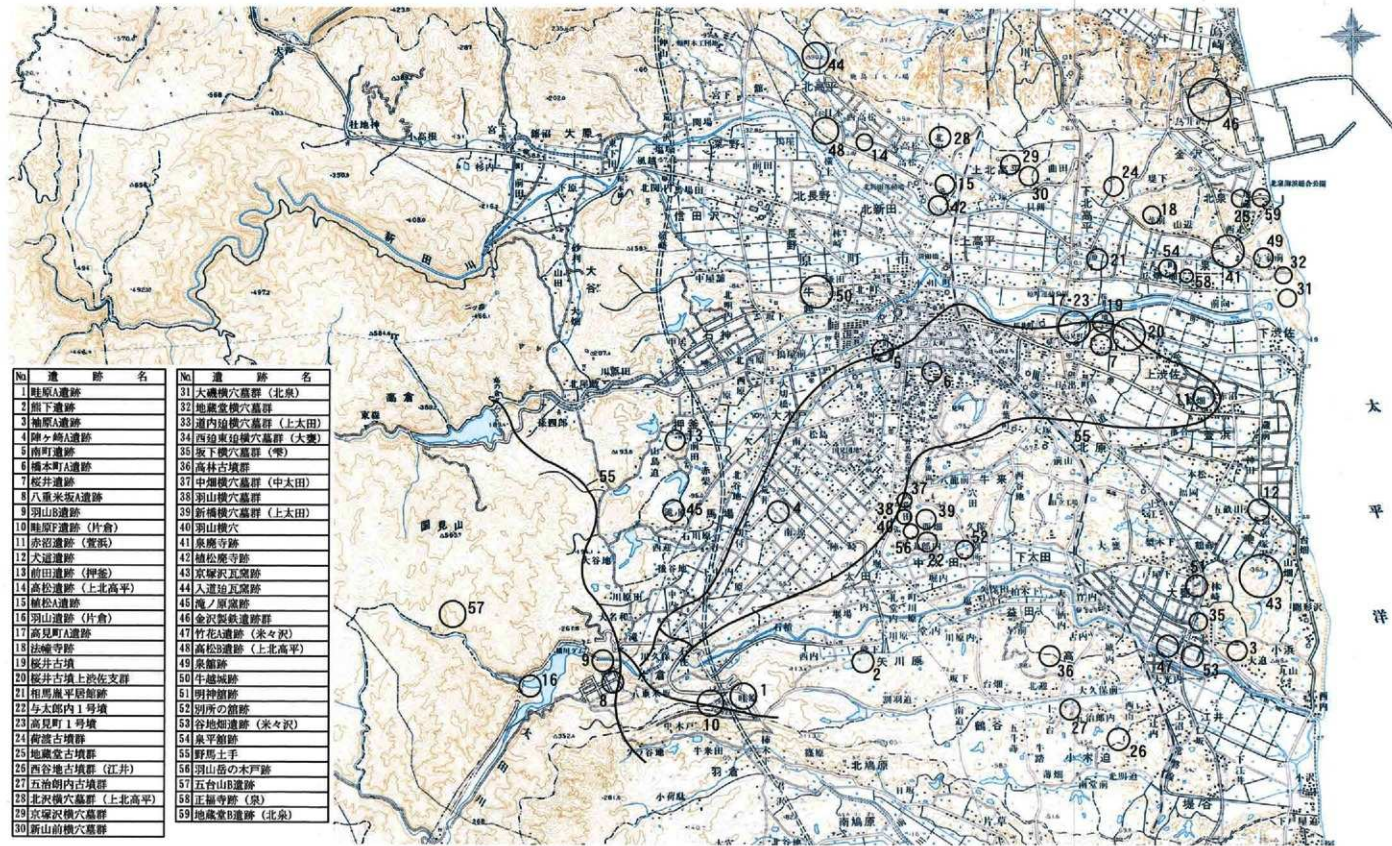


図3 原町市主要遺跡位置図

## 第2項 原町市内の古墳時代の遺跡

現在の原町市内には、約300近い数の遺跡が確認されており、このうち古墳時代の遺跡は45遺跡を数えている。遺跡の分布状況を見ると新田川の河岸段丘縁辺、太田川河岸段丘縁辺、阿武隈高地から東に延びる低位丘陵の頂部または中腹に位置しており、市内西部域の山部には確認されていない。

まず、新田川北岸には北沢横穴墓群・京塚沢横穴墓群・新山前横穴墓群・荷渡古墳群・北山古墳群・北山横穴墓群・町池横穴墓群・宮前古墳・館前古墳A・館前古墳B・地藏堂横穴墓群・鎮塚古墳群・大磯横穴墓群・地藏堂古墳群・地藏堂B遺跡が確認されており、いずれの遺跡も阿武隈高地から太平洋に向かって派生する標高40mから50mほどの低位丘陵の尾根部もしくは中腹に所在している。

このうち、発掘調査で遺跡の内容が明らかになっているのは荷渡古墳群・北山古墳群・北山横穴墓群・地藏堂B遺跡である。

荷渡古墳群は丘陵頂部に築かれた直径15m程の円墳3基で構成される小規模な群集墳である。いずれの古墳も地山を堅穴状に掘り込んだ墓域内部に割竹形木棺を直葬するものである。墳丘は棺の埋葬後に築かれ、埴輪や葺石などはともなわない。調査では2号墳の墳丘から土師器高杯1点と2号墳・3号墳の棺内副葬品として鉄製刀子が合計3点出土し、土師器の高杯から古墳群の築造年代は6世紀後半段階とされている。北山古墳群は荷渡古墳群とほぼ同じ丘陵の頂部に築かれた、前方後円墳1基・円墳3基で構成される群集墳である。2号墳は主軸長25mの前方後円墳である。墳丘主軸は南北方向に向け、段築や葺石・埴輪などは見られない。1号墳・3号墳・4号墳は直径10m程の小円墳である。円墳群は2号墳を囲むように位置しており、2号墳の北側に1号墳、南側に3号墳、西側に4号墳が位置する。このうち4号墳は後世の削平が墳丘を横断しており墳丘の残存状況は悪いものの、この削平部から多量の川原石が出土していることから、4号墳の埋葬施設は川原石を用いた横穴式石室であると推測される。しかし1号・2号・3号墳の墳頂部には埋葬のための掘り込みを確認することはできていない。したがって荷渡古墳群同様に棺の埋葬後に墳丘を構築している可能性が考えられる。各古墳の築造年代については、1号墳の墳丘面から出土した有段の内黒土師器杯から、6世紀後半段階に築造されたと考えられ、2号墳は前方部西側前端から出土した栗園式期の壺から、6世紀後半段階の所産であると考えられる。3号墳・4号墳も1号墳・2号墳同様に6世紀後半段階に築造されたものと考えられている。

北山横穴墓群は、北山古墳群と同じ丘陵の腹部に築かれた横穴墓群である。横穴は、丘陵の南面に築かれており、現在までに8基が確認され古墳時代終末期に築かれたことはほぼ間違いなくであろう。

地藏堂B遺跡は新田川河口付近北側の丘陵頂部から斜面に営まれた集落跡である。調査では4軒の堅穴住居跡が確認されている。住居跡は一辺4mほどの方形を呈し、カマドが住居の北壁に設けられており壁周溝が巡る。住居内からは古墳時代後期住社式の土師器の杯や壺などの食膳具が良好な状態で出土している。

その他の遺跡については、発掘調査がおこなわれてなく遺跡の詳細については不明であるが、北沢横穴墓群や京塚沢横穴墓群は北山横穴墓群と同様に古墳時代終末期に築かれたと考えられる横穴墓群である。鎮塚古墳群や宮前古墳A・Bの3基の墳墓は現在では墳墓の所在すら確認することはできないが、奈良・平安時代の行方郡家である泉庵寺跡の周辺に位置していることから、泉庵寺跡との関連を考慮すべき墳墓群である。地藏堂B遺跡と同じ丘陵に所在する地藏堂古墳群は直径10mを前後する円墳5基で構成される群集墳である。荷渡古墳群・北山古墳群と同じような円墳群で構成されていることから、6世紀代に築かれた古墳群であると考えられる。

このように、新田川北岸に所在する古墳時代の遺跡は古墳時代後期を中心とした時期に営まれたもので、その多くは低位丘陵の頂部から中腹部にかけた範囲に分布している。また地藏堂古墳群のような墓域と地藏堂B遺跡のような集落域が同丘陵上に営まれていることや、北山古墳群のような古墳時代後期の墳墓群と北山横穴墓群のような終末期の横穴墓群がほぼ重複する位置に造営されていることは、当地方における古墳時代後期から終末期にかけた集落や墓制の変遷を考える上で非常に興味深い。

さて、新田川の南岸には桜井古墳群・桜井遺跡群・高見町遺跡群が所在する。これらの遺跡群は新田川によって形成された河岸段丘縁辺に位置しており、近年の発掘調査から多くの成果があがっている。

これらの遺跡の詳細については第3項で後述することから、ここでは簡単に記載したい。

桜井遺跡群は桜井A・B・C・D遺跡に分けられ、遺跡群全体の面積は約26haに及ぶ弥生時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。桜井遺跡は弥生時代中期後葉の標式土器である「桜井式土器」や磨製石器を多量に出土することで知られており、この時期に大規模な集落が営まれたことは確実である。

高見町遺跡群は高見町A・B・Cの3地区に分けられ、遺跡群全体の面積は約8.5haに及ぶ。高見町A遺跡では、これまで5回の調査が行われており、桜井古墳群の支群である高見町支群と重複することが確認されている。遺跡内からは縄文時代晩期から平安時代にかけての遺構、遺物や、墳丘部が削平され周溝部のみが残存する古墳が検出されている。これらの遺構、遺物の中で最も多く出土するのが、弥生時代から古墳時代のものであり、合計58棟の住居跡と25基の古墳が確認されている。住居跡では弥生時代終末期の「十王台式土器」と古墳時代前期の「塩釜式土器」が伴する竪穴住居跡や北陸系の土器群を出土する竪穴住居跡などが検出されている。また遺跡内からは棒状浮文を有する壺やS字状口縁台付甕の破片など、東海系の遺物の出土も確認されており、弥生時代から古墳時代への時代の変遷を知る上で興味深い知見が得られている。

桜井古墳群は前方後方墳である桜井古墳を中心とした大規模な古墳群である。古墳群は高見町・上浜佐の二支群で構成され、両支群を合わせて合計37基の古墳が確認されている。古墳群の内容を見ると前方後方墳・方墳・前方後円墳・円墳が確認されており、多様な様相を呈している。



古墳群東部を構成する上流佐支群には、古墳時代前期の桜井古墳・同支群7号墳が位置しており、両古墳とも前期の所産であると考えられ、上流佐支群は古墳時代前期を中心に古墳が築かれた地域であると考えられる。

古墳群西部を構成する高見町支群は前方後円墳である15号墳を中心に築かれた後期の群集墳であり、古墳の多くは直径10m前後の円墳で構成される。

このように桜井古墳群には古墳時代前期と後期に集中的に古墳が築かれたことは確実であるが、確実に中期に位置付けられる墳墓は確認されていない。また、この地域の集落構造については墳墓群ほどの成果があがっていないものの、桜井古墳群から東に約500mほどの場所に所在する前屋敷遺跡の調査では古墳時代中期の南小泉式の土師器が出土しており、古墳の築造が激減する古墳時代中期においてもこの地域で人々が生活を行っていることが明らかとなっている。また埴輪をとまなう墳墓が存在しないことも当古墳群の特徴である。

一方太田川流域で確認されている遺跡のうち、発掘調査が実施されているのは羽山横穴・与太郎内古墳群の2遺跡に限られ、他の遺跡の詳細についてはほとんど知られていない。太田川流域における古墳時代の遺跡の分布状況を見ると、北岸の中流域において比較的遺跡が集中しており、それ以外の遺跡は低位丘陵に点在している傾向にある。

太田川北岸に所在する遺跡は、太田川によって形成された河岸段丘の縁辺若しくは低位丘陵に築かれた古墳が多く、そのほとんどが横穴墓群である。最も顕著なまとまりを見せている北岸中流域には羽山横穴墓群が所在する。羽山横穴墓群は丘陵の南側に20数基の横穴墓が確認されており、そのうちの1基からは装飾が確認されている。装飾は奥壁と天井部にベンガラと白色粘土によって人物・馬・白鹿・渦巻文や点文などの装飾が描かれており、国の史跡に指定されている。玄室内には鉄刀やガラス玉・馬具などの副葬品が出土し、古墳時代終末期の所産である。

羽山横穴墓群が所在する丘陵の裾部には与太郎内古墳群が所在する。与太郎内古墳群は太田川によって形成された河岸段丘上の微高地上に立地し、2基の前方後円墳と1基の円墳で構成される。1号墳は墳丘長21.5m・2号墳は墳丘長40mを計測する前方後円墳である。3号墳は墳丘直径15mほどの円墳である。発掘調査は2号墳で実施されたが、埋葬施設や土器などの遺物は検出されなかったため築造年代については不明である。

その他の遺跡では、多くの横穴墓群が確認され古墳時代終末期に築かれたことは確実であろう。また、西遺跡や水押遺跡などは太田川流域で古墳や横穴を築造した人々の集落遺跡であると考えられ、太田川流域の古墳社会を知る上で重要な遺跡であると考えられる。

No.	名 称	No.	名 称	No.	名 称	No.	名 称
1	北沢横穴墓群	13	羽山横穴墓群	25	町池横穴墓群	37	湊遺跡
2	京塚塚沢横穴墓群	14	新橋横穴墓群	26	宮前古墳	38	高見町A遺跡
3	新山前横穴墓群	15	与太郎内古墳群	27	館前古墳A	39	坂下横穴墓群
4	荷渡古墳群	16	道内始横穴墓群	28	館前古墳B	40	城下横穴墓群
5	桜井古墳群上洪佐支群	17	西始東始横穴墓群	29	地藏堂横穴墓群	41	五治朗内古墳群
6	桜井D遺跡	18	別所古墳	30	鎮塚古墳群	42	南丈ノ内遺跡
7	桜井古墳群高見町支群	19	前田横穴墓群	31	大磯横穴墓群	43	西遺跡
8	桜井C遺跡	20	姫塚古墳	32	上洪佐前屋敷遺跡	44	水押遺跡
9	桜井B遺跡	21	権現壇横穴墓群	33	袖原古墳群	45	荒井前遺跡
10	大塚横穴墓群	22	高林横穴墓群	34	風目木横穴墓群		
11	石橋横穴墓群	23	南始横穴墓群	35	地藏堂古墳群		
12	中畑横穴墓群	24	西谷地古墳	36	地藏堂B遺跡		

原町市内古墳時代遺跡一覧

### 第3項 桜井古墳群

桜井古墳群に点在する墳墓は、新田川下流域によって形成された河岸段丘の縁辺に位置している。古墳群はこの河岸段丘の縁辺沿いに植林された杉木立の中に確認され、現在までに東西約800m・南北約300mの範囲に合計37基の墳墓が確認されている。現在までに確認されている墳墓は現地踏査や発掘調査によってその存在が明らかになっているものであるが、これらの墳墓以外に福島県史の中に現在では確認することができない7基の墳墓の存在が記されている。現在確認されている37基の墳墓と未確認の7基の墳墓を合わせると、桜井古墳群は総数39基で構成される大規模な古墳群であると考えられる。

これらの総数44基で構成される桜井古墳群は、段丘上を流れてくる小さな川を境に古墳の分布に顕著なまとまりが見られ、谷を境に東側が高見町支群、西側が上洪佐支群として分けられている。

上洪佐支群には前方後方墳である桜井古墳や、一辺約27.5mの方墳である上洪佐支群7号墳、その他直径15m前後の円墳、墳丘や周溝を持たずに割竹形木棺を直葬した土壇墓1基、あわせて合計16基が確認されている。上洪佐支群は高見町支群と比べて墳丘の保存状況は良好であるが、その大部分は未調査のまま保存されており、支群全体の様相については不明な点が多い。上洪佐支群で発掘調査が行われ、古墳の詳細が確認されている古墳は桜井古墳・2号墳・7号墳である。2号墳は直径20mを測る円墳である。残念ながら埋葬施設は後世の土地利用において大きな攪乱を受けており詳細は不明であったが、堅穴状の墓域内から断片的ではあるが帯状の白色粘土が確認されたことから割竹形木棺を直葬したものと推測される。また攪乱の土中から残存長5cmの鉄剣片が出土したことから、2号墳の築造年代は5世紀代と考えられている。

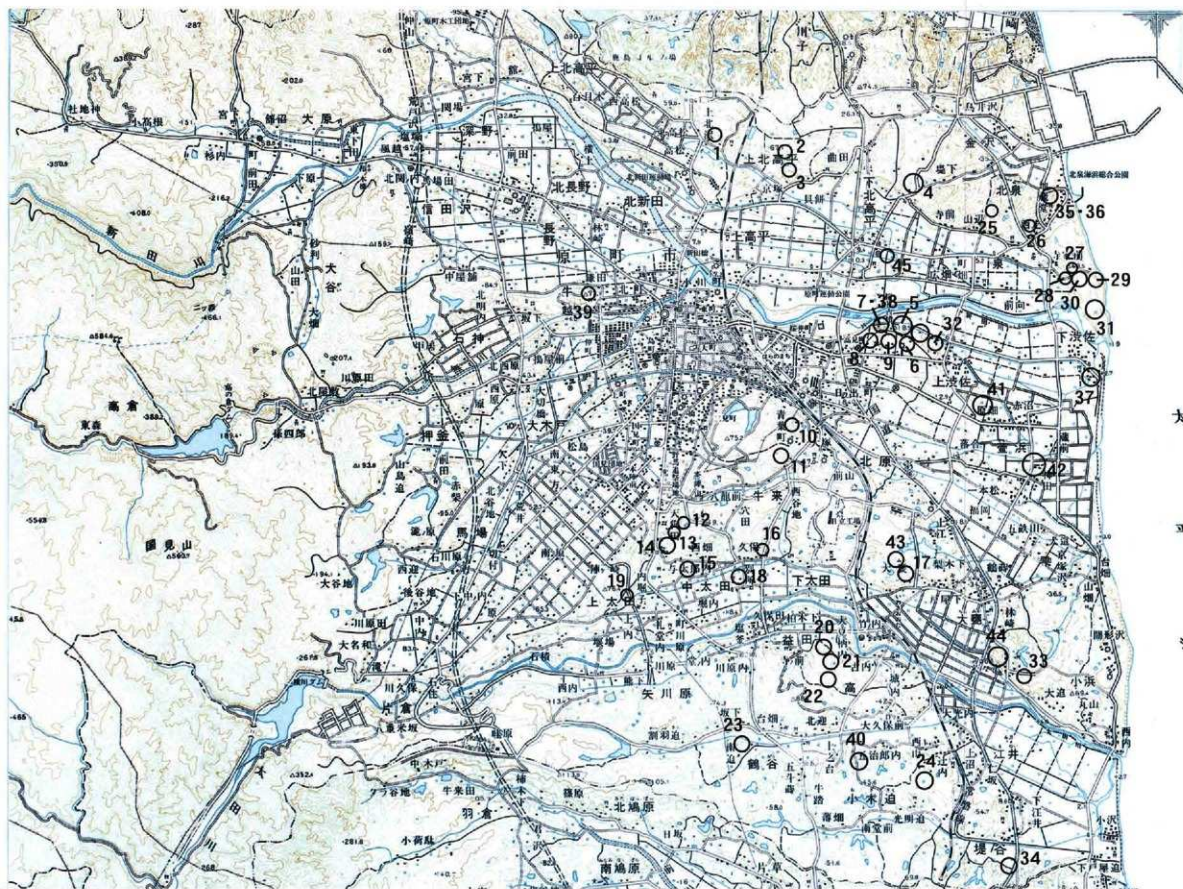


図4 古墳時代関連遺跡位置図

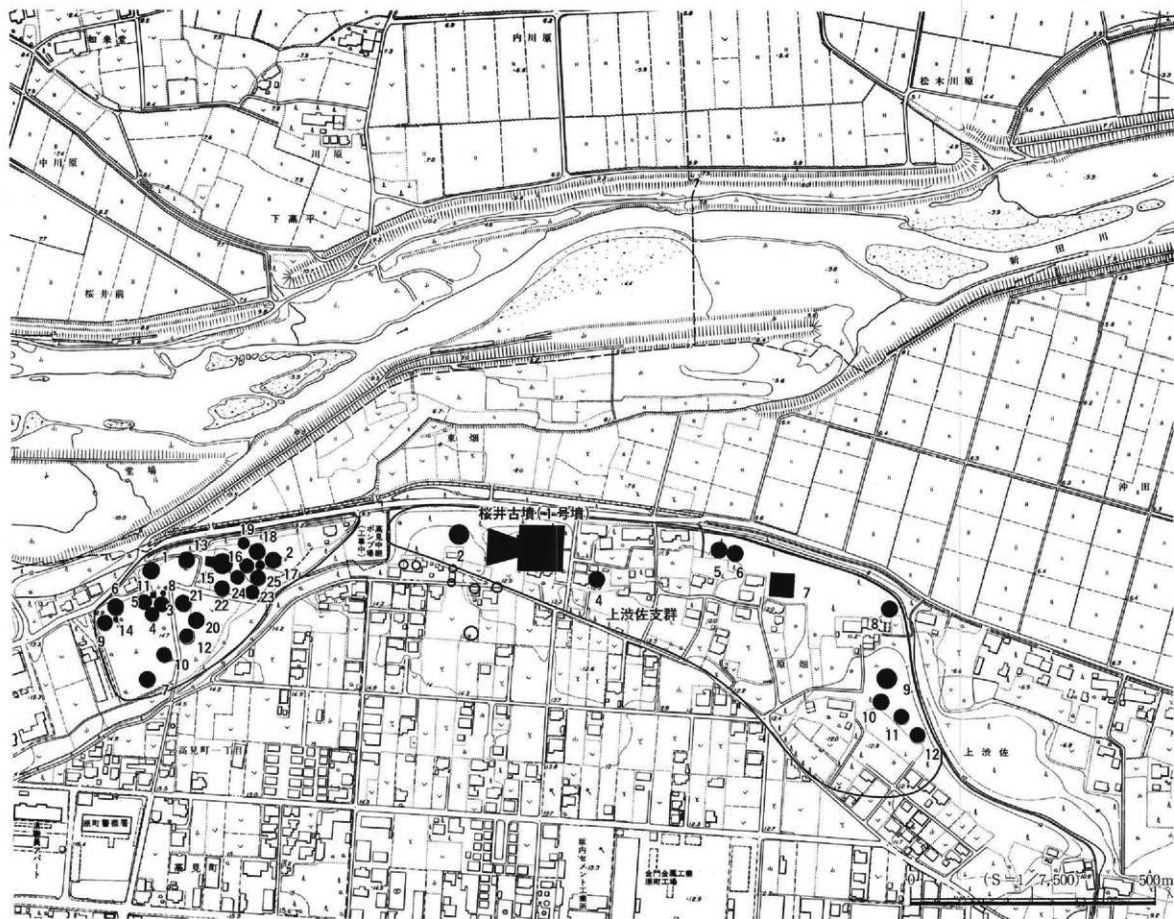


图5 桜井古墳群古墳分布図

7号墳は一辺27.5mを測る大型の方墳であり、周囲には不整形ながらも周溝をめぐらしている。墳頂平坦面には長軸を東西方向に向けた長さ約8m、幅約4mの墓壇が確認された。墓壇は二段に掘り込まれており、下段墓壇内に組合式木棺を安置したものと考えられる。2段墓壇や組合式木棺は、桜井古墳群では初めて確認された埋葬形態である。棺は長軸約4m・短軸約1mを測り棺の両端には長さ約1mの粘土塊が検出された。棺の内部には多量のベンガラと水銀朱が検出され、棺材内部はベンガラで赤彩されており、棺の所々には水銀朱を散布していたと考えられる。副葬品は被葬者の頭部左側に珠文鏡一面、腰から足付近左側に鉄製鏡一点、同位置右側に不明有機製品が出土している。土器資料では良好な遺物はなく古墳の築造年代については検討を要するが、珠文鏡や出土した土器片の検討から築造年代は4世紀代と推定されており、桜井古墳群内においては最も早い時期に築造された古墳であると考えられる。

一方、高見町支群は2000年（平成12年）までに合計7回の発掘調査が行われており、上洪佐支群と比べると調査の数は多く、支群の内容について多くの成果が蓄積されている。これまでの調査では、高見町支群には合計25基の古墳と、縄文時代晩期から古墳時代にかけての住居跡等が確認されている。高見町支群で確認された古墳は戦後の開拓による土地利用により墳丘の大部分が削平されており、発掘調査では削平を免れた周溝や埋葬施設が確認されることが多い。現在でも墳丘が残存している古墳は1・3・4号墳である。

1号墳の発掘調査は1967年（昭和42年）と1997年に行われている。調査では良好な出土遺物には恵まれなかったが、1号墳は直径12m、高さ約1mの円墳であることが確認された。埋葬施設からは棺の身と蓋を止めるための白色の粘土及び小口板を押さえるための粘土塊が検出されたことから割竹形木棺の直葬墓であったと考えられている。1号墳の年代については、良好な出土遺物が無かったため遺物による年代決定は困難であるが、粘土施設が確認されたことから4世紀末から5世紀初頭として報告されている。

1994年（平成6年）に実施された高見町A遺跡の発掘調査では、古墳1基と竪穴住居跡が検出された。古墳は直径約12mの円墳で周囲には幅約2mの周溝が検出され、高見町2号墳と命名されている。2号墳の墳丘や埋葬施設はすでに削平されており、古墳全体の様相については不明な点が多いものの、周溝堆積土中から出土した土器は東北地方土器器編年引田式のもので古墳時代中期の年代が与えられている。特に、竪穴住居跡からは弥生時代終末期の十王台式土器と古墳時代前期の塩釜式土器の共伴が確認されている。十王台式土器の出土としては本遺跡が最北例となっている。

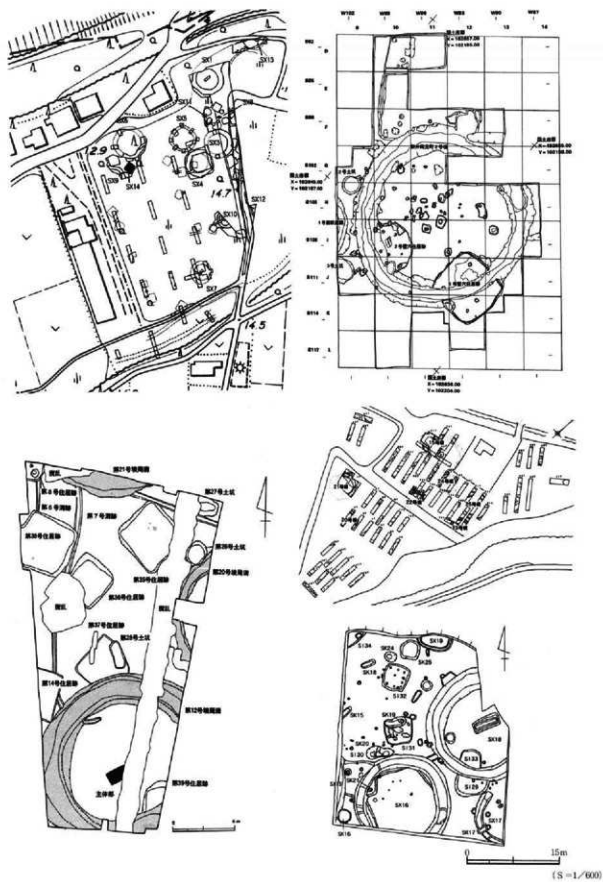


図6 高見町支群調査平面図

同年には桜井古墳東側の史跡隣接地における桜井A遺跡の発掘調査が実施され、古墳時代前期である埴釜式の複合口縁壺の口縁部から肩部にかけた土器が出土した。

1995年（平成7年）の高見町A遺跡の発掘調査では、円墳が10基、刳抜石棺を埋葬した土塚墓2基、箱式石棺1基とともに21軒の堅穴住居跡が確認された。確認された古墳の規模は高見町1号墳直径12m・3号墳直径11m・4号墳直径11m・5号墳直径11m・6号墳直径12m・7号墳直径8mである。9号墳・10号墳・12号墳・13号墳については周溝の一部が確認されただけであり、墳丘規模は不明である。8号墳・11号墳は墳丘や周溝などを伴わない刳抜石棺、14号墳は箱式石棺である。確認された古墳の周溝堆積土には榛名二ツ岳伊香保テフラ（FP）が確認されたことにより、6世紀中葉以前には築造されたことが確認されている。

1994年（平成8年）の個人宅地建設に伴う発掘調査では4基の古墳と縄文時代晩期から弥生時代中期の堅穴住居跡が確認されている。古墳については16号墳が直径約10m、18号墳は直径約12mを測る円墳である。18号墳では刳竹形木棺を直葬した埋葬施設が確認され、棺外埋葬として6世紀中葉から後葉の坏が出土している。

1998年（平成10年）・1999年（平成11年）には桜井古墳の西方約30mに位置する上洪佐群2号墳・13号墳の発掘調査が実施された。2号墳は隣接する近世野馬土手築造に伴う土取りのためか、東側から南側の墳丘裾部にかけて範囲に大きな削平を受けていたが、周溝の残存状況から直径20m、高さ約2mの円墳であることが確認された。埋葬施設は後世の土地利用によって大きな攪乱を受けており詳細は不明であったが、わずかに残存する帯状の青白色粘土が確認されたことから、埋葬施設の形態は刳形形木棺を直葬したものと考えられる。良好な遺物は出土しなかったため、年代については不明である。ただし埋葬施設内の攪乱土から残存長約5cmの鉄剣の破片が出土したことから、桜井古墳に後続する5世紀代の年代が推定されている。13号墳は、2号墳の北東約20mに位置する周溝や墳丘を持たない土塚墓である。墓壇は地表面から長軸4m×短軸2mに堅穴状に掘りこまれ、墓壇内には上蓋部と下床部を接合した白色粘土が検出されたことから棺は刳竹形木棺であると考えられる。築造年代は出土遺物がなかったことから判然としないが、埋葬施設の構造から6世紀代と考えられている。

1999年（平成11年）には2度の発掘調査が行われ、合計8基の古墳および26軒の堅穴住居跡が確認されている。確認した古墳は、15号墳が墳丘長約20m（後円部径約15m・前方部長約5m）の前方後円墳であり、20号墳は直径7m、21号墳は直径12m、22号墳は直径8m、23号墳は直径7m、24号墳は直径7m、25号墳は直径11mの円墳であることが判明した。前方後円墳は当古墳群では初めて確認された墳丘形態である。15号墳の埋葬施設は後円部中央に刳竹形木棺が設置されており、副葬品として鉄刀1振、鉄鏃5点、刀子1口が出土した。周溝から出土した壺型土器や坏から6世紀中頃の築造年代が考えられる。

12号墳は、マウンドは削平されていたが幅約2mの周溝が確認され、直径10mの円墳であることが確認された。墳丘部の中央付近には埋葬施設が確認され、棺は刳竹形木棺であり、副葬品として鉄製轡や両頭金具などの馬具が出土している。年代的には6世紀中頃から後半の年代が想定されている。

第2節 原町市を取り巻く歴史的環境

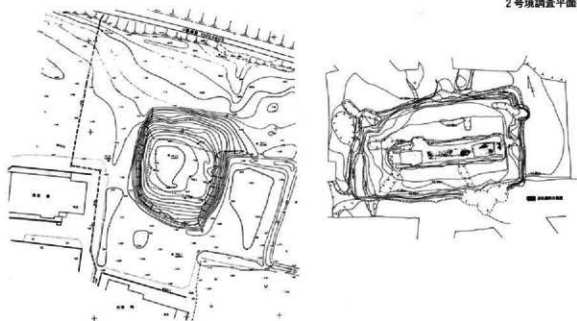
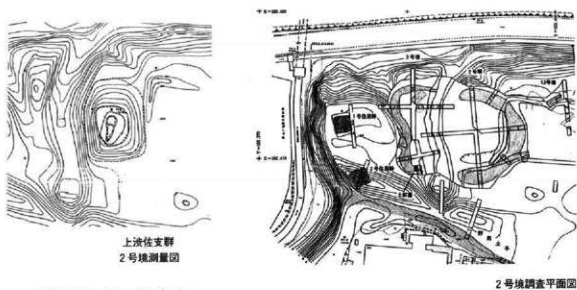


図7 上流佐支群調査平面図



## 第3章 桜井古墳の調査

### 第1節 調査経過

桜井古墳に関係する調査は過去2度実施されている。この節では過去の調査について振り返ってみたい。桜井古墳の最初の調査は1955年（昭和30年）に大塚初重氏によって実施された墳丘測量調査である。以後この調査を1次調査として記載する。2回目の調査は、1983年（昭和60年）に玉川一郎氏を調査担当として実施した範囲確認調査であり、以後2次調査として記載する。

#### 第1項 1次調査（図8）

1次調査は、1955年（昭和30年）に大塚初重氏によって実施された地形測量調査である。この測量調査は科学研究費の助成を受け実施され、墳丘測量図は1m幅の等高線で作成された。

調査の結果、桜井古墳は墳丘主軸長75m・後方部長40m・後方幅47m・後方部高7m・前方部長35m・前方部前幅27m・前方部高4.5mの大型の前方後方墳であることが確認され、当時日本最北に位置する前方後方墳であることが明らかになった。当時の測量調査の知見では墳丘の後方部東側から南側、前方部前部北側においては墳丘の一部が削平されているが墳丘残存状況は比較的良好で、特に前方部の形態が墳丘の主軸線を挟んで左右非対称形であることや、後方部墳頂高に対して前方部の墳頂高が低いなどの特徴から、未発達の前部を有した古墳であり、古式の様相を呈した古墳であると判断された。この測量調査では、墳丘のテラスや葺石や埴輪などの外表施設は認められなかったが、後方部墳頂平坦面において白色粘土の散布が確認されたことから、埋葬施設は粘土施設を有する割竹形木棺であろうと想定された。

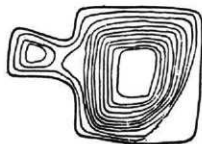


図8 桜井古墳墳丘測量図（1）

#### 第2項 2次調査（図9）

1983年（昭和60年）には範囲確認調査が実施された。この調査はそれまでの桜井古墳の後方部と前方部の一部という指定範囲を墳丘全体及び周溝を含めた全域を史跡として追加指定を受けることを目的に実施され、地形測量調査と史跡範囲外における試掘調査で行われた。測量調査図は1955年（昭和30年）の測量図より更に高い精度を求めて50cm幅の等高線で作成されている。測量図は墳丘外の周溝範囲や野馬土手なども図化されている。

試掘調査は未指定であった周溝付近及び前方部の一部において実施された。墳丘の周囲には幅、深さともに小規模で平面形が不整形な周溝が存在していることが確認されたが、周溝は後方部東側で途切れてしまい、北側においては溝状に巡ることはなく段丘崖に至り明瞭な周溝外

周は確認できないといった調査結果が得られた。

この調査では、桜井古墳の墳丘形態は墳丘の主軸線に直交して長軸を有する長方形の後方に、後方部幅の約 $\frac{1}{2}$ 幅と狭く、低い前方部が主軸線に対して北に偏してとりついた前方後墳であることが桜井古墳の墳丘形態の特徴として理解された。

調査で確認された桜井古墳の規模は墳丘主軸長72m・前方部長30m・前方部前縁幅23m・前方部高3m・後方部長42m・後方部幅45m・後方部高6.35m・墳頂平坦面長13m・墳頂平坦面幅17mと計測され、1次調査の結果を若干補正する結果を得ることになった。

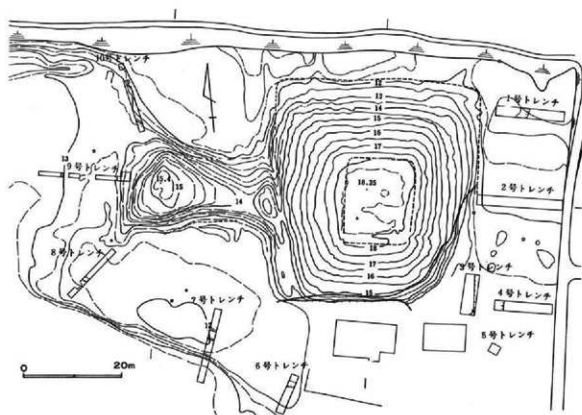


図9 桜井古墳墳丘測量図(2)



图10 桜井古墳·上流佐支群2号墳

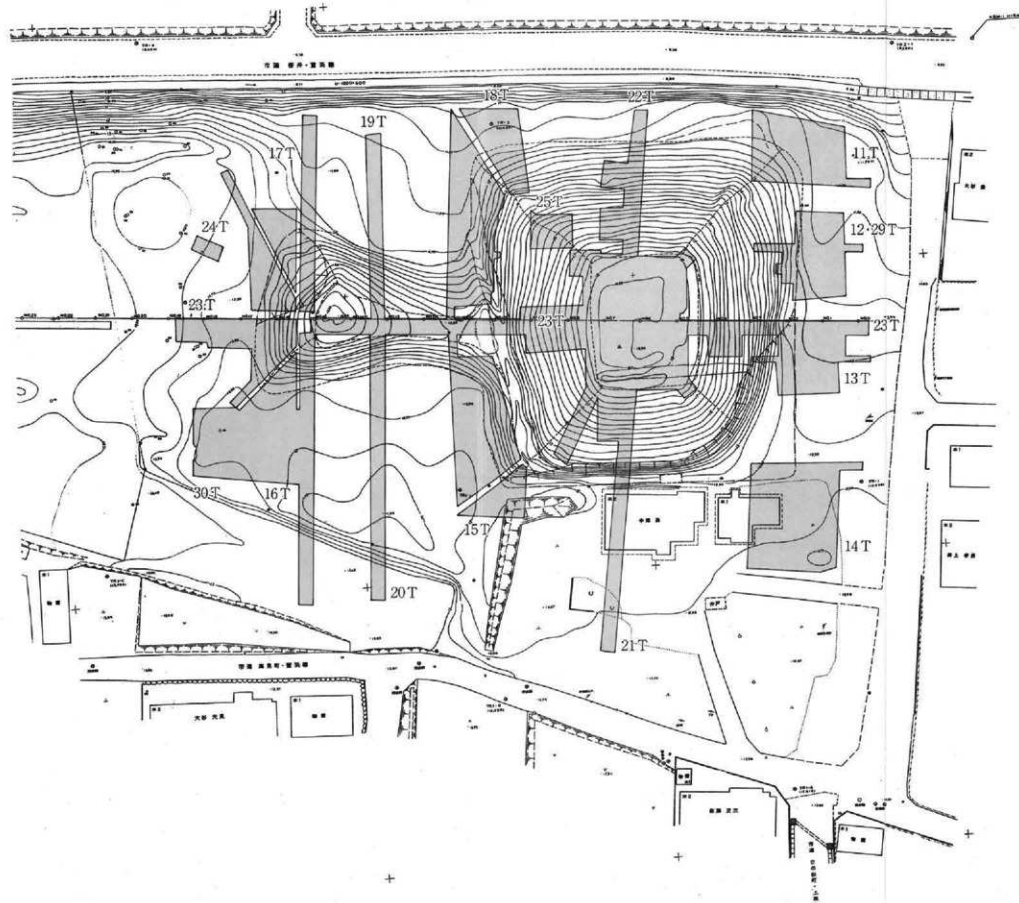


図11 トレンチ配置図

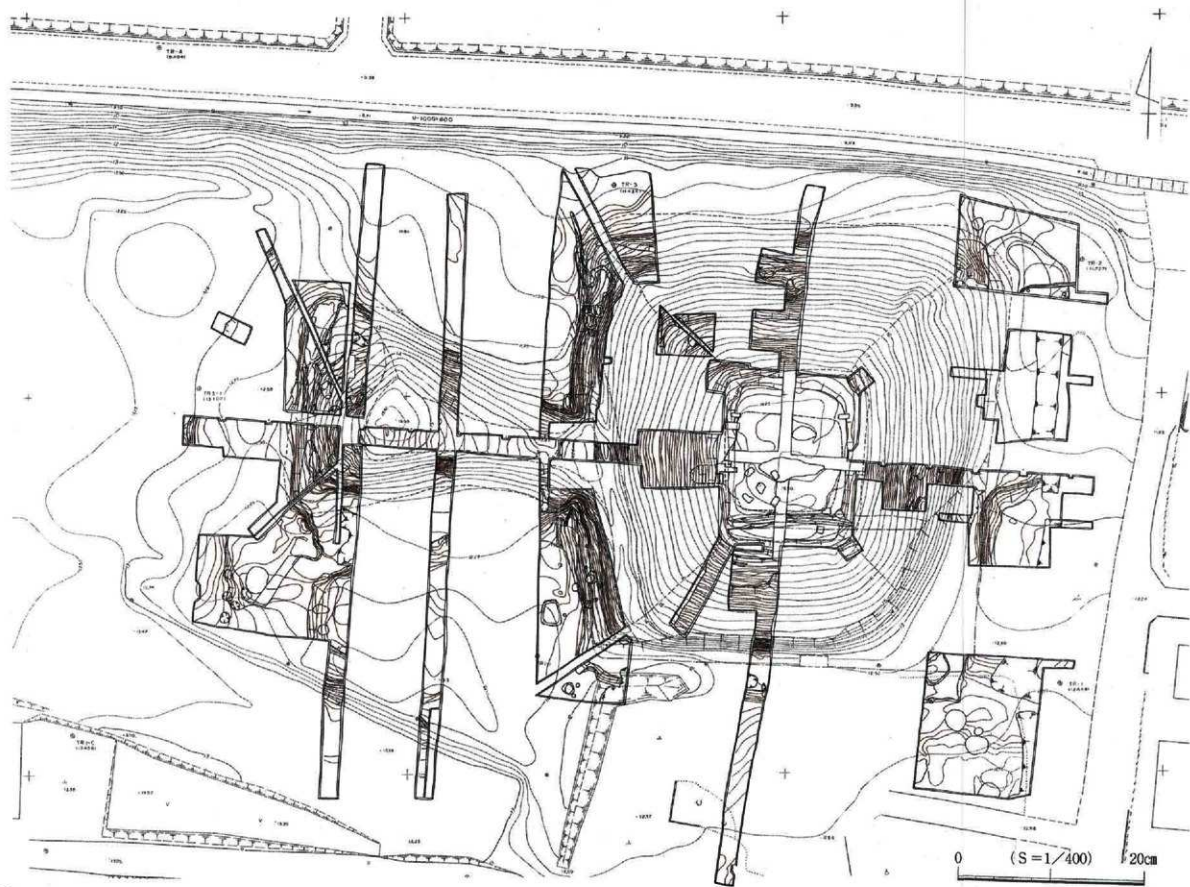
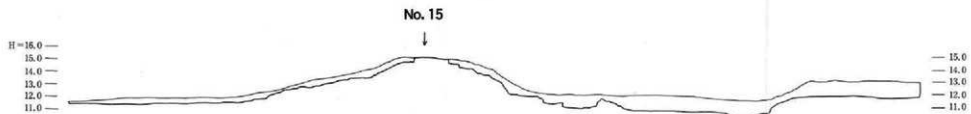
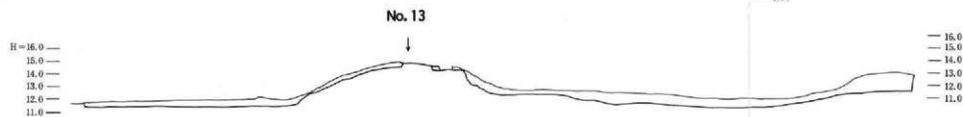
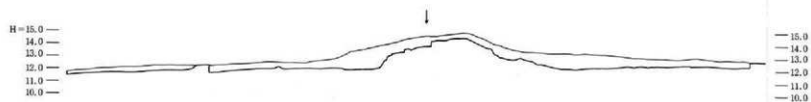
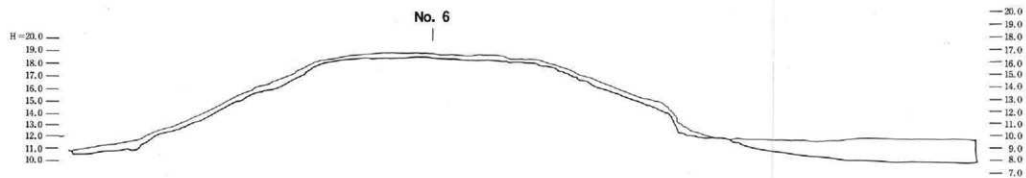
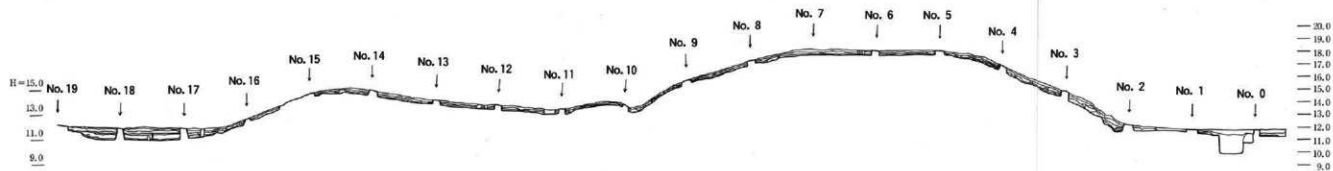


图12 調查全体图



0 (S=1/300) 10m

图13 填丘縦断・横断面

## 第2節 3次調査

この節では、過去2度に渡る調査の成果を踏まえ実施した、史跡整備にかかる一連の調査を3次調査として記載する。3次調査として実施した調査は、墳丘測量調査、物理探査（赤外線撮影・地中レーダー探査）発掘調査である。

### 第1項 測量調査（図10）

桜井古墳の史跡整備に伴う一連の調査に先立ち、現在の桜井古墳の状況を把握することを目的に新たな地形測量図が作成された。測量図は25cm幅の等高線で作成している。

測量調査を行うと、桜井古墳の現状が再認識された。現在の桜井古墳は、後方部の東側中央部から南側一面、前方部前端北側、くびれ部上面（後方部と前方部の連結部分）の3箇所に大きな削平を受けており築造当時の姿は留めていない。

墳丘規模は墳丘主軸長75m・後方部東西辺（後方部長）約45m・南北辺（後方部幅）約47m、後方部墳丘高約6.75mであり、後方部の平面形は墳丘主軸に直交する長方形である。前方部の長さは30m・前方部前端幅23m・墳丘高は3m・くびれ部幅15mを計測する。後方部墳頂は標高17.50m～18.25mの範囲において明瞭な平坦面を形成しており、南北18m×東西15mを計測する。墳頂平坦面には盗掘などの痕跡は見られず、埋葬施設は無傷のまま残されている可能性が高いと想定された。また、測量図では墳丘斜面にはっきりとした平坦面の存在を読み取ることはできないが、後方部北斜面の標高12.00m～13.00m付近、15.75m～17.25m付近の2カ所で等高線の間隔が他の部分と比べて広がるように観察されることから、斜面の平坦面は標高12.00m付近と標高16.00m付近の2箇所に位置していると想定し、後方部3段築成の墳丘である判断した。しかし後方部東斜面及び西斜面・南斜面では平坦面の存在を示唆する箇所を認めることはできず、墳丘斜面の平坦面のあり方を解明するには発掘調査が必要であると判断された。特に後方部西斜面では古墳主軸想定線付近で等高線が微妙に前方部側へ張り出しており、西側の墳丘構造は他の3面とは異なっている可能性が考えられた。

前方部は後方部側に近づくにつれて標高は低くなり、もっとも標高が下がったところでは標高13.83mを計測する。反対に前方部前端に向かうと標高は高くなり、最も高いところでは標高15.69mを計測する。前方部の高低差は約1.8mである。前方部の墳丘斜面には明瞭な平坦面の存在を確認することはできず、無段の前方部である可能性が高いと考えられ、また前方部の大きな特徴としては前方部の主軸方位が後方部の中心線を挟んで非左右対象であること、後方部高と比較すると低平な前方部であること、後方部の平面形が墳丘主軸線に対して横長の長方形を呈することが桜井古墳の特徴として理解された。

また、史跡範囲の南辺には江戸時代に放牧された馬の逃散を防ぐため作られた「野馬土手」と呼ばれる土手が存在している。野馬土手は西方向から墳丘南側のくびれ部付近まで確認されるが、後方部付近では土手状の高まりを確認することはできないことから、削平されたものと考えられる。また野馬土手は史跡範囲を過ぎると再び現れ東方の海岸方向へ向かう。

## 第2項 発掘調査(図11)

今回の保存整備にかかる発掘調査は、平成10・11・12年度の3年間をかけて実施した。調査区は墳丘復元の情報を得るために適していると考えられる箇所にて、最終的には合計20箇所にトレンチを設定している。なお、1トレンチから10トレンチまでは第2次調査の際に付されたトレンチ番号であるため、今回の調査では11トレンチからの番号を付している。

トレンチは後方部北東コーナー(11トレンチ)・南東コーナー(14トレンチ)・11トレンチと14トレンチの間に2箇所(12トレンチ・13トレンチ)・後方部南西角から南側くびれ部にかけての範囲(15トレンチ)・後方部北西コーナーから北側くびれ部にかけての範囲(18トレンチ)・前方部前端南側(16トレンチ)・前方部前端北側(17トレンチ)・前方部中央北側(19トレンチ)・前方部中央南側(20トレンチ)・後方部南斜面(21トレンチ)・後方部北斜面(22トレンチ)・墳丘主軸線上(23トレンチ)・墳丘北西付近周溝外周(24トレンチ・25トレンチ)・後方部北西墳麓線(26トレンチ)・後方部南西墳麓線(27トレンチ・28トレンチ)・後方部南側周溝外周(28トレンチ・29トレンチ)に設定した。また、16・17・21・22・23トレンチにおいては調査状況にあわせて拡張を行っている。

## (1) 11トレンチ(図15)

当調査区は後方部北東コーナーの位置及び周溝範囲の確認を目的としたトレンチである。調査区の規模は東西12.7m×南北9.5m(西辺)・8m(東辺)の台形であるが、周溝外周を確認のためにトレンチ南東隅に1m×3.3mの拡張をしたため、最終的な調査面積は114㎡である。調査の結果、後方部北東コーナーと後方部東側の周溝を検出した。

周溝は北東コーナーで途切れ、後方部の北側には続いている。周溝の規模は、上面幅

8.5m×底面幅3.4m×深さ0.8mを測る。周溝壁面の立ち上がりは非常に緩やかである。北東コーナーの北側では、深さ0.3mほどで硬い礫層に至り、周溝の掘り込みを終了している。北側の河岸段丘の法面が市道によって若干の削平を受けているにしても、後方部北斜面の墳墓から北側の河岸段丘の法面まで平坦面の幅は約3mで、浅い掘り込みが段丘崖に接続している。後方部北東コーナーの東側でも、周溝の掘り込みは緩やかで、また現代の大規模な攪乱により周溝外周を確定するのは困難であったが、不明瞭な傾斜変換点を周溝外周とすると周溝の幅は8.5mとなる。11トレンチと後述する18トレンチの状況から、後方部北側では墳丘基底面の削り出しを行ったものの、硬い礫層に阻まれて周溝の掘り込みは行われなかったと考えられる。後方部北東コーナーはほぼ直角であり、また第2次調査の1号トレンチでは弥生時代に位置付けられる住居跡3軒が検出されているが、1号トレンチの北に隣接する今回の11トレンチでは新たな住居跡を検出することはできなかった。

(鈴木文雄)



図14 11トレンチ位置図



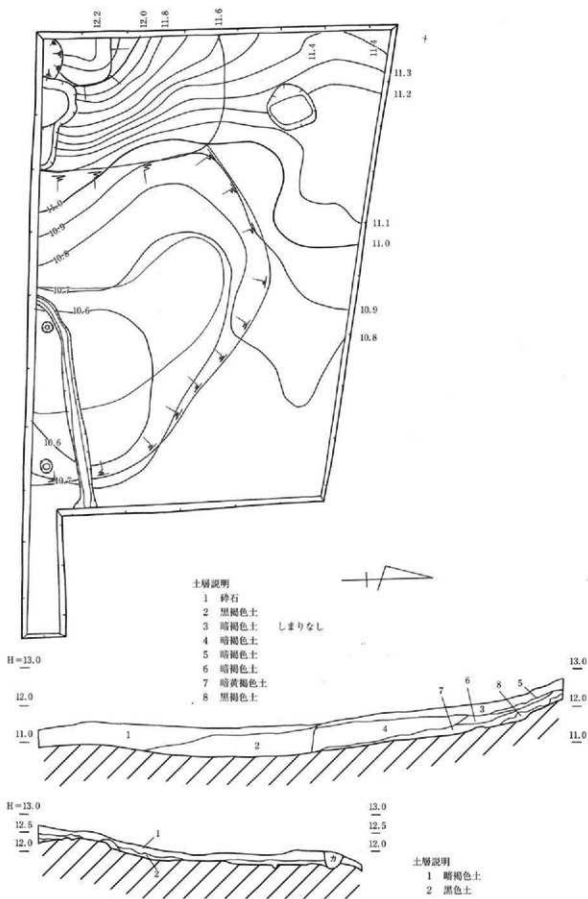


図15 11トレンチ

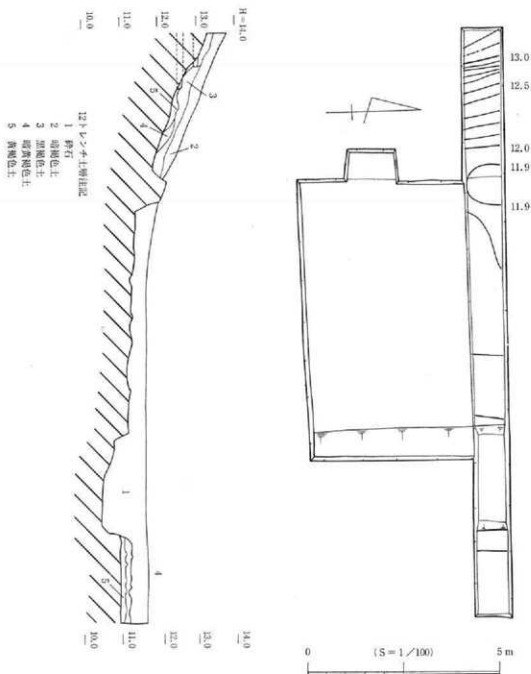


図16 12トレンチ

(2) 12トレンチ (図16)

当調査区は後方部東側の周溝を確認するために設定したトレンチである。第2次調査の2トレンチで後方部の東側に周溝が検出されなかったことから、周溝は途切れ陸橋の北側部分の存在が想定された箇所である。調査区の規模は東西7.3m×南北5.5mの長方形であるが、墳裾を確認するためトレンチ北西隅に幅1m×長さ4mのサブトレンチと、周溝外周の立ち上がりを確認するためにトレンチ北東隅に幅1m×長さ4mのサブトレンチを追加した。調査面積は48㎡である。

平成12年度の調査でトレンチを拡張した結果、29トレンチと連結した状況になっているが、

ここでは平成10年度の12トレンチの知見について記載し、最終的な状況については29トレンチで記載することとする。

調査区は全面重機による削平・攪乱を受けていた。特に後方部東側には幅約3m×深さ約1mの重機による大きな攪乱溝が南北にのびている。約50cmの表土(攪乱土)を除去すると、トレンチ全面に黄褐色の砂礫層が現れ、明確な周溝の掘り込みは確認されなかった。この礫層はトレンチ一面に広がり、古墳築造の際にこれ以上掘り下げることができなかつ

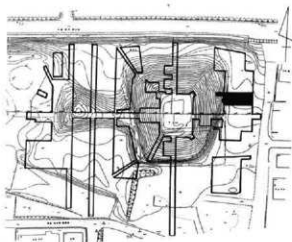


図17 12トレンチ位置図

たため、この面で掘り込み作業を終了したと考えている。なお、重機による大きな攪乱溝の外側では、厚さ約50cmの攪乱土の下に黒色土と暗黄褐色土の水平堆積が確認されており、周溝堆積土と同様な状況を呈していることから、礫層上面までの掘り込みが調査区の外側まで続いていると考えられる。以上のことから、この付近には調査前に予想していた人為的な陸橋は存在せず、自然地形の礫層のため結果的に掘り込みが浅くなったものと考えられ、周溝と周溝外側の掘り込みの差がほとんどなかった箇所と考えられる。

墳丘まで延ばしたサブトレンチでは、墳裾と標高12.90mで旧表土層上面が確認されている。

(鈴木文雄)

### (3) 13トレンチ (図19)

当調査区は後方部東側の周溝を確認するために設定したトレンチである。第2次調査の2号トレンチでは周溝が検出されなかったことから、周溝が途切れ陸橋の南側部分の存在が想定されていた箇所である。調査区の規模は東西8.5m×南北5.5mの長方形であるが、墳裾を確認するためにトレンチ北西隅に幅1m×長さ3.3mのサブトレンチと周溝外周の立ち上がりを確認するためにトレンチ北東隅に幅1m×長さ4.7mのサブトレンチを追加している。調査区の規模は58㎡である。

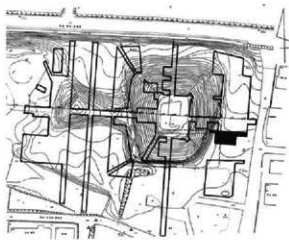


図18 13トレンチ位置図

第2次調査の成果から、このトレンチで周溝が途切れて陸橋が検出されることを予想したが、今回の調査では、上面幅8.8m・底面幅約5m・現地表面からの深さ約1.1mの周溝を確認した。墳丘東斜面の掘削および墳裾からの東側に及ぶ重機による攪乱によって、墳裾は明瞭ではなく、また周溝の外周付近は重機による南北方向の大規模な溝によって攪乱を受けていることが確認された。この攪乱溝の東側に周溝外周の立ち上がりと思われる緩斜面があり、ここを一応周溝

外周としておきたい。しかし、この周溝外周の外側にも周溝と同じ覆土が水平に調査区外まで堆積している。つまり、周溝の東側は調査区外まで浅くかつ広く掘り込んで墳丘の覆土を供給し、墳裾付近をさらに掘り込んで周溝を成形していると考えられる。

墳丘まで延ばしたサブトレンチでは、墳裾と標高12.80mで旧表土層上面が確認されており、築造当時の地表面より約1m削り出して墳丘基底面を成形している。

周溝内からは底部穿孔二重口縁壺が出土した。これらの土器は周溝底面付近で出土し、墳丘流出土中から出土していることから、墳丘部に置かれていたものが墳丘の崩壊にともない周溝内に流入したものと考えられる。  
(鈴木文雄)

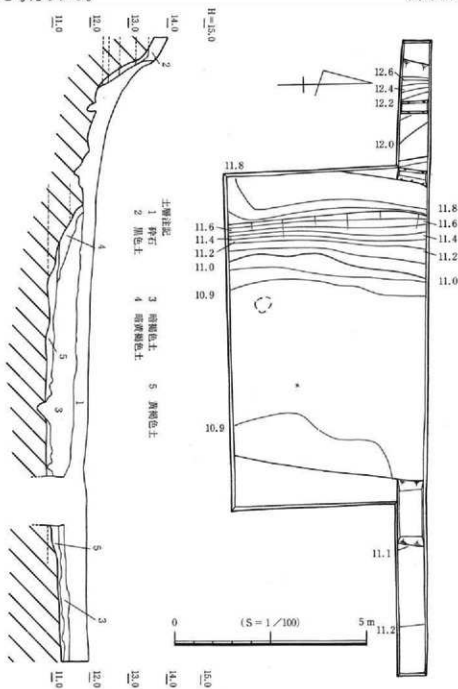


図19 13トレンチ

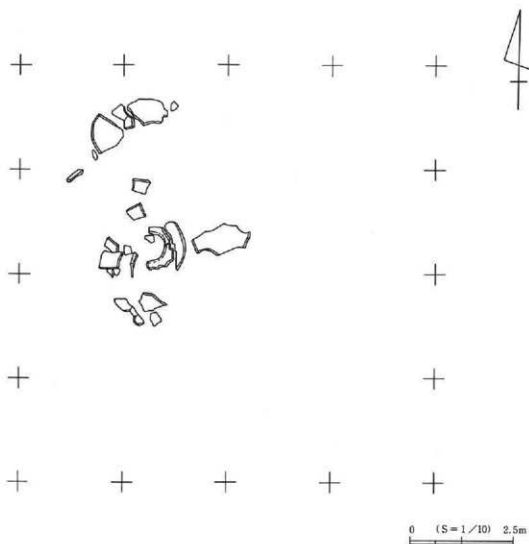


図20 13トレンチ土器出土状況図

## (4) 14トレンチ (図23)

当調査区は後方部南東コーナーおよび周溝を確認するために設定したトレンチである。当調査区は2次調査における3・4・5号トレンチと重複しており、3号トレンチでは後方部南東コーナー・堅穴状遺構が確認され、4号トレンチでは周溝外周が確認されている。

当初トレンチは東西12.7m×南北14.7mの規模で調査を開始したが、周溝外周の立ち上がりを確認するためにトレンチ北東隅に幅1m×長さ3mのサブトレンチを設定したため、最終的な調査面積は190㎡となる。

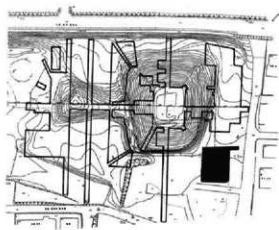


図21 14トレンチ位置図

周溝の上面は削平されており、底面は検出面より深さ約0.9m掘り進んだところで検出した。周溝の底面はほぼ平坦であり、黄褐色土層または砂礫層が露呈している。層位的には黄褐色土が上層に位置し砂礫層が下層に位置することから、砂礫層の上面は起伏しており周溝の底面は砂礫層の最もレベルの高いところが露呈した時点で周溝の掘削を終了したものと考えられる。トレンチの東部には後世の大規模な掘削が行われており、周溝外周を検出することはできなかったことから、トレンチ北東隅にサブトレンチを設定し、周溝外周の把握に努めた。周溝の壁面はサブトレンチの東端で緩やかに立ち上がっているが、上端は調査区の東に伸びており確認することはできず、南東コーナー東側の周溝は史跡範囲外まで伸びている可能性が高い。南東コーナーの南側はいたるところに後世の擾乱が存在しており、周溝の遺存状況は悪かったが、土層断面の観察では周溝堆積土を認識することができたため、ある程度の周溝規模を想定することができている。土層観察による周溝規模は南東コーナーの南側付近で上面幅約4.4m・底面幅3.7mを測る。東側付近では周溝の上面は調査区外に延びるため不明であるが、底面幅7.2m・深さ1.1mと考えられる。13トレンチから続く周溝は調査区の中央やや北側付近まで続くが、それより南側では浅く不明瞭になる。

後方部南東コーナーは現代の住宅築造などによる削平を受けており、地上部分では確認することはできなかったが、調査を進めると墳丘基底が検出されたことにより後方部南東コーナーを認識することができた。後方部南東コーナーは後方部北東コーナーから後方部東辺を形成する墳端線がほぼ直角に屈曲し西方へ向かう地点で認識した。(鈴木文雄)

#### (5) 15トレンチ (図24・25・26)

当調査区は後方部南西コーナーから南側くびれ部の構造確認、くびれ部付近の周溝範囲の確認を調査目的としたトレンチである。トレンチは墳丘主軸想定線No.10杭から主軸想定線に対し直角に接するように設け、北側に位置する18トレンチと併せてくびれ部付近を横断するように設定している。また、トレンチは後方部南西コーナーから南側くびれ部にかけて広い範囲を調査対象としたため不整形な台形を呈しており、後方部南西墳端線上に設けた土層観察用ベ

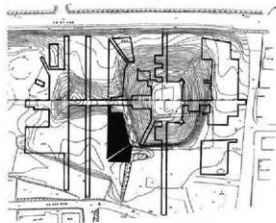


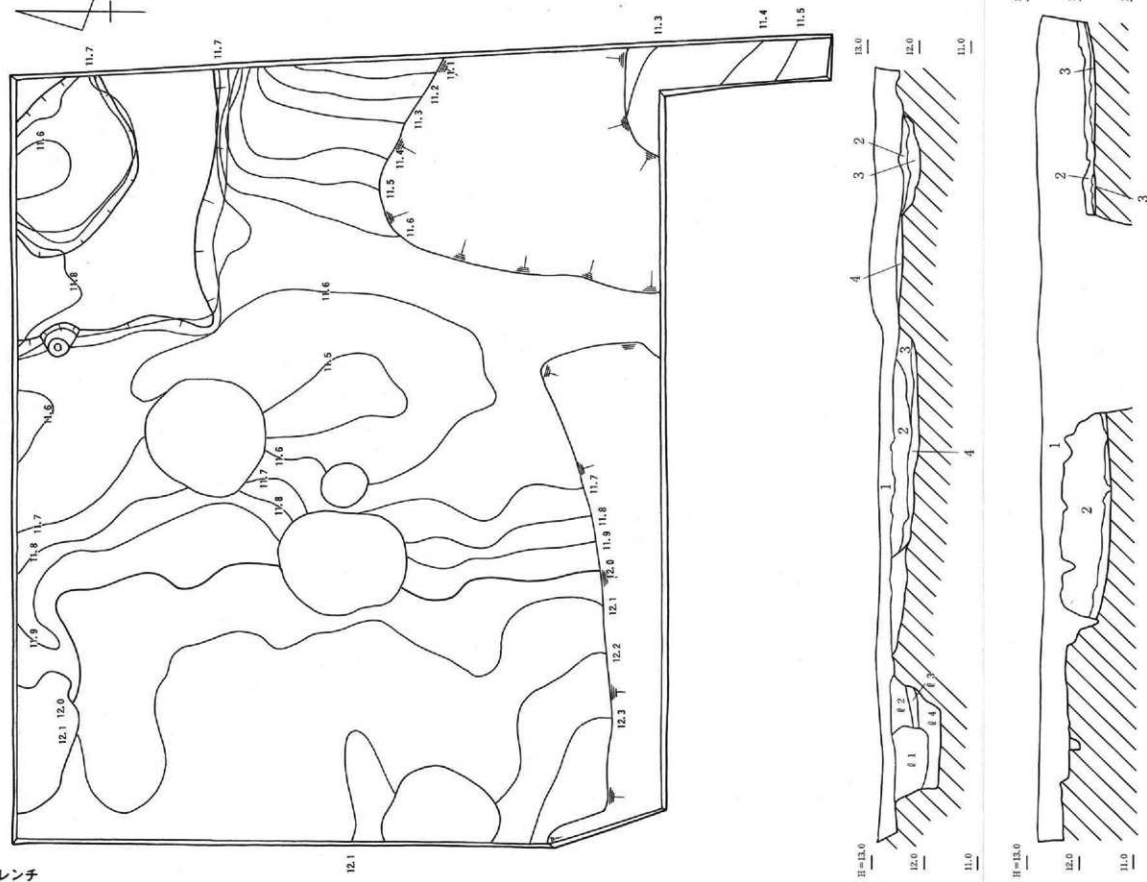
図22 15トレンチ位置図

ルトによって2箇所に分けられている。最終的な調査区の規模は183m<sup>2</sup>である。

当調査区付近における測量調査の知見では、前方部墳頂平坦面ならびに後方部南側墳丘裾部には墳丘を大きく改変する掘削を受けており、築造当時の墳丘を留めていないことは明らかであった。特に後方部南側の掘削は大規模で、後方部の南西コーナーの位置を検出することができれば、後方部の南北規模ならびに東西規模を確定することができるであろうと判断された。

調査は墳丘から周溝にかけての範囲の堆積土を層位的に除去し、墳丘面ならびに周溝面の確認

図23 14トレンチ



14トレンチ土層説明

- 1 表土 砕石
- 2 黒褐色粘土 黒褐色
- 3 黒褐色粘土 暗褐色土
- 4 黒褐色粘土 黄褐色土
- 1 暗褐色粘土 礫を多量に含む。
- 2 暗褐色粘土 泥入物は特になし。
- 3 黄褐色土 泥入物は特になし。
- 4 暗褐色土 礫を多量に含む。

0 7 m

(S=1/100)

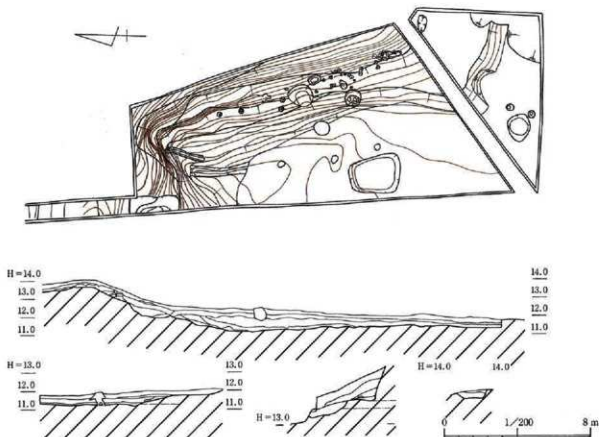


図24 15トレンチ全体図

に努めた。厚さ10cmの表土を除去すると、後方部南西墳麓線上の土層観察ベルトを境に北側には暗褐色土を主体とする堆積土が現われ、土層観察用ベルトから南側では黄色ロームの地山が現れる。暗褐色土はトレンチのほぼ全面で検出されたが土層自体にはしまりがないこと、この段階では墳丘を構成する盛土・旧表土・黄色地山ロームを確認することができないことから、この暗褐色土は墳丘面を覆う墳丘流出土と考え、ベルトの南側で現れた黄色ロームは後方部南側付近で黄色ロームを削りだして形成された墳丘面であると判断される。

南側で現れた墳丘は、幅4mの平坦面を形成しており墳丘の傾斜は標高12.70m付近の変換線から始まる。傾斜は標高11.80mの等高線まで下がったところで終了し墳丘裾の墳端線を形成する。

平坦面は、墳丘部に位置する平坦面としては、幅が広いことや表土直下で検出されたことから、後方部南側一面の大規模な削平によって形成された平坦面であり、墳丘斜面に位置する平坦面とは考えられない。したがって後方部の削平は墳丘傾斜が始まる標高11.10mに位置する傾斜変換線で終了していると理解することができ、これ以下の高さで検出された墳丘面は築造当時の墳丘を保っていると判断することができる。

土層観察用ベルトから北側では、後方部西斜面から前方部南斜面にかけた範囲に広がる流出土を除去すると後方部西斜面では墳丘面が現れ、前方部南斜面ではしまりの強い堆積土が検出



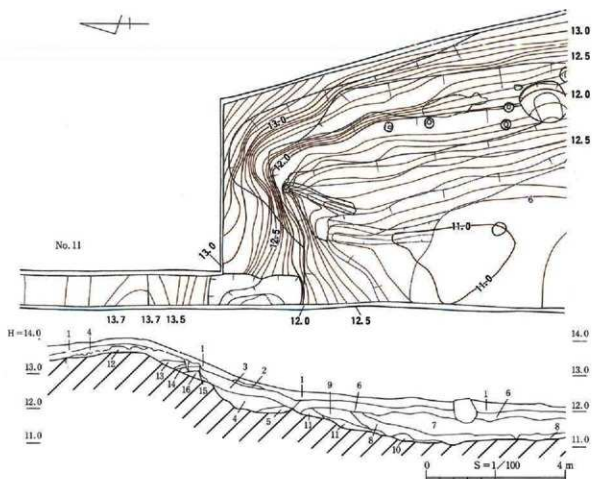


図25 15トレンチ詳細図(1)

された。後方部西斜面は標高11.60m付近の傾斜変換線まで墳丘斜面が続くが、この傾斜変換線から傾斜は緩くなり、幅1.8mの平坦面を形成する。平坦面は標高11.20mの等高線を過ぎると再度緩やかに傾斜を始め墳丘裾の墳端線へ至る。前方部付近で確認されたしよりの強い堆積土は、南側くびれ部から前方部南斜面にかけた範囲に広がっており、層的には削り出された黄色ロームの上層に位置している。調査当初、一旦墳丘斜面を削り出した後に構築された墳丘盛土の可能性を想定し調査をすすめたが、断面観察の結果、土層の堆積状況が墳丘側から周溝部に向う斜めの堆積であることと、地山削り出しのラインを墳丘裾の墳端線と想定すると19トレンチと16トレンチで確認された墳端線上に位置することから、最終的にはこのしよりの強い堆積土はくびれ部付近に堆積した自然堆積土として位置付けている。

くびれ部南側の構造を総括すると、14トレンチで検出された後方部南東コーナーから続く後方部南側裾部は、22トレンチで検出した周溝上端を通過し15トレンチへと現れる。15トレンチに現れた墳裾の墳端線は南西部の土層観察ベルト付近で北側に向かって屈曲し、くびれ部南側へと到達する。墳丘裾の墳端線はくびれ部の最深部から前方部前端へ直線的に向かい、前方部南側の墳端線を形成する。後方部西斜面の標高11.00m付近には幅1.8mの下段平坦面が位置す

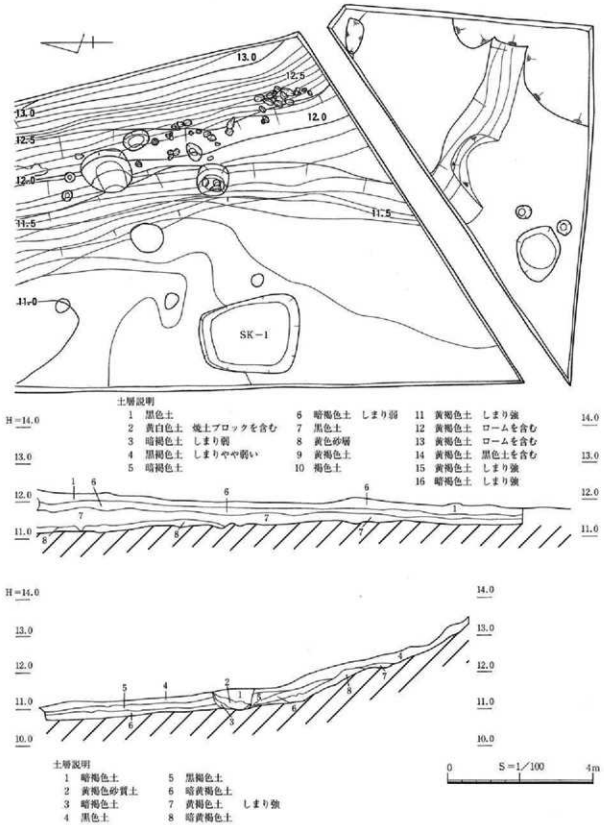


図26 15トレンチ詳細図(2)

るが、くびれ部墳丘斜面に接して終了する。

また、墳丘流出土作業中に後方部西斜面において拳大の川原石が出土している。当初これらの川原石は墳丘面を覆っていた葺石の可能性を考慮して調査を行ったが、川原石の出土は15トレンチに限られていることや、崩落した葺石としては出土数が少ないことから葺石として利用された川原石と考えるよりは、墳丘崩落の過程に混入しものと判断している。また、当トレンチでは平安時代の廃棄土坑や時期・性格不明の白色粘土散布箇所、焼成土坑などが検出されている。(鈴木文雄)

#### (6) 16トレンチ (図28・29・30)

当調査区は、前方部前端の墳丘構造確認並びに周溝の範囲を確認することを目的としたトレンチである。トレンチは墳丘主軸推定線上No.11杭から主軸想定線に対し直角に接しており、北側に位置する17トレンチとあわせて前方部を横断するように設定している。当初、調査区は幅2m×長さ38mの規模で設定し、前方部墳丘からの周溝・野馬土手までの範囲の調査をおこなったが、前方部前端部の南半分の形状及び周溝の平面形確認のため西側への拡張を行ったことにより、最終的な調査面積は184m<sup>2</sup>となる。

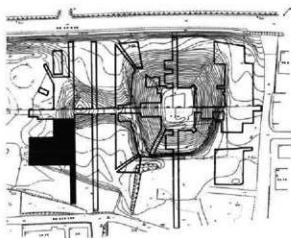


図27 16トレンチ位置図

当調査区付近における測量調査の知見では、墳丘並びに周溝部においては大きな等高線の乱れを観察することはできなかったことから、後世の土地利用などによる墳丘の改変はなく、墳丘ならびに周辺の地形はおおむね築造当地の様子をとどめているものと考えられた。特に墳端線は直線的にくびれ部から前方部中ほどまで進み、そこから前方部前端に向かって屈曲するように観察されることから、いわゆる「バチ形」の前方部の可能性があること、また墳丘斜面では明瞭な平坦面を認識することはできないことから、無段の前方部であろうと考えられた。周溝部においては墳裾の墳端線から最も低い等高線までの高低差が75cmを計測していることから、明瞭な周溝が存在しているものと判断されたが、前方部南側の端部における墳端線を確定できないことや、南側の墳丘傾斜角度は前方部北側の傾斜角度と比較すると角度に大きな差異が認められることなどの疑問点も指摘された。

また、本調査区は2次調査時の第8号トレンチと重複する位置関係にあり、第8号トレンチによる調査の結果では、前方部前端南側では明瞭な周溝は認識されなかったが、地山ロームの削り出しが確認され、周溝の外周として捉えられた。しかし、この地山ロームの削りだしの深さが非常に浅いことから、存在する周溝の平面形や深さは不整形なものであると想定された。

発掘調査は、当初墳丘主軸想定線に対して直角に接する2m×38mのトレンチを基本とし、墳丘部をA区・周溝部をB区、野馬土手範囲をC区と区分して調査を進めた。

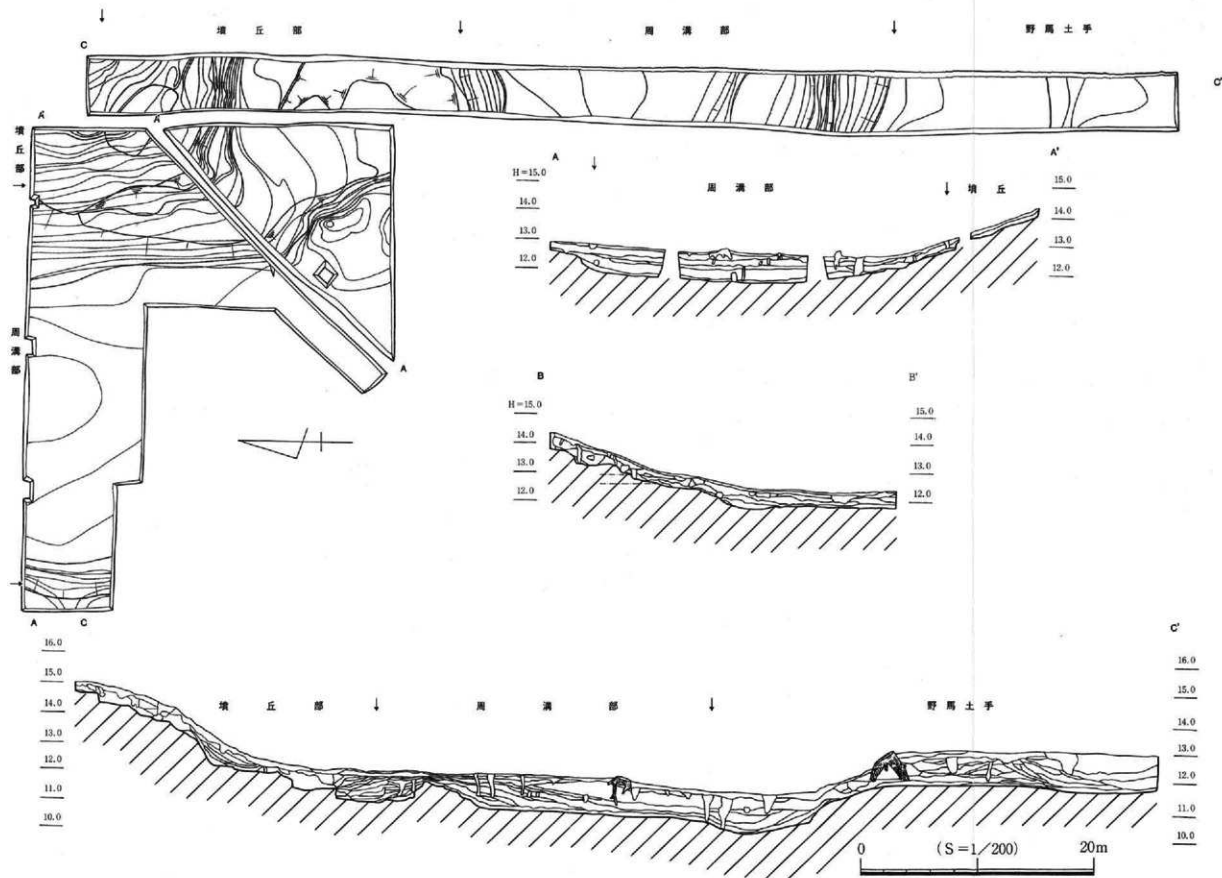


図28 16トレンチ全体図

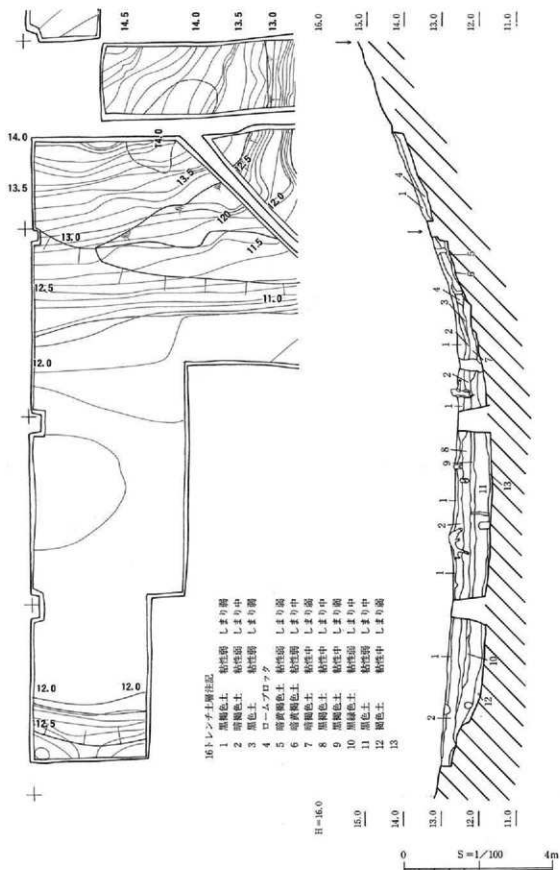


図29 16トレンチ詳細図(1)

調査は表土から層位ごとに除去し、墳丘面・周溝・野馬土手の確認に努めた。

A区とした墳丘部では約15cmの表土を除去すると、暗褐色を主体とする土層が検出されたが、この土層にはしまりが無いことから墳丘面としては考え難く、墳丘からの流出土と判断した。この流出土を除去すると標高12.70m付近で黄褐色土、12.60m付近で黒色土、12.50mより下からは黄色土が検出された。検出した3層のうち最も上層に位置する黄褐色土は墳丘盛土層、その下に位置する黒色土は旧表土層、最も下に位置する黄褐色土は山間層として位置付けている。

墳丘部には標高14.60mと12.40m・11.90m付近の3ヶ所に傾斜変換線を認めることができる。標高14.60mの傾斜変換線は前方部頂部から斜面に変化する変換線であり、変換線を境に斜面は急になり標高12.40mに位置する変換線に到達する。この斜面には上記の墳丘流出土が堆積しており、近世の陶磁器片を出土することから前方部南斜面は大規模な掘削が行われたことにより築造当時の墳丘面は留めていないと判断され、表土直下で検出した墳丘流出土は墳丘の削平後に堆積した2次流出土として考えられる。前方部南側が削平されているという知見は、隣接する19トレンチにおいても同様の知見が得られており、墳丘斜面の掘削は16トレンチ・19トレンチ・15トレンチにかけた範囲で行われたと考えることができる。

墳丘斜面の掘削が終了する標高12.40mの傾斜変換線を過ぎると、標高11.90mに位置する傾斜変換線までの約13mの間には平坦面が続くが、この平坦面は前方部南斜面の掘削によって形成された平坦面と考えられる。この平坦面からは楕円形の掘り込みが確認されている。この掘り込みの内部には多量の焼土や炭化物が堆積しており、窯跡や製鉄跡などのような火を使用することに関連した遺構であると思われるが、遺構の壁面には焼成による硬化面や鉄滓の出土など遺構の性格を判断できる知見を得ることはできていない。またこの遺構が墳丘部の大規模な掘削が行われた時期との先後関係についても不明である。

以上のような調査の結果、墳丘の残存状況が良好であろうと思われた前方部の南斜面は大規模な掘削が行われており、築造当時の姿は留めていないことが判明した。したがって掘削が及んでいる範囲を把握し、前方部の形状を解明するためには調査区の拡張が必要であると判断され、西側への拡張を行った。

拡張は16トレンチの当初トレンチと23トレンチの間を対象とした。拡張区は墳丘線にそって設定した土層観察ベルトを境に、南側をD区・西側をE区と呼称している。

調査はこれまで同様、表土から順に除去し墳丘面の確認及び周溝面の確認を行った。約10cmの表土を除去すると、D区ではA区と同様に墳丘2次流出土が現れ、著しく墳丘が掘削されていることが明らかとなり、築造当時の墳丘面は大きく損なわれていることが確認された。また周溝付近においても大規模な風倒木が確認され、明瞭な墳丘面を検出することはできていない。E区では墳丘頂部で長軸を東西に向けた半円形のプランが検出された。この半円形のプランは、A区においてこのプランの反対側を検出しており、当初は倒木による攪乱であろうと判断していたものであったが、この付近の作業中に攪乱土中から緑色凝灰岩質の管玉が出土したことにより、前方部には埋葬施設が存在している可能性が考えられ、これまでの遺構ならびに堆積土の再検討をおこなった。

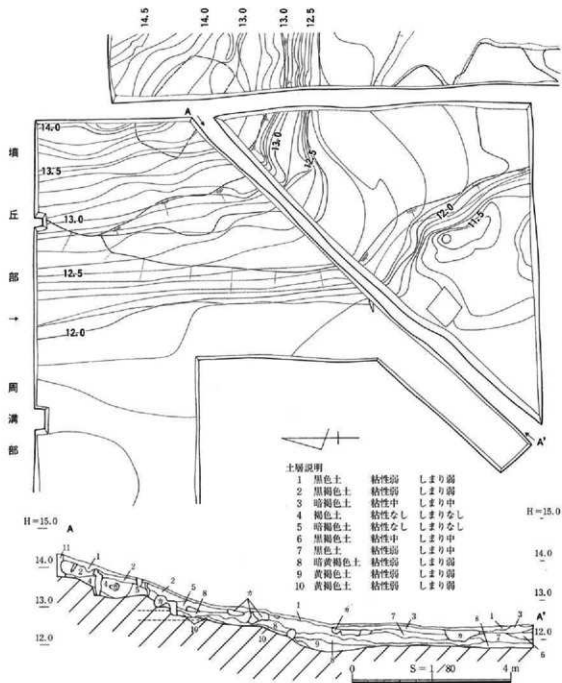


図30 16トレンチ詳細図(2)

再検討の結果、前方部において埋葬施設の可能性が考えられる痕跡はA区からE区にかけて検出された楕円形のプラン以外には存在せず、この楕円形プランを前方部埋葬施設の可能性があると考えておきたい。なお、前方部埋葬施設の可能性のある楕円形プランについては、遺構の掘り込みは行わず、平面形の把握で終了している。

E区の墳丘斜面では表土の直下に黄褐色土が現れ、周溝部においては黒色土が検出された。層位的には黒色土が上層に位置し、黄褐色土は下層に位置する。黒色土は周溝内の堆積土と考えられ、黄褐色土は墳丘流出土と判断した。周溝内堆積土並びに墳丘流出土を除去すると、良好な状態の墳丘斜面並びに周溝面が検出された。墳丘面は上層から黄褐色土・黒色土・黄褐色土・砂礫層の順に層位が分かれ、上層の黄褐色土から墳丘盛土層・旧表土層・地山ローム層・地山砂礫層として位置付けている。

前方部前端の平面形は17トレンチが位置する前方部北側から直線的に16トレンチに向かっており、後方の南北線とはほぼ平行する。前方部南側の前端は風倒木と思われる攪乱によって明瞭な遺構は確認できない状況にある。斜面では標高12.40m付近で傾斜変換線を確認したが、この傾斜変換線は墳塚ラインと平行しており、変換線を境に傾斜角度が変化することから墳丘から周溝へ移行する変換線と理解している。また斜面には平坦面を示唆する状況は確認されなかったことから、無段の前方部であると考えられる。

周溝の調査はB区と拡張D区・E区で行った。

B区では標高11.70mに位置する傾斜変換線を周溝内周の上端としてとらえ、60m程下がった地点の標高11.10m付近で周溝内周の下端を確認した。周溝の底面は下端を過ぎてても緩やかに標高を下げ、標高10.50m付近で更に一段深く掘り込まれる。周溝の最深部はこの2段目の底面で計測し、現地表面からの深さは約1.6mを測る。周溝の外周では標高10.60mに2段目の底面の下端を、標高10.70m付近で2段目周溝の上端が、標高11.00m付近に1段目周溝の下端を、標高11.80m付近に1段目周溝の上端を確認している。

周溝の内周は墳丘に対して外方に向かい、外周は直線的に西側に延びる。したがって周溝の平面形は前方部の南側前端付近で収束し陸橋状を呈するように途切れている可能性が想定された。以上の調査結果により16トレンチで確認した周溝は2段に掘り込まれ、周溝1段目の上端幅は約15m、下端幅約11mを計測し、2段目周溝は上端幅約2.5m、下端幅約2mを計測することとなる。調査では、この2段に掘り込まれた形状から他の溝状遺構との重複関係にあることを考慮し断面の検討を行ったが、堆積土内においては周溝と他の遺構との重複関係は認めることはできない。このような2段に掘り込まれた周溝は隣接する23トレンチや20トレンチの周溝では確認されていないことから、前方部前端南側に限られた状況と考えられる。

また、周溝の底面には地山である黄色ローム層の下層に位置する黄色砂層が露呈しており、底面付近から壺・小型壺と杯が出土している。小型壺と杯は内外面とも赤彩が施されている。

C区とした野馬土手の調査は、土手の付近には鬱蒼とした竹林が広がっており地中の遺構については地下茎による影響が懸念されていた。表土を除去するとやはり竹の地下茎により、明確な土手の状況を判断することができなかったため、調査は土手の断ち割りを行い土層の断面によって土手の形状を把握することとした。土層断面観察の結果、土手の南半は交互に積み重ねた版築状の堆積状況を呈していることが確認され、人為的な堆積土であると判断される。北半は南半と比較すると版築のような状況は弱いものの台形状の堆積状況を呈していることから野馬土手に関する盛土であると判断した。この人為的な堆積土層は上端幅約7.4cm、下端幅約



9.2cm・高さ約90cmの台形を呈している。

16トレンチと総称したこの調査区では、弥生土器・土師器・近世陶磁器などが出土している。これらの出土遺物のうち、古墳時代に比定される遺物は周溝底面付近から出土した土師器と前方部前端斜面から出土した緑色凝灰岩質管玉であるが、後者は攪乱土中からの出土である。

(荒 淑人)

#### (7) 17トレンチ (図32・33・34)

当調査区は前方部前端北側の構造、周溝範囲の確認を目的としたトレンチである。トレンチは、墳丘主軸想定線上No.11杭から北側に向かって直角に接しており、南側に設けた16トレンチとあわせて前方部前端を横断するように設定している。当初、調査区は幅2mのトレンチを設け前方部から周溝にかけて範囲の約54㎡の調査を行ったが、調査状況に合わせて西側に拡張を行った。17トレンチの最終的な調査面積は164㎡である。

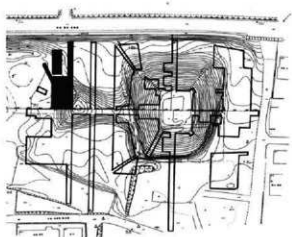


図31 17トレンチ位置図

17トレンチ付近の測量調査時の知見では、前方部北側には大規模な掘削が認識されており、築造当時の墳丘面を留めていないことが明らかであった。この掘削は、前方部の北側半分にかけて広範囲に及んでおり、前方部の形状を想定することは非常に困難な状況であったが、19トレンチ付近から17トレンチへ向かってくる等高線には大きな乱れが見られないことから、墳丘面の改変は前方部北半に限られ、それ以外の遺構は良好に残存しているものと想定された。また、17トレンチは2次調査時の第10号トレンチと重複しており、その結果、削り出された地山が確認され、墳丘裾のラインとして捉えられている。

調査は表土から層位順に堆積土の除去を行い、墳丘面ならびに周溝面の確認に努めた。墳丘部においては厚さ約10cmの表土を除去すると比較的均一な褐色土が現れた。この褐色土には他のトレンチで確認された墳丘盛土特有のしまりがないことや、墳丘の掘削範囲に断片的に堆積している状況から、墳丘を掘削したあとに堆積した2次的な流出土であると判断される。この2次流出土を除去すると掘削された墳丘面が現れた。墳丘面は標高13.10m付近から12.90m付近に位置する黒色の旧表土層を境に上層には黄褐色土、下層には黄色ロームが確認され、上層の黄褐色土を主体とする土層は他のトレンチで墳丘盛土として位置付けた土層と同様のもので、所々に黒色土を含む。この時点で前方部前端北側の大部分は測量調査時の知見と同様に、大規模な掘削を受けていることが再確認され、築造当時の墳丘面は留めていないことが明らかとなった。また、掘削は標高14.70m付近から標高12.50m付近の範囲に及んでおり、複雑な傾斜変換線を形成しながら墳丘裾部に至る。

基本トレンチ内で遺構面が残存していると考えられる範囲は、トレンチ中央やや北よりに位

位置する傾斜変換線から周溝部にかけての範囲である。この傾斜変換線は黄色ロームを削り出すことで遺構面を形成しており、約40cmほどで周溝部の底面に至る。周溝の底面は緩やかに傾斜しながら北方に向かうが、周溝の外周を形成しないまま段丘崖に至る。

この調査区では前方部の平面形や墳丘北側の周溝の範囲を確定できる知見を得ることはできなかったことから、調査区を西側に拡張し前方部の範囲ならびに周溝の確認を行うこととした。

新たに設定した調査区は東西7m×南北14.5mの長方形を呈し、調査区を斜めに横断する土層観察用のベルトを設けている。拡張の目的は前方部の平面形の確認、周溝の確認である。

拡張区の調査の結果、墳丘部では、墳丘盛土、旧表土層、黄色地山ロームを検出することはできたものの、先に調査した基本トレンチと同様に墳丘面は掘削による地形の変化が著しく、墳丘の構造を明らかにすることはできなかった。墳丘面には掘削による複雑な変換線が確認されたが、これらの変換線のうち最も低い所に位置している変換線は、墳丘部の掘削が終了した範囲の変換線として捉えた。この変換線より下部には周溝内堆積土と判断される黒色土が広がっており、墳丘部の掘削は墳丘裾部や周溝部には及んでいないと判断された。周溝内堆積土の黒色土を除去すると、黄色地山ロームに近い堆積土が現れる。この黄色土は初期段階の墳丘流出土と考えられ、この初期流出土を除去すると前方部の平面形を確認することができた。

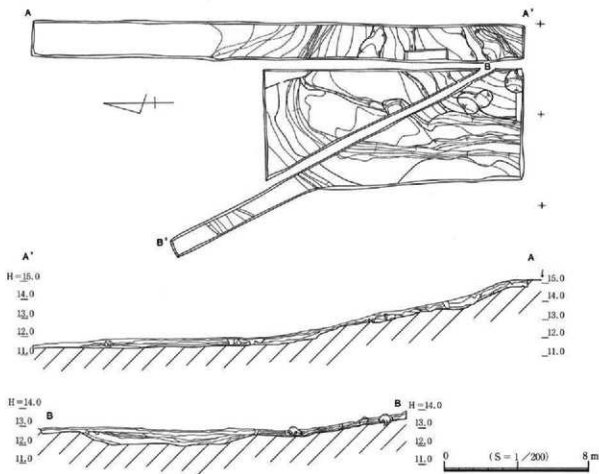


図32 17トレンチ全体図

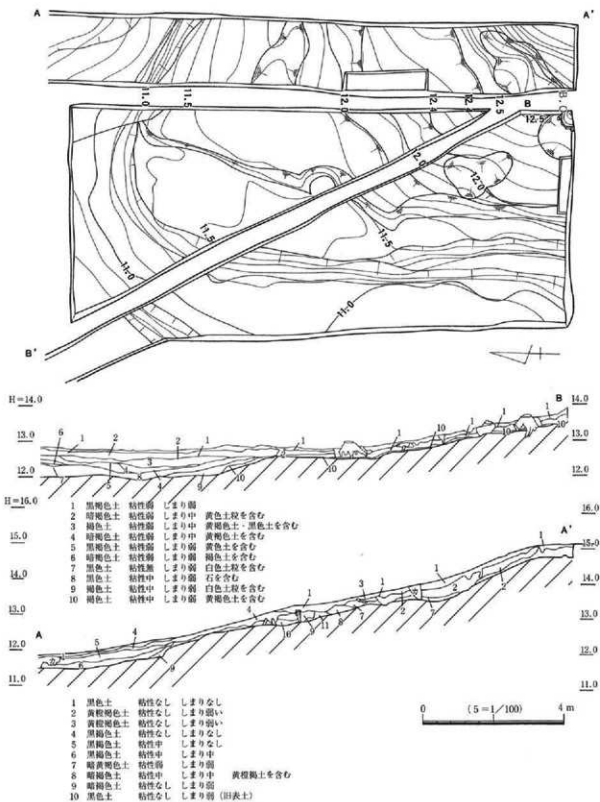


図33 17トレンチ詳細図(1)

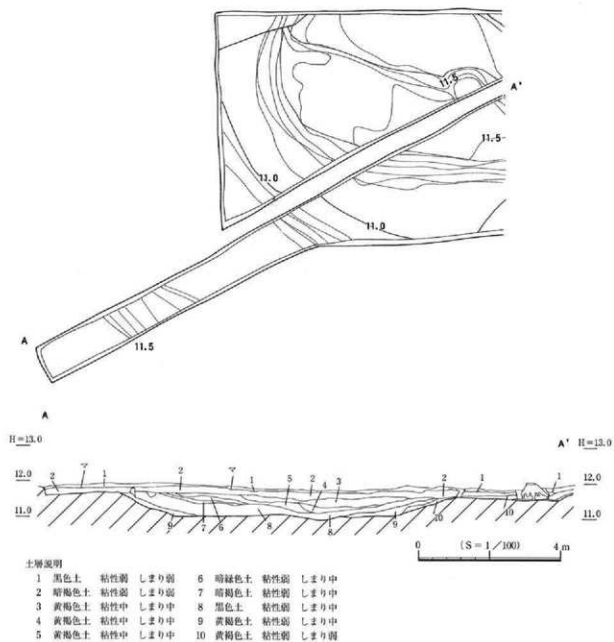


図34 17トレンチ詳細図(2)

前方部の平面形は19トレンチで検出した墳丘裾の墳端線がほぼ直線的に17トレンチへと向う。この墳丘裾の墳端線は17トレンチの拡張区内で緩やかに屈曲し16トレンチへと向かい、前方部西側の墳端を形成する。また前方部の前端は明瞭な角を形成しないことが特徴である。また前方部西側の墳端線は墳丘の主軸に対して直交している。

前方部北側の周溝は拡張区の北西角に設定した補足的な調査区で確認することができた。周溝は、地山である黄褐色ロームを掘り込み形成される。残存している墳丘面から周溝外周の上端までの幅は約10mを測り、墳丘裾のラインと周溝外周の下端の幅は6mを測る。深さは検出面より80cmを測る。周溝内の堆積土は中層に黒色土の周溝堆積土が確認されるが、この黒色土の上層には厚さ約40cmの黄褐色を主体とする土層が広がる。この堆積土中からは近世陶磁器の破片や板井式土器などが不規則に混入していることから、ある時期の人為的な埋土の可能性が高いと考えている。(荒 淑人)

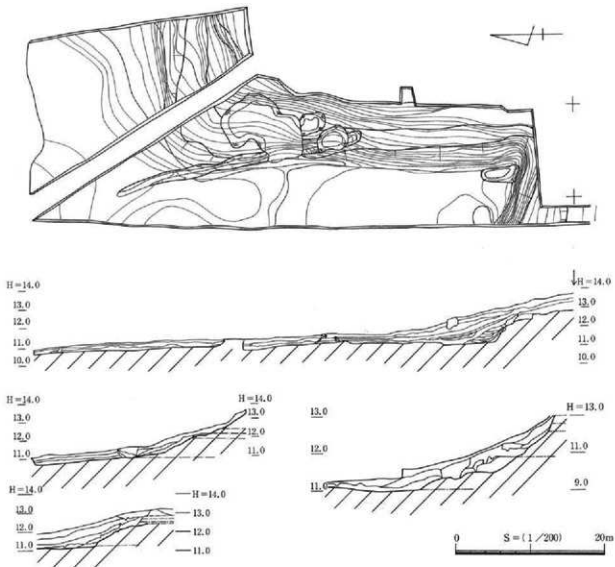


図35 18トレンチ全体図

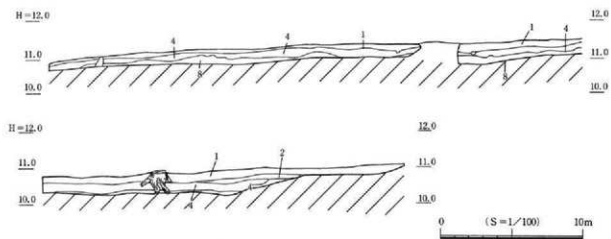
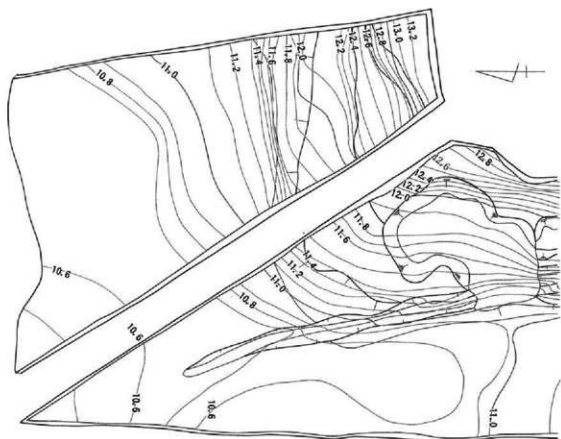


図36 18トレンチ詳細図(1)

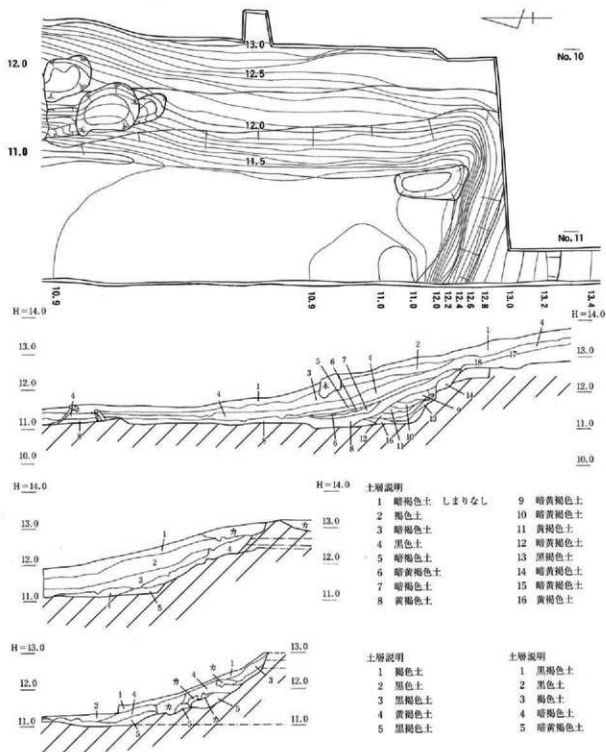


図37 18トレンチ詳細図(2)

## (8) 18トレンチ (図35・36・37)

当調査区は、後方部北西コーナーから後方部西斜面、くびれ部にかけての範囲の墳丘構造ならびに周溝の範囲を確認するために設定したトレンチである。調査区は墳丘主軸想定線 No. 10杭から直角に接するように設け、南側に位置する15トレンチとともにくびれ部を横断するように設定している。また、後方部北西墳麓線上には土層観察用のベルトを設定したため、調査区は2箇所に分けられている。

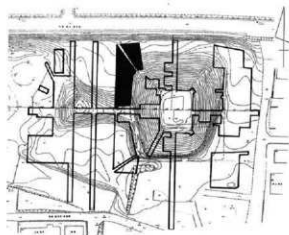


図38 18トレンチ位置図

は、現状でも確認することができる前方部墳頂平坦面を横断する後世の掘削以外には、墳丘を大きく損なう改変は認められていない。またくびれ部の等高線は幅が広くっており、墳丘斜面の傾斜は他の墳丘斜面と比較すると非常に緩やかな墳丘斜面であると判断されている。この緩やかな墳丘斜面は墳丘からの流出した土がくびれ部付近に堆積したためと考えられ、この箇所の墳丘面は良好な状態で遺存していると想定された。ただくびれ部南側の墳丘傾斜角は北側の傾斜角と比較すると非常に急な墳丘斜面であることから、くびれ部の北側と南側では墳丘構造に違いがあるものと想定された。

調査は表土から順に堆積土を除去し、墳丘面ならびに周溝面の確認を行った。厚さ約10cmの表土を除去すると、暗褐色土を主体とする堆積土が検出された。この堆積土にはしまりがなく墳丘を構成する墳丘盛土・旧表土層・黄色ロームはこの時点では確認されていない。したがってこの堆積土は墳丘盛土の流出が原因の墳丘流出土と判断し除去を行った。褐色土を除去すると後方部では墳丘面が現れ、前方部側では15トレンチと同様にしまりに強い堆積土が現れた。このしまりの強い堆積土については、当初地山削り出したあとに構築された墳丘盛土の一部である可能性を考慮し、サブトレンチによって下層の調査を行ったが、堆積土の下層には明瞭な墳裾の削り出しが行われていることが確認され、地山の削り出しラインは19トレンチ、17トレンチの墳端線を結んだ線上に位置することから、上層の堆積土は墳丘部から周溝部へ堆積した自然堆積と判断された。したがってこの堆積土は自然堆積土と位置付け、最終的には15トレンチと同様にくびれ部付近に堆積した墳丘流出土と考えている。

当トレンチで検出された墳裾の墳端線は、11トレンチで検出した後方部北東コーナーから22トレンチの墳端線とおり18トレンチへ向う。18トレンチに現れた墳端線は土層観察用のベルトの南側で南方へ方向を変え、後方部西辺の墳端線を形成する。後方部西辺は北西コーナーから直線的に前方部斜面に到達し、前方部北辺はくびれ部の最深部から直線的に前方部北側の前部に向かう。前方部の墳頂平坦面は標高13.70m付近で確認され、標高13.20mに位置する傾斜変換線から墳丘斜面が始まる。墳丘斜面には平坦面は存在せず、無段の前方部である。

(鈴木文雄)



## (9) 19トレンチ (図40・41)

当調査区は前方部北側の平面形の確認・墳丘構造の確認・周溝範囲の確認を目的とし、特に前方部の平面形が「バチ形」を呈するのかが確認するために設定した調査区である。調査区は前方部北面のほぼ中央部付近、墳丘主軸想定線上No13杭から主軸線に対し直角に接するように設定し、南側に設定した20トレンチとあわせて、前方部中央を横断するようにしている。

調査区の規模は幅2m×長さ25m・面積は50㎡である。

測量時の知見では、この調査区付近には後世の乱乱や掘削など墳丘や周溝を改変した痕跡は認められず、遺構の保存状態は良好であると考えられた。また、墳丘斜面には平坦面のような施設の存在を読み取ることはできず、無段の前方部であると考えられた。

調査は表土から順に除去し、墳丘面ならびに周溝底面の確認を進めた。墳丘面を確認するまでの堆積土は墳丘部で約30cm、周溝部で約50cmであり、上層から表土・周溝堆積土・墳丘流出土である。

墳丘部では表土・墳丘流出土を除去すると、黄褐色土・黒色土・黄色ロームが検出された。黄褐色土は標高14.40mから13.20mの範囲で確認され、比較的硬く締まっている。黒色土は標高13.20mから12.60mの範囲で検出され、層的には黄褐色土の下層に位置する。さらに標高12.60mから11.30mの範囲では黄色ロームを検出した。この異なる3層は上層から墳丘盛土・旧表土・地山として考え、墳丘築造に際しては標高13.20mの旧表土上面から黄褐色地山ローム層の範囲で地山を削り出し、さらに旧表土層の上部に厚さ約1.7mの黄褐色土を盛り上げることで前方部を築いていることが確認された。

また墳丘部では標高14.00m付近・12.20m付近の2箇所傾斜変換線が認識された。いずれの傾斜変換線もほぼ直線的に前方部前端に向かってのり。標高14.00m付近に位置する傾斜変換線は前方部墳頂平坦面から墳丘斜面へ移行

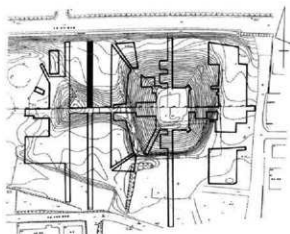


図39 19トレンチ位置図

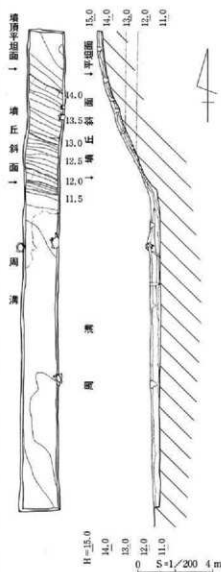


図40 19トレンチ全体図

する変換線であり、標高12.20m付近に位置する傾斜変換線は、墳丘斜面から周溝へ移行する変換線であると判断している。

周溝部では標高12.20m付近の傾斜変換線を周溝の上端とし、周溝内周の下端は標高11.40mの傾斜変換線で捉えている。周溝底面レベルは、トレンチの北に向かうにつれて徐々に標高を下げ最も低い所では標高11.10mを測る。また標高11.30m付近からは礫層が露出し、トレンチ北端まで続く。礫層は黄褐色地山層の下層に位置していることが確認されており、この礫層の検出面が古墳築造にかかる周溝部の掘削停止面であると考えている。墳丘北側の周溝の立ち上りについては明瞭な立ち上りを確認することができなかったため、周溝外周から周溝内に流れ込む流入土の有無など詳細な検討を行ったが、周溝外周の存在を示唆する堆積状況を確認することはできなかった。したがって北側周溝の立ち上りについては、明瞭な立ち上りを形成しないまま河岸段丘崖に至ってしまう、もしくはすでに削平された可能性が考えられるが、確実な結論を得ることはできていない。

当調査区から出土した遺物は、弥生時代中期の桜井式土器片が大半であり、表土・流出土・周溝堆積土からも出土である。また古墳時代に位置付けられる遺物は出土していない。

調査では墳丘の平坦面や葎石・埴輪の存在を示す痕跡は確認されなかったことから、測量の際の知

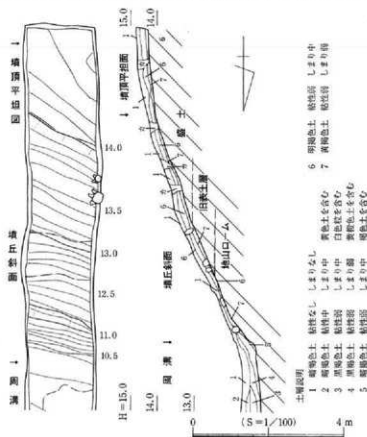


図41 19トレンチ詳細図

見と同様に平坦面や葎石などをともなわない前方部であることが確認された。(荒 淑人)

#### (10) 20トレンチ (図43・44)

当調査区は前方部南側の墳丘平面形および構造、周溝範囲、野馬土手の範囲を確認するために設定したトレンチである。トレンチは前方部南面はほぼ中央付近、墳丘主軸想定線No.13杭から主軸に対し直角に接するように設定し、北側に位置する19トレンチとあわせて前方部中央を横断するように設定している。トレンチの規模は長さ約42m×幅2mで面積は84㎡である。

測量の知見では、本トレンチ周辺には削平による地形の改変を認識することはできなかったことから、遺構は比較的良好に残っているものと判断された。しかし、墳丘部斜面は前方部北

面の墳丘面と比べて急であること、墳丘の傾斜変換線や墳丘裾部の位置が曖昧であることから、トレンチを設定し墳丘の形状や範囲の確認を行うこととした。

調査は表土から層位ごとに除去し、野馬土手、墳丘、周溝範囲の確認に努めた。なお、当調査区は南北方向に長いトレンチであることから、調査を進めるにあたって墳丘部をA区、周溝部をB区、野馬土手をC区と呼称している。

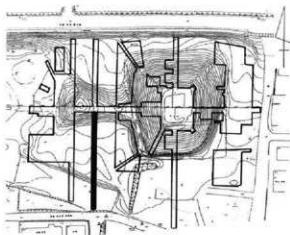


図42 20トレンチ位置図

遺構を確認するまでの堆積土は、野馬土手付近で約30cm、墳丘部で約30cm、周溝部で約80cmである。基本的な層位は上層から表土、野馬土手盛土、周溝堆積土、墳丘流出土である。

表土を除去すると調査区南部では黄褐色土に黒色土が混入した盛土が確認され、野馬土手築造にかかる盛土であると判断した。野馬土手の裾のラインは標高11.80m付近に位置し、野馬土手の頂部は標高13.00m付近で確認した。トレンチ内で確認された野馬土手の規模は底辺約8.5m、上辺約3.5m、高さ約1.15mの台形を呈する。1988年に実施された野馬土手の調査では、野馬土手の規模は上幅6尺・下幅18尺・高さ6尺であると考えられ、この調査成果を考慮すると本トレンチで確認された野馬土手の頂部は大きく削平されていると考えられる。

野馬土手の下層には周溝堆積土として判断した黒色土が入り込んでいる様子が確認された。したがって野馬土手と周溝は重複関係にあり、野馬土手は周溝埋設後に築造されていることが明らかとなった。

調査は周溝の範囲を確認するために野馬土手の断ち割りを行い、周溝の外周の確認をおこなった。また、野馬土手の下層には溝状遺構が確認されており、桜井古墳以外の古墳の周溝である可能性が考えられる。

墳丘部では約20cmの表土を除去すると硬く締まった黄褐色土が検出され、前方部墳頂平坦面として判断した。墳丘斜面付近ではしまりのない黄褐色土が広い範囲で検出され、墳丘流出土と考え調査を進めた。墳丘流出土を除去すると墳丘面は大きな掘削を受けていることが明らかになった。墳丘の掘削は前方部墳頂平坦面からほぼ垂直に行われており、標高14.40m付近から標高12.50mの範囲で行われている。このような状況から、当初墳丘流出土と判断した堆積土層は墳丘掘削後に堆積した2次の流出土であると判断された。また2次流出土からは近世陶磁器、砥石などが出土しており、この時期には墳丘の掘削が行われていたと考えることができる。

墳丘は、上層から黄褐色土・黒色土、黄色ロームで構成されており、黄褐色土は標高14.50mから12.80m、黒色土は標高12.80mから12.50mの範囲で確認され、さらに旧表土層の下層には黄色ロームが位置する。この3層は19トレンチの墳丘を築造している土と対応状況にあり、

19トレンチと同様に上層から墳丘盛土・旧表土・地山ロームとして位置付けている。

周溝の内周は、墳丘側で認識した標高12.10m付近に位置する傾斜変換線で捉えている。この付近の地形は、墳丘の削平により大きな改変を受けていることから、確実に捉えることはできなかったが、標高12.10mの傾斜変換線を過ぎると緩やかな落ち込みが始まる。この落ち込みは明瞭な下端を形成しないで、標高11.00m付近の最深部へと到達する。

周溝の外周は標高11.60m付近に位置する傾斜変換線で捉えている。この変換線は近世野馬土手の下層に位置しており、野馬土手は周溝が埋没したあとに構築していることが確認されて

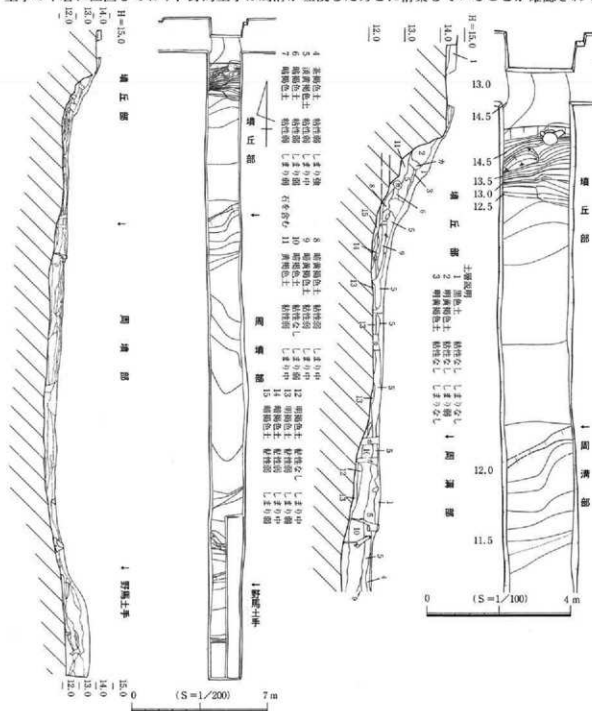


図43 20トレンチ全体図

図44 20トレンチ詳細図

いる。周溝の掘り込みは内周と同様に非常に緩やかで明瞭な下端を認識することはできない。

以上の調査の結果、前方形南辺には幅約19.5mを測る周溝が巡っていることが確認された。

当調査区からの出土遺物は、弥生時代中期の桜井式土器片が大半であり、桜井古墳にともなう遺物はない。また、調査では葺石などが存在していた痕跡を認めることはできなかったことから、19トレンチの調査知見と同様に葺石などはともなわない前方形であると考えられる。

(荒 淑人)

#### (11) 21トレンチ (図46・47)

当調査区は後方形南側斜面の構造確認及び周溝範囲を確認するために設定した調査区である。調査区は墳頂平坦面に位置するNo. 6杭から主軸想定線に直行するように設け、北側に隣接する22トレンチとあわせて後方形を南北方向に横断するように設定している。調査区の規模は当初幅2m×長さ45mの90㎡で調査を進めたが、遺構の検出状況にあわせて墳丘斜面で25㎡の拡張を行ったため、最終的な調査面積は115㎡となる。

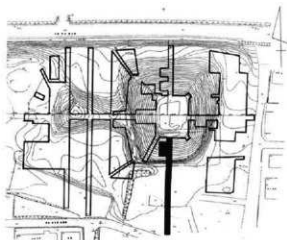


図45 21トレンチ位置図

当調査区付近の測量調査時点の理解では、後方形墳頂平坦面並びに墳丘斜面上半部には、墳丘の形状を大きく損なう改変は認められなかったが、墳丘裾部には後世の土地利用による大きな掘削を受けており、墳丘裾部ラインを認めることはできない状況にある。また墳丘部では墳丘斜面の平坦面を確認することはできなかったため、墳丘構造の確認のためには発掘調査が必要であると判断された。墳丘の掘削部から周溝にかけた範囲では周溝の存在を認められる状況にはなく、また調査区の西側には野馬土手が現存しているが当調査区付近では完全に掘削されてしまっていた。

発掘調査は、まず墳頂平坦面から墳丘斜面下半部の掘削部にかけた範囲で墳丘面を確認することから開始した。調査は表土から層位順に堆積土を除去し墳丘面の確認を行った。墳丘部に堆積している厚さ約20cmの表土を除去すると、暗褐色を主体とする堆積土が検出された。この暗褐色土にはしまりがなく、調査区全体で検出される状況を考慮すると墳丘流出土として判断される土層である。また墳丘裾部付近の掘削を受けている範囲には掘削後に堆積した2次流出土が厚く堆積しており、この2次流出土を除去した時点で黒色土を含む黄褐色土・黒色土・黄色土が確認されている。標高12.70m付近に位置する黒色土は旧表土として捉えられるもので、この旧表土の上層に位置する黄褐色土は墳丘盛土、下層に位置する黄色土は地山であると考えられる。

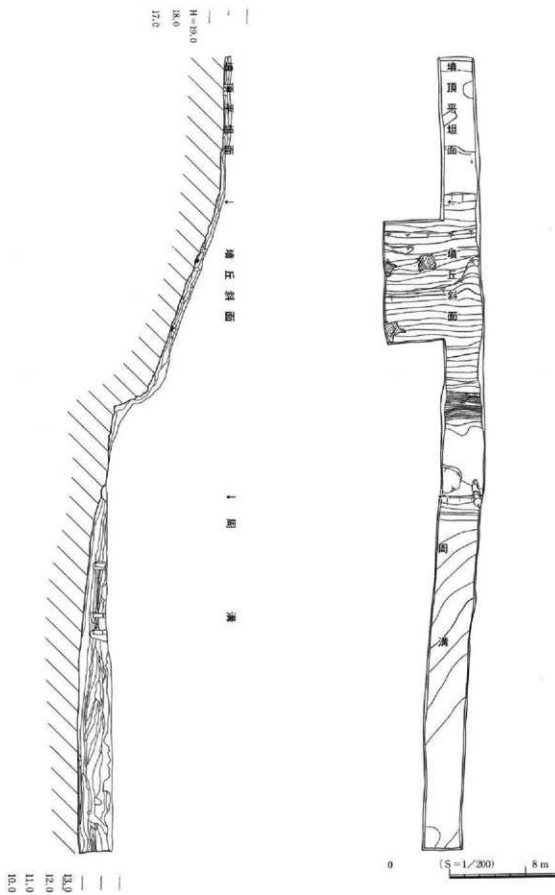


図46 21トレンチ全体図

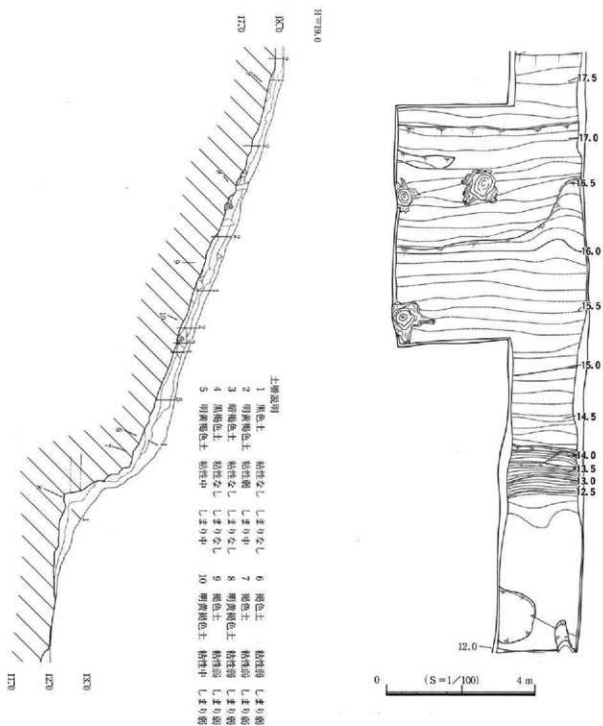


図47 21トレンチ詳細図

墳丘の構造では、標高17.90mを中心とする範囲には明瞭な平坦面が形成されており、墳頂平坦面と考えられる。墳頂平坦面は標高17.50m付近に位置する傾斜変換線を境に墳丘斜面へと移行し、明瞭な傾斜変換線を形成しないまま標高14.20mに位置する墳丘掘削ラインへと至る。したがって、この時点では墳丘斜面に存在するであろうと思われる平坦面を検出することはできなかったため、墳丘斜面の平坦面を確認するために調査区を西側に拡張をおこなったが、明瞭な平坦面を確認することはできなかった。後方部南斜面の平坦面については後方部南斜面の墳丘面は砂質土で築造されていることから墳丘の崩落が起きやすい状況であると考えられること、後世に墳丘上に植林された杉、自生していた竹の地下茎が広がっていたことを考慮すると、後方部南斜面には平坦面は上記の理由によって崩れてしまった可能性が高いと考えているが、本来後方部南斜面には平坦面が存在していなかった可能性も残されており、調査の成果では後方部南斜面の存在については不明であると言わざるを得ない。

周溝部の調査は後方部南側の周溝の存在並びに規模を確認するために行った。調査は周溝が存在していると考えられる範囲の堆積土を層位的に除去し、周溝面の検出に努めた。周溝は調査区の北側に位置する墳丘部から始まる周溝の内周を検出した。この周溝内周は後世の掘削によって削平された後方部南側の墳端線から周溝の傾斜が始まる傾斜変換線は標高11.90mに位置する。周溝は黄色ロームを掘り込み形で形成されるが、標高11.50m付近で砂礫層が現われる。しかし周溝の底面は南に向かって徐々に深くなっており、そのまま調査区の南端に到達している。したがって、後方部南側の周溝の外周は調査区の更に南側へ位置しているものと考えられる。周溝部の底面は最も深いところで現地表面から1.75mを測る。

また周溝内からは遺物は出土していない。

(荒 淑人)

#### (12) 22トレンチ (図49・50・51)

当調査区は後方部北側斜面の構造確認及び周溝範囲を確認するために設定した調査区である。調査区は、後方部墳頂平坦面のはは中央付近の墳丘推定主軸線No. 6杭から墳丘主軸推定線に対し直角に接するように設定した。また、当調査区は南側に設定した21トレンチとあわせて後方部を南北方向に横断するように設定している。調査区の規模は幅2m×長さ31mで設定したが、調査状況に合わせて上段平坦面付近と下段平坦面で拡張を行っている。最終的な面積は94㎡である。

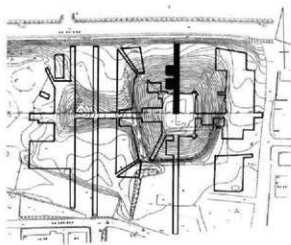


図48 22トレンチ位置図

測量調査時の知見では、後方部の東側斜面、南側斜面は後世の土地利用による墳丘の削平が著しく、後方部の構造を明らかにすることは困難であると判断されたが、当調査区域付近には、倒木によると思われる窪みが所々で見られる以外には、墳丘の残存状況は良好であったことか



ら、後方部の構造を把握するには最も適した場所であると判断された。特に標高11.70m付近と13.80m付近において等高線の間隔が若干広がっていることから、この付近に平坦面が位置する後方部3段築成の墳丘であると想定されている。調査は墳頂平坦面から表土・周溝部堆積土・墳丘流出土の順に堆積土を除去し、墳丘面の確認を行った。当調査区内における堆積土は墳頂平坦面付近で約45cm、墳丘斜面付近で約65cm、周溝付近では約70cmである。

当調査区の調査は、幅2mの調査区を墳頂平坦面から周溝にかけた範囲に設定し開始した。墳頂平坦面から斜面に広がる黒褐色を基調とした表土の除去をおこなうと、標高14.50m付近で楕円形の落ち込みと、標高12.90m付近で溝状の遺構が確認された。楕円形の落ち込み内には黒褐色土及び褐色土が堆積しており、土層には締まりがないことから植林されていた杉による倒木痕であると判断される。溝状の落ち込みは18トレンチ、及び23トレンチ東斜面の状況を含めて考えると、後方部を螺旋状にあがる道状の遺構と考えられ、この掘り込みは墳丘流出土を掘り込んでいることから古墳に伴う遺構の可能性はきわめて低いと考えられる。

また、表土を除去したトレンチの全体には暗褐色土及び明褐色土が広がった。この段階では旧表土層や地山面は確認されていないこと、この土層に底部穿孔二重口緑壺の破片が混入していることから、検出した暗褐色土及び明褐色土は墳丘の崩落による墳丘流出土として理解された。標高15.90m付近と12.80m付近では斜面の角度がやや平坦になっている箇所が確認され、この付近に墳丘斜面の平坦面が位置している可能性が高いと考えられ、また出土する底部穿孔二重口緑壺の破片は2箇所平坦面付近でまとまった出土状況を示していることから、墳頂に設置されていた供献土器が墳丘の崩壊に伴う墳丘流出土とともに、2箇所の平坦面に堆積したものと考えられる。

墳丘面の確認作業は出土した土器片の出土状況を記録した後、更に墳丘流

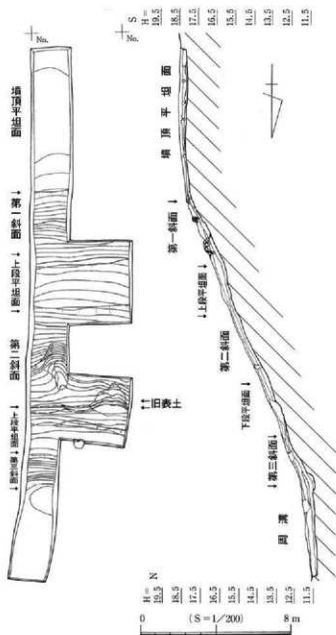


図49 22トレンチ位置図

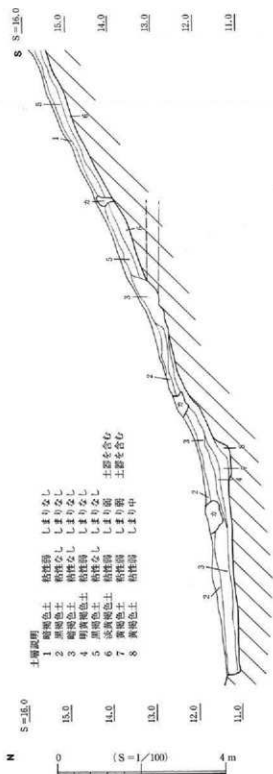
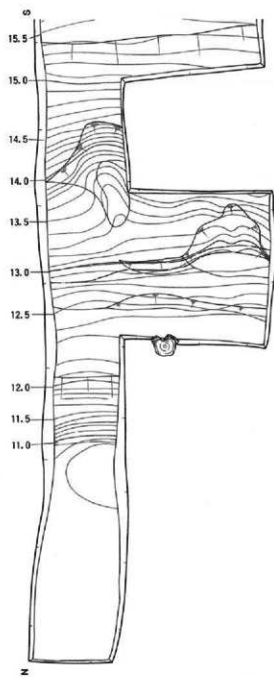


図50 22トレンチ詳細図 (1)

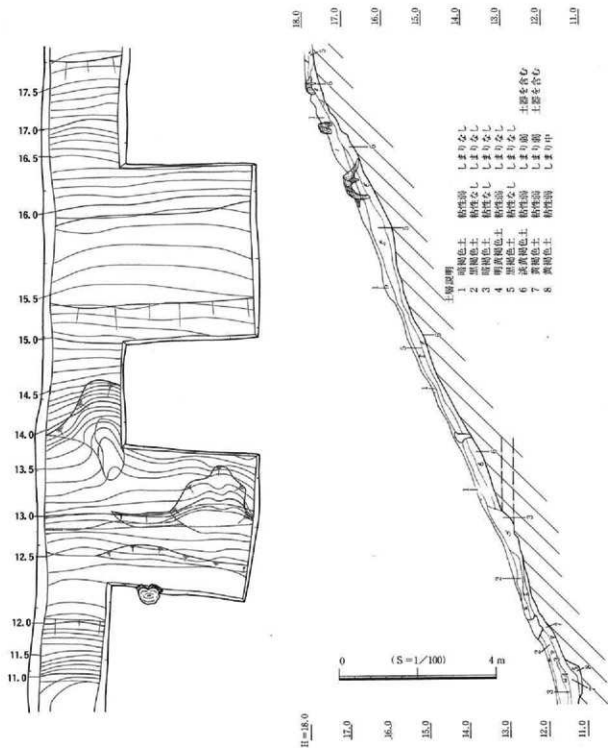


図51 22トレンチ詳細図(2)

出土の除去をおこない、墳頂平坦面では硬く締まった黄褐色土を検出した。墳丘斜面では砂質の強い黄褐色土を検出し、標高12.80mから13.10m付近では黒褐色土、標高17.90mから12.80mに範囲では黄色ロームが検出された。検出された3層は上層から墳丘盛土、旧表土層、地山ロームと考えられることから、この面を墳丘面として判断した。

この時点で墳丘面が確認され、墳丘には墳頂平坦面を含めて3つの平坦面が存在していることが確認された。平坦面は標高17.70mの傾斜変換線を境に、墳頂平坦面と第1斜面を区別し、標高16.00mから標高15.40m付近に位置する2箇所の傾斜変換線を上段平坦面として位置付けている。上段の平坦面は幅2cmを測り、平坦面内側（第1斜面終わり）から平坦面外側（第2斜面始まり）の高低差は約60cmを測る。下段平坦面は標高13.00mから12.00mに位置しており、上段平坦面から約2.40cmほど下がったところに位置する。下段平坦面は幅1.8cmを測り、平坦面内側と平坦面外側の高低差は約40cmである。

周溝部は標高12.30mに位置する傾斜変換線で捉え、標高11.20m付近で周溝の底面を確認している。

また、調査では葺石の存在を示す痕跡は確認されなかったことから、後方部には葺石等の施設はないことが確認された。

(荒 淑人)

### (13) 23トレンチ

23トレンチは墳丘主軸線上に設定された調査区で、後方部から前方部にかけて墳丘を縦断する調査区である。23トレンチの調査目的は、墳丘主軸線上における墳丘構造の確認、並びに墳丘東西の周溝の確認である。当初設定したトレンチは、墳丘主軸想定線No. 0杭からNo. 19杭間の約95m×幅2mで設定しトレンチの面積は約190㎡であったが、調査進捗状況にあわせて合計521㎡の拡張をしている。

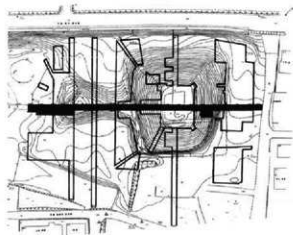


図52 23トレンチ位置図

のために17㎡、後方部東側斜面において上段平坦面の確認のために15㎡、墳頂平坦面において墓域並びに棺陥没坑の確認のために232㎡、後方部西斜面で墓道の確認のために36㎡、前方部西側では前方部の状況と周溝範囲の確認のために48㎡の拡張を行っている。最終的な調査面積は521㎡となる。

23トレンチの範囲における測量調査時点の理解は、後方部東側斜面には後方部両側から続く大規模な掘削が及んでおり、墳丘の形状は大きく損なわれていることは確実であった。しかし、この墳丘の掘削は墳丘斜面までは及んでいないことから、おおむねの墳丘形態は遺存しているものと思われた。墳頂平坦面付近から後方部西斜面にかけた範囲でも墳丘の形状を大きく損なう掘削は認められず、後方部の墳丘形態はおおむね良好な状況で検出されるであろうと想定さ

れた。後方部から前方部へ至る、いわゆるくびれ部付近には墳丘を横断する溝状の掘削が認められくびれ部の形状は大きく損なわれているが、この掘削範囲を過ぎると前方部西側の周溝部にかけたままでは墳丘の改変は認められていない。

調査は表土から層位順に除去し墳丘面並びに周溝面の確認を行った。当調査区は墳丘主軸線上に設定したため、東西に長い調査区になっている。調査では東側周溝をA区・後方部東斜面をB区・後方部墳頂平坦面C区・後方部西斜面をD区・前方部墳頂平坦面をE区・前方部西斜面をF区・後方部西側周溝をG区と呼称し調査を進めた。以下各区毎に記載する。

#### A区 後方部東側周溝の調査 (図54)

A区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 0 杭からNo. 2 杭にかけて後方部東側周溝にかかる範囲である。当初は幅2mの規模で調査を開始したが遺構の検出状況に合わせ北側と南側に拡張を行ったため、最終的には北側の南側の13トレンチと連結している。

調査は基本となる幅2mのトレンチから開始した。最も上層には後世に持ち込まれた厚さ40cmの碎石層が位置する。碎石層を除去すると調査区の東よりで南北に横断する溝状の掘り込みが検出された。この溝状の掘り込み

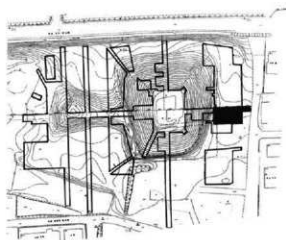


図53 A区位置図

は、14トレンチから続く現代の掘削の延長線上に位置していることから14トレンチの掘削と一連のものと考えられる。また碎石の下層にはこの掘削に関連すると思われる攪乱土が調査区の全面から検出され、当調査区は後世の土地利用によって大きく改変されている。この掘削に関連して動かされた攪乱土を除去すると調査区を斜めに横断する掘り込みが検出された。この掘り込みは後世の攪乱土を除去した時点で確認されたことから掘削を受けていないことは確実であり、かろうじて掘削を免れた周溝ラインであると想定される。この周溝ラインは黄色ローム層の下層に位置する砂礫層を掘り込み形で検出されたが、築造当時の周溝の掘り込み面が砂礫であったかは不明である。

検出された周溝ラインは調査区の北東側から南西方向に向かって緩やかにカーブしていることから後方部東側の周溝は墳丘主軸想定線付近で収束し、陸橋状の施設を備えている可能性が想定された。したがって後方部の東側に周溝が途切れ陸橋状の施設が存在しているかを確認するために調査区を南側へ拡張することにした。調査区の拡張は平成10年度調査時の13トレンチにかけた範囲を対象範囲とした。調査区の拡張の結果、周溝と思われる掘り込みは調査区の南側から墳丘裾のラインに沿うように墳丘主軸想定線付近まで延びてくるが、主軸想定線付近では緩やかにカーブし史跡指定範囲外へ至ってしまうことか確認された。

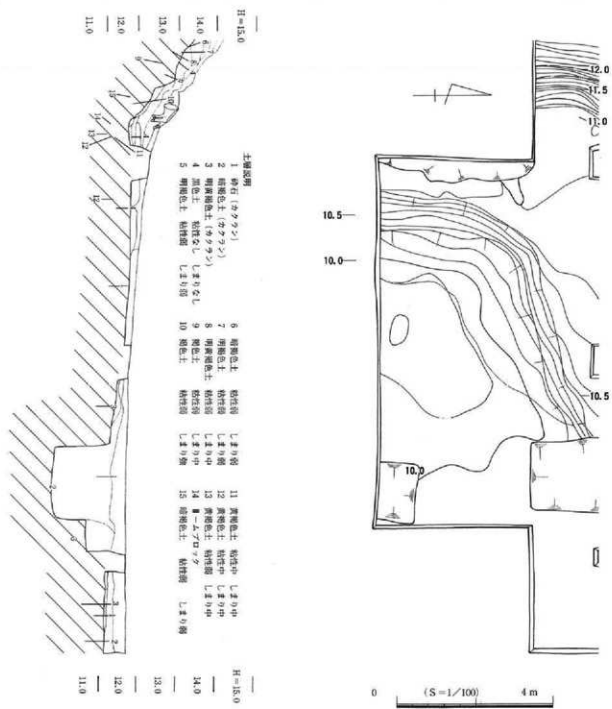


図54 A区詳細図

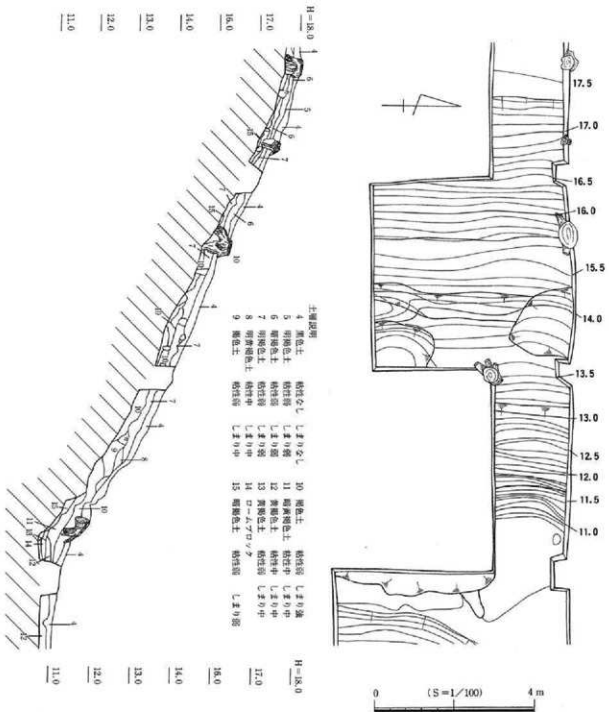


図55 B区詳細図

## B区 後方部東斜面の調査 (図55)

B区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 2 杭からNo. 6 杭にかけての範囲である。調査は後方部東斜面の構造を確認することを目的としている。調査は当初幅2mのトレンチの規模で開始したが、遺構の検出状況に合わせて墳丘斜面で拡張15㎡の拡張を行っている。

調査は墳頂平坦面付近から層位ごとに墳丘の堆積土を除去し、墳丘面の検出を行った。厚さ15cmの表土を除去するとB区中央付近で楕円形の落ち込みと、溝状の掘り込みが検出された。この楕円形の落ち込みと溝状の掘り込みは、現段階で調査区一面に広がる墳丘流出土と判断される層を掘り込み形で検出されていることから、古墳築造時のものでないことは明らかである。楕円形の落ち込みは平面形ならびに堆積土の状況が遺構と判断できるものではないことから倒木痕の可能性が高いと考えている。溝状の遺構は墳丘流出土を掘り込み形で形成されており、後方部北側に設けた22トレンチで検出された溝状の遺構と類似していることから、両者を一連のものとして考え、ある時期に墳丘へ上るためにつくられた道状の遺構であると思われる。

墳丘斜面一面に広がる墳丘流出土を除去すると墳丘面が現われた。後方部東斜面の構造は、No. 5 杭からNo. 6 杭にかけての範囲では明瞭な平坦面が存在しており墳頂平坦面として位置付けることができる。墳頂平坦面は標高17.70m付近に位置する傾斜変換線を境に墳丘斜面へと移行する。墳丘斜面は標高15.60m付近に位置する傾斜変換線まで一定の傾斜を維持しているが、この傾斜変換線を境に傾斜は緩くなり、この傾斜変換線を墳丘斜面に位置する上段平坦面であると考えられる。上段平坦面の肩(第2斜面の始まり)は上述した溝状遺構によって破壊されており不明である。溝状遺構を過ぎると再度墳丘斜面が現われるが、標高13.20m付近まで続いた墳丘斜面は墳丘裾部にみられる掘削ラインへ至って終了する。したがって墳丘の下段平坦面並びに最下段斜面の構造については不明である。

## C区 墳頂平坦面の調査 (図57)

C区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 4 杭からNo. 8 杭にかけての範囲であり、後方部墳頂平坦面の構造を明らかにすることと、墳頂平坦面に存在する埋葬施設の確認を主な目的としている。調査当初は幅2mのトレンチを墳丘主軸線上に設定し、後方部北斜面の21トレンチと後方部南斜面の22トレンチと合わせて墳頂平坦面に十字のトレンチを配し墳頂平坦面の調査を行ったが、遺構の検出状況から墳頂平坦面全体へ調査区の拡張を行っている。

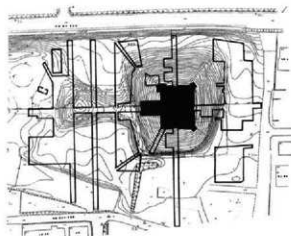


図56 C区位置図

まず、墳頂平坦面を東西方向に縦断するように設定した当初のトレンチでは、厚さ15cmの表土を除去すると褐色土の堆積層が検出された。この堆積層は途切れることなく墳丘斜面へ続いていることから、墳丘流出土として位置付けられる層である。この流出土を除去すると墳丘面が検出される。墳丘面は標高17.80m付近に位置する傾斜変換線まで明瞭な平坦面を維持して



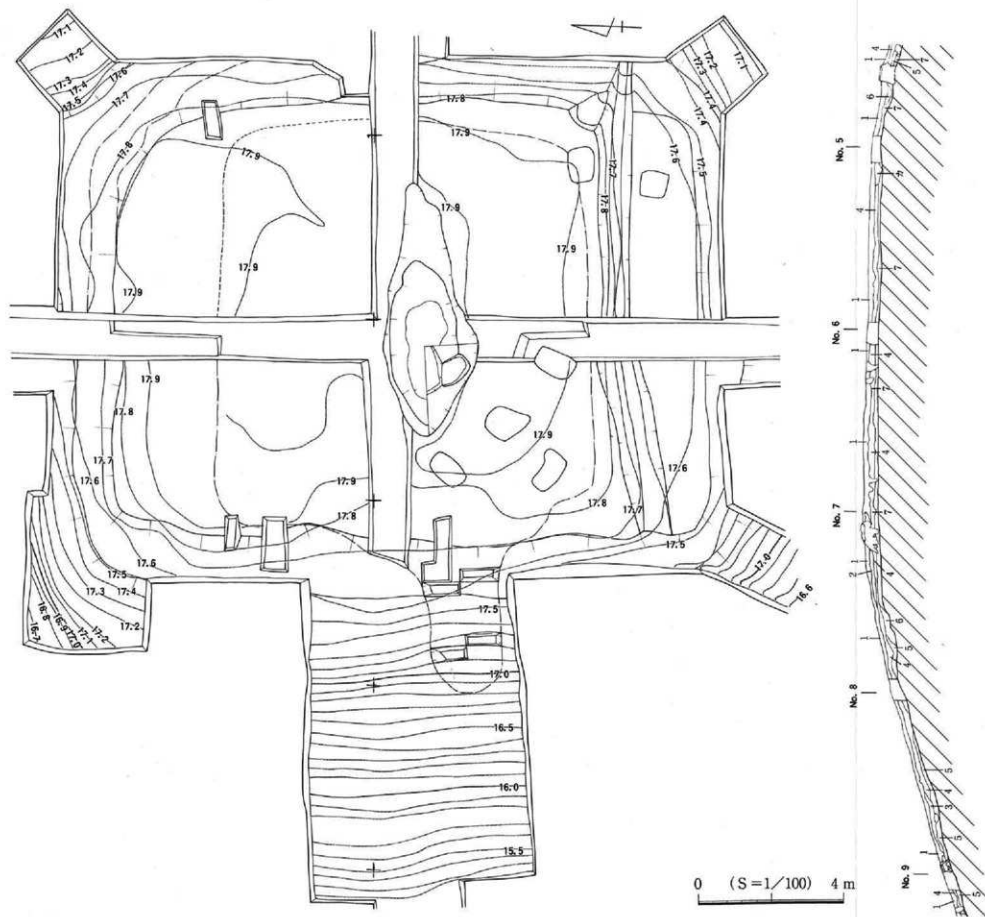


図57 C区詳細図

おり、墳頂平坦面の中心付近では黒色土プランが検出された。この黒色土プランについては盗掘坑の可能性も考慮しながら堆積土の検討を行った。検討の結果、検出された黒色土プランには墳丘盛土の黄褐色が全く混入しておらず、自然堆積土であると判断されることから、棺が朽ちたことが原因の陥没坑の可能性が高いと考えられた。ただし、現段階では黒色土プランの全体が未確定であることから、詳細な判断には調査区の拡張が必要であると判断された。また、この時点では墳頂平坦面で検出されると想定された墓壇プランは未確認の状況である。

調査区の拡張は、墳頂平坦面に配置された21トレンチ・22トレンチ・23トレンチを繋ぐように拡張された。厚さ15cmの表土を除去すると暗褐色の流出土が現われた。流出土中には底部穿孔二重口縁壺の破片が含まれている。

流出土を除去すると、墳頂平坦面の南側で黄褐色土に黒色土を含む墳丘盛土とは明らかに異なる土層が検出された。検出された土層は比較的均一な黄褐色土を呈しており、明瞭な混入物は認められない。この土層の違いを手がかりに墳頂平坦面の土層検討を行うと墳頂平坦面上に方形プランが検出された。

この方形プランの北西ラインについては不確定な部分も残しているが、長軸を墳丘主軸方位に向けた長方形を呈していると判断される。遺構の規模は長軸11m×短軸10mを測る。この長方形のプランについては墳頂平坦面のほぼ中央に位置していること、墳丘盛土層の掘り込む形で作られていることを考慮すると墓壇プランとして位置付けられる遺構である。またD区の説明で後述するがこの墓壇プランの西辺には墓道と思われる舌状のプランが認められている。

墓壇プランの中央付近では長軸を東西に向けた楕円形の黒色土プランが検出された。このプランは先の調査で確認された黒色土プランと一連のものであり、陥没坑として位置付けられたものである。また陥没坑の北側に新たな黒色土による楕円形プランが検出された。この新たな楕円形プランも先に検出されたものと類似する状況であることから、陥没坑の可能性が高いと判断している。この時点で墳頂平坦面の2箇所が朽ちたことが原因の陥没坑が発見され、南側に位置するものを1号陥没坑とし、北側に位置するものを2号陥没坑として位置付けた。

1号陥没坑は墓壇プランのほぼ中央に位置し、長軸を墳丘の主軸方位と同じ東西方向に向けている。長軸規模は7m×短軸規模は3mを測る。陥没坑内部にはFAもしくはFPと思われる火山灰層の堆積が確認されている。またこの火山灰層の上下付近からは陥没坑埋没の過程で混入したと見られる底部穿孔二重口縁壺の破片が出土している。

2号陥没坑は長軸3.5m×短軸2mを計測し、1号陥没坑と比較すると規模は小さい。陥没坑内の堆積土は黒色土のほぼ単一の自然堆積層であり、火山灰や土器の流入などは認められない。

上記以外には墳頂平坦面の南西付近では溝状の遺構と4基の柱穴状遺構が検出されている。溝状の遺構は墳頂平坦面の南辺を東西方向に走っており、上幅1cm深さ20cmを測る。この溝状遺構は墳丘流出土を掘り込む形で作られていることから、当古墳築造以後のものであることは確実である。また後方部東斜面の上段平坦面並びに北斜面の下段平坦面付近で検出された溝状遺構と一連のものである可能性が高く、後方部をらせん状に巡る道のような遺構である可能性

が高いが、時期は不明である。

検出された4基の柱穴状遺構の断面には柱痕跡と思われるような土層が観察されることから、墳頂平坦面には4基の柱穴からなる建物が存在していた可能性が高いと考えている。この柱穴は1号陥没坑との重複関係が認められ当建物跡が新しいことが確認されている。

墳頂平坦面の調査では比較的まとまった底部穿孔二重口縁壺の破片と器台並びに高杯と思われる土器片が出土している。これらの土器は平坦面の西半から多く出土している傾向にある。ただし、原位置を保っている状況であるとは断定することはできない。

#### D区 後方部西斜面の調査(図57)

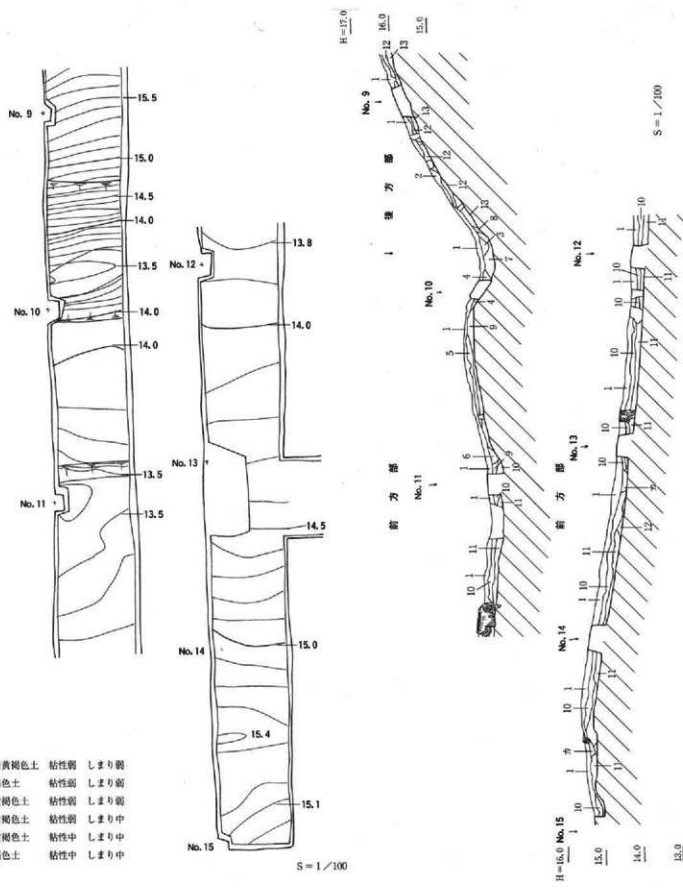
D区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 7杭からNo. 9杭にかけた範囲の調査で、後方部西斜面の構造を確認することを目的としている。後方部西斜面については測量調査時の検討で、等高線が若干外側へ膨らむように観察されたことから、他の後方部斜面と構造が異なる可能性が想定されていた箇所である。調査は他の調査区同様に表土から順次堆積土を除去し墳丘面の検出を行った。厚さ10cmの堆積土を除去すると暗褐色土の流出土が検出され、少量の土器器が出土している。流出土を除去すると、黄褐色土に黒色土を含む墳丘面が現われた。墳丘斜面は、標高17.20m付近に位置する傾斜変換線からはじまり、他の墳丘斜面と比較すると緩やかな傾斜角度である。墳丘斜面は標高13.80m付近に位置する傾斜変換線まで緩やかな傾斜が続く。標高13.80m付近に位置する傾斜変換線は、くびれ部付近を横断する後世の掘削によるもので、墳丘斜面を著しく改変しており、これ以下の墳丘構造については不明である。ただし、この掘削部を除いた範囲では墳丘傾斜角度が変化する地点は認められず、後方部西斜面には平坦面が存在していなかった可能性が高いと考えている。

また調査区の南壁付近で暗褐色のプランが検出されている。当初の調査区ではプランの北半が検出されただけであったため、調査区を南側に拡張しプランの全体を検出することとした。拡張の結果、この暗褐色上のプランの平面形は舌状を呈しており、標高16.80m付近から17.90m付近に広がっている。長さ4m×幅2mを計測する。この舌状のプランは確実に墳丘斜面を掘り込む形で形成されており、墳頂平坦面の調査で確認された墓壇プランと同一の堆積土であることから、棺の埋葬にかかる際に使用された墓道状の遺構であると考えている。

#### E区 前方部墳頂平坦面の調査(図58)

E区範囲は墳丘主軸想定線上No. 9杭からNo. 15杭にかけた範囲の前方部の墳頂平坦面の構造を確認することを主な目的としている。前方部墳頂平坦面についてはくびれ部付近で墳丘形態を大きく改変する掘削が行われている以外には、大きな掘削は認められていなかったことから、良好な状況で平坦面の検出ができるであろうと期待された。

表土並びに流出土を除去すると、所々で小規模な攪乱が認められたものの、非常に均一な黄褐色土で作られた前方部墳頂平坦面が姿をあらわした。前方部墳頂平坦面は最も低いところで標高12.20mを計測し、最も高いところで標高16.20mを計測する。平坦面は西側の前方部前縁側から緩やかな傾斜が始まり、最低標高値は主軸想定線上No. 9杭あたりで計測した。平坦面は前方部前縁に向かった緩やかなスロープ状を呈している。また後方部側に対しては、大規模



土層説明

- |           |      |       |         |     |      |
|-----------|------|-------|---------|-----|------|
| 1 黒色土     | 粘性弱  | しまり弱  | 8 暗黄褐色土 | 粘性弱 | しまり弱 |
| 2 暗褐色土    | 粘性弱  | しまり弱  | 9 褐色土   | 粘性弱 | しまり弱 |
| 3 暗黄褐色土   | 粘性弱  | しまり弱  | 10 黄褐色土 | 粘性弱 | しまり弱 |
| 4 黄褐色土    | 粘性弱  | しまり弱  | 11 黄褐色土 | 粘性弱 | しまり中 |
| 5 褐色土     | 粘性弱  | しまり弱  | 12 黄褐色土 | 粘性中 | しまり中 |
| 6 ロームブロック |      |       | 13 褐色土  | 粘性中 | しまり中 |
| 7 暗褐色土    | 粘性なし | しまりなし |         |     |      |

図58 E区詳細図

な掘削によって判然としないが、No. 9 杭付近の最低標高付近から強い上り傾斜がはじまり、後方部西斜面を形成していくものと思われる。

#### F区 前方部西斜面の調査

F区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 15杭からNo. 16杭にかけた範囲で行った前方部西斜面の構造確認のための調査である。

厚さ15cmの表土並びに墳丘流出土を除去すると黄褐色土を主体とした墳丘面が検出された。墳丘面には大きく墳丘を改変する掘削や攪乱は認められずおおむねの墳丘面を維持しているものと判断された。ただし、墳頂平坦面の西肩付近は自生する竹の地下茎によって破壊されており明確な傾斜変換線を捕まえることはできていない。墳丘斜面には平坦面は存在せず比較的均等な傾斜を維持している。墳丘傾斜は標高12.60m付近に位置する傾斜変換線を境に角度が変化する。この傾斜変換線は墳丘部が周溝掘削部へと移行する際の変換線として理解している。

#### G区 前方部西側の周溝調査

G区範囲は墳丘主軸想定線上のNo. 16杭からNo. 19杭にかけた範囲で、前方部西側の周溝の構造範囲の確認を主な目的としている。厚さ20cmの表土を除去するとNo. 16杭からNo. 19杭にかけた範囲で黒色土が検出された。この黒色土は周溝内に堆積した周溝堆積土として判断された。黒色土の下層には暗褐色土が位置し、暗褐色土を除去すると砂礫層で構成された周溝底面が検出される。周溝の内周はF区で確認された標高12.60mに位置する傾斜変換線を上端ラインとして捉え、下端を標高11.80m付近の傾斜変換線で捉えている。対する外周ラインの上端はNo. 19杭のやや東側付近の標高12.60m付近に位置し、下端は標高12.10m付近に位置する。周溝内の堆積土は明瞭なレンズ状堆積を呈しており、この付近の周溝は自然堆積によって埋没したことは確実である。土層検討では、明瞭な火山灰層などは認められず、また若干の弥生土器が出土した以外には遺物は出土していない。

前方部西側の周溝は上幅13m、下幅10m、深さ80cm計測する。周溝は黄色ロームを掘り込むように形成され、下層の砂礫層が露呈した時点で周溝の掘削を終了しているものと考えられる。

(荒 淑人)

#### (14) 24トレンチ (図60)

当調査区は17トレンチと23トレンチで確認された前方部前端付近の周溝外周の立ち上りを確認するために設定した補足的な調査区である。調査区は墳丘推定主軸線No. 18杭から約10mほど北側に位置している。調査区は幅2m×長さ4m、面積は8㎡である。

調査は表土から層位順に除去し、周溝底面の確認をおこなった。周溝底面を確認するまでの深さは最も深いところで1.1mを測る。

堆積土は大きく2層に分けられ現表土、周溝

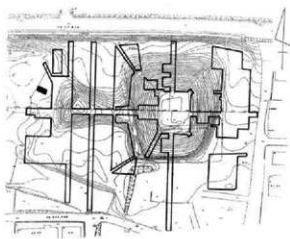


図59 24トレンチ位置図

堆積土として判断した。周溝は外周側から緩やかに下り始め標高12.70mから12.60m付近で急激に落ち込む。周溝底面は標高11.90付近で確認している。17トレンチで確認した墳丘面から考えると、当調査区域付近の周溝の上幅は約9m前後と推定される。当調査区からは土師器が出土している。

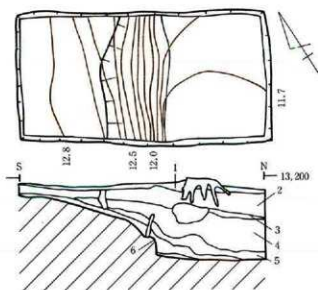
(荒 淑人)

### (15) 25トレンチ (図61)

当調査区は先に調査を行った22トレンチで検出された上段平坦面を確認するために22トレンチの西側に設定した補足的な調査区である。調査区は後方部北西墳麓線上に位置しており、調査区の形は斜め方向の土層観察用のベルトを境に二つの三角形の底辺を向かい合わせたような変則的な形状をしている。調査区の規模は長辺約6m×短辺約5mであり、調査面積は合計で約30㎡である。

調査は、表土ならびに墳丘流出土を除去し墳丘斜面及び上段平坦面の確認をおこなった。約15cmの表土を除去すると、黄褐色で砂質度の強い墳丘流出土が現れた。流出上を除去すると若干砂質の墳丘面が検出された。墳丘面には植林された杉によると思われる攪乱が確認されたが、墳丘の遺存状態は良好であり、

標高15.70m付近と15.20m付近の2箇所に傾斜変換線が確認された。標高16.30m付近で確認された等高線は標高15.70m付近の変換線を境に幅が広くなり、標高15.20m付近の傾斜変換線を境に狭くなりことから、標高15.70m付近の変換線を上段平坦面の内側(第1斜面の終わり)、対する標高15.200m付近の変換線を上段平坦面の外側(第2斜面の始まり)に相当する変換線と理解している。この2箇所の変換線には約50cmの高低差が認められるが、これは平坦面の角が風雨によって崩れ盛土が流出したためと理解し、築造当時の平坦面は標高15.70m付近に位置していた可能性が高いと考えている。22トレンチで確認された平坦面は、墳丘の標高15.70m付近を約2mの幅で当調査区に向かう。当調査区に現れた平坦面は、調査区内で緩やかに折



土層説明

- 1 表土 黒色 土粘性弱 しまり弱
- 2 埴土 暗褐色 土粘性弱 しまり弱
- 3 埴土 暗黄褐色 土粘性弱 しまり中
- 4 埴土 黒色 土粘性弱 しまり弱
- 5 埴土 黄褐色 土粘性弱 しまり弱
- 6 埴土 黄褐色 土粘性中 しまり弱

0 (S=1/60) 2m

図60 24トレンチ詳細図

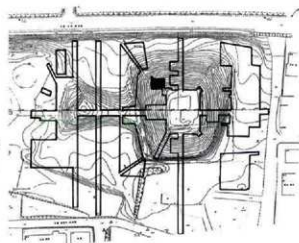


図61 25トレンチ位置図

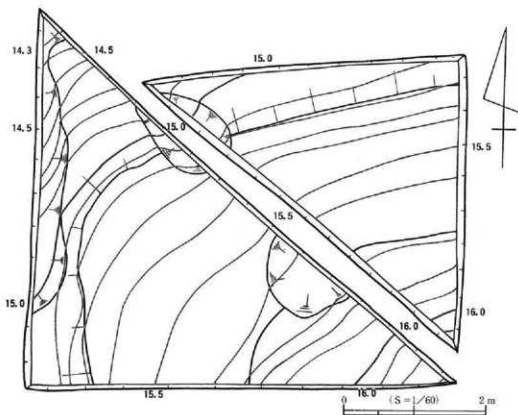


図62 25トレンチ詳細図

れ曲がり前方部側へと向かう。

当調査区では、墳丘の葺石などの痕跡は確認されていない。

(荒 淑人)

(16) 26トレンチ

当調査区は墳丘南側の周溝外周を確認するために設定した調査区である。調査区は墳丘南側の野馬土手西側に設定している。調査区は幅2m×長さ10mの20㎡である。調査は表土から順に堆積土を除去し遺構の検出に努めたが、地山の黄色ロームを検出するまで攪乱が及んでおり、遺構・遺物を検出することはできなかった。

(荒 淑人)

(17) 27トレンチ

当調査区は墳丘南側の周溝外周を確認するために設定した調査区である。調査区は周溝の外周ラインが位置すると想定される位置に幅2m×長さ10mで設定した。調査は表土から層位ごとに堆積土を除去し周溝の検出を行ったが、厚さ20cmの表土を除去した時点で黄色の地山ロームが露呈し、この範囲までは周溝が及んでいないことが確認された。

(荒 淑人)

## (18) 28トレンチ

当調査区は後方部南西墳麓線上の上段平坦面を確認するために設定した調査区である。調査区は後方部南西の墳麓線に沿うように幅2m×長さ11mで設定した。調査は表土から順に堆積土を除去し墳丘面の確認を行った。厚さ10cmの表土を除去すると暗褐色の砂質土が現われた。この砂質土には底部穿孔壺の破片が混入している状況から墳丘流出土と判断され、表土に続いて流出土の除去を行った。墳丘流出土を除去すると黄褐色の砂質土が検出されたが、この時点では検出された黄色砂質土が墳丘流出土か墳丘盛土であるかを判断する知見を得ることはできなかった。したがって調査区の壁際に幅20cmのサブトレンチを設け下層の確認を行うと、約70cmまで掘り込んでも上層の黄褐色の砂質土が続いていることから、当調査区付近の墳丘盛土は黄色の砂質土を主体とする土層であると考えられた。当調査区内では墳丘の上段平坦面を検出することはできず、墳丘南斜面及び西斜面の平坦面のあり方については解明することができなかった。(荒 淑人)

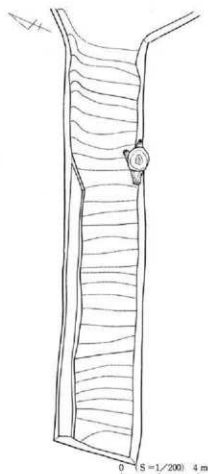


図63 28トレンチ詳細図

## (19) 29トレンチ (図64)

当調査区は前方部前端南側付近の周溝の状態を確認するために設定した調査区である。当調査区の付近で行われた16トレンチによる前方部前端南側の調査では、この付近を巡る周溝が取戻し陸橋状に途切れてしまう可能性が考えられたため。再度調査区を設け陸橋部の存在を明らかにすることを目的としている。調査区は先の16トレンチと一部重複しているが、当調査区の規模は約140㎡である。調査区は東西方向に長い方形で設定したが南側に隣接する野馬土手の影響でやや台形を呈している。

また当調査区は第2次調査時の第8号トレンチと重複する位置関係にあり、この時点の調査知見では、黄色ロームである地山の削りだしが確認されており、非常に浅い周溝が存在していると考えられていた箇所である。

調査は表土から順に堆積土を除去し遺構面の検出に努めた。この付近は、墳丘を大きく改変する大規模な掘削が行われている範囲であり、表土を除去した時点で調査区の一部で地山の黄色ロームが検出されている。また、先に調査された16トレンチでB区とした周溝範囲の確認のためのトレンチ付近で確認された墳丘南側を巡ってきた周溝の内周ラインが再検出された。



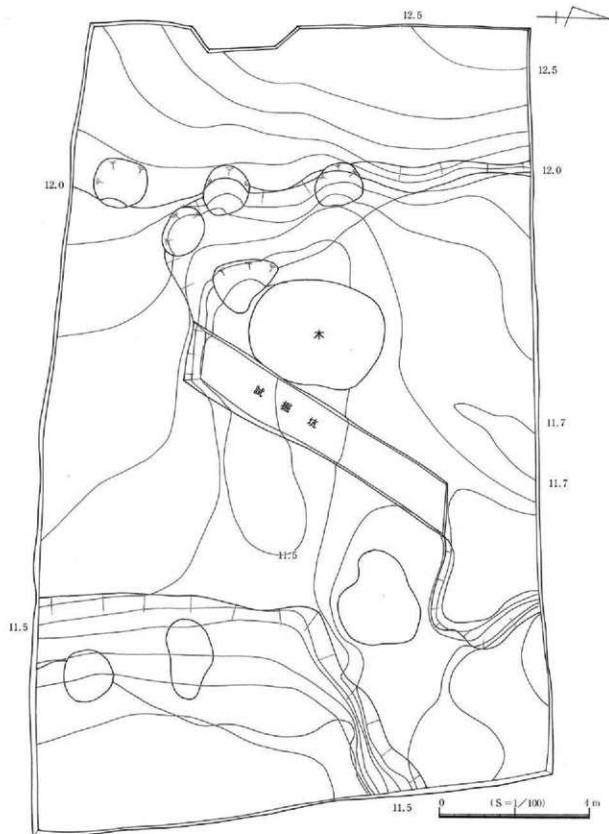


図64 29トレンチ詳細図

墳丘の南側を巡ってきた周溝の内周ラインは16トレンチを超えたあたりで強くカーブし、野馬土手の方向へと向かっており、前方部南側前端には確実に地山の黄色ロームが掘り残されている箇所が存在していることが確認された。

墳丘の西側を巡る周溝は、浅いところで地山の砂礫層が検出され、南側の周溝ほど明瞭な周溝の掘り込みを認められる状況にはないが標高12.00m付近では黄色ロームを掘り込んだ状況の周溝外周が確認されている。周溝の外周ラインは南側に向かうにつれて徐々に標高を下げっており、第2次調査時のトレンチ付近では明瞭な掘り込みは認められない。このことは、黄色ロームの下層に位置する砂礫層が比較的浅いところで露出していることに関係しているものと思われる。対する周溝の内周ラインについては後世の削平及び攪乱等によって確実に捉えることはできていない。

(荒 淑人)

#### (20) 30トレンチ (図65)

当調査区は後方部東側の周溝の状態を確認するために設定した調査区であり、23トレンチと11トレンチの間に位置し、12トレンチと重複関係にある。当調査区は後方部東の周溝の状況を確認することを目的としている。特に第2次調査時には、当調査区付近の周溝は陸橋状に途切れている可能性が指摘されており、また23トレンチの調査においても周溝が収束するような状況が認められたことから、再度調査区を設けた。

調査区は東西9m×南北15mの135㎡の規模である。調査は表土から層位順に除去し、周溝の検出を行った。表土を除去した時点で調査区を南北に縦断する大規模な掘削が確認された。掘削は23トレンチから続くもので上幅3mを測る。調査区の北半には黒褐色土が広がる。調査ではこの黒色土を除去は行っていないが、掘削部の断面観察では緩やかに傾斜しており、明確な周溝の掘り込みと判断することはできない。この黒色土からは底部穿孔壺が出土しており、古墳築造後に周溝状の窪地に堆積した層であると判断され、この黒色土の範囲を周溝範囲として捕らえると、後方部東側には周溝堆積の黒色土が検出されない場所があることになる。この場所が後世の土地利用によって掘削されている可能性も残されているが、この付近では地山の黄色ロームは認められず黄色ローム層の下層に位置する砂礫層が広がっている状況から、当調査区で検出された陸橋状の高まりは、周溝部掘削に適さない砂礫層が露出したために周溝掘削を行わなかった範囲とも考えることができ、陸橋部として位置付けることはできないと判断している。

(荒 淑人)

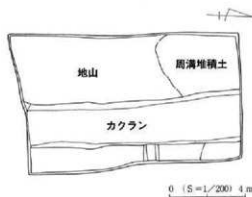


図65 30トレンチ詳細図

## (21) 1号土坑 (図66)

15トレンチの周溝内で東西2.1m×南北2.8mの隅丸長方形の土坑を検出した。周溝堆積土から周溝の底面まで掘り込まれており、土坑内からは土師器の杯・甕が置かれたような状態で多数出土していることから、平安時代の土器を投棄した土坑と考えられる。SK1の東側で出土した土師器甕も、SK1と同時期に置かれたものと考えられる。なお、この付近には同時期の遺構は確認されておらず、今回は単発的な発見であったが、この付近に他にも平安時代の遺構が存在する可能性がある。

(鈴木文雄)

## 1号土坑土層説明

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土 若干砂質が強い
- 3 暗褐色砂質土

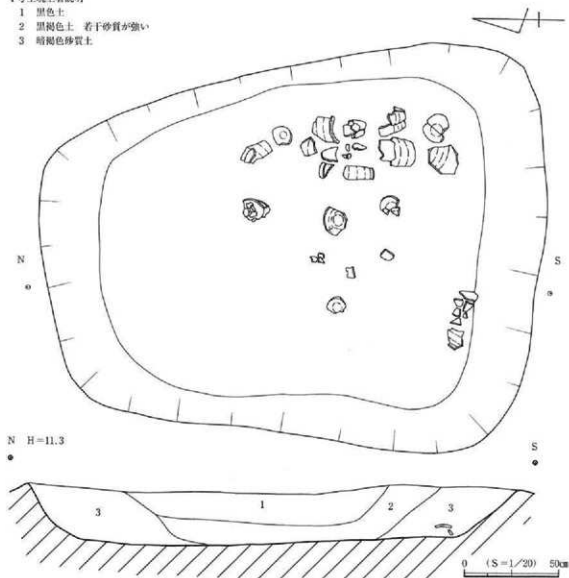


図66 1号土坑詳細図

(22) 2号土坑 (SK2)

15トレンチの北東隅で、前南部南斜面を掘り込んだ土坑を検出した。土坑の上面から焼けた粘土ブロックが出土しているが、その下の覆土には焼土は含まれず、壁面も焼けていないことから、他の場所で焼かれた粘土ブロックを埋めた土坑と考えられる。時期・性格は不明である。

(鈴木文雄)

(23) 3号土坑 (SK3)

15トレンチの南西隅で、周溝覆土から周溝底面を掘り込んだ土坑を検出した。東西1.5m×南北1.2mの楕円形の土坑で底面から近世の火鉢が出土している。

(鈴木文雄)

(24) 4号土坑 (SK4)

14トレンチの後方部南東コーナーの北西4mで検出した、長軸3m×短軸2.5m×深さ約0.3mの楕円形の土坑である。底面は平坦である。堆積土中からは赤錆に覆われた鉄分の多い鉄滓が出土しており小鍛冶に関連する遺構であると推測される。南東コーナーの墳丘を削平して、その底面に掘り込まれている。陶磁器などから近世の小鍛冶跡と思われる。

(鈴木文雄)

(25) 5号土坑 (SK5)

14トレンチの後方部南東コーナーの南隣に位置する。周溝の覆土からさらに周溝底面を掘り込む、上面径約2.3m・底面径約1.1mの円形の土坑である。位置的にSK4の小鍛冶遺構と関連がありそうだが、性格は不明である。

(鈴木文雄)

(26) 土器埋設遺構 (図67)

18トレンチ南東隅付近に位置し、後方部西斜面の北側くびれ部で弥生時代の土器棺墓を検出した。この遺構はⅡ層(褐色土)を掘り込み、弥生時代中期の桜井式土器の壺を倒立させ、埋納した状態で出土している。底部は欠損しており、倒立していたために底部が古墳築造時に削平されたものと考えられる。

(鈴木文雄)

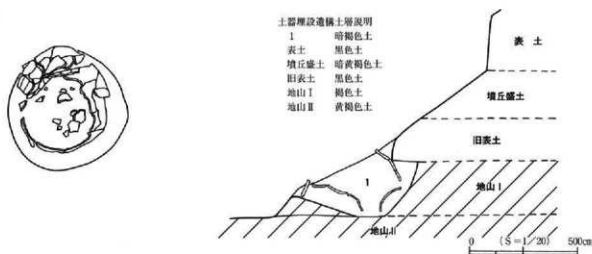


図67 土器埋設遺構詳細図

### 第3項 出土遺物

3年間にわたる発掘調査では、土師器・須恵器・弥生土器・石器・近世陶磁器・鉄滓・羽口・石製品・土製品が出土している。

#### (1) 土師器

土師器は、底部穿孔二重口縁壺・底部穿孔壺・器台・鉢・杯・壺・甕・墨書土器が出土している。

底部穿孔壺・二重口縁壺(図68・69・70・71・72)

1から11は口縁部を中心とした資料である。

1は口縁端部から頸部までが残存している資料であり、15トレンチから出土した。体部の形状は不明であるが、頸部は直線的に外傾しながら上方に向かって立ち上がり口縁部下端に至る。口縁部下端には水平方向の平坦部が段状に形成されている。口縁部は平坦部の突端から強く外反しながら上方に向かい口縁端部に至る。口縁端部にはつまみ出し技法が見られ、断面形は三角形を呈する。また口縁部の側面部に明瞭な面が形成されている。調整は頸部から口縁にかけての外面には密度の細かいハケがナナメ方向から施され、内面の頸部付近から口縁下半部にかけての範囲には横方向のハケが施されている。口縁上半部の内外面にはヨコナデが施されている。

2は口縁部から頸部にかけての範囲が残存している資料であり、22トレンチから出土した。頸部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部下端の平坦部に至る。口縁部は水平方向の平坦部突端から強く外反しながら立ち上がり、口縁端部に至る。口縁端部はつまみ出しによって整形されており、明瞭な面が形成されている。器面の調整は外面にヨコハケ後にタテハケを施し、頸部内面にはヨコハケが施されている。口縁部の外面上半部から内面全面にかけての範囲はヨコナデによって整えられている。

3は頸部から口縁部にかけて範囲が残存している資料であり、23トレンチから出土した。頸部はハの字に開きながら立ち上がり、口縁下部の平坦部に至る。平坦部は1・2の資料ほど明瞭ではない。口縁部は平坦部から突端から外反しながら立ち上がり口縁端部に至る。口縁端部はつまみ出しによる整形によって、明瞭な面が形成されている。器面の調整は口縁部を中心とした範囲に縦方向のハケが施され、頸部の内面には横方向のハケが施されている。口縁部の外面上半から内面の全面にかけて範囲にはヨコナデが施されている。

4は口縁部が残存している資料で、22トレンチから出土した。口縁部は強く外反するもので、口縁端部はつまみ出されている。口縁部外面下部には縦方向のハケが施され、内面下部には横方向のハケが施される。内外面の上半はハケ調整の後に横方向のナデによって整えられている。

5は平坦部突端から口縁部にかけて範囲が残存している資料であり、23トレンチから出土した。平坦部の形状は不明であるが、平坦部突端から強く外反する口縁部が確認できる。口縁端部の形状は断面が丸みを帯びていることから、つまみ出しによる整形は行われていないと判断される。器面の調整は内外面ともに横方向のナデによって調整されている。

6は平坦部から口縁部にかけて範囲が確認できる資料であり、23トレンチから出土した。平坦部の形状は不明であるが、強く外反する口縁部が確認される。口縁端部はつまみ出されており、明瞭な面が形成されている。外面の調整は口縁下半部には縦方向のハケが施され、内面下半部には横方向のハケが施されている。口縁部内外面の上半は横方向のナデによって整えられている。

7は頸部から口縁部にかけて範囲が残存している資料であり、22トレンチから出土した。体部の形状は不明であるが頸部は体部との接合部分から直立気味に立ち上がり、頸部上半で強く外反し口縁部下端に至る。口縁部は頸部外反の突端に付くような形状を呈しており、水平方向に外反しながら口縁端部に至る。口縁端部にはつまみ出しは行われてなく断面は丸い。

8は頸部から口縁部にかけて範囲が残存している資料であり、23トレンチから出土した。頸部は上方に向かって徐々に開きながら立ち上がるが、頸部上半で強く外反しいわゆる平坦部を形成することなく口縁下部に至る。口縁部は頸部突端から一旦上方に向かって立ち上がり、そこから強く外傾しながら口縁端部へと至る。口縁端部には明瞭なつまみ出しを認めることはできず、断面は丸い。器面の調整は、外面の頸部から口縁部下半部にかけて範囲にはヨコ方向のハケの後に断片的な縦方向のハケを施し、口縁端部は横方向のナデによって整えている。内面調整は頸部から口縁端部にかけて全面を横方向のナデによって整えられている。

9は口縁部資料で、22・23トレンチから出土した。器形は強く外傾しながら口縁端部に至る。口縁端部の断面は丸い。器面の調整は内外面ともに断片的なナメ方向のハケを施し、外面の口縁端部付近には横方向のナデが見られる。

11は口縁部資料で、23トレンチから出土した。器形は強く開きながら口縁端部に至る。口縁端部の形状は摩滅のために判然としないが、口縁端部が外方に向かって面を有しているように観察されることから、口縁端部のつまみ出しを施している資料と判断している。

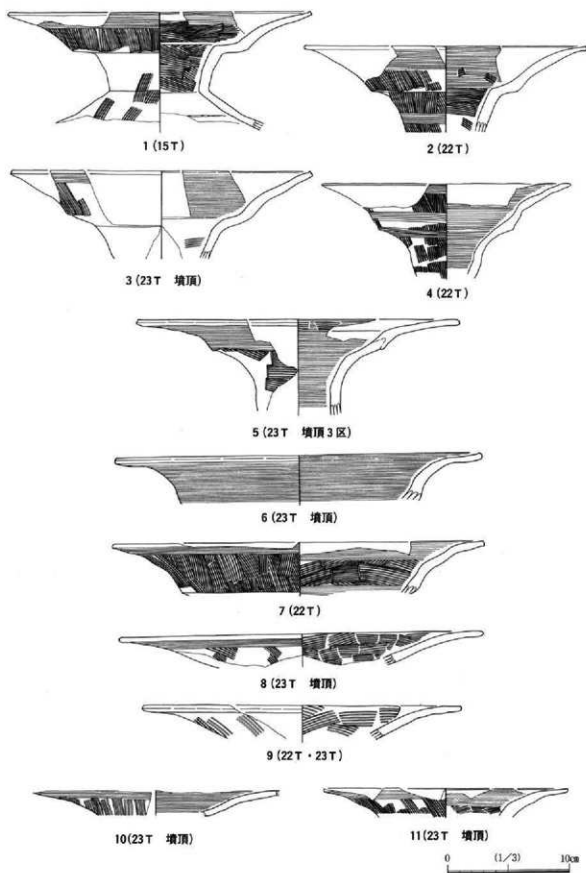


図68 二重口縁壺(1)

10は口縁部資料であるが、口縁端部は欠損している。平坦部から強く開きながら口縁端部に至る範囲の資料であり、外面には縦方向のハケが施され、外面上半から内面の全体にかけた範囲にヨコナデが施されている。

12は体部上半から口縁下部にかけた範囲が確認できる資料であり、15トレンチから出土した。比較的丸みの強い体部に、若干外方に向かって開きながら立ち上がり、体部と頸部の接する箇所断面三角形の突帯を有する。若干開きながら立ち上がった頸部は頸部上半で強く外反し、口縁下端部に至るため、明瞭な平坦部は存在しない。口縁部は頸部上半から強く外反し口縁端部へ向かうものと思われる。器面の調整は外面の体部付近には断片的であるもののハケ調整が観察され、頸部に近い付近にはミガキが施される、頸部から口縁下部にかけた範囲には縦方向のハケ調整後に横方向のナデによって整えられている。内面の調整は体部付近にはナデが施され、頸部から口縁部にかけた広い範囲に横方向のナデが施されている。

13は体部上半から頸部にかけた範囲が残存している資料であり、13トレンチから出土した。丸みを帯びた体部からハの字に開く頸部を有する。体部外面には縦とナナメ方向のハケが施される。頸部外面には、タテハケの後に頸部上半にはヨコナデが施される。内面の調整は体部内面には粘土継痕が残存しており、残存範囲の中では明確な調整は観察されない。体部と頸部が接する箇所には指頭圧痕が残り、頸部上半には横方向のハケが施されている。

14は頸部資料であり、23トレンチから出土した。体部及び口縁部の形状は不明であるが、体部と頸部が接する箇所断面が四角形の突帯が見られる。頸部は緩やかに外反しながら口縁部方向へ向かう。外面の調整は縦方向のハケによって整えられ、内面はナナメ方向のハケが施されている。また頸部と体部が接する箇所の内面には指頭圧痕が残る。

15は頸部から平坦部への屈曲部が確認できる資料であり、30トレンチから出土した。直線的に外傾しながら立ち上がる頸部に、水平方向に張り出す平坦部が確認される。頸部付近の外面には縦方向のハケが施され、平坦部付近には横方向のナデが施されている。頸部内面には横方向のハケを施している。

16は頸部を中心とした資料で、わずかながら平坦部を確認することができる資料である。23トレンチから出土した。体部からはほぼ直立気味に立ち上がる頸部から、横方向にのびる平坦部が見られる。頸部外面には縦方向のハケによって調整が加えられるが、ハケ調整後に平坦部を中心に横方向のナデが施される。内面には断片的なハケ調整がヨコ又はナナメ方向から施される。

17は体部上半から頸部にかけた範囲が残存している資料である。体部のほとんどが欠損しているが、丸みの強い体部から、上方に向かって若干開きながら立ち上がる頸部を有する。内外面に目の細かなハケ工具によって調整が加えられている。

18は頸部資料であり、体部並びに口縁部は欠損している。上方に向かって強く開きながら立ち上がる頸部であり、外面には縦方向のハケが、内面には横方向のハケの後にヨコナデが施されている。

19は頸部資料である。上方に向かって強く開きながら立ち上がるタイプのもので、外面には縦方向のハケが断片的に施され、内面には横方向のハケが施されている。



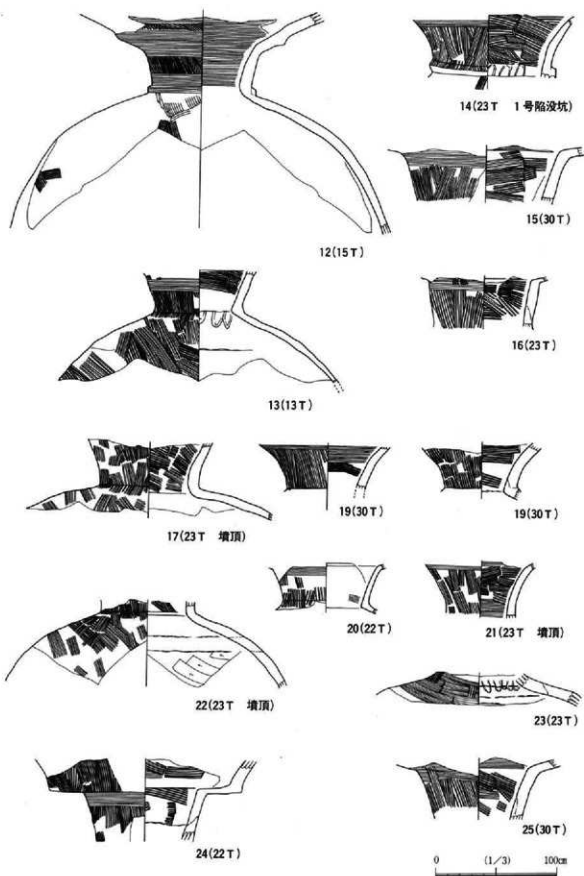


図69 二重口縁臺(2)

20は頸部資料である。直線的に外傾しながら立ち上がるもので、外面には粗いタテハケが断片的に施され、内面にはヨコハケが観察されるが、内面調整は不明瞭である。

21は頸部資料であり、上方に向かって外反気味に開きながら立ち上がるものである。外面には縦方向のハケが施され、残存範囲の上部にわずかながらヨコナデが観察される。内面調整は横方向のハケが主であり、外面と同様に残存範囲の先端にわずかなヨコナデのが観察される。

22は体部上半から頸部下半にかけた資料である。丸みの強い体部に直立気味に立ち上がる頸部を有するものである。体部から頸部にかけて広い範囲にタテもしくはナナメ方向のハケが施され、内面には体部下部にヘラケズリ、頸部にナナメ方向のハケが施されている。

23は体部と頸部が接する付近の資料であるが、頸部は欠損しており不明である。体部外面には縦方向のハケ調整の後にヘラナデが施され、内面には粘土継痕と指頭圧痕が残る。

24は頸部から口縁下半部が残存している資料である。体部から若干外傾気味に立ち上がってきた頸部は、頸部上端で水平方向に強く張り出し、明瞭な平坦部を形成している。平坦部は外面と内面に明瞭な段を形成している点は他の資料と大きく異なる。口縁部は強く張り出した平坦部の先端から若干外反しながら直立気味に立ち上がる。外面の頸部から口縁下部にかけた範囲には縦方向のハケを施し、平坦部付近にヨコナデを施す。内面は横方向のハケ調整を行う。

25は頸部から平坦部にかけた範囲が残存している資料である。上方に向かって直線的に外傾しながら立ち上がる頸部を有し、頸部上端で横方向に伸びる平坦部を確認することができる。器面の調整は頸部外面に縦方向のハケを施し、平坦部付近にはヨコナデを施している。内面の調整は頸部付近ではナナメ方向のハケを施し、平坦部にはヨコナデが観察される。

26と27は体部資料であり、底部と口縁部が欠損している資料である。

26は体部下半から口縁下部にかけた範囲が残存している資料である。体部の形状は他の資料と大きく異なり、体部の最大径が体部最下段に位置するものである、全体的に下膨らみ、撫肩の印象を受ける資料である。徐々に径の小さくなる体部上端には上方に向かって弱く開く頸部を有する。頸部の上端にはナナメ上方に立ち上がりが認められるが、平坦部を形成するのかが口縁部に至るのかが不明である。

27は体部中段から下半にかけた範囲の資料である。底部並びに頸部の形状は不明である。体部の最大径は体部下半に位置するものと思われるが、27の資料ほど極端なものではない。体部最下部にはヨコまたはナナメ方向のヘラケズリが施され、体部中段から上半にかけた範囲にはヨコもしくはナナメ方向のハケを施している。内面の調整は明瞭ではないものの、明瞭な粘土継痕が確認されることから整形段階のナデで終了しているものと思われる。

28から44は底部を中心とした資料である。

28は直接的な接合関係には無いが同一個体として判断される底部と体部の資料であり、15トレンチから出土している。焼成前に大きく穿孔された底部は一旦緩やかに斜め上方に立ち上がった後、緩やかに外傾しながら上方へ向かう。体部は上述の底部からやや器形の立ち上がりを上方に変化させ、体部中央付近に位置する最大径付近へ向かうものと判断される。器面の調整としては外面にはナナメ方向のケズリが顕著である。内面にはヘラナデが施される。

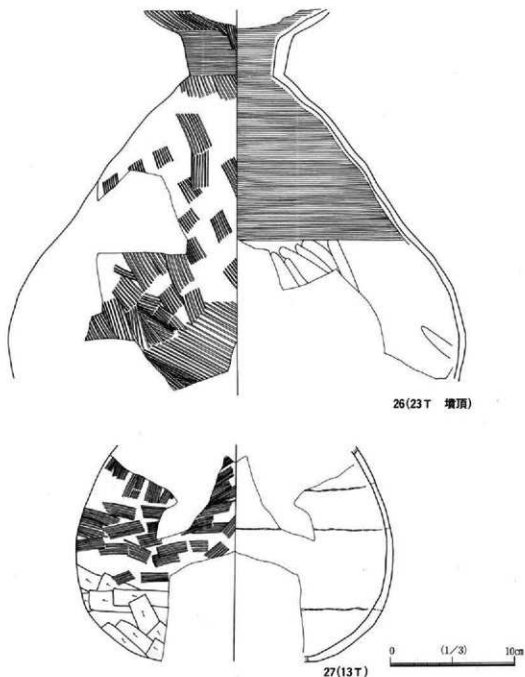


図70 二重口縁壺(3)

29は丸トレンチから出土した焼成前穿孔の底部資料である。大きく穿孔された底部は一旦上方に立ち上がった後に屈曲し体部へと至る。体部は口縁部から大きく外傾気味に立ち上がっていく様子から比較的大きな体部を形成する可能性がある。器面の調整は断片的なハケが観察されるが、ハケ後の何らかの調整が行われているかは判断できない。

30は体部の最大径が体部下半に位置する資料であり、23トレンチから出土している。底部は焼成前に大きく穿孔されており、一旦上方に立ち上がったあとと体部へと至る。体部の外面にはナナメ方向のハケメを施し、内面には底部底付近にハケが施される。

31は焼成前穿孔が見られる資料であり、23トレンチから出土した。底部は一旦上方に立ち上がった後比較的丸みを帯びた体部が始まるものと思われる。器面には不明瞭であるがハケ調整が施される。この資料で特徴的なのは、体部下半に見られる粘土継痕の存在である。底部付近の外面を調整したハケがこの粘土継痕のしたにもぐりこんでいく様子が観察され、土器の製作工程の中に一時粘土の半乾燥をおこなう、小工程が存在している可能性がある。

32は23トレンチから出土した底部資料であり、焼成前に穿孔された穿孔部を見ることのできる。底部は一旦上方に立ち上がった後に体部へと移行する。器面の調整は外面にハケ調整後にヘラケズリを施し、内面にはハケが施される。

33は焼成前の穿孔が確認される資料であり、穿孔部の高さが高いのが特徴である。30トレンチから出土した。体部は上方に向かって強く立ち上がった後緩やかに外傾しながら体部へと至る。器面の調整はハケ後にケズリが施される。

34は焼成前に穿孔された底部資料で16トレンチから出土した。底部の穿孔は2回行われている。器形は底部から一旦斜め上方に向かって立ち上がった後に体部へ至る。器面の調整は外面にヘラケズリが施され、内面にはハケが施される。

35は比較的大型な底部資料であり、23トレンチから出土した。大きく穿孔された底部から上方に立ち上がったあと体部へと至る。外面にはヨコ又はナナメ方向のハケが施され、内面にはナナメ方向のハケが施される。

36は焼成前に穿孔された底部資料で、23トレンチから出土した。底部の立ち上がりが顕著な資料である。内外面にハケが施される。

37は焼成前に穿孔された底部資料で、22トレンチから出土した。器面の調整は不明であるが、何度かに渡って底部の穿孔が行われている。

38は焼成前に穿孔された底部資料である。22トレンチから出土している。穿孔部の高さが低いことと、底部の立ち上がりが弱いことが特徴である。器面の調整は縦方向のハケが主である。

39は焼成前に穿孔された底部資料であり、23トレンチから出土している。底部の形状は底部からの立ち上がりは認められるが比較的低いのが特徴である、器面の調整は縦方向のハケの後にナナメ方向のハケを施す。

40は焼成前に穿孔された底部資料であり、23トレンチから出土した。底部の形状は穿孔部付近から体部に向かった付近には明瞭な屈曲地点は認められない。全体的の器厚が薄いのが特徴で、内外面ともに下部にはタテハケ、上半にはナナメ方向のハケが施されている。

41は焼成前に穿孔された底部資料である。23トレンチから出土した。底部の穿孔は小さく、器厚は厚い。底部は一旦上方に向かって立ち上がるが弱い。器面調整はヨコ・又はナナメ方向のハケが施される。全体的に小型な印象を受ける資料である。

42は焼成前に穿孔された底部資料であり、非常に薄い作りになっている。底部の穿孔部から体部にかけての範囲には明瞭な屈曲点は存在しない。器面の調整は判別することはできなかった。

43は焼成前に穿孔された底部資料であり22トレンチから出土した。2回の工程を踏んで穿孔された底部には明瞭な立ち上がりは見られず、大きな屈曲点を形成しないまま体部へ至るもの

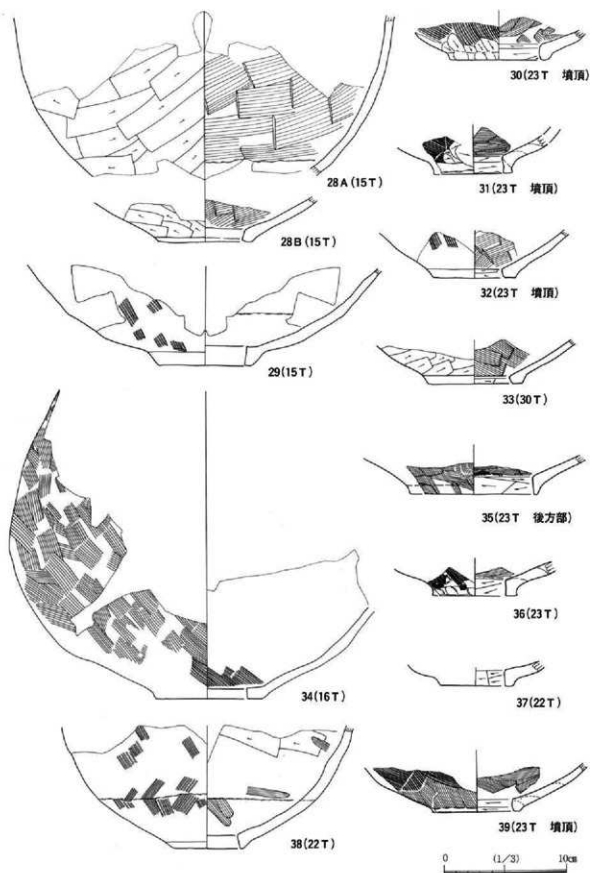


図71 底部穿孔壺 (1)

と考えられる。器面の調整はナナメ方向のケズリが施されている。

44は底部から頸部下部までが残存している資料であり、23トレンチから出土した。底部は焼成前に穿孔されており、明瞭な立ち上がりを形成しないまま体部へと移行する。底部付近の器厚が薄いのが特徴的である。体部は緩やかに外傾しながら立ち上がるが体部中央よりやや下側に位置する最大径を過ぎると急に内傾し頸部へと至る。全体的には卵型と呼べるような器形である。外面の調整はナナメ方向のハケ調整の後同方向のケズリを施す。内面には底部付近にはハケ調整が施されるが、上半部分には調整は施されず、粘土継痕や指頭圧痕が残る。

(荒 淑人)

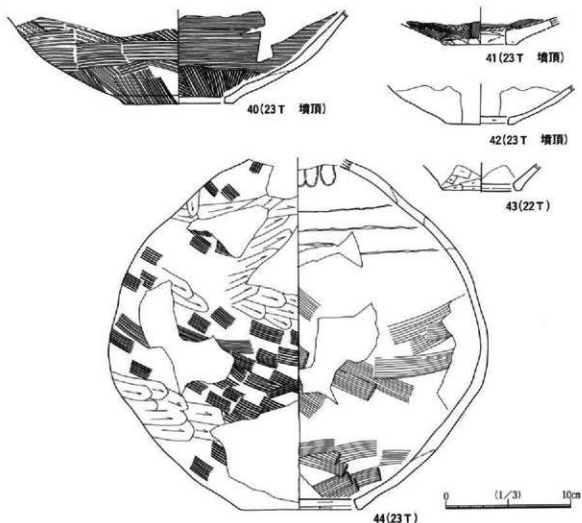


図72 底部穿孔壺(2)

その他 (図73)

この資料は、後方部墳頂平坦面から出土した口縁部資料である。非常に小破片のため器種の断定はできないが壺形土器の可能性が高い。当資料は強く外反する口縁部の口唇部に近い付近のもので、明瞭につまみ出された口縁端部を認めることができる。口唇部はつまみ出しの効果によって外方を向く明瞭な面が形成されている。胎土ならびに焼成具合は隣接して出土した底

部穿孔二重口縁壺とは大きく異なり、粗雑な胎土で焼成はあまい印象を受ける。特筆すべきは、口縁部つまみ出しによって形成された面に2個の円形浮文が付することである。円形浮文は直径0.8cmで、円形浮文同士の距離は約1cmと近い。また破片左側には円形浮文は存在せず、また浮文の剥離痕跡も認められないことから、円形浮文は口縁端部を全周するものではなく、2個以上の円形浮文がある程度の間隔をおいて配置されているものと思われる。当資料が確実に当古墳にともなうものかは不明である。

(荒 淑人)

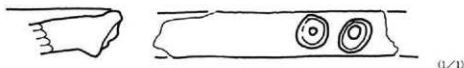


図73 円形浮文土器

## 壺 (図74)

1は複合口縁壺の口縁部資料である。体部から底部の形状は不明であるが直立する頸部に複合口縁が見られる。12トレンチから出土している。

2は16トレンチから出土した小型の壺である。平らな底部から一端斜め上方に向かって立ち上がり、膨らみの強い体部を有する。口縁端部は欠損しているが、口縁部は直立して収まるものと想定される。体部外面には横方向のヘラケズリが施され、体部内面にはヘラナデが施される。口縁部は口縁部と体部が接する範囲までヨコナデが施される。残存器高9.7cm、復元底径5.9cmを測る。

3は16トレンチの周溝部底面近くから出土した小型の壺である。底部は欠損しているが体部から口縁部にかけての範囲が残存している。ほぼ球形に近い体部に直立する口縁部が見られる。外面には丁寧なミガキが施され、鮮やかな赤彩が施されている。口径は9.2cm、残存高は11.9cmを測る。

(荒 淑人)

## 鉢 (図74)

4は16トレンチから出土した。鉢の底部は中央部が窪んでおり、膨らみの強い体部を有する。口縁部はほぼ直立気味に立ち上り口縁端部に至る。体部外面には明瞭なヘラケズリが施され、口縁部はヨコナデで整えられる。体部内面にはユビナデが施される。推定高9.0cm、復元口径10.7cm、底径4.5cmを測る。

(荒 淑人)

## 杯 (図74)

5は16トレンチから出土した杯である。口径16.0cm、器高7.2cmを測り、丸底の底部から丸みの強い体部が見られる。口縁部は体部中央付近から外方に向かって強く外反する。内外面には丁寧なミガキと赤彩が施されている。

6は16トレンチから出土した杯であり、口径12.4cm、器高5.5cmを測る小型品である。器形的には1と同様で、丸底の底部から丸みの強い体部が見られ、口縁部は強く外反する。外面調整は底部付近にはヘラケズリ、体部上半から口縁部にかけては丁寧なミガキが施される。内面は杯底部から口縁部付近にかけた全面にミガキが施されている。また内面を含めた土器の全面に赤彩が施されている。

図76-4はロクロ整形された杯であり、口縁部は欠損している。底径7cm、残存高4.8cmを測り、底面には回転糸切り痕が残る。底部側辺りには手持ちヘラケズリの再調整が見られる。内面には明瞭なミガキ調整と、黒色処理が施されている。平坦な底部から直線的に外傾しながら口縁部に至る。

図76-1から3は墨書土器で記載するが、内面に内黒処理が施されたロクロ土器である。

(荒 淑人)

#### 器台・高杯(図74)

7は18トレンチから出土した器台である。裾部から受部までが残存している。全体的な器形は浅めの受部に直線的な裾部を有するもので、受部の貫通孔は見られない。器面の調整は外面にハケを施す。

8から13は小片であり厳密な器種分類は不可能であるが、残存している範囲を高杯の脚部付近の資料として判断したことから、高杯として分類している。

8は脚部資料である。杯部並びに裾部の形状は不明であるが中空状の脚部が確認される。杯部と脚部が接するところの外面にはヘラ状工具による刻みが施されている。

9は脚部資料である。杯部並びに裾部の形状は不明であるが、中空の脚部で透孔が確認される。

10は脚部資料である。短い脚部に大きく広がる裾部を有するものと思われる。杯部並びに裾部の形状は不明である。全体に鮮やかな赤彩が施されている。

11は中空の脚部資料である。杯部並びに裾部の形状は不明である。脚部に透孔が確認される。

12は脚部資料である。緩やかに立ち上がる受部と受部と同じ角度で開く脚部を有する。

13は脚部資料である。直線的に下方に向かって開く裾部が確認され、脚部には透孔が認められる。

14は器台裾部資料である。裾部は下方に向かうにつれて大きく広がっていく。裾部には6個の透孔が確認される。受部の形状は不明である。

15から17は受部付近から下方に向かって緩やかに開く裾部を有するものである。14と比較すると小型品であると思われる。16には透孔が確認される。いずれも受部の形状は不明である。

(荒 淑人)



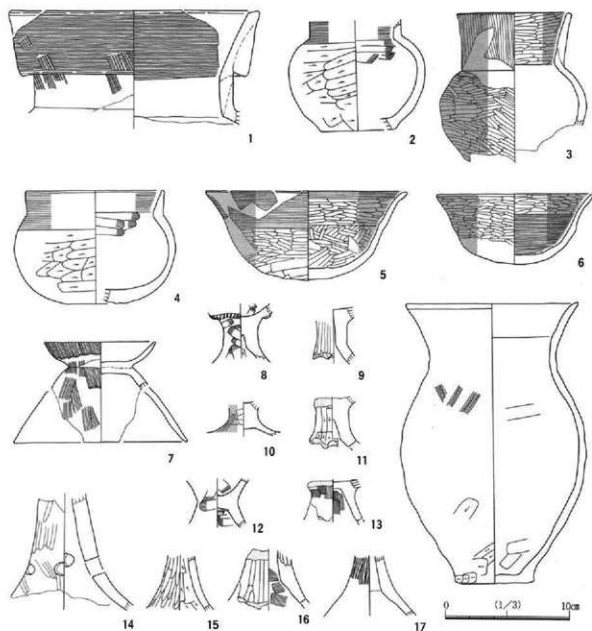


図74 その他の土師器(1)

## 甕 (図75)

1は口縁部から底部までの全体が判断できる資料である。甕はロクロを使用して整形されている。平らな底部から直立して口縁部まで至る。体部の最大形は体部中央に位置する。口縁部は強く外方に屈曲し、断面形が三角形の口唇部は直立する。外面調整は体部下半には縦方向のナデが施され、底部に近づくにつれて斜め方向のナデに変化している。内面には底部付近にヘラナデが施されている。体部上半には明瞭なロクロナデが残る。口縁部径は21.0cm、器高34.2cmである。

2は口縁部から底部までの全体が判断できる資料であり、長胴化の進んだ甕である。甕は口

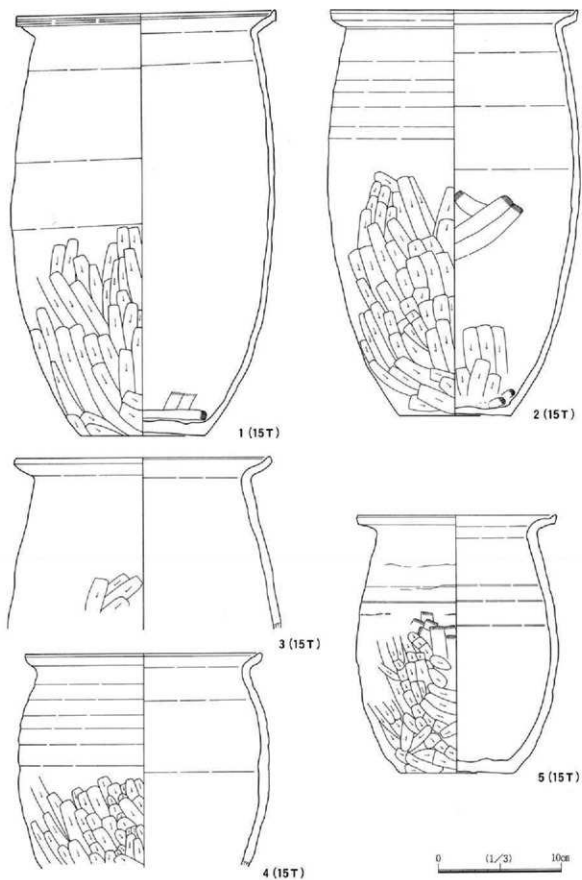


図75 その他の土師器(2)

クロを使用して整形されており、口縁部径は20cm、器高は33cmを測る。平らな底部から直立気味に体部が立ち上がり口縁部まで至る。土器の最大径は体部中央に位置している。口縁部は体部から外方に強く屈曲し、断面三角形の口唇部は直立して収まる。器面調整は外面下半にはナデが施され、底部に近づくにつれて斜め方向のナデに変化する。外面の上半には明瞭なロクロナデが残る。内面の中央部にはヘラナデが施され、内面の底部付近にはナデが施される。

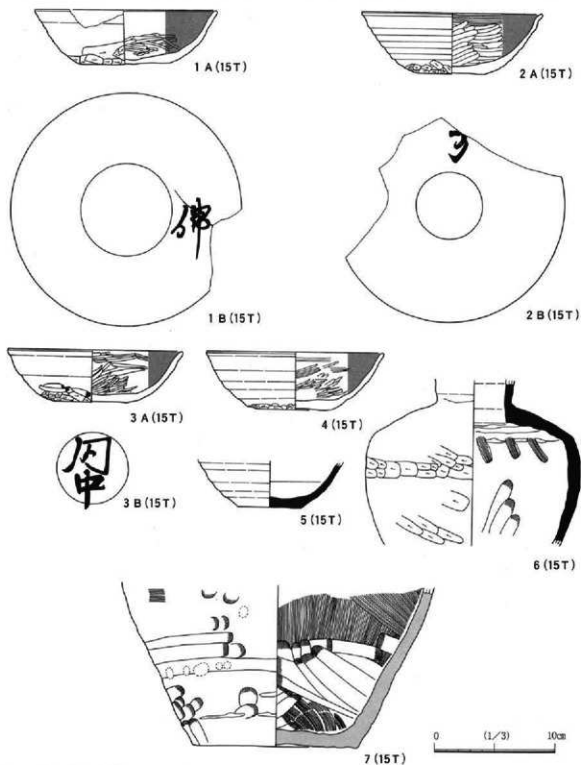


図76 その他の土器

3は体部上半から口縁部までが残存している資料である。口縁部径は20.5cmを測り、残存器高は14cmである。体部は口縁部に向かって弱く内湾しており、口縁部に到達すると外方に強く屈曲する。口唇部は直立して取まる。外面の一部には斜め方向のヘラケズリが施されるが明瞭ではない。

4は体部中ほどから口縁部にかけての範囲が残存している資料である。口縁部径は14.2cmを測り、残存器高は17.2cmを測る。器形は緩やかに上方に開きながら立ち上がってきた体部は、体部中ほどで緩やかに内湾が始まり口縁部に至る。口縁部は外方に向かって強く屈曲し断面三角形の口唇部がつくが口縁部は短いのが特徴である。外面調整は体部下半に縦方向のヘラケズリが施され、体部上半にはロクロナデが残る。

5は小型の甕である。口縁部径は16.1cmを測り、器高は20.8cmを測る。器高に比べて径が大きく平坦な底部から直立気味に体部が延びる。体部の最大形は体部下半に位置しており、径が最大な箇所を過ぎると緩やかに内湾する。口縁部は短く外方に向かって強く張り出す。口唇部は断面三角形で直立している。器面の調整は体部下半に縦方向の小さなヘラケズリが施されており、体部上半にはロクロナデがみられるが、粘土継ぎの痕跡が残る。

(荒 淑人)

#### 墨書土器 (図76-1・2・3)

1はロクロを使用して整形された杯である。内面には明瞭な黒色処理とミガキが施されている。底部の切り離し技法は回転糸切りであり、底部には切り離し後に手持ちヘラケズリを施す。墨書は杯部外面に墨書の天方向を口縁部に向けており「佛」と判読される。

2はロクロを使用して整形された杯である。内面には黒色処理とミガキが施されている。底部は回転糸切りによって切り離されており、手持ちヘラケズリによる再調整が施される。墨書は底面に薄い墨で「内中」と書かれている。

3はロクロを使用して整形された杯である。内面には黒色処理とミガキが施されている。底部は回転糸切りによって切り離されており、手持ちヘラケズリによる再調整が施される。墨書は杯部外面に比較的濃い墨でかかっているが判読はできない。

(荒 淑人)

#### (2) 縄文土器 (図77)

1～4はいわゆる縄文時代早期末葉の貝殻痕文系土器であり、素山Ⅱ式に比定されるものである。4点が出土している。1と2は口縁部資料であり、口唇部はヘラ状工具によって平坦に仕上げられている。器種は口縁部の立ち上り具合から深鉢形の土器であると判断される。3・4は胴部の破片資料であり縄文を地文とする文様が施される。土器には明瞭な繊維の混入が認められる。

5は縄文時代前期末葉の大木2a式の破片資料であり、1点を確認している。破片上部には無文帯が見られ、下部には燃糸が施されている。繊維の混入は極めて少ない。

6～21は縄文時代中期初葉の大木7式と判断した資料であるが、厳密に大木8式と区別することはできなかった。6～8は綾絡文が見られる資料であり、LRとRL縄文の組合わせに

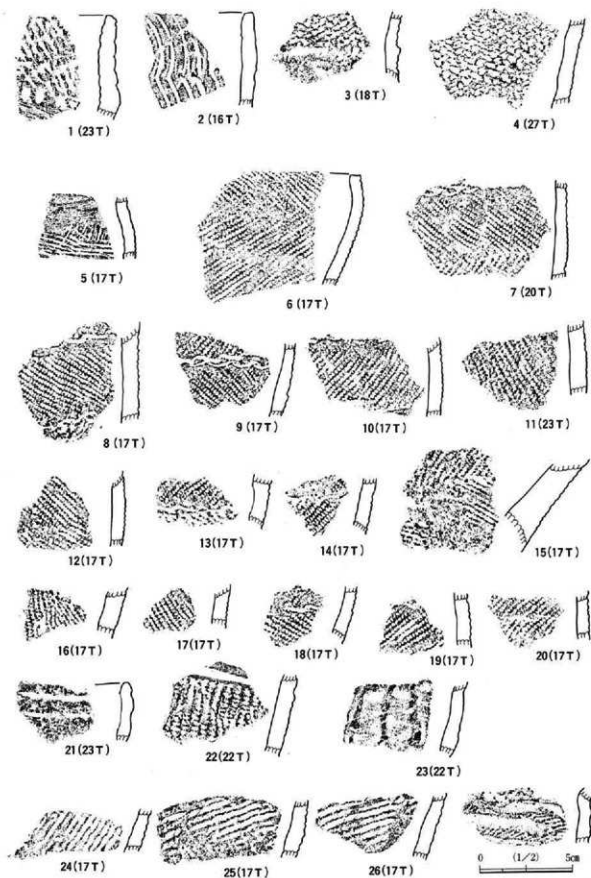


図77 縄文土器

よって羽状効果を出している。6は口縁部資料であり、緩やかに外傾しながら立ち上がってきた胴部は口縁部付近で直立する。口唇部は平坦に仕上げられている。器種は深鉢である。

22・23は、縄文時代中期末葉の大本10式の破片資料である。縄文の斜縄文が確認される。

24は縄文時代後期初頭の三十稲葉式土器と考えられる破片資料である。当資料は1点を図示した。器面には指頭圧痕が明瞭に観察され、三十稲葉式として判断した。出土量は極めて少なく、詳細は不明である。

(荒 淑人)

### (3) 弥生土器

発掘調査で最も多く出土したのが弥生土器である。弥生土器は墳丘を中心とした広い範囲から出土しており、その多くは桜井式土器である。また、若十であるが17トレンチを中心に樹形甕式土器も出土している。

#### 樹形甕式土器 (図78)

1の外面には口縁端部直下に横位の沈線が巡り、その下部に波状に平行沈線が巡る。内面には2条の平行沈線が横位に施される。2は外面の口縁端部直下には太い横位沈線が2条巡り、その下部に2条の斜位沈線が見られる。内面には口縁端部直下に1条の横位沈線が見られる。3は口縁部下部に3条の横位沈線が巡る。4～8は口縁端部直下に横位の沈線が施される。4～7は3条の沈線が巡り、8の横位沈線は1条である。9は口唇部に刺突が施され、外面には熱糸文が施される。10は口縁端部直下に細い3条の沈線が横位方向に巡り、口縁部は折り返されている。11・12は口縁部外面に地文である縄文を沈線によって区画し、内部をミガキですり消している。11は縄文を口縁端部直下では3条の沈線によって区画し、その下部に4条の沈線を山形文に巡らしている。山形文の谷部はミガキ手法によってすり消される。12は口縁端部直下から2条の沈線による山形文が描かれ、沈線間に縄文が施されている。沈線区画の外側はミガキによって縄文がすり消されている。13は口縁部より下部の破片であるが、沈線区画の外側はミガキ消されている。14は甕の体上部付近の破片である。熱糸には明瞭な結節が見られ、結節の上部にはナデが施される。15は1条の横位方向の区画沈線が見られ、沈線の下部には縄文が施され、沈線上部には施されない。16は幅の広い2条の沈線の間は縄文をミガキ消し、沈線区画の外側には縄文を施している。17は壺の頸部付近の資料と思われる。頸部と体部の接するところに横位の沈線が1条めぐり、その下部に横位の沈線と斜位の沈線を、半月状に組合わせた文様を描いている。18は2条の沈線によって無文帯を区画している。19は無文帯と縄文を円形の沈線によって区画している。20は、幅の狭い2条の沈線が見られる。21は3条の沈線区画の間を無文帯と縄文が交互に施されている。22は2条の沈線が巡る。縄文帯は見られず、丁寧なミガキが施されている。23は平行沈線で連弧を描いている。24は3条の沈線が円形に巡ると思われる。沈線の間には丁寧なミガキが施されている。25はミニチュア土器である。外面に熱糸が観察される。

(荒 淑人)

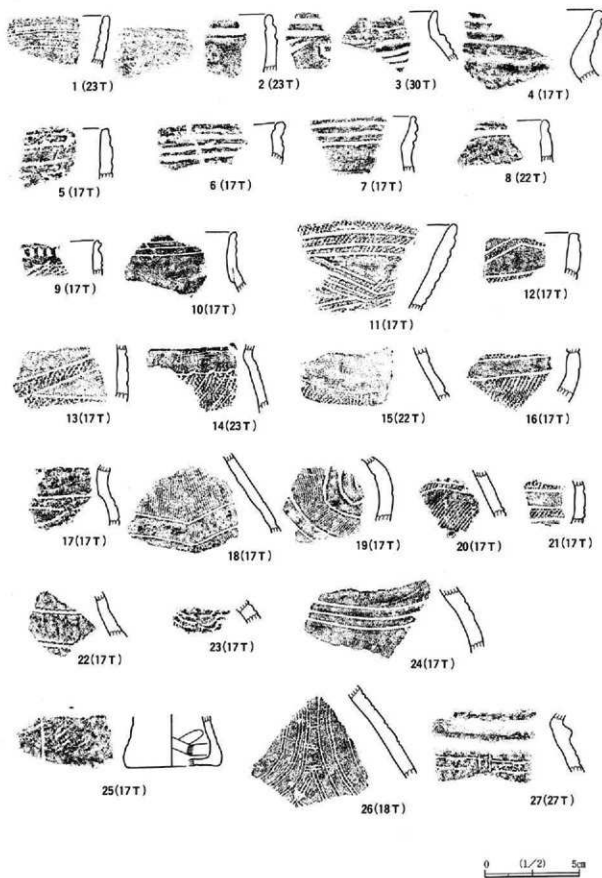


図78 弥生土器(1)

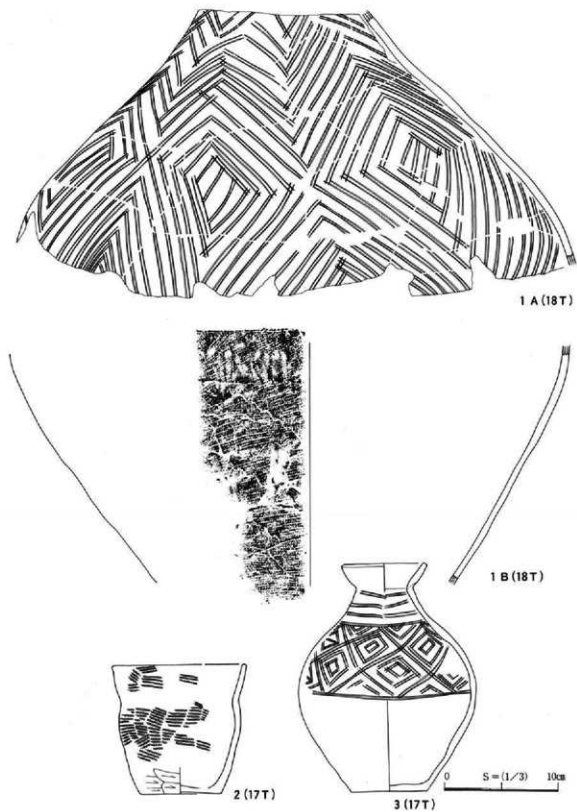


図79 弥生土器(2)



## 桜井式土器（図79）

桜井式土器は調査区全体から出土しており、今回は代表的なものに限定して掲載した。

1は18トレンチから出土した桜井式の壺であり、土坑内に埋設されていたものである。資料は壺の上半部と下半部分かれており、直接的な接合関係はないものの出土遺構並びに文様構成から同一固体である可能性は高いと判断される。

資料は口縁部と底部については欠損しており形状は不明であるが、体部の全体を確認することができる。資料から判断される器形は器高の割に直径の小さな底部から外傾気味の体部が上方に向かってのびる。体部は器高のほぼ中央付近で最大径を計測し、そこから頸部に向かって内傾を始める。体部の文様は体部中央の最大径付近に横位の平行沈線文を一条配し、上半の平行沈線文帯と下半の縄文帯を区画している。上半の平行沈線文帯は半截竹管状工具によって重菱形文が描かれる。下半の縄文帯はLRで上半部分には器面をナナメに走る綾絡文が見られる

2は17トレンチから出土した。平坦な底部には布圧痕が見られる。体部は底部から直立気味に立ち上がり口縁下部に至る。口縁下部は一旦外面弱く括れるが、そこから直線的に外傾し口縁端部に至る。外面には燃糸が施されている。

3は、17トレンチから出土した小型の壺型土器である。口縁部から底部にかけて範囲が残存しており、土器の全体が判断できる資料である。平坦な底部から上方にむかってハの字に開く体部が延びる。体部の最大径は体部中央付近に位置しており、体部中央付近を過ぎると緩やかに内傾が始まる。体部は明確な肩部を形成することなく直線的に頸部に至り、外方にむかって強く外傾する短い口縁部が付く。器面の文様構成は上中下の3段に分けられる。最も上段に位置する文様帯は竹管状工具による平行沈線文4条を横位方向に巡らし、中段は上段と同様の工具によって菱形文を描く。下段の燃糸文は横位方向の平行沈線文で中段の菱形文と区画される。

図78-26は竹管状工具によって描かれた2個の同心円文が、横位の平行沈線文によって連結されている。図78-27は桜井式の壺頸部付近の破片であり、断面三角形の隆帯が見られる。隆帯の下部には縦位の平行沈線文と横位の平行沈線文が描かれている。

（荒 淑人）

## （4）須恵器（図76-5・6）

5は杯である。口縁部の形状は不明であるが、底部には回転糸切り痕を明瞭に残す。底部の再調査は見られず、器面には明瞭なロクロナデが施される。

6は壺である。底部ならびに口縁部は欠損しており、土器の全体を判断することはできないが、丸みの強い体部と、強く張る肩部が確認される。頸部は弱く外反しながら立ち上がり、口縁部へと向かう。

（荒 淑人）

(5) 近世陶磁器 (図80)

1・2は肥前系の磁器である。1には草花が、2には山水の染付けが見られる。

3から8は大掬相馬焼の碗である。3から6は丸碗に分類されるもので器面には灰釉が施されている。5・6・7・8の釉薬は漬けかけ手法によって施釉されるが、3・4は畳み付けや高台内部にまで釉薬が及んでいることから浸しがけによるものと考えられる。4の高台部は高いのが特徴である。7は腰折碗であり、釉薬は灰釉である。8は腰鏝碗で、体部下半に鉄釉が施され体部上半に厚めの灰釉が施されている。

9から13は大掬相馬焼の高台部資料であるが器種の断定は困難な資料である。9と13は比較

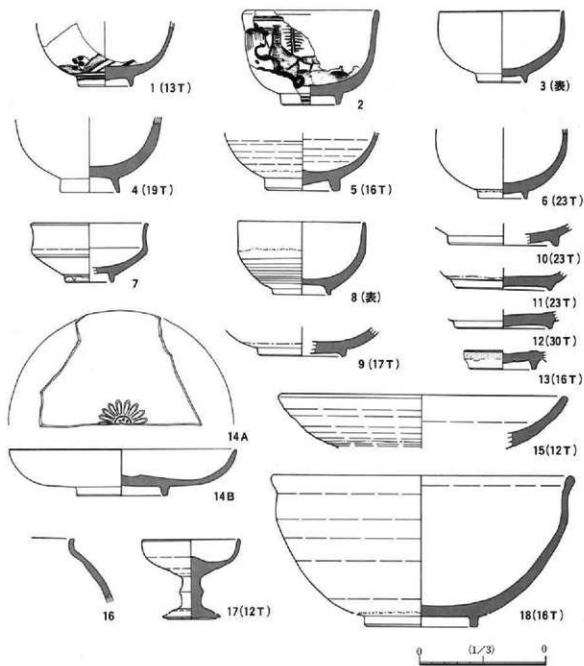


図80 近世陶磁器

的高めの高台が見られることから碗類の可能性が考えられ、10・11・12の高台は低く高台径が大きいことから皿類の可能性が考えられる。

14は大掘相馬焼の丸皿である。釉薬は灰釉で見込みの部分に印花文が見られる。破片のため推定となるが18弁菊印花文と思われる。16は小型の壺の破片資料である。丸みの強い体部に短く直立する口縁部が見られる。17は仏飯器であり、全体に鉄釉が施されている。15は鉢の口縁部付近の資料である。18は中型の鉢である。釉薬は灰釉で、口縁部直下の括れが弱いのが特徴である。

(荒 淑人)

### (6) 打製石器

#### 石鋏 (図81)

1は石鋏として判断した資料である。長さ11.5cm、基部幅5.4cm、鋏先幅5.0cmを測る大形なものである。器形は2次加工によって長方形に仕上げられており、側辺部には細かな加撃が加えられている。刃部は表面に大きな剥離が認められ、刃部の形状ならびに製作手法は判然としないが、裏面には細かな加撃によって刃部が造られている。

(荒 淑人)

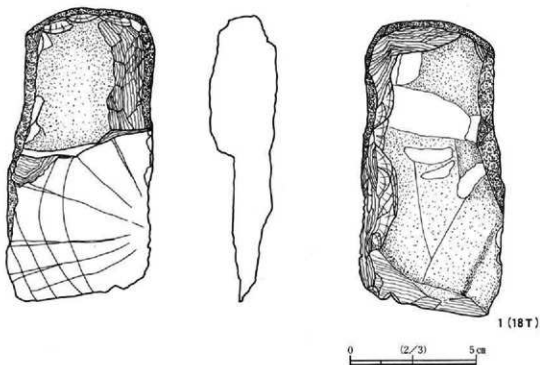


図81 石鋏

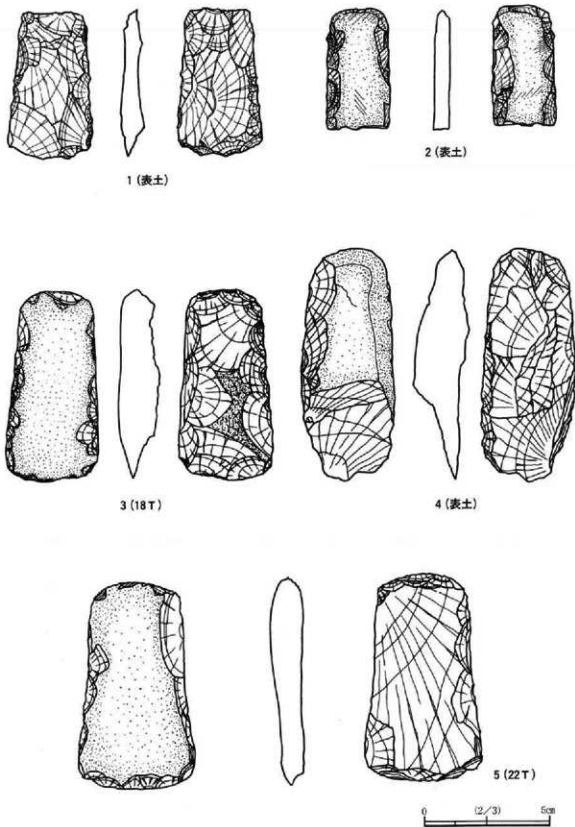


图82 石斧

## 石斧(図82)

1は基部から刃部までが残存している資料である。全体的に大きな加撃によって、形成されており平面形は短冊状を呈する。側辺部ならびに刃部には細かな加撃による、小さな剥離が観察される。基部から刃部までの長さは5.8cm、基部幅2.4cm、刃部幅3.4cmを測る。

2は刃部が欠損している資料である。残存している範囲の長さは4.8cm、基部幅2.1cmを測る。器面の表裏には自然面を明瞭に残しており、整形段階の加撃は側辺部に限られている。側辺部の加撃は非常に細かく、石器の平面形を短冊状に仕上げています。

3は基部から刃部までの全体が判断できる資料である。基部から刃部までの長さは7.6cmを測り基部幅は2.9cm、刃部幅3.4cmを測る。石器の表には石材の自然面を残しており、裏には大きな剥離が見られる。石器の側辺部には細かな加撃が加えられており、石器の形状を短冊形に仕上げています。刃部は裏面からの加撃によって大きく作られ、その後非常に小さな加撃によって作られる。

4は基部を中心とした範囲が残存している資料である。刃部付近の表面には大きな剥離が見られ、刃部が残存しているか判断することはできない。石器の残存長は9.2cm、基部幅2.9cmを測る。平面形は短冊状を呈し、石器の表面には石材の自然面を残している。整形段階の加撃は裏面に大きな加撃が加えられ、側辺部には細かな加撃が加えられている。

5は基部から刃部までの石器全体が残存している資料である。基部から刃部までの長さは8.2cmを計測し、基部幅3.5cm、刃部幅4.5cmを計測する。平面形は刃部がやや広い短冊状を呈する。石器は裏面に多くな2次加工が施され、表面には素材の自然面を残している。側辺部、基部頂部、刃部には細かな加撃によって形が整えられている。

(荒 淑人)

## (7) 磨製石器

磨製石器は、扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・石庖丁・石ノミが出土している。

## 扁平片刃石斧(図83)

扁平片刃石斧としたものは、器面に素材獲得の際の剥離面、若しくは敲打による整形の痕跡を残し、刃部の整形が片面からの研磨によるものである。8点が出土している。

1は基部から刃部までの石器全体が判断できる資料である。器面の全面には整形段階の研磨が斜め若しくは縦方向に施されており、敲打痕跡は基部の一部に見られるだけである。刃部から基部までの長さは6.5cm、刃部幅は3.5cm、基部幅は2.8cmである。刃部は片面からの研磨によって形成されており、典型的な扁平片刃石斧である。

2は基部から刃部までの石器全体が判断できる資料である。石器は基部から刃部までの長さが6.5cm、基部幅2.5cm、刃部幅は3.5cmを測る。器面には斜め方向を主体とした研磨が施され、基部ならびに体部の一部に、敲打痕跡を残す。刃部は片面からの研磨によって削り出されており、明瞭な片刃を形成している。

3は基部から刃部までが残存している資料である。石器の刃部から基部までの長さは5.6cmを測り、基部幅2.2cm、刃部幅3.1cmを測る。石器の表面には丁寧な研磨によって整えられてお

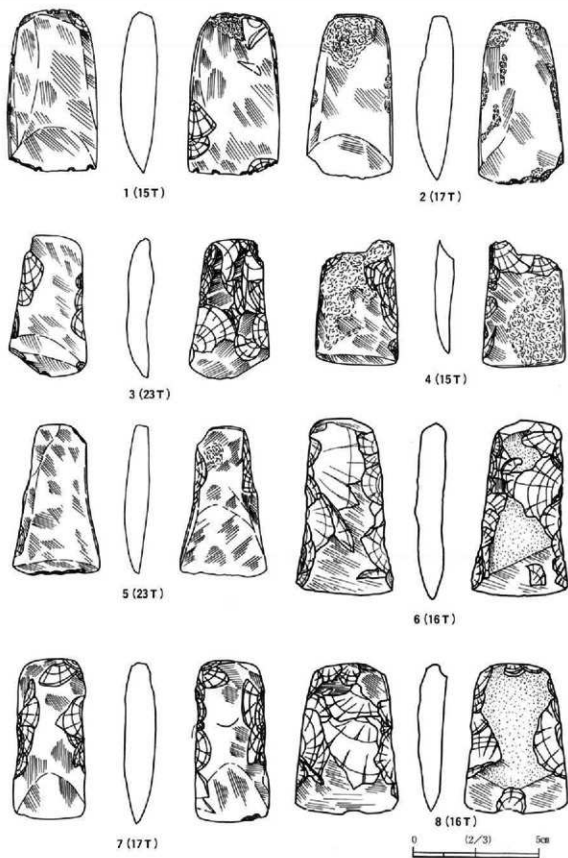


图83 扁平片刃石斧

り、裏面には剥離面が多く残る。刃部は斜め方向の研磨によって作られている。

4は基部が欠損している資料である。器面には表面整形の敲打痕跡を明瞭に残している。刃部の整形は斜め方向の研磨によって整えられており、明瞭な片刃が作られている。残存範囲は、長さ5.0cm、刃部幅3.2cmを計測する。

5は基部から刃部までが残存している資料である。基部から刃部までの長さは5.9cmを計測し、基部幅2.0cm、刃部幅3.4cmを計測する。器面には丁寧な研磨が施されている。裏面の一部には敲打痕跡が確認される。刃部は表面に斜め方向からの研磨によって整形されているが、刃部の長さが短いのが特徴である。

6は基部から刃部までの石器全体が残存している資料である。基部から刃部までの長さは6.9cmを計測し、基部幅2.5cm、刃部幅3.8cm、最大厚1.0cmを計測する。器面は、素材獲得の際の剥離痕を多く残しているが、石器裏面には斜め方向の研磨によって整えられている。刃部は表面に斜め方向の研磨によって作られているが、裏面にも研磨が施されている。断面を見ると両刃のように見えるが、表面の研磨に比べて裏面の研磨は明瞭でない。

7は基部から刃部までの石器全体が判断できる資料である。基部から刃部までの長さは6.5cmを測り、基部幅2.5cm、刃部幅2.8cmを測る。器面には素材獲得の際の剥離が所々に残っているが、比較的器面の研磨は丁寧であり、敲打の痕跡は認められない。刃部は表裏両面からの研磨によって形成されており両刃のように見えるが、表面からの研磨が強い。

8は基部から刃部までの全体が判断できる資料である。基部から刃部までの長さは6.0cmを測り、基部幅2.8cm、刃部幅4.0cmを測る。石器の表面は素材獲得の際の剥離痕が多く見られるが、基部と刃部を中心とした2箇所にも明瞭な研磨が施されている。表面には自然面を残している点の特徴であり、研磨は刃部に限られている。

#### 石庖丁 (図84)

1はほぼ完全な形で出土した石庖丁である。幅11.2cm、長さ4.1cm、厚さ0.5cmを測る。形状はわずかに膨らむ背部と、大きく膨らむ刃部が見られ、いわゆる半月状外湾刃の形態を持つものである。器面には敲打の痕跡は認められないが、体部にはナメ方向を主とした研磨が施され、刃部には横方向を主とした研磨が施される。刃部は両面からの研磨によって形成されており両刃である。穿孔部は2箇所に見られ両面からの回転穿孔による。

2は、未製品であると判断される資料である。器面には素材獲得の加撃痕跡である大きな剥離が見られ、その後斜め方向の研磨を施している。研磨は石器の右側を中心に施され、左側には施されていない。刃部には細かな加撃が加えられており、刃部成形の痕跡であると考えられる。形状は背部と刃部が大きく膨らんでおり、1とは形態的に大きく異なっている。器面には穿孔は見られず、また明瞭な刃部整形の研磨は見られない。石器は長さ11.7cm、幅1.5cmを測り、厚さは1.1cmである。

3は両側刃部の大部分が欠損しており、穿孔部が確認される資料である。背部は直線的で、刃部には丸みが認められることから、半月状外湾刃形を呈するものと思われる。体部には斜め

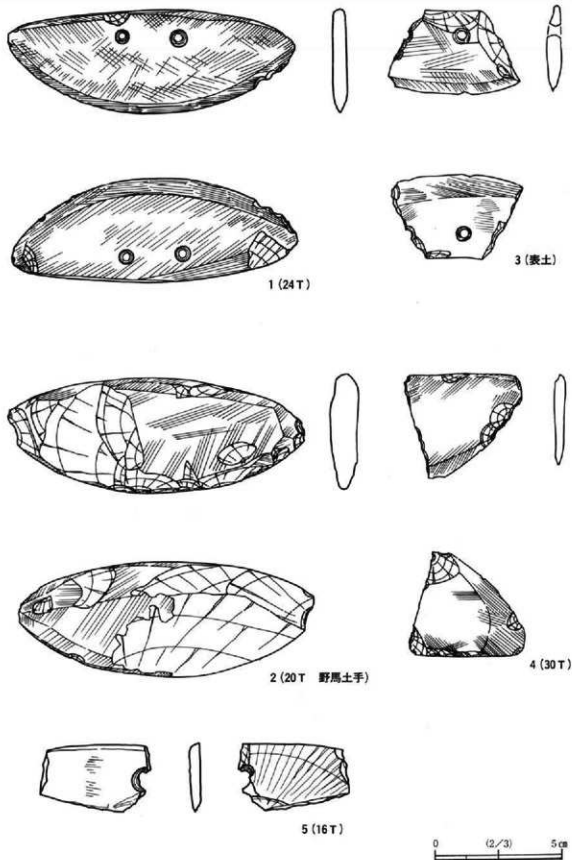


图84 石匙丁



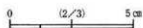
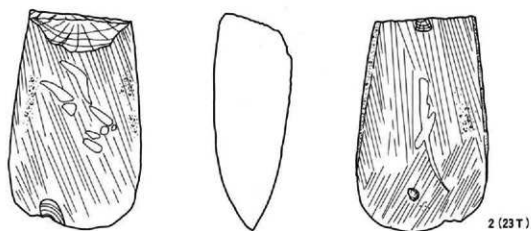
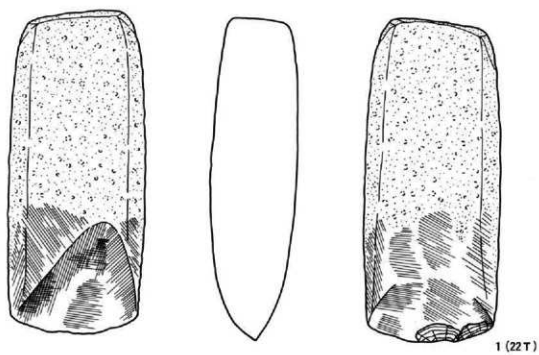


図85 太形蛤片刃石斧

方向の明瞭な研磨が施され、刃部には斜め方向の研磨が施されている。刃部は両刃であり、穿孔部もまた表裏両方向から回転穿孔によって穿たれている。

4は側刃部を中心とする資料であり、石器の大部分は欠損している。器面は丁寧な斜め方向の研磨によって整えられており、刃部は体部とは異なるナナメ方向の研磨が施されている。刃部の研磨は側刃部にまで至っており側刃部に大きな刃部が形成されている。残存している範囲には穿孔部は認められない。

5は両側刃部が欠損している資料である。石器の表面には横方向の研磨が施されるが、裏面には剥離が残存している。背部は研磨によって整えられているが、刃部付近には細かな加撃による剥離を残しており、整形段階のものか刃部であるのかは判断できない。加撃は一方向から行われているだけであり、刃部であるとすれば片刃の石庖丁であると考えられる。形状は背部ならびに刃部には明瞭な膨らみは見られず直線的であり、非常に細長い形状の石器であったと想定される。残存資料の右側に表裏両方向からの回転による穿孔が穿たれる。

(荒 淑人)

太形蛤刃石斧(図85)

1は刃部から基部にかけての石斧の全体が判断できる資料である。刃部から基部までの長さ12.8cmを計測し、刃部幅は5.0cm、基部幅は4.8cm、最大厚は3.5cmである。器面の調整は、刃部を中心に横方向と斜め方向の研磨が施される。基部を中心とした範囲には、細かな敲打によって整形されている。

2は刃部が残存している資料である。残存長は8.4cmを計測し、刃部幅は5.2cmである。器面の全体には、縦方向の研磨が施されており敲打整形段階の器面を残すところはない。

(荒 淑人)

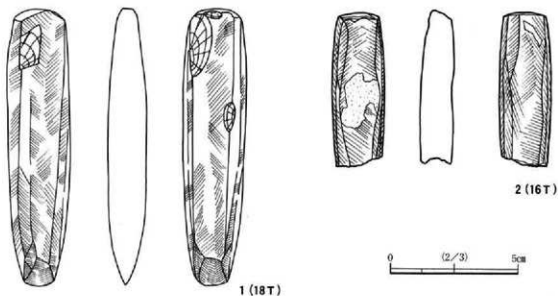


図86 石ノミ

## 石ノミ (図86)

1は刃部から基部にかけての全体が残存している資料である。長さ10.8cm、頭部幅2.2cm、刃部幅1.3cm、最大厚1.5cmを測る。表面は非常に丁寧な研磨によって整えられており、刃部は複数の方向からの研磨によって形成されている。頭頂部には複数の剥離が見られることから、頭部を何らかの加撃工具によってできた打痕であると考えられる。

2は刃部を含む下半部が欠損している資料である。残存長は6.0cm、頭部幅は1.8cmである。表面には丁寧な研磨によって磨き上げられているが、一部敲打面を残す。頭頂部には加撃工具によってできた打痕である剥離痕跡が見られる。(荒 淑人)

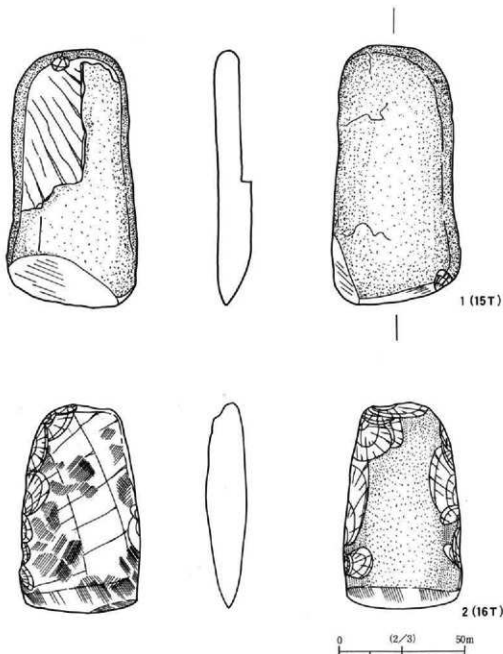


図87 石斧

石斧 (図87)

石斧として記載するものは上記の磨製石斧とは形態的に異なるもので2点が出土している。

1は長さ10.1cm、幅5.1cmを測る。この石器は器面のほとんどに自然面を残すもので、研磨は刃部整形のためだけに行われている。刃部の研磨は表裏両方向から行われ、刃部は両刃の形態を持つ。

2は長さ8.1cm、最大幅4.7cmを図る。形態的には扁平片刃石斧に類似するが、刃部形態が両刃であるのが特徴的である。器面調整は、片面には大きな剥離痕が残り、剥離のあとに研磨を施しているが、器面全体を調整するほどではない。裏面には自然面を残し、備端部には細かな加撃による剥離が観察される。刃部整形は研磨によって行われている。

(8) 装身具 (図88)

装身具としたものは块状耳飾1点・管玉1点が出土している

1は块状耳飾である。23トレンチの後方部東斜面で出土した。全体の $\frac{1}{2}$ が残存しており、块状耳飾特有の中央部には孔があり、その下部には切目がみられる。

2は16トレンチから出土した石製の管玉である。長さ3.6cm、直径0.9cm、穿孔部直径3mmを測る。管玉の断面形は若干楕円形を呈する。石材は緑色凝灰岩質であり、薄い緑色の中に斑紋状に濃い緑色が混入しているのが特徴である。

(荒 淑人)

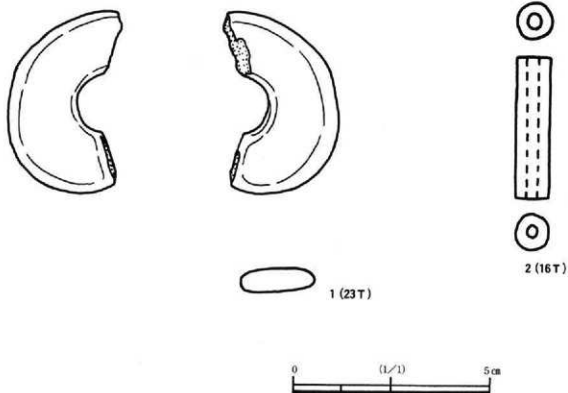


図88 装身具

## 第4章 物理探査

はじめに

発掘調査をされていない古墳の内部構造を知ることは、保存整備計画を進めるうえで重要な要素となる。また発掘調査をすとしてもどのように発掘調査を進めるかといった指針を与えてくれる。地下の構造を掘らないで探査する（非接触探査）方法としては、面的な情報を取得する：航空写真判断と、断面的な情報を取得する：物理探査方法が考えられる。航空写真判読で面的な情報を捉え、それに地中レーダー探査で得られた断面情報を加えることによって、3次元的な解析が可能となる。3次元解析は地下の構造を判断するうえで有効な武器になりうる。航空写真判読方法は、赤外線カラー航空（空中）写真判読が最も地下の水分含有量が分かり、適切な判読方法と言える。

物理探査方法は大きく分けて、

- 1) 電気探査
- 2) 磁気探査
- 3) 地中レーダー探査があるが、それぞれ一長一短があり、状況に合わせて使い分けられる。

国指定史跡桜井古墳は、福島県原町市に位置する前方後方墳で、盛土や内部主体が比較的良

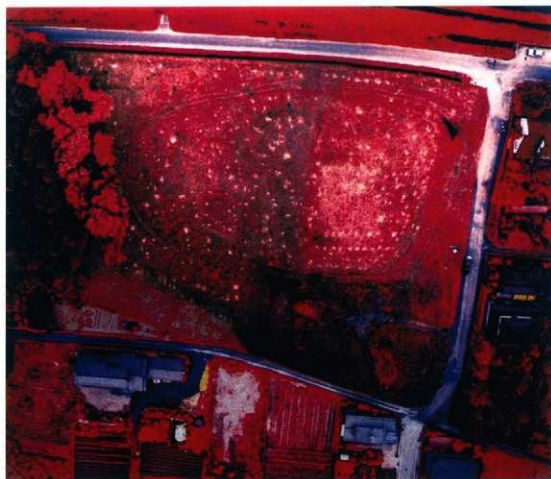


図89 赤外線カラー写真

好に残っていると推定されてきた（原町市教育委員会1985）。特に埋葬施設については、40数年前に当時明治大学教授大塚初重氏による測量調査の際の記録・知見があるのみである。

今回、赤外線カラー空中写真と地中レーダー探査を企画したのは、桜井古墳の内部構造を明らかにするための試みられたことであり、本章は赤外線カラー写真判読と地中レーダー探査の解析について解析報告書である。

## 第1節 赤外線撮影

### 第1項 赤外線カラー空中写真撮影

#### (1) プラットホーム

赤外線カラー航空写真撮影（垂直方向からの撮影）に有効なプラットホームは各種に種類が考えられるが、今回は、低高度から撮影しなければならない。撮影面積が少ない等の理由から、使用したプラットホームは、

ラジオコントロール模型ヘリコプターである。諸元は以下の通りである。

ローター径：2.5m・実用上昇限度：300m・排気量：40cc（使用燃料ハイオクガソリン）

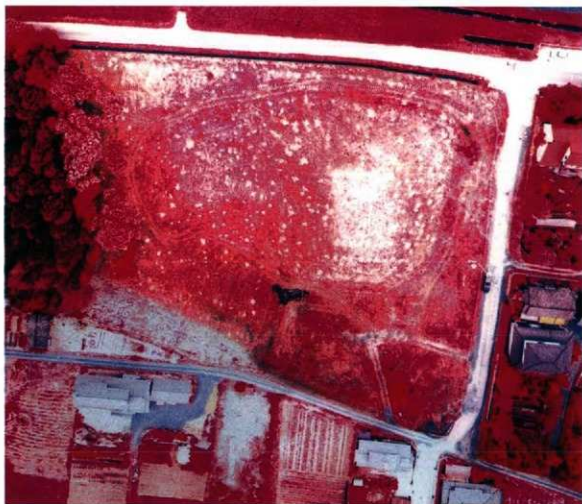


図90 赤外線カラー写真

ラジオコントロール模型ヘリコプター（以下「ラジコンヘリ」と呼ぶ）はモニターを見ながら、自由に撮影高度が選べ、今回は古墳の長軸に沿って、高度50mで2コースのコース撮影を行った。（図91）

## （2）赤外線カラーフィルム

通常のカラーフィルムでも、条件が良ければ地表の状況はある程度判読できるが、赤外線カラーフィルムを使用すると、水分の含有量を通して、各種のことが分かるようになる。

赤外線放射量は、次の条件の時良く現れる。

- （1）土壤に水分が多く含まれていると水分が少ない地域より濃く写る。
- （2）同一の土壤に覆われているところでは、土壤粒子が細かいところほど、粗いところより濃く写る。
- （3）植化が進んでいるときは、腐植化が進んでいるところの方が濃く写る。

以上、赤外線カラーの性格を利用して、空中写真撮影を行った。使用したフィルムの諸元は以下の通りである。また、同時にナチュラルカラーでの撮影も行った。ナチュラルカラー撮影は、垂直撮影だけではなく、周囲の景観も含め、俯瞰撮影も行った。



図91 空中写真撮影コース

赤外線カラーフィルムの諸元

製品名：コダックエクタクローム E I Rフィルム/2236

露光指数：200

ネガサイズ：24mm×36mm

使用したカメラ・レンズの諸元

製品名：コダックエクタクローム E200

露光指数：200

ネガサイズ：53mm×53mm・24mm×36mm

使用したカメラ・レンズの諸元は以下の通りである。

製品名：ハセルブラット SWC/E 使用レンズ：ツアイズビオゴン  $f=38.4\text{mm}$

製品名：コンタックス G 2 使用レンズ：ツアイズビオゴン  $f=21.5\text{mm}$



図92 判読写真 (赤外線)



## 第2項 赤外線カラー空中写真判読

### (1) デジタルモザイク

撮影したフィルムをスキヤナで読み取り、デジタルデータに変換（A/D変換）を行った。赤外線カラーはデジタルモザイクデータを作成し（図92）、このデジタルモザイクデータを基に解析を加えた。ナチュラルカラー（図93）はそれぞれの単画像解析を行った。

### (2) 主体部の様相

ナチュラルカラー、赤外線とも前方部の頂上に2箇所の明るい部分が見える（A）。赤外線カラー画像をさらに明度を下げ、コントラストを下げるとその差は明瞭で、墳長の南側にも北側と同様な明るい点の列が見える。これは、切り株の集積と考えられるが、その北側に色調の異なった平面形が台形の区画見える（図94点線部）。皮肉なことに、ナチュラルカラー画像ではより明瞭に、さらに点線の区画を抽出し、灰色部分を拡大すると（図95）、南北に延びる細い溝（中央部がやや膨らむ）状の遺構と思われるソイルマークを検出できる（図95B）。これが、主体部と考えられ、細さや形状から粘土礫主体部と考えられる。Bの主体部と考えられるソイルマークが東によっていることから、さらに1列主体部がある可能性がある。参考として、



図93 判読写真（ナチュラルカラー）

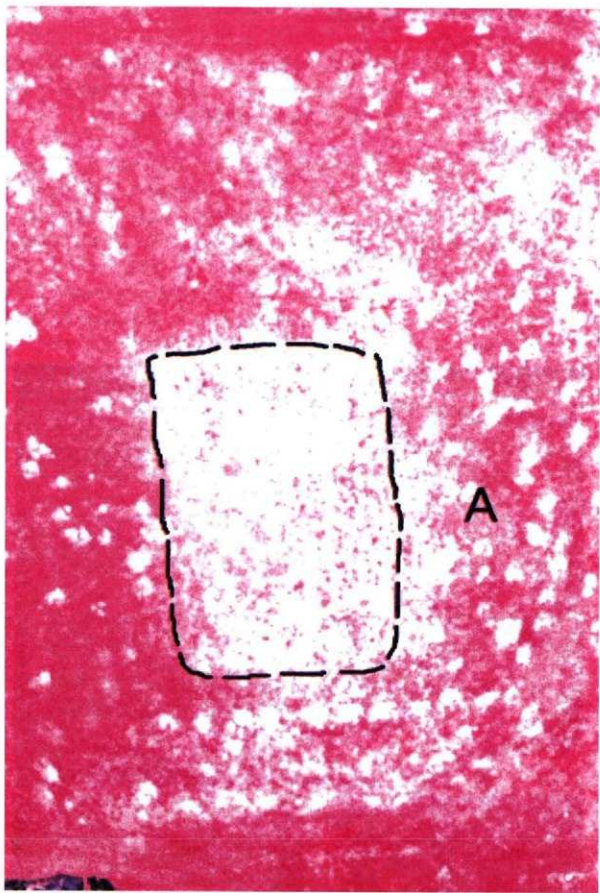


図94 判読写真

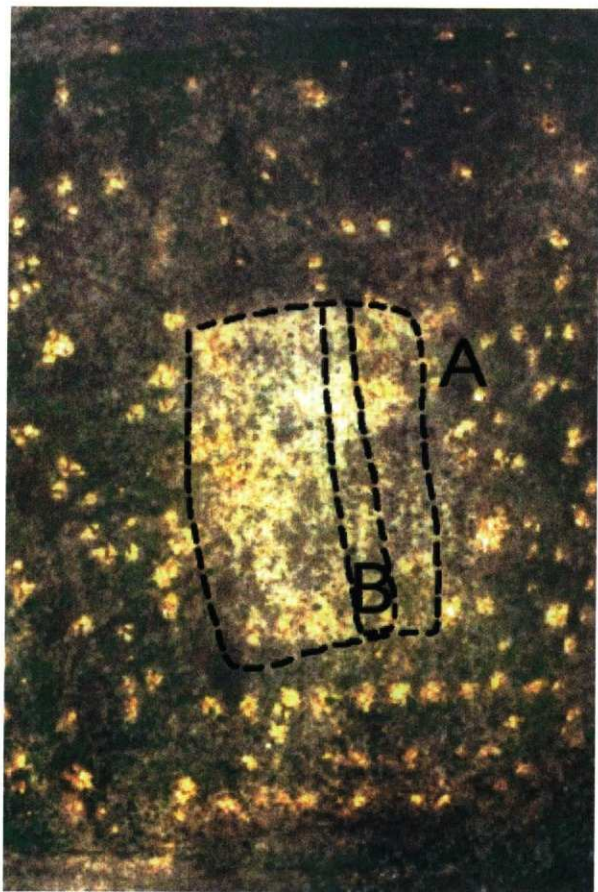


図95 判読写真



図96 埋葬施設例

島根県大戸町上野1号墳の粘土椀主体部発掘写真(図96)を掲載した。

地中レーダー探査では、主体部の位置を確認したら、主体部の長軸に直交するように、細かく(50cm間隔以下)でレーダー探査し、主体部の3次元状況を確認する必要がある。

### (3) 周濠の状態

図97に周濠と想定される部分を図示した。長い点線の部分は比較的是っきりとソイルマークとして判読できる部分で、点の連なっている部分は、はっきりとは判断できない部分である。

Bは水分の含湿度が低く、乾いた状態であるが墳丘との境に溝状の暗い部分が見られる。再度地中レーダーで探査すべき位置である。みかたによっては、中方双方墳のように見える。道路に沿って何本かのレーダー探査線が必要になるであろう。

C・Dはいずれも、前方部の角がよく見える。北側の2つの角に比べても明瞭である。

Eは現地形に段差があり、西側は北側へ上がるように見えるが、ソイルマークに暗い部分があったので、現状のような推定線を引いた。この部分も探査すべきである。

F・Gに関しては、造り出しと思われるソイルマークが検出された。この部分も細かく探査すべきと考えられる。Hは表面の盛土等があるようで、周濠の位置が確定できなかった。



図97 探査判読全体図

(4) まとめ

赤外線カラー空中写真判読から、ある程度桜井古墳の主体部、周溝、造り出しについて興味のある示唆が得られた。今後は、本データを基に地中レーダー探査を試み、より確実な情報としたい。地中レーダーのデータが出来上がった時点で、再度赤外線カラー・ナチュラルカラーデータの比較検討を加えれば確実な地下の情報がわかると思われる。

## 第2節 地中レーダー探査

### 第1項 はじめに

原町市桜井古墳については先に赤外線カラー航空写真・ナチュラルカラー航空写真による写真判読を試み、主体部の存在・周溝の存在等を確認した(図98~101)。その結果、以下のことが想定された。



図98 ナチュラルカラー写真

## 1) 主体部

1基以上存在し、ほぼ南北に主体部が存在する。東側の主体部は大きく、西側は東側より不明瞭であるが、主体部と考えられるソイルマークが確認された。西側の主体部は東側より、 $7\sim 10^\circ$  主軸を東側に振っているようである。

主体部堅穴と思われるソイルマークが確認された。大きさは南北16m、東西11mと想定される。ちょうどこの部分は後方部でも1段高くなっており、周辺は後方部平坦面の「犬走り」のように低くなっている。こうした現象は桜井古墳のレーダー探査を実施した翌週に富山県婦中町勅使塚古墳（前方後方墳）のレーダー探査を実施する機会に恵まれたが、勅使塚古墳でも同様の現象が指摘されている。



図99 ナチュラルカラー写真

2) 後方部東側裾部

周溝が一部途切れ、突出部（あるいは別区）の存在が予想されたので、レーダー探査をかけることにした。

3) 周溝部

周溝が全周しているかどうかを確認するために、レーダー探査を実施した。

4) その他

前方部と後方部とのくびれ部に張出し部の存在が予想されたので、レーダー探査をかけることにした。

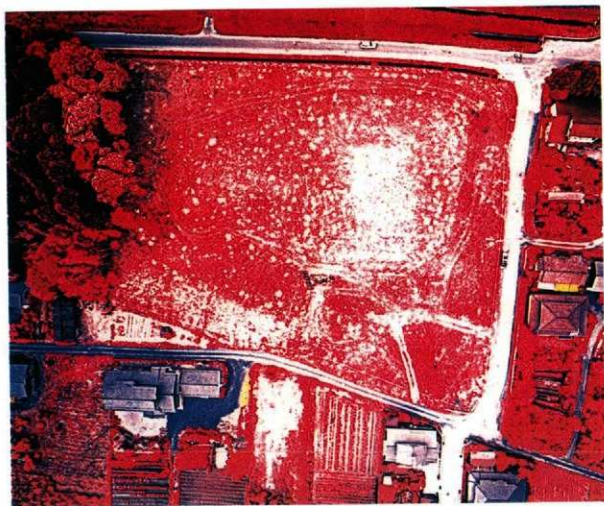


図100 赤外線カラー写真



## 第2項 作業報告

作業は以下の構成でおこなった。

主任技師	アジア航測株式会社	システム考古学	部長	学芸員	宮塚義人
現場代理人	アジア航測株式会社	システム考古学	技師	測量士	高橋保弘

<現地調査>平成10年7月14日～16日

調査主任	アジア航測株式会社	システム考古学	技術部長	学芸員	工藤利幸
現場代理人	アジア航測株式会社	システム考古学	技師	測量士	高橋保弘
			技師	測量士	片岡 悟

<解析>

主任技師	アジア航測株式会社	システム考古学	部長	学芸員	宮塚義人
	アジア航測株式会社	システム考古学	技術部長	学芸員	工藤利幸
	アジア航測株式会社	システム考古学	技師	測量士	高橋保弘

<報告書作成>

主任技師	アジア航測株式会社	システム考古学	部長	学芸員	宮塚義人
	アジア航測株式会社	システム考古学	技師	測量士	高橋保弘

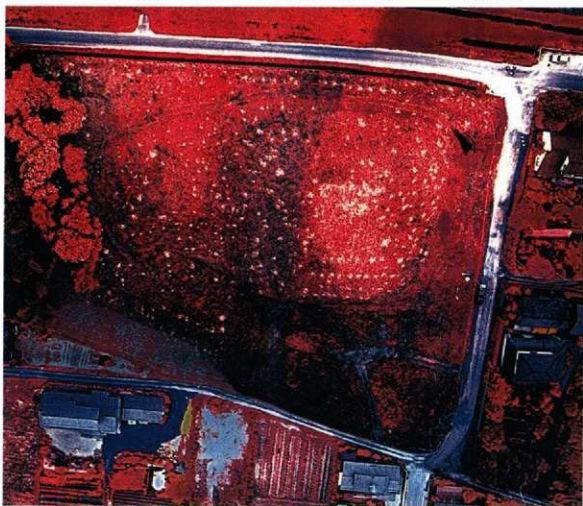


図101 赤外線カラー写真

### 第3項 地中レーダー探査

ナチュラルカラー航空写真・赤外線カラー航空写真の解析結果を基に、地中レーダー探査を実施した。

使用した地中レーダー探査機の諸元は、以下の通りである。

名 称：S I R - 2型地中レーダー探査機（アメリカ製）

使用アンテナ：（1）400MHz（可探深度0～5m）

（2）200MHz（可探深度0～20m）

探査深度 最大32スキャン/秒・200スキャン/m・平均10スキャン/秒

探査線は計79本設定した（図102）探査した全データは現地でプリントアウトし、探査データとして一括した（別添探査データ参照）。探査データは全て左から右方向に記録されており、最初のデータシートにある、深度目盛りはおおよその深度を示す。

また、探査位置は原町市教育委員会から提供いただいた。地形測量図にある測量基準杭から略測して位置を決めた。

以下、赤外線カラー航空写真等で判読した地点を中心に地中レーダー探査データを解析してみたい。

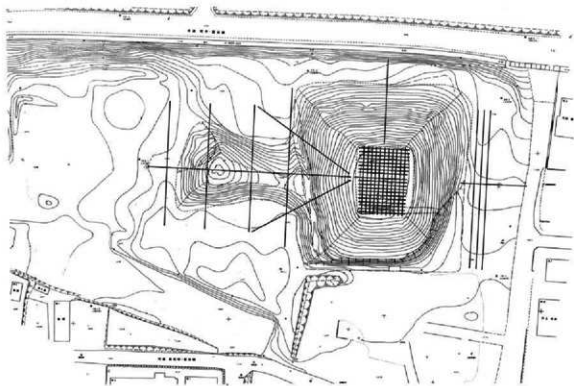


図102 探査箇所位置図

## (1) 埋葬施設

埋葬施設では赤外線カラーから、埋葬施設が南北方向に位置すると想定された。確実に捉えるため南北方向(16本)、東西方向(11本)各1mピッチで探査線を設定した。断面データ上に細い縦線が存在するが、現地にてメジャーを張り、1mピッチでマークしたラインである。また、探査線上の標高を地形図から読み取り、探査線上に傾斜をつけている。

想定したとおり、埋葬施設の主軸は南北方向に走っており、探査データでは2箇所の埋葬施設と思われる断面形状が確認できた。特徴的な断面を図103・104に示す。

図103(探査ライン39)では探査開始地点から緩やかに傾斜している墓塚の断面と思われる傾斜が確認される。西側では強い反応が壁際にあり、あるいはこの部分のみ石を積んでいる可能性が考えられる。墓塚の深さは約1.8mと考えられる。探査開始線から3m、5.5mのところに、主体部と考えられる断面形状が墓塚の底面から掘り込んだような形で確認される。西側の埋葬施設の西端はやや強い反応が見られ、厚く粘土が堆積していると考えられる。その両側に60~80cmの粘土が詰められている様である。上部の粘土は確認されなかったが、内部に崩落し反応値が低いと推定され、と考えられる。極端な盗掘坑と考えられる反応は見られない。図104(探査ライン)では図103で確認した西側の埋葬施設が探査開始地点から約4.5mの位置に確認され、西側の埋葬施設が東側の埋葬施設とは並行に存在せず、やや主軸を東に振っていることが伺える。西側の埋葬施設は右下に強い反応を示す地点があり、この図から

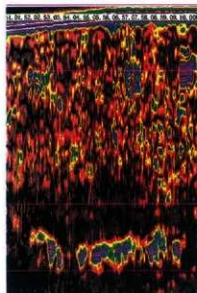


図103 東側埋葬施設探査データ

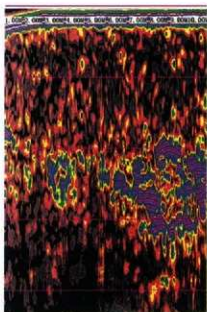


図104 西側埋葬施設探査データ

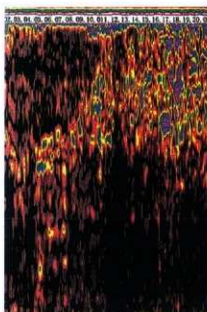


図105 後方部東側掘部探査データ

は石室の断面のように見えるが、ほかの断面ではこのような石室状に見えないので、盛土をした際、礫を多く含む土砂をこの部分に堆積したと考えられる。この断面では、墓竈は2.0mの深さがあり墓底底面が北に深く傾斜していることが考えられる。

### (2) 後方部東側裾部

南北に3本、東西に1本の探査線を設定した。南北に走る探査線は同様な断面形状を見せる。代表的な探査データを図105(探査ライン55)に示す。断面データ上細い縦線が存在するが、現地にメジャーを張り1mピッチでマークしたラインである。

探査開始地点から11m北上がった地点で周溝は立ち上がっており、北側には周溝と考えられる落ち込みは認められない。探査ライン57では、ほぼ平坦な断面が観察された。周溝の深さは約2mあると考えられ、かつて原町市教育委員会が発掘調査したデータとは異なる。

(原町市教育委員会1985)

地表面1.2mの地点に、堆積層がわずかに異なる層界面が見られるが、2m地点のものが北側では大きく立ち上がっており、周溝の立ち上がりと考えられるので、試掘調査にあたっては留意されたい部分である。

#### <参考文献>

玉川一郎1985「国指定史跡板井古墳範囲確認調査報告書」原町市教育委員会

### (3) 周溝部

周溝部かつて、住宅が建てられ攪乱されていると考えられる後方部南側を除いて前方部に4ライン(探査ライン68~75)、後方部に1ライン(探査ライン60)を設定し、探査した。断面データ上の細い縦線は現地にメジャーを張り、1mピッチでマークしたラインである。また、探査線上の標高を地形図から読み取り探査線に傾斜をつけている。

図106(探査ライン69)は前方部の外側

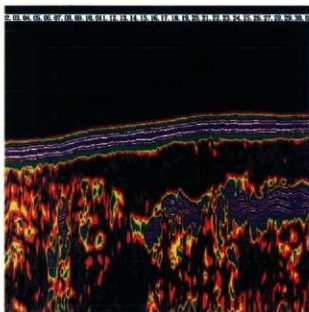


図106 周溝部探査データ(1)

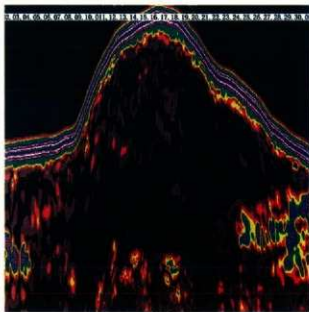


図107 周溝部探査データ(2)

を南北に探査した結果である。探査開始地点から3～4 m北側に周溝と考えられる落ち込みが確認された。周溝の深さは約1 mあり、前述したように原町市教育委員会が1985年に調査したデータよりは深い。また、周溝の底面は平坦ではなく、凹凸が見られるように見えるが、北半分は礫層に覆われており、そのリフレクション（干渉波）があるものと考えられる。

探査開始地点から14 m地点で、礫層を埋めるようにやや反射の高い反応が見られるので、周溝の底面はこの反応の上面と考えられる。周溝の底面は緩やかに傾斜しているかもしれないが、おおむね平坦であると考えられる。

図107（探査ライン70）は前方部の墳頂からやや西側を探査したものである。南側には周溝が認められるが北側には確認できなかった。周溝の幅は4～5 m、深さ1 m前後である。探査データは後方部主体部とは大きく異なり、粘土礫・埋葬施設と考えられるような反応は認められない。同様なことは、以下のデータにも見られるので、前方部に埋葬施設は存在しないと考えられる。

図108（探査ライン73）は前方部のほぼ中間を探査したものである。南北に周溝と考えられる落ち込みが確認されたが、覆土はまったく異なった反応を示す。南側は反応が低く、反対に北側は高い反応を示す。おそらく北側の周溝の覆土は礫・粘土等が充填していると思われ、南側は黒色土で埋

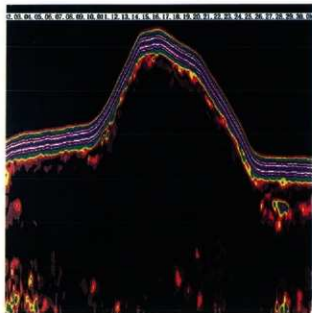


図108 周溝部探査データ（3）

まっていると考えられる。また、南側に周溝は現在の前方部裾部から、1～2 m南から始まっており、前方部南側が削平されたことが伺える。周溝は北側で5～6 m、深さ1.2 m、南側で6～7 m深さ1.6 m前後と考えられる。

図109（探査ライン74）は前方部と後方部の中間にあたり、測量図から平面形は、後方が北側に傾斜した斜面に築かれているので、北側の辺が長い台形状に見える。この

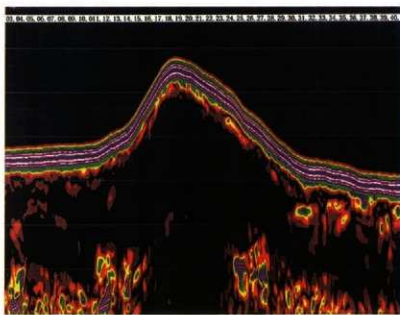


図109 周溝部探査データ（4）

ため、どのように周溝が廻っていたのかを確認するために、柵部ざりざりの位置に探査線を設けた。周溝は南側と北側にも確認された。探査ライン73同様、北側と南側では覆土が異なり、また南側は少し削平されているようである。

図110（探査ライン60）は後方部の探査データである。周溝は認められず、盛土が竊状に堆積していることが分かる。また、わずかではあるが、段築成と考えられる段差が2段確認された。

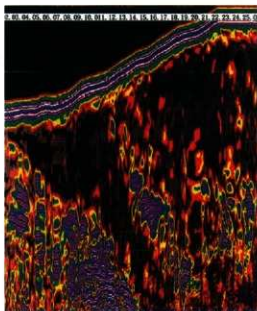


図110 周溝部探査データ（5）

#### 4) くびれ部

赤外線カラー航空写真判読から、くびれ部に張出状のソイルマークが確認されたので、確認のために探査した。図111・112（探査ライン77）が探査データである（高低差があるため図を2分してある）現地表面が谷状に入ぐられているため段状に見えるのかもしれないが、段差は存在するようである。また、墳丘裾部から、直接周溝へとは移行せず、5mほどの間隔を置いて、周溝に繋がるようであり、この部分も段築と考えられる。

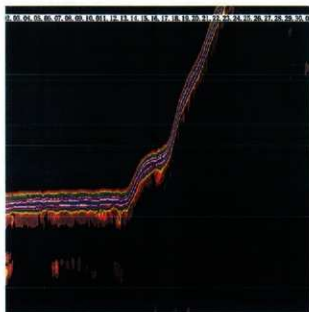


図111 くびれ部探査データ（1）

## 第4項 探査結果

探査結果と赤外線カラー航空写真・ナチュラルカラー航空写真を統合し、図113にまとめた。

### (1) 埋葬施設

後方部墳頂に南北16m、東西11mの墓塚が掘り込まれているようである。壁は緩やかに傾斜し、深さは1.6m～2.0mを測る。底面は緩やかに北側に傾斜していると考えられる。主体部が存在すると考えられる聖穴の上部は2基存在すると考えられる。墓塚底面から掘り込まれ、周囲に粘土を詰めていると考えられ、東側の埋葬施設は主軸方向がほぼ南北を示し、西側の埋葬施設はわずかに主軸を東に振るようである。主体部の幅は80cm前後、その両側に粘土が60～80cmの幅で詰められていると考えられる。

### (2) 後方部張り出し部

幅広く周溝は見られない。張り出し部というより段丘端部の盛り上がり高い部分を残していると考えられる。

### (3) 周溝部

全周はしていないようである。前方部両端、後方部北側は明瞭な周溝は認められなかった。後方部北側は段丘崖にあたり崩落したか、道路建設の際に破壊された可能性も高い。

後方部北東部は北に向かって傾斜しており、周溝が認められないが、わずかに地表面は窪んでおり、赤外線カラー航空写真でも暗く写っている。浅い周溝があった可能性は考えられるが今回の調査でははっきりと確認できなかった。

### (4) その他

前方部と後方部の間に張り出し部が存在すると考えられたが、はっきりとした痕跡は捉えられなかった。ただ、北側のくびれ部には2段の段差があることが確認された。

他に、探査ライン60でわずかではあるが、後方部北側で前述した墳丘頂部の平坦面を除いて2段の段差が確認された。地形を見ると東側と南側では1段の段差しかないようである。北側の斜面が長いので、このような結果になるのかもしれない。同様に、傾斜した斜面上に築造された古墳であるため、後方部の北側辺が長い、台形に近い平面形を取るものと思われる。

(アジア航測株式会社 宮塚・高橋)

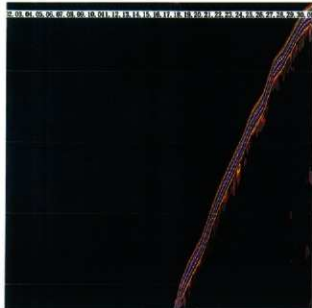


図112 くびれ部探査データ(2)



図113 探査箇所位置図



## 第5章 ま と め

今回の桜井古墳の発掘調査は、1985年に行われた範囲確認調査とは大きく異なり、史跡整備にともない桜井古墳の全体の姿を再現するために墳丘並びに周溝の構造を解明するための実施されたもので、東北地方における前期の大型墳の様相を明らかにするという点で大きな意義をもつものであると考えている。また、調査は発掘調査に限らず物理探査を行い非接触手法で桜井古墳に関連する諸施設に対して興味深い知見を得ることができたため、第4章ではこれらの調査成果についてまとめておく。

### 第1節 墳丘構造

ここでは、発掘調査によって改めて確認された桜井古墳の墳丘についてまとめておく。

これまでの桜井古墳調査は2度の測量調査と1度の範囲確認調査が行われ、桜井古墳の墳丘規模並びに墳丘形態について検討がなされてきた。

最初に桜井古墳の測量調査を実施した大塚初重氏は墳丘主軸長75m、後方部長40m、後方部幅47m、後方部高7m、前方部長35m、前方部前端幅27m、前方部高4.5mという数値を導き出している。2次調査を担当した玉川一郎氏は、未指定範囲に調査区を設け考古学的手法を用いてその時点で可能な限りの墳丘の解明を行っている。玉川氏はそれまでの大塚氏の測量数値を若干補正する、墳丘主軸長72m・前方部長30m・前方部前端幅23m・前方部高3m・後方部長42m・後方部幅45m、後方部高6.35mという計測値を提示し、以後桜井古墳に関する墳丘の計測値はこの調査のものが使用されていくこととなる。また氏は、報文の中で主軸線に直交して長軸を有する長方形の後方部に、後方部幅の約半の幅の狭くかつ低い前方部が主軸に対して北に偏して取り付いた前方後方墳と評価しながらも、本来墳丘部の正確な規模は墳麓線によって確定すべきであり、今回の調査のように指定地外の部分調査に結果から導き出される規模はあくまでも推定値の域をでないものであると付け加えている。

(単位 m)

	墳丘主軸長	後方部長	後方部幅	後方部高	前方部長	前方部前端幅	前方部高
1945(大塚)	75	40	47	7	35	27	4.5
1985(玉川)	72	42	45	6.35	30	23	3
2002(荒)	74.5	45	47	6.8	29.5	30	3

墳丘測量値比較表

さて、今回の発掘調査は史跡整備という観点で実施されたことにより、これまで調査が許されていなかった史跡範囲内部における調査が許され、墳丘規模や立体構造を解明するためのポイントとなる部分が重点的に調査され、墳丘規模並びに構造が解明されたと考えている。

調査によって得られた知見をもって墳丘規模並びに立体構造を整理すると、後方部は14・15・18トレンチで黄色ロームの地山を削り出すことで形成された明瞭な後方部コーナーが検出

され、11トレンチでは黄色ロームの下層に位置する砂礫層を削りだした北東コーナーが検出された。この後方部の4つのコーナーを結んだ線を仮に後方部墳丘裾の墳端線として考えると11・14・15・18トレンチの各トレンチ間に位置する12・13・21・22・23トレンチで認識された墳端線並びに周溝内周ラインと一致することから、各後方部コーナーを結んだラインに後方部墳端線を求めることができる。

後方部の墳丘立体構造は、後方部北側斜面において良好な墳丘斜面が確認されている。後方部北斜面の立体構造を簡単にまとめると、墳頂平坦面は標高18.00m付近に位置し墳頂平坦面が墳丘斜面に変わる変換線は標高17.80m付近に位置する。墳丘斜面はこの傾斜変換線を境に一定の角度を有する第1斜面が始まる。第1斜面は標高16.00m付近に位置する傾斜変換線を境に傾斜角度は緩くなり上段平坦面が形成される。上段平坦面は約2mの幅を計測し標高15.48mの等高線付近まで緩やかに降る。上段平坦面は標高15.40mの傾斜変換線に到達すると再度墳丘の傾斜が始まり第2斜面が形成される。第2斜面も第1斜面とはほぼ同じ角度を有し、標高13.00mの下段平坦面を形成する傾斜変換線へと到達する。下段平坦面は旧表土層より低い場所に位置しており、約1.8mの幅の平坦部を形成する。下段平坦面は標高12.00m付近に位置する傾斜変換線から第3斜面へと移行し周溝底面へと至る。

他の調査区では22トレンチほど明瞭な墳丘面は確認されていないが、後方部東斜面の23トレンチでは標高15.60m付近で上段平坦面が確認され、11・15・18トレンチでは標高11.60m付近で下段平坦面が確認されている。このように墳丘北斜面、東斜面には墳丘斜面の2箇所平坦面が存在していたと考えることができるが、後方部西斜面並びに南斜面では問題が残っている。

後方部西斜面については、上段平坦面が存在すると思われる場所には、棺の埋葬にかかる墓道が位置しており、明瞭な平坦面の存在を認められない。また下段平坦面付近にはくびれ部を横断する後世の掘削が行われており、下段平坦面については確実な状態での検出はできていない。後方部西斜面の墳丘傾斜角は後方部北・東・南の各面と異なっており、後方部西斜面に存在する墓道との関連によって墳丘傾斜角度に差が生じているものと想定される。

また後方部南斜面についても、墳丘斜面の平坦部を検出することはできていない。下段平坦面は後世の掘削により削平されてしまっていると考えられるが、残存状況が良好と思われた上段平坦面付近では平坦面の存在を示す知見を得ることはできなかった。後方部南斜面の平坦面の存在については、この箇所の墳丘盛土が砂質の強いため墳丘盛土の流出が激しかったものと想定され、またこの場所に広がる地下茎によって墳丘面の破壊が想定されが、いずれにせよ、後方部南斜面の確実な平坦面を検出することができなかったことは墳丘の構造を考える上で大きな課題が残ったといえよう。

後方部をまとめると、墳頂平坦面は標高18.00m付近に位置し南北18m×東西14.5mの墳丘主軸長に対して直交する長方形を呈する。また墳頂平坦面の側辺の傾斜変換線より約1mほど内側へ入った部分には土壇状の高まりが見られるのが特徴である。第1斜面は墳頂平坦面側辺の傾斜変換線から上段平坦面の傾斜変換線までで高さ1.8m。上段平坦面は第1斜面終了の傾斜変換線から第2斜面開始地点で幅2m。第2斜面は上段平坦面が終了する変換線から下段平

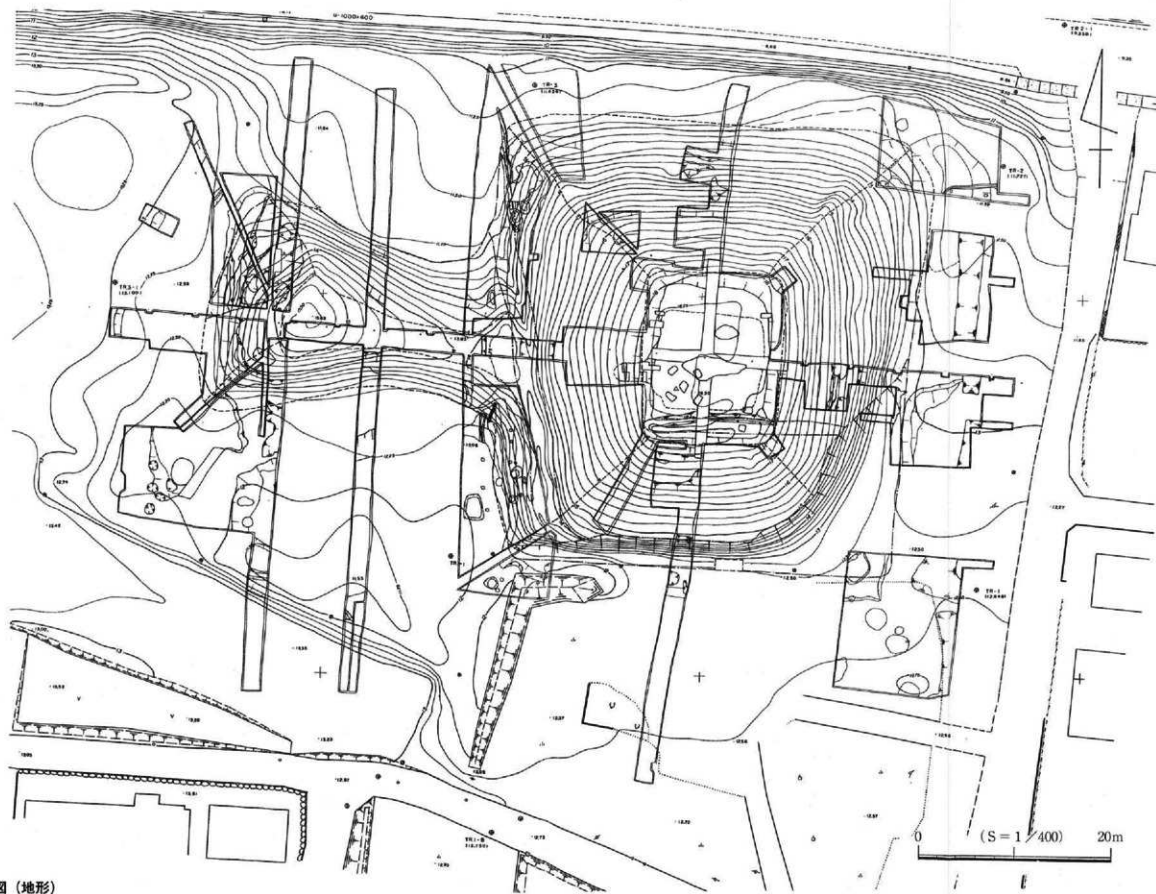


图114 调查全体图 (地形)

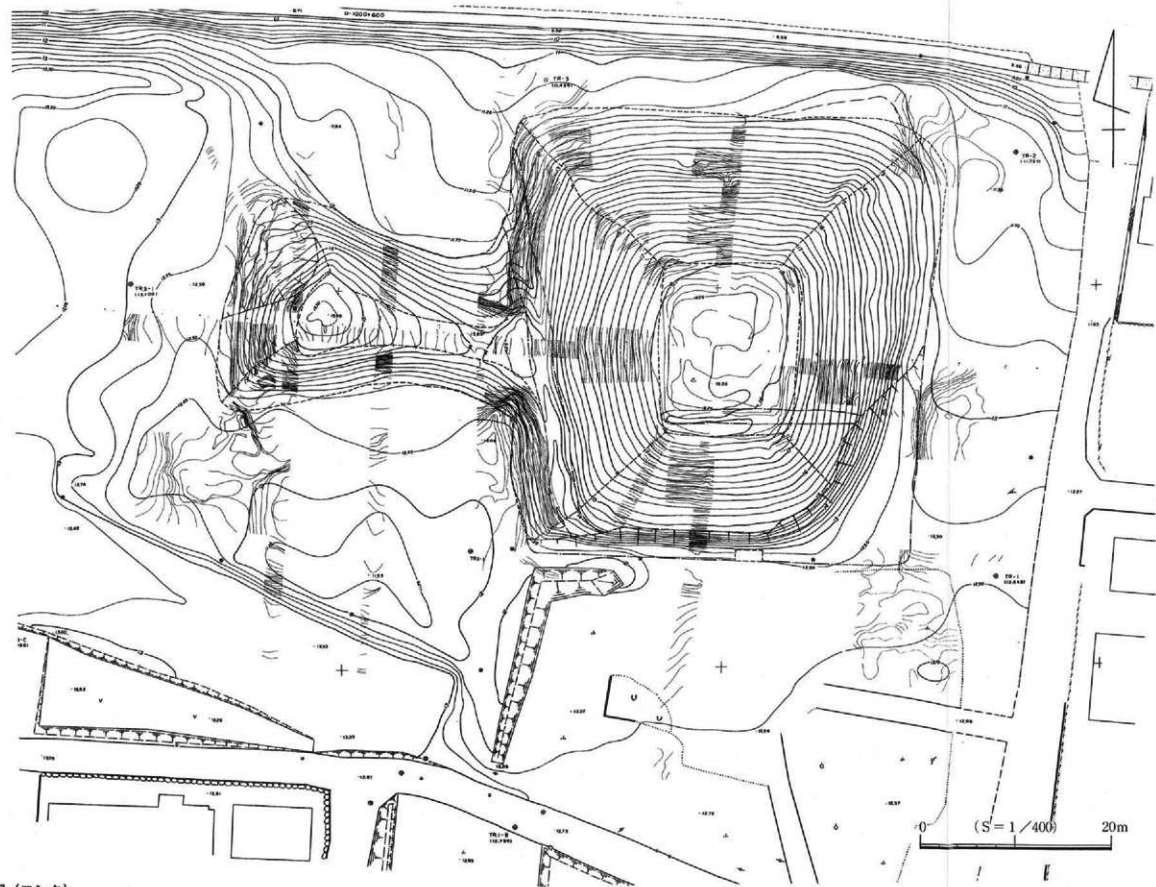


図115 調査全体図 (コンタ)

坦面が開始する変換線の比高差から高さ3.40m。下段平坦面は第2斜面の終了地点から第3斜面の開始地点まで幅1.8m。第3斜面は下段平坦面から周溝内周の下端変換線で計測し高さ1.6mとすることができ、後方部高は6.8mと求めることができる。

前方部については、これまでの調査で桜井古墳の前方部は小さく未発達なものであり、かつ墳丘主軸線に対して北に偏して取り付いていることが特徴とされてきたが、このことは前方部南斜面の大規模な掘削に原因があると考えられる。

さて、掘削を受ける以前の前方部の状態については、前方部北斜面に設けた19トレンチの状況が参考となる。19トレンチで確認された前方部の構造は標高14.00m付近に位置する傾斜変換線を境に墳頂平坦面と墳丘斜面が区別される。墳丘の斜面は大きく変化することなく標高12.20m付近に位置する傾斜変換線に到達する。この傾斜変換線を境に斜面の傾斜角度は一段と強くなり周溝底面の傾斜変換線に至る。

このように前方部墳丘斜面には後方部のような平坦面は存在せず、無段の前方部であるといえる。墳丘斜面で認められた傾斜変換線は墳丘部が周溝部へと移行する際の変換線として捉えられることから、墳丘部と周溝部は一連の斜面で構成されるが周溝部では傾斜角度が強くなると判断される。この19トレンチの状況をもとに前方部南側の墳丘をみると、16トレンチと20トレンチで周溝の内周が検出されており、このラインを結んだ線を墳丘裾の墳端線であると考えられると、前方部南側については墳丘の約半が掘削されたと考えられることができる。

前方部前端は16トレンチ並びに17トレンチで調査したが、両前端とも後世の掘削を受けており、特に16トレンチでは周溝部の掘削が浅くなり、墳端線の確定はできない状況にある。一方17トレンチでは掘削を免れた前方部前端が検出されたことにより、前方部前端の平坦面を知る手がかりが得られている。17トレンチで検出された前方部前端の形状は、くびれ部から直線的に延びる墳丘斜面が前方部前端に到達すると緩やかにカーブし前方部西側斜面を形成する。前方部前端ラインは後方部南北ラインと平行の関係にある。

この前方部北側の墳丘状況をもとに削平された前方部南側の墳丘構造について考えてみると、前方部南側の墳端線は、16・19トレンチで検出された周溝の内周ラインに求めることができる。この内周ラインとくびれ部南側の墳端線を結んだラインを前方部南側の墳端線として設定する。前方部南側前端については、上記の前方部南側墳端線と前方部前端線が交わる付近に求めることができるが、17トレンチで検出された前方部の突端は鋭角ではなく丸みを帯びてことから、前方部南側前端についても17トレンチの状況を考慮しなければならないであろう。

前方部の構造をまとめると前方部側面はくびれ部から直線的に前方部前端へと向かい、古い時期の古墳に見られるいわゆる「バチ形」と呈するものではない。前方部コーナーは丸く、前方部前端の墳端線は後方部南北墳端線と平行関係にある。このような後方部並びに前方部の墳丘の検討から、桜井古墳の墳丘規模は後方部北東コーナーと南東コーナーを結んだラインで計測すると後方部幅48mとなる。後方部長は後方部北東コーナーから北西コーナーで45mを計測する。前方部長はくびれ部の最深部から前方部前端までで29.5mを計測する。前方部前端幅は両前端間で計測し30mとすることができ、後方部長に前方部長を加えた墳丘主軸長は74.5mと

なる。また後方部高は周溝の内周下端の変換線から後方部墳頂平坦面の傾斜変換線までが6.8mを計測し、前方部前端の墳頂平坦面から周溝内周の下端で計測すると前方部高は3mを計測する。

墳丘の平面形は後方部幅（南北辺）の中央と前方部前端ラインの中央と結んだ線に墳丘主軸線を求めると、墳丘主軸線を中心にはほぼ左右対称に近い墳丘とすることができる。

さて桜井古墳は墳丘主軸長74.5mを計測する前方後方墳であることが確定となった。この数値は、先の調査で玉川氏が指摘した本来墳丘部の正確な規模は墳麓線によって確定すべきであるという課題をクリアしたものである。発掘調査では墳丘部の南側一帯に大きな掘削が行われ、築造当時の墳丘は著しく損なわれていたことが明らかになったわけであるが、東北地方で墳丘主軸長70mを超える古墳は17基確認されており、この中で前方後円墳に限れば第3位の墳丘規模を有する古墳であることが明らかとなった。このことは墳丘の大規模な掘削を考慮しても、桜井古墳の歴史的な価値を損なうものではない。

また、桜井古墳の墳丘形態が、これまで指摘されてきた墳丘主軸線をはさんで左右非対称の墳丘形態ではなく、主軸線をはさんではほぼ左右対称の墳丘を有するものであるという発見は、桜井古墳を考える上で新たな知見を提示できたものと評価される。

(単位 m)

No.	墳名	規模	墳形	No.	墳名	規模	墳形
1	雷神山古墳	168	前方後円墳	11	千塚山古墳	85	前方後円墳
2	亀ヶ森古墳	127	前方後円墳	12	堂ヶ作山古墳	84	前方後円墳
3	玉山1号墳	118	前方後円墳	13	大安場古墳	84	前方後方墳
4	会津大塚山古墳	114	前方後円墳	14	桜井古墳	74.5	前方後方墳
5	遠見塚古墳	110	前方後円墳	15	天神森古墳	74	前方後方墳
6	青塚古墳	100	前方後円墳	16	宝領塚古墳	70	前方後円墳
7	稲荷森古墳	96	前方後円墳	17	吉ノ内古墳	70	前方後円墳
8	愛宕塚古墳	90	前方後円墳	18	国見八幡塚古墳	68	前方後円墳
9	舟森山古墳	90	前方後方墳	19	名取葉師堂古墳	67	前方後円墳
10	名取大塚古墳	90	前方後円墳	20	京銭塚古墳	66	前方後円墳

陸奥南部墳丘規模比較一覧



图116 填丘復元图

## 第2節 埋葬施設・墓道

今回の調査では、墳丘構造や周溝の範囲を確認することを第1の目的としたため、棺の埋葬にかかるとの施設の調査までは行っていないが、墳丘面を確認した時点で得られた知見から桜井古墳に関連する埋葬施設について想定されることをまとめておく。

まず、後方部墳頂平坦面において、明らかに墳丘盛土とは異なる土層による方形のプランが認められている。この方形のプランは南北10m×東西11.5mの墳丘主軸線に並行する長方形を呈しており、墳頂平坦面のほぼ中心に位置している。この方形プランは、棺の埋葬にかかるとの墓壇として位置付けられるもので、桜井古墳の墳頂平坦面には平坦面のほぼ全面に掘られた大規模な墓壇が存在していると見ることができる。

第2にこの墳頂平坦面に構築された墓壇内の2箇所に黒色土からなる楕円形のプランが検出されている。この楕円形プランを構成する黒色土は、層位的に墓壇埋土の上層に位置するもので、墓壇の埋め戻し後にできたものであることは確かである。この楕円形プランの断面はすり鉢状を呈しており、また堆積土層は自然堆積と考えられることから、墓壇埋没後の人為的埋土と見ることはできない。このような墳頂平坦面に自然に現われた落ち込みの存在は近年の古墳の発掘調査によって徐々に確認例が増えてきている。特に詳細な調査例は宮城県宮崎町大塚森古墳（夷森古墳）の調査例があげられる。大塚森古墳は宮城県大崎平野に所在する直径48mを計測する大型の円墳である。東北学院大学考古学ゼミナールによる発掘調査の結果、大塚森古墳の墳頂平坦面上に現われた楕円形の落ち込みの下層から被覆粘土を伴う粘土郭が検出されている。陥没坑は粘土郭内の割竹形木棺が朽ち空洞となった箇所、上層に位置する被覆粘土と墓壇埋土が陥没した状態で確認されている。したがって桜井古墳の墳頂平坦面に現われた2ヶ所の楕円形プランは棺が朽ちたことによって形成された棺陥没坑として捉えることができ、この陥没坑の下層に棺が位置しているものと考えられ、桜井古墳の後方部墳頂平坦面には2基の棺が安置されていると考えることができる。

ただし、陥没坑が検出された古墳の埋葬施設は上述の大塚森古墳のような被覆粘土を伴う粘土郭である場合や木棺直葬である場合があり、棺の種類まで断定することはできないが、桜井古墳で検出された陥没坑は断面がすり鉢状を呈していることや被覆粘土存在を示す知見は得られていないことから、木棺直葬の埋葬施設である可能性が高いと考えている。

第3に墓壇西辺から後方部西斜面に延びる舌状を呈する遺構が確認された。この舌状の遺構は墓壇西辺ほぼ中央部から後方部西斜面に延びており、幅4m×長さ2mを測るものである。墓壇との関係を精査したところ、墓壇との直接的な重複関係にはなく一連の遺構である可能性が高いと判断された。つまり、墳丘構築後に墓壇とともに掘削されたものと考えられ、棺の埋葬にかかるとの施設であると考えられることができる。このような墓壇の存在は、先述した宮城県大塚森古墳（夷森古墳）で良好な状態で確認されている。大塚森古墳は墳丘周囲に大規模な周溝をめぐらす、墳丘の南西付近の周溝の掘削は行われておらず、陸橋と判断される遺構を形成している。墓道はこの陸橋部から墳頂平坦面に位置する墓壇を結んだ墳丘斜面上で確認されている。墓壇内に2基の粘土郭が発見されており、墓道と判断される遺構も2基の棺に対応するよ



うに新旧2時期分が確認されていることは、棺の搬入に関する施設であると考えられている。大塚森古墳と桜井古墳とは墳丘形態が円墳と前方後方墳といった違いはあるものの、棺を搬入するための諸施設の存在や古墳祭式という原則は同じものと考えられ、桜井古墳の後方部西側で検出された墓壇から続く舌状の遺構は、大塚森古墳の墓道と同様の性格を持つものと推測され、棺の搬入に際して掘削された墓道として考えても大きな誤りではなく、墓壇と墓道の存在を明確にした好例であると評価されよう。

また、今回の調査では前方部に埋葬施設が存在している可能性が認められた。前方部における16トレンチの調査を行っていた最中に掘削部の攪乱土から緑色凝灰岩質の管玉が1点出土した。このような管玉は装飾品として用いられたものと考えられ、棺内の副葬品として出土するケースが多い遺物である。この遺物の性格から前方部に副葬品として管玉をとまう埋葬施設が存在している可能性が高い。福島県本屋敷1号墳の発掘調査では前期の前方後方墳の前方部に箱式石棺をとまう埋葬施設が確認されており、桜井古墳についても前方部に埋葬施設が存在していたとしても不思議は無い。残念ながら、桜井古墳の前方部は大きく掘削されており、埋葬施設については確認することはできなかったが、管玉に代表される豊かな副葬品を有する埋葬施設が存在していた可能性が高い。またこの付近では石室を構築していたと思われる痕跡は確認されていないことから、埋葬施設が存在していたならば木棺直葬であった可能性がある。

### 第3節 周溝・陸橋

まず、周溝の掘削の前に各調査区で検出された墳丘斜面では、斜面下部で帯状の黒色の旧表土層が検出されている。この旧表土層が確認されたことは墳丘の構築に際して周溝掘削以前に墳丘基底部の削りだしが行われていたと考えることができる。つまり周溝は墳丘基底部が構築された後に掘削されたこととなり、墳丘は基底部を削りだした際に発生した土と周溝を掘削した際に発生した土を使用して構築されたと考えられる。

桜井古墳の周囲を巡る周溝は後方部東側と前方部南側、前方部西側で明瞭な状態で検出されている。墳丘の周囲を巡る周溝は、黄色の地山口・ムを掘削し黄色ロームの下層に位置する砂礫層が露呈した時点で周溝の掘削を終了するといった共通性がうかがえる。このことは後方部北側や東側、前方部南側・西側など、周溝部の全域で認められていることから、周溝の掘削に関しては、砂礫層の掘削には大きな労力が必要とされること、墳丘盛土として適さないことの原因から掘削を停止しているものと考えられる。したがって、周溝部の底面レベルは各調査区間でばらつきが認められるが、このことは周溝の規格性というよりは桜井古墳の立地条件によるものと判断されよう。

さて、今回の調査で確認された周溝については、墳丘北側から前方部西側を巡り前方部南側前端にかけた範囲。また後方部の東側から墳丘南側を巡る前方部南側前端にかけた範囲で確認されている。前方部前端南側から前方部前端を巡る周溝は黄色ロームを掘り込み形成されており、周溝底面は砂礫層で掘削を終了している。墳丘主軸線上では幅13mを測る。この周溝外周は北側へ向かうと段丘崖へ到達し終了するため、墳丘北側を巡る周溝の外周は存在せず段丘

崖へ至っていた可能性がある。

後方部東側から墳丘の南側を巡る周溝は後方部東辺付近の23トレンチ付近では明瞭な掘り込みが見られるが、14トレンチでは周溝の掘り込みは浅くなる。後方部南側では周溝の掘り込みは深くなるものの、調査範囲の中では外周の立ち上がりは認められていない。前方部南側では20トレンチでは周溝は浅く、16トレンチ付近で更に深くなっている。16・20トレンチ付近では現存する野馬土手の下層で外周の立ち上がりが認められ、16トレンチ付近では幅15m、20トレンチでは幅19.5mの有する規模であると考えられる。また、後方部東辺中央から北側付近では砂礫層が露呈し、ほとんど周溝の掘削は認めることはできないが、これは周溝の掘削を行った結果、砂礫層が露呈したためと考えられることから、周溝掘削に関連する行為は確実に行われていると考えられる。

さて、周溝の掘削は墳丘の西側・東側・南側で行われており、砂礫層が露呈した時点で掘削を終了していることが確認されたことになるが、前方部前端南側では、墳丘盛土に適したローム層が存在しているのにもかかわらず、周溝の掘削を行っていない場所がある。このことは、この部分では意識的に周溝の掘削をおこなっていないものと評価され、いわゆる墳丘外から墳丘内にかけて道状の性格を有する陸橋として位置付けられよう。

#### 第4節 出土遺物

ここでは、発掘調査によって出土した遺物についてまとめておく。発掘調査で出土した遺物を大別すると縄文土器、弥生土器、土師器、近世陶磁器、石器、装身具に分けられる。この出土遺物のなかで最も出土量が多いのが弥生土器であり、次いで土師器の出土が多い。特に出土した土師器には桜井古墳の墳丘に供献されたと考えられる底部穿孔二重口縁壺が多く、桜井古墳に確実に伴うと考えられる土器であると考えられることができる。この底部穿孔二重口縁壺について考えることは桜井古墳の築造年代並びに歴史的位置付けを行うためには必要不可欠であると考えられるため、この桜井古墳に供献されたと考えられる底部穿孔二重口縁壺を中心にまとめる。

##### (1) 二重口縁壺・底部穿孔壺

まず、この墳丘供献土器について考える前に東北地方の土師器の編年の研究と二重口縁壺の研究について整理する。東北地方における土師器は氏家氏和典によって7型式に大別されている。氏は「東北土師器の型式分類とその編年」の中で古墳時代から平安時代までの土師器を壺釜式・南小泉式・引田式・住社式・栗閉式・国分寺下層式・表杉ノ入式の7型式に編年をおこなっている。この型式的編年は、その後の資料の増加にともないいくつかの細分案が提示されているものの、それらの研究のすべてがこの氏家氏の形式的編年の上に成り立っており、現在まで土師器研究の根幹となっているものである。

この氏家氏の形式的編年の中で古墳時代の土師器形式は壺釜式・南小泉式・引田式・住社式・栗閉式の5形式が相当する。現在のところ土師器の第I型式である壺釜式以前の様相については明確にされてなく、東北地方における土師器の成立については不明である。

さて、古墳時代の最も初めに位置付けられている土器群は「塩釜式」と呼ばれる土器群である。これらの土器群は宮城県仙台市霞の目飛行場拡張工事によって実施された南小泉遺跡出土の資料の中に南小泉式に先行する特徴を有する土器群に対して設定された。塩釜式の特徴としては、壺では口縁部中央部外側に後縁もしくは複合口縁を形成するもので、高杯・器台には脚部に凹窓をもつ。また台付甕を伴うことも特徴のひとつである。塩釜式の年代は奈良県桜井市桜井茶臼山古墳から出土した土器群との類似性を考慮しながらも、「文化伝播による速度を考慮に入れて」と付け加えた上で5世紀とされたが、1964年に行われた福島県会津若松市に所在する会津大塚山古墳の発掘調査によって、三角縁神獸鏡を含む豊かな副葬品が発見され、東北地方においても古墳時代前期に位置付けられる墳墓の存在が明らかとなった。この会津大塚山古墳の調査結果によって、以後塩釜式の年代についても古墳時代前期である4世紀まで遡ることとなる。

その後東北地方を縦断する東北新幹線建設や東北自動車道建設などの大規模開発にともなう発掘調査によって出土した土器群は土器研究の促進することとなる。塩釜式土器についても例外ではなく、宮城県大橋遺跡や宮前遺跡の発掘調査によって出土した塩釜式の一括資料が最も古い段階に位置付けられることとなり、塩釜式は丹羽氏・次山氏・辻氏によって細分案が検討されるようになる。

丹羽氏は宮城県内から出土した土器群の検討から甕体部の球形化、高杯・器台脚部の凹窓の消失、器面調整の簡素化などの型式的変遷を認め塩釜式は4段階に細分されるとした。次山淳氏はその後に出土した資料を新たに加え高杯・小型丸底壺・甕の3器種によって塩釜式を6段階に細分を行った。この研究は特定の器種の消長をもって塩釜式土器に時間軸を与えるものであり、東北地方における古墳時代前期の塩釜式土器を古墳社会全体の枠組みの中で捉えようとしたものであった。

辻秀人氏は「シンポジウム 東日本における古墳出現過程の再検討」のなかで東北地方南部全域における土器群の検討をおこなっている。この研究は東日本における各地方の土器編年を、共通した時間軸に乗せることで広域的な編年整備を図るもので、辻氏は東北地方南部という広範囲を対象とすることで、塩釜式土器は宮城県域のみならず東北地方南部全域に見られる塩釜式を含んだ編年を行っている。また辻氏の編年は従来の塩釜式土器を遡る時期を含ませた3段階8期に区分しており、辻氏のいうⅠ期は庄内式新段階、漆町編年5・6群・廻間編年Ⅱ式に相当し、Ⅱ・Ⅲ期は従来の塩釜式に相当するものとしている。

集成編年	1		2		3		4		5
赤塚	廻間2式		廻間 1・2・3・4				松河戸Ⅰ式 1・2・3・4		
田嶋	漆5・6群	漆7群	漆8群	漆9群	漆10群	漆11群	漆12群		
辻	I-1・2	II-1・2	III-I	III-2	III-3	III-4	南小泉式		
次山	1段階	2段階	3段階	4段階	5・6段階				

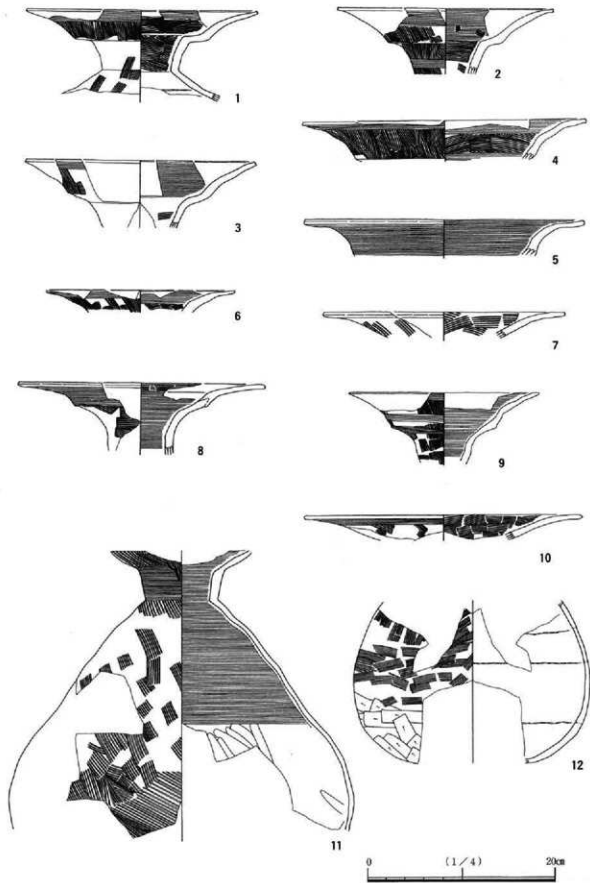


図117 二重口線壺分類 (1)

一方二重口緑壺については1949・50年の桜井茶白山古墳の発掘調査による二重口緑壺の発見から研究が行われていくこととなる。桜井茶白山古墳の調査では末永雅夫氏によって「埴輪円筒の母体」という見解が出され、小出義治氏は「桜井茶白山出土例は壺型埴輪と把握すべきで」「祭祀専用で作られたものであるが元来、実用の器から発しているため起源はこれより遡る」としている。また上田宏範氏は祖形を畿内第V様式求めながら朝顔型埴輪の祖形としての位置をおこなっている。

この時点までは主として古墳祭祀にかかる意義や埴輪の起源としての研究がなされるが、近藤義郎・春成秀爾両氏は「埴輪の起源」の中で吉備の壺から二重口緑壺への変遷を、そして朝顔埴輪への変遷過程を提示し、二重口緑壺に対する理解に一応の決着がついたことになる。

寺沢薫氏は「矢部遺跡」において畿内第V様式中(弥生後期後半)から出現する二重口緑壺は庄内2式に超大型化した点に画期を求め、庄内3式には加飾されるものが主体になりながらも一方では無文のものはそのまま布留3式まで存続すると考え、布留遺跡山口池地点(庄内3式)一箸墓(布留0式)一桜井茶白山(布留1式)一発志院(布留3式)の編年を導き出している。

比田井克仁氏は墳墓出土例を対象とした編年研究ともの集落出土例を対象とした編年の研究をもって東国の二重口緑壺は畿内系と伊勢湾系の2系統に分けられることを示し、畿内における二重口緑壺を各形式や製作手法の系譜をもって再検討を加えた野々口陽子氏は畿内第V様式系一庄内式系一布留式系という型式的変化を導き、布留式系の系譜を四国東部域に求めている。

東北では青山弘樹氏が墳墓出土の底部穿孔壺は、集落出土のものとはことなる特徴をもつものが多いことから、底部穿孔壺を集落出土の土器編年の枠組みへの編年の位置付けを行うのは適切ではないとし、墳墓から出土した二重口緑壺、底部穿孔壺の型式学的な検討を加えている。

さて、上述の研究を踏まえた上で桜井古墳から出土した底部穿孔二重口緑壺について見てみるが、検討を加えるまえに桜井古墳から出土した二重口緑壺底部穿孔壺にはいくつかの特徴を認めることができるため、前段にその特徴をもって分類を行っておく。ただし、出土した資料には口縁部から底部にかけての土器の全体が判断できる資料は出土していないため、口縁部、屈曲部、頸部、体部、底部の各部位における分類が主となることを断っておく。

口縁部 口縁部が確認される資料は口縁部は口縁端部の形状から2類に分類が可能である。基本的にはハケメ調整が主で、口縁部にはハケメ後にヨコナデを施すがまれにハケメが残っているものも見られる。ここでは口縁端部の形態によって2類に分類される。

A類：口縁端部がつまみ出しによって整形されるもの。(図117-1・2・3・4・5・6・7)

B類：口縁端部がつまみ出しが認められず、丸みを帯びるもの。(図117-8・9・10)

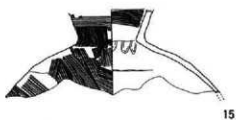
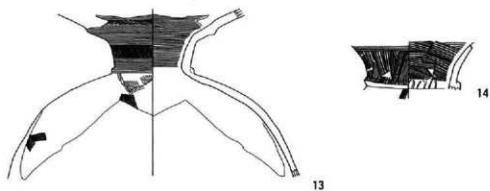
屈折部 屈折部として判断した資料は、屈折部の形状から2類に分類した。器面の調整はハケメ調整が顕著であるが、屈曲部下端にハケメの後にナデを施すものもある。

A類：1次口縁部から水平方向に延びる屈折部(擬口縁)を形成し2次口縁部に至るもの。

(図117-1・2・3)

B類：外反する1次口縁の端部に、更に強く外反する2次口縁部を乗せたもの。

(図117-3・8・9)



15

16

17



18

19



20



21



22



23



24

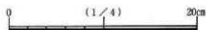


図118 二重口縁壺分類 (2)

頸部 頸部として判断した資料は頸部の頸部と体部の接合部の形状から2類に分類が可能である。器面の調整は縦方向のハケメが施される。

A類：頸部下部の体部と接する箇所突帯を有するもの。(図118-13-14)

B類：頸部下部に突帯が見られないもの。(図118-15-17-19-20)

体部 体部として判断した資料は破片資料での分類は困難であったため、ある程度接合し全体の形状が判断される資料から2類に分類した。器面の調整は基本的にはハケメ調整が施される。中にはハケメ調整後にケズリによる調整が施されるものがある。確実にミガキによる調整が行われていると判断される資料はない。

A類：体部の最大径が体部中央に位置するもの。(図118-13)

B類：体部の最大径が体部下半に位置するもの。(図117-11)

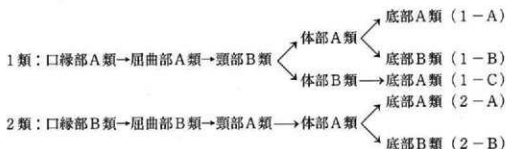
底部 底部として判断した資料は形状から大きくA類・B類に2類したが、その他形状が判然としないものをC類として総括した。資料のほとんどが焼成前穿孔によるものであるが、C類としたものの中には焼成後に打ち欠いた可能性のある破片が含まれるが、破片のため詳細については不明である。

A類：穿孔部から一端上方に立ち上り体部に至るもの。(図119-25-36)

B類：穿孔部から明瞭な屈曲点を持たないで体部に至るもの。(図119-37-41)

C類：上記以外の形状を持つものである。

上記の各部位毎の分類を接合関係にある資料をもって整理すると、図117-1・2・3では口縁部A類の口縁部つまみ出しが行われる資料には例外なく屈曲部A類が見られることがわかる。したがって同図4・5・6・7の口縁部A類の資料にも屈曲部A類が付く可能性が高い。図117-8・9の口縁部B類には屈曲部Bが見られることから、同図10には同様に屈曲部Bがつく可能性が高い。次に頸部と屈曲部の関係についてある程度接合している資料を見ると、図118-13の頸部A類の頸部下端に突帯がつくものには屈曲部B類が付いていることがわかる。一方図117-1のような突帯が見られないB類には明瞭な水平部分を形成する屈曲部A類が見られる。体部と頸部の関係については体部A類の最大径が体部中段に位置する資料には頸部A類、頸部B類の両方が見られ、体部B類の最大径が体部下半に位置するものには頸部B類が見られる。体部と底部の関係では底部A類には体部A・B類の両方が見られ、底部B類には体部A類が見られる。上記資料のある程度各部位が接合している資料によって検討された分類を図にまとめたのが下記の図になる。



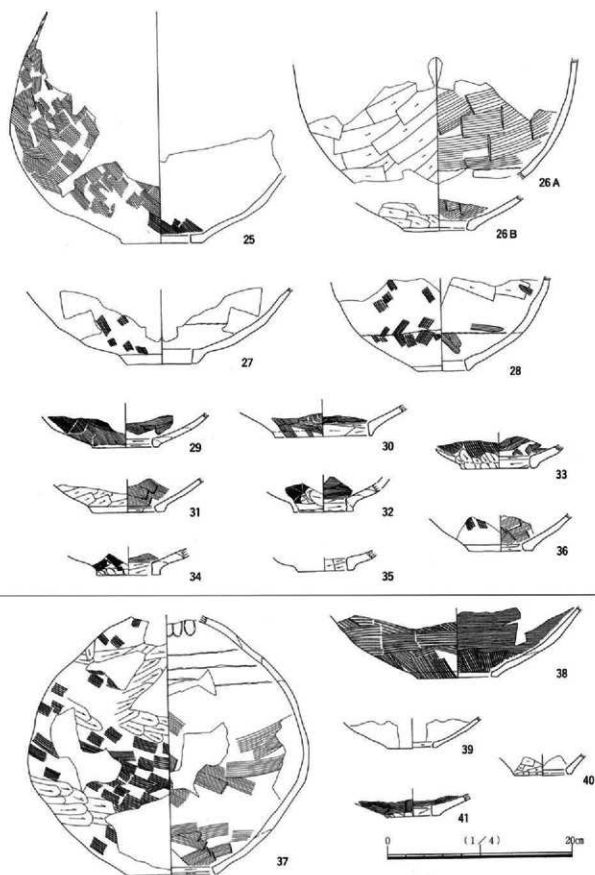


図119 二重口線壺分類 (3)



このことから、桜井古墳に供献された底部穿孔壺もしくは二重口縁壺には大きく5つのタイプに分けることができたわけだが、次に各タイプについて詳細に見てみるとする。

まず1類は口縁部A類の口縁端部はつまみ出しが顕著に認められる資料である。焼成前に穿孔された底部には一旦直立してから体部へ移行するものと、大きな屈曲点を持たないままスムーズに体部へ移行するものが見られる。体部は最大径を中央付近に有するものと、下段に位置するものが見られる。頸部は短く直線的に外傾しながら上方に向かって開く。頸部の上端には水平方向に延びる屈曲部（擬口縁）が見られ、その上に強く外反する口縁部が乗るとまとめられる。器面の調整はハケ調整が主である。

この1類の特徴はまず口縁端部に見られるつまみだし技法と、底部の焼成前穿孔である。また体部最大径を中央より下に移行した下膨れの1-C類の形状も大きな特徴である。口縁端部につまみ出し技法が見られる例は意外と多く、また古墳時代前期を通じて見ることのできる技法のようである。古くは愛知県西上免遺跡SX01出土例・長野県弘法山古墳出土例・群馬県貝沢町柳1号墳出土例・神奈川県南原B2号墳出土例・石川県宿東山1号墳出土例・福島県宮東1号墳出土例など各地で最も古い時期（辻編年Ⅱ-1・Ⅱ-2段階；集成編年1期・2期前半）に築造されたと考えられる墳墓から出土した二重口縁壺のほとんどに口縁端部つまみ出しを見ることができる。また新しい時期（辻編年Ⅲ-2・Ⅲ-3；集成編年3期・4期）では富山県関野1号墳出土例や三重県深長古墳出土例などでもつまみ出し技法が認められ、古墳時代前期全般を通じて見られる技法であるといえることができる。

また底部の焼成前穿孔についても古くは栃木県駒形大塚古墳、新しくは宮城県大塚森古墳（夷森古墳）までの集成編年1期～4期（辻編年Ⅱ-1・Ⅲ-4）段階まで見られる。器面調整では器面のミガキ調整が消失しハケメ主体となるのが千葉県草刈138A（集成編年3期）から同県柏熊8号墳（集成編年5期・辻編年南小泉式）までのことである。このことから桜井古墳出土1類については口縁部つまみ出し技法・焼成前穿孔・器面ハケメ調整を考慮すると集成編年3期を中心とした時期のものであると考えられる。また、体部最大径が体部下段に位置している1-C類については、器面調整がハケメ調整であることや器形が崩れた下膨らみの体部と理解すれば3期から4期にかけての時期のものである可能性が高い。

2類は頸部A類の突帯の存在が特徴的な資料である。つまみ出しを行わない口縁部から大きく外反する頸部と口縁部が見られる。体部の最大径は体部中央に求めており、底部は焼成前穿孔である。器面の調整は体部から口縁部にかけて範囲に顕著なハケ調整を施し、一部にはケズリが施される。口縁部調整にはヨコナデが施される。

まず、最も特徴的な頸部下端に位置する突帯についてであるが、東日本を見渡して見るとさほど資料の類例は多くない。最も古い時期のものは集成編年1期（辻編年Ⅱ-1・2）の千葉県白井南古墳に見られる。以降石川県宇気塚越1号墳（集成編年2期）・群馬県元島名将軍塚古墳（集成編年1期～2期）・栃木県原受宕塚古墳（集成編年2期）・福島県堂ヶ作山古墳（集成編年2期）・栃木県那須八幡塚古墳（集成編年3期）・埼玉県源訪山29号墳（集積編年3～4期）まで各時期を通じて見ることができる。また焼成前穿孔は集成編年1期から4期に

見られ、器面調整がハケメを中心としておりミガキ調整を施さない点を考慮すると、1類同様に集成編年3期（辻編年Ⅲ-2・Ⅲ-3期）を中心とする時期であると考えられる。

このように、桜井古墳から出土した底部穿孔壺・二重口縁壺を見ると、その特徴の大部分は古墳時代前期（塩釜式）の全般に見られるもので、底部には焼成前の穿孔が見られることからすでに墳丘に供献するために作られたもので、本来の壺としての機能を失い儀器化が進んだものであることは確実である。また土器に見られる特徴は集成編年3期を中心に見られるものとまとめることができることから、桜井古墳から出土した1類・2類ともに集成編年3期を中心とした時期のものであると考えておく。

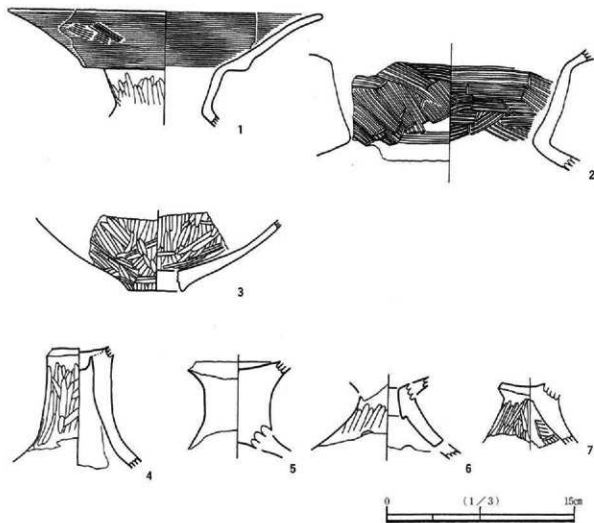


図120 上洗佐支群7号墳出土遺物

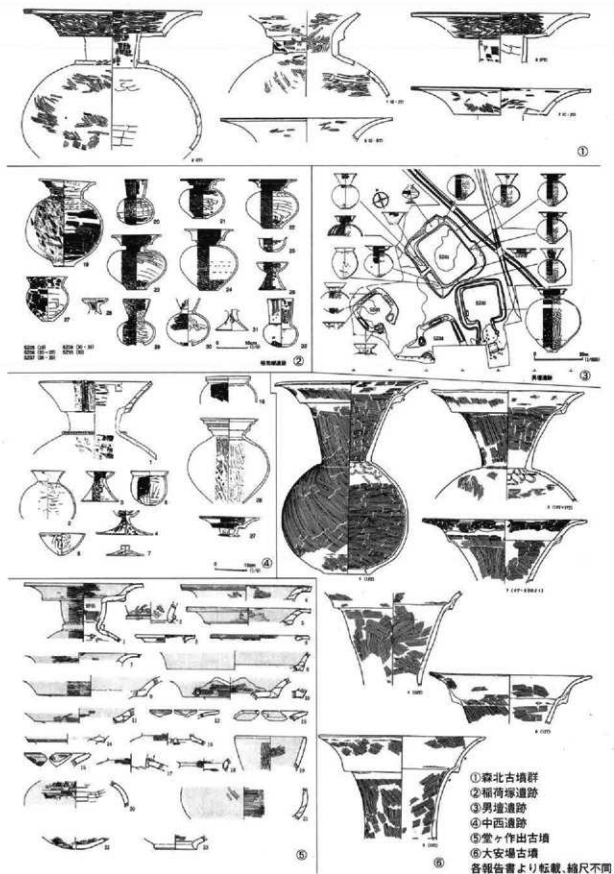
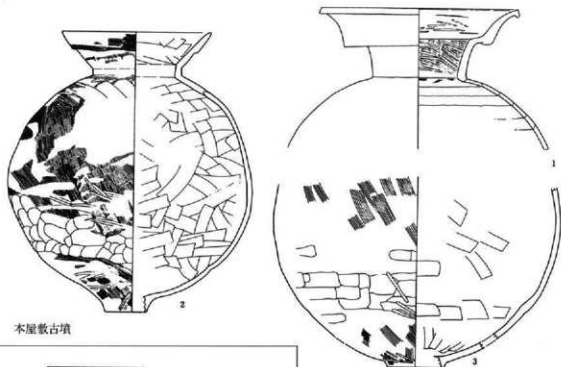
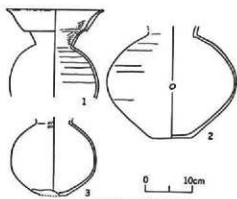


図121 二重口緑壺出土例(1)



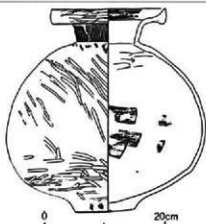
本屋敷古墳



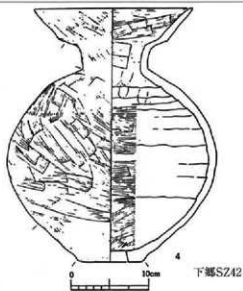
今熊野方形周溝墓



雷神山古墳



逸見塚古墳



下郷SZ42

図122 二重口縁壺出土例(2)

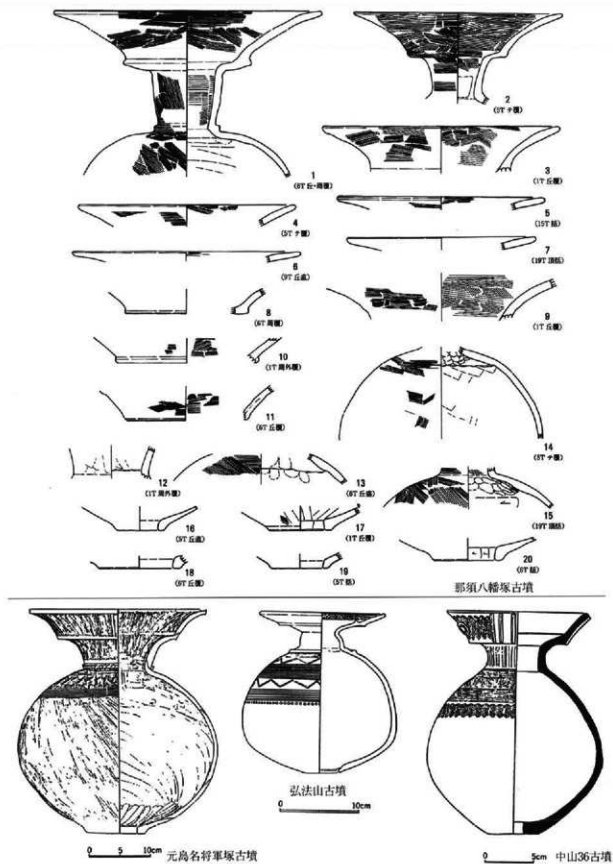


圖123 二重口縁壺出土例(3)

## (2) 土師器

二重口縁壺・底部穿孔壺以外に器台や高杯・壺・杯などが出土している。これらの出土した土器には出土場所によってまとまりが見られるようである。まず、墳頂平坦面から後方部斜面や周溝部を中心とした範囲からは器台や高杯などが出土し、16トレンチの前方部南側の周溝付近からは壺や杯が出土している傾向にある。

後方部を中心とした範囲から出土した土師器のうち底部穿孔壺、もしくは二重口縁壺を除いたものには器台と高杯・竹管状工具による円形浮文を有する破片などが挙げられる。いずれの資料も脚部・裾部を中心としたもので全体の器形が判断できるものは少なく、器種分類の面からも厳密な意味で器台と高杯を判別することは困難な状況にある。かろうじて全体が判断できるものには直線的にハの字に開く裾部を有する器台がある。受部は浅く貫通孔は見られないが器形から器台として判断されるものである。器面外面にはハケメ調整が施されている。この資料はくびれ部南側の周溝部から出土したものであるが、出土層位は墳丘流出土であることを考慮すると本来は墳丘上に位置していた可能性がある資料である。このような特徴を有する器台は東北地方土師器編年では塩釜式に属するものであり、更に細かく言えば辻綱年のⅢ-3の時期に相当する可能性があると考えられる。その他の資料のほとんどは墳頂平坦面から出土しており、二重口縁壺・底部穿孔壺と供伴関係にある可能性が高いもので、南小泉式の高杯に見られる柱実棒状の脚部を有するものではないことを考慮すれば、塩釜式の範疇で捉えることがで

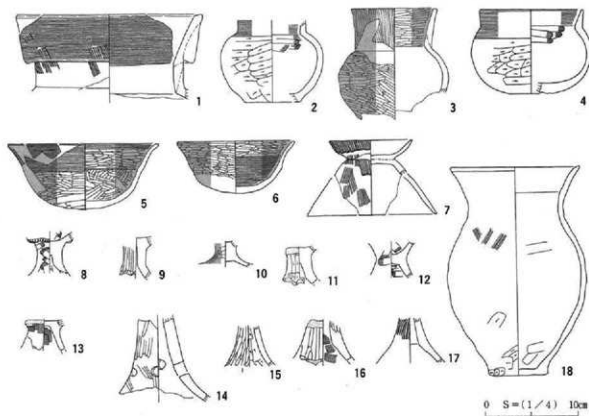


図124 桜井古墳出土土師器

きる資料である。これらの土器群は出土した場所は後方部墳頂平坦面を中心とする場所であることから、後方部上で行われた墳丘祭式に関連する遺物である可能性が高いと評価することができる。

前方部南側から出土した遺物には壺・杯・鉢がある。これらの土器は周溝のほぼ底面に近い付近から出土していることから、周溝が埋没する過程の比較的早い時期に周溝内に転落もしくは投棄された可能性がある資料である。これらの土器の特徴を見ると杯の底部はケズリによって整えられた丸底の底部から頸部付近までは強く立ち上がり口縁部は外反している。内外面に鮮やかな赤彩を施す。法量には大小がある。小型の壺は底部の形状は不明であるが丸みの強い体部とほぼ直立する口縁部が特徴的である。体部外面には横方向のミガキを施し、口縁部は縦方向のミガキを施し、外面には赤彩を施すものと平底状の底部に丸みの強い体部を有する。口縁部は上方に向かって直立するものがある。このような特徴を有する土器群は東北地方土師器編年住社式と並行関係にある舞台式に類似すると考えられ、古墳時代後期の所産であると思われる。これらの土器群が古墳時代後期のものであるとすれば、前方部南側の周溝は墳丘築造以後比較的長い間大きく埋没せずに存在していた可能性が考えられる。

また後方部から出土した土器に円形浮文を配する壺型土器の口縁部付近の資料がある。資料は破片のため詳細なことについては不明であるが、明瞭につまみ出された口縁端部と外方にむかって面をもつ口唇部が特徴的であり、断面形はT字状を呈する。円形浮文はこの外側を向いた口唇部に見られ、直径0.8cmほどの円形の粘土を張りその上から竹管状工具によって刺突を施している。桜井古墳では、円形浮文を付する土器はこの1点のみであり、その他の土器は二重口縁壺・底部穿孔壺がほとんどであり、この土器が墳丘にともなう土器の可能性は低いといわざるを得なく、墳丘築造の際に混入した可能性が高いと判断される。ただし、これまで、桜井古墳近辺からは棒状浮文を有する壺型土器の存在は知られていたが円形浮文を有する土器は初めての出土例となる。このことは桜井古墳を築造する以前には壺の口縁部を棒状浮文もしくは円形浮文によって加飾を行う人々が存在していたことを示しており、桜井古墳や上流佐野7号墳のように、群内でもっとも初めに墳墓の造営を開始した人々について知る手がかりとなるであろう。東北地方においては円形浮文を有する土器が出土した例は福島県壺ヶ作山古墳、中西遺跡などから出土しており、前者は新潟シンボ編年8期、後者は漆町編年7期の時期が与えられている。棒状浮文を有する土器は福島県大安場古墳などで確認されている。このように円形浮文を有する土器は中通り、浜通り地方では出土した例はない。

最後に前方部北側の17トレンチから出土した土器について触れておく。この土器については出土した層位は明確に捉えることはできなかったが、前方部の北側前端部が削平された部分の旧表土層から出土したとして判断している。つまり桜井古墳前方部掘削部分に堆積した土層ではなく、墳丘築造以前にこの場所に位置していた土器と考えられる。ただし、調査では住居跡のようなこの土器をとまなう遺構の存在は把握することができていないことを断ったうえで、この土器について見てみたい。この土器の形状は平坦な底部から緩やかに湾曲する体部が見られる。比較的長い口縁部は体部上半から外反して収まる。器面の調整は体部下半にナデもしく

はケズリ調整が断片的に施される。さてこの土器の器形的な特長は一見して弥生時代末期の「十王台式」土器を思わせる器形を呈していることである。ただし、器面には燃糸などの施文は施されてなく、土器自体の印象は土師器的である。この土器については詳細な検討が必要と思われ、ここでは詳しい言及を避けておきたいが可能性のひとつとしては、弥生土器から土師器への過渡期を示す可能性のある資料である可能性が考えられる。ただし現在の東北地方では古墳時代前期の土器群として認識されている塩釜式の成立は弥生土器との直接的な関係にはないと考えられていることを考慮すれば、この土器を土師器の初現段階のものとするれば非常に大きな問題を提示することになる。(荒 淑人)

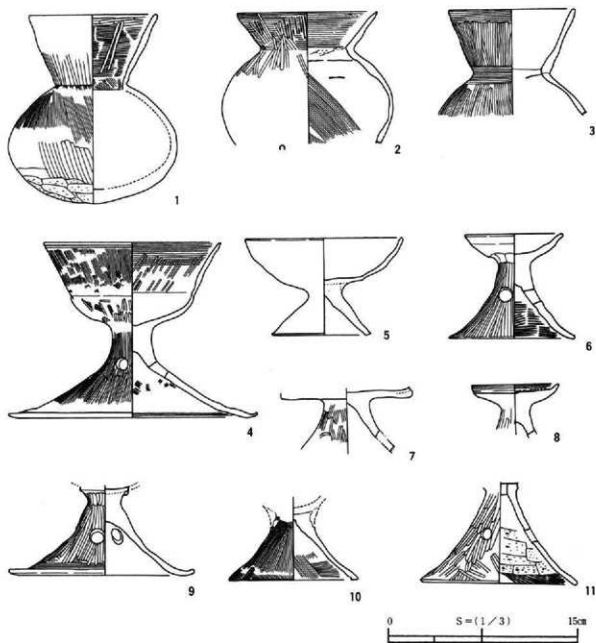


図125 高見町A遺跡出土遺物(1)



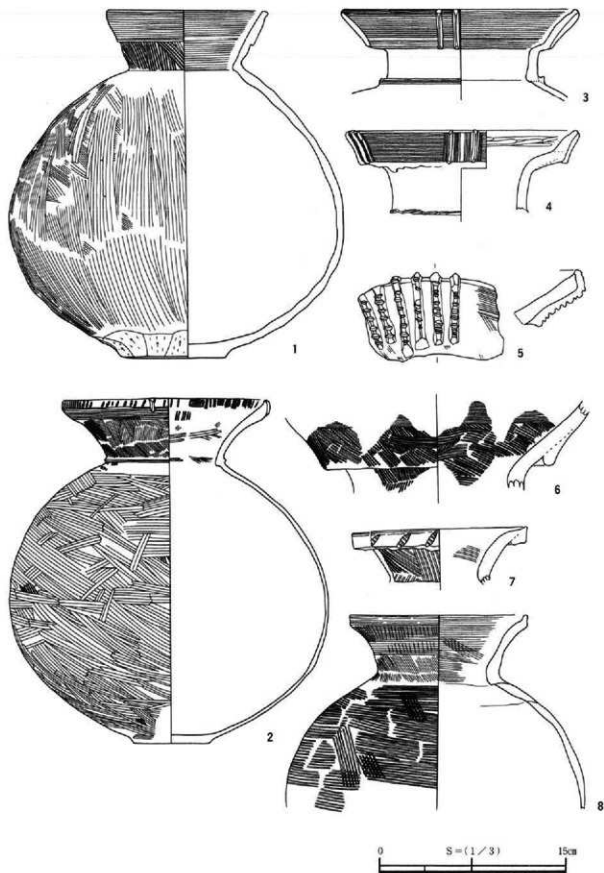


图126 高見町A遺跡出土遺物(2)

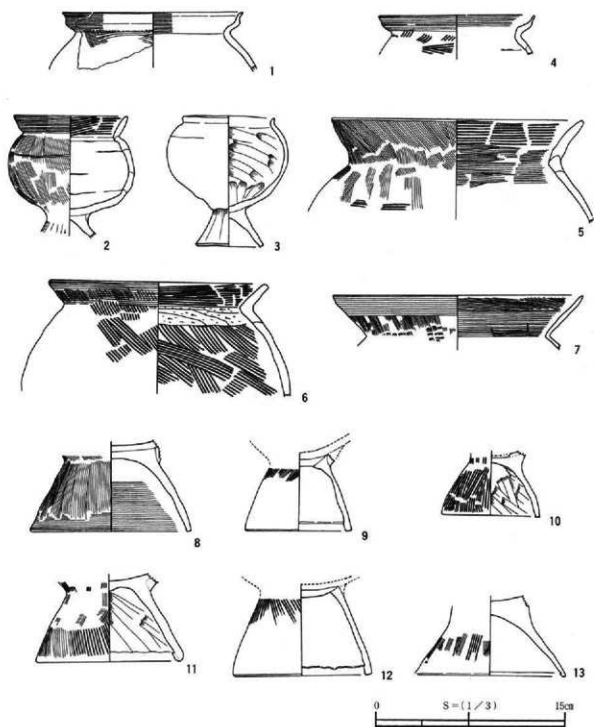


図127 高見町A遺跡出土遺物(3)

## (3) ロクロ土師器

15トレンチで出土した土師器の中には明らかに古墳時代のものでないものが存在している。それらの土器はロクロを使用して整形されたいわゆるロクロ土師器で「表杉ノ入式」に比定されるものである。表杉ノ入式は東北地方土師器編年を提示した氏家氏によって対馬式に後続する第7型式として宮城県塩釜市表杉ノ入貝塚出土の土師器群をもって標式とされている。表杉ノ入式の特徴は当初杯底部に糸切り痕を残すものに限定されて考えられてきたが、その後ヘラ切りや静止糸切りによる杯が共存することが明らかとなったため、現在ではロクロが使用されている土師器として定義されており、おおむね9世紀段階の土器群として考えられている。

この東北地方の9世紀段階に展開する表杉ノ入式は土器の9世紀前半段階と後半段階では土器の構成に違いが認められている。9世紀前半段階には、土師器杯・高台杯・蓋・鉢・甕、須恵器では杯・高台杯・蓋・高杯・長頸瓶・甕があり、土師器では杯と甕に非ロクロの製品が見られる。後半段階では前半段階の器種組成の中に新たに耳皿や皿が加わる。杯は底径が大きく内面には黒色処理と井桁状もしくは横方向のヘラミガキが施される。また底部の切り離し技法はヘラ切り・静止糸きり・回転糸きりが用いられ、再調整によるヘラケズリを施すものが多い。甕は長胴型的大型品と同張りの小型品が見られる。後半段階の杯では内面のヘラミガキが放射状の変化しているのが特徴である。

上記のような特徴をもつ表杉ノ入式であるが、桜井古墳15トレンチで出土した資料を見ると、大きな底形を有する杯はロクロを使用して整形されており、内面には黒色処理と明瞭な横方向のミガキが施される。底部の切り離し技法は回転糸切りにより、再調整として底部側辺部を中心にヘラケズリが施されている。また甕は長胴化の進んだ大型のもので体部上半にはロクロナデを残し、体部下半には縦方向のヘラケズリが施されており、表杉ノ入式期のものと見られるべき土器群であろう。また、桜井古墳から出土した土器群の特徴は表杉ノ入式の前半段階の特徴が非常に良く見られる土器群であることから、これらの土器群の年代は表杉ノ入式の9世紀前半段階のもと考えておきたい。

さて、これらの9世紀前半段階のもと考えられる土器群は15トレンチから出土していることは先述のとおりであるが、15トレンチは墳丘南側くびれ部の調査のために設けた調査区であり、周溝部の調査中に出土している。これらの土器をもつ遺構は長軸2.8m×短軸2.1mを測る長方形の土坑状遺構であり、遺構のほぼ底面から土器を廃棄したかのような状態で出土している。

当地方における9世紀頃の状況は、新田川下流域の北岸に所在する泉庵寺跡の規模が最も大きくなる時期である。泉庵寺跡は古代陸奥国行方郡家に比定される遺跡であり、これまでの発掘調査で群庁院や正倉院が確認されている。特に郡庁院は7世紀段階に造営が開始され、9世紀末もしくは10世紀段階に廃絶されるまで、8世紀代・9世紀代と大きく2度にわたる建物配置の変更を行っていることが確認されている。この変遷の中で9世紀代に登場する郡庁院は規模並びに建物構造から最も大規模に整備された時期であることが判明している。

一方当時期の集落遺跡については調査例が少なく詳細な検討が行えるほどの資料の蓄積はな

いものの、泉麿寺跡から約3km離れた桜井古墳で9世紀代の人々の生活痕跡が発見されたことは、確実に9世紀段階の人々の生活拠点が桜井古墳近辺まで広がっていたことを物語っており、今後この周辺で平安時代の集落に関係する遺構が発見される可能性は非常に高い。

また出土したロクロ土師器の中には墨書が認められる杯がある。墨書は「佛」「内中」「□」と書かれており、いずれも比較的濃い墨でかかっている。「佛」は明らかに寺院や仏教に関連するものであり、この地に平安時代の集落が営まれていたとすれば集落に関連する寺院・仏教に関する遺構の存在が推定される。このことは、福島県江平遺跡で仏教に関連した墨書が書かれた木簡が集落遺跡から出土したことが示すように、官衙関連施設以外の一般集落にも仏教が浸透していたことを想定させる資料である。

#### (4) 縄文土器

出土した縄文土器は古くは縄文時代早期末葉の貝殻条痕文土器である素山Ⅱa式から縄文時代後期初頭の三十稲葉式にかけた時期のものであり、縄文時代晩期を除いた時期のものが出土している。元来、この地は弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が多く出土することから、弥生時代から古墳時代にかけての時期の遺跡であると考えられてきたが、今回の縄文土器の出土は、当遺跡付近には弥生時代以前の縄文時代から人々の生活の拠点になっていたことが明らかとされ、当遺跡の見方を大幅に見直さなければいけないであろう。

さて、今回出土した縄文土器で最も古い時期に位置付けられるものは素山上層1式と言われ、いわゆる貝殻条痕文系土器である。素山式土器は宮城県小牛田町に所在する素山貝塚を標式遺跡とし、伊東信雄氏によって提唱された。土器の胎土には比較的明瞭な繊維の混入が認められている。原町市内に所在する遺跡でこの土器が出土している例は、馬場滝ノ原遺跡からの出土がある。滝ノ原遺跡は市内西部域の丘陵に近い場所に営まれた集落遺跡で、桜井古墳のように海岸に近い場所に所在する遺跡とは立地的な相違が見られる。

縄文時代早期末葉に位置付けられる素山上層1式の次段階の土器としては大木式2a式土器が出土している。大木式土器は宮城県大木町貝塚から出土した土器群を指し、大きくは東北地方中・南部の前・中期の土器として理解されており、1式から10式に分けられている。

この中で大木式Ⅱa式の特徴は深鉢が多く口縁・胴部形態が単純なものと、胴部がくびれるものがある。胎土には繊維が含まれ、半截竹管や齒歯状工具による波状・山形・連続刺突文が特徴的である。縄文は斜状・羽状・各種捺糸文が見られる。市内で大木2式が出土した例は風越遺跡・原遺跡・赤沼遺跡などがある。

大木2a式の次段階の資料は大木7式土器である。大木7式は縄文中期に位置付けられる土器である。器形は深鉢が種々鉢・壺などがある。文様は口縁部付近に集中する傾向があり平行沈線文間にキザミ目を施すもの、波状沈線文・連弧状入組文がある。また口縁部に縦位の捺糸文・斜縄文が施文される。市内における大木7式の土器は押釜前田遺跡・馬場石倉遺跡・上北高平植松遺跡などで出土している。

大木10式は、中期後葉に位置付けられるもので、3段階に分けられている。大きくは深鉢・

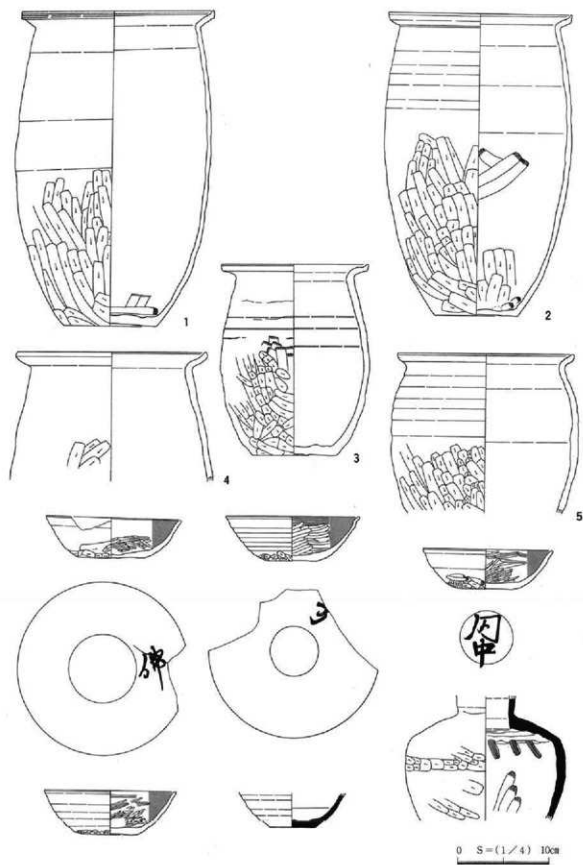


图128 桜井古墳出土土器

浅鉢・注口土器がある。1段階は器面全体に沈線や隆線で「S」「C」「U」字状を描き、内部に縄文を充填する。2段階は1段階の文様が胴上部に限定されたり、横に連結されたりする。3段階は文様が胴上部に限定され、隆線に沿って刺突が加えられたりする。市内では馬場下荒井遺跡・原遺跡などで出土している。

この他、桜井古墳群に隣接する高見町A遺跡では縄文時代晩期の住居跡が確認されており、当地には縄文時代全般を通じて人々が生活を営んでいたことが明らかとなった。

#### (5) 桜井式土器

出土した弥生土器の大半はこの桜井古墳が所在する一帯から出土する桜井式土器がもっとも多い。桜井式土器については伊東信雄氏によって線間の狭い2～3本同時施文土器を桜井式と称すべきと提唱され、東北地方南部における弥生時代中期後葉に位置付けられた。他の土器との編年的な関係で言えば、山草荷・川原町口式よりは新しいものの時期のものであると考えられている。また、故竹島国基氏は幾度も渡る踏査を行い桜井式土器とともに石砲丁や太型蛤刃石斧・扁片刃石斧・石ノミ・有角石斧・石鋏などを採集している。

さて今回の発掘調査で出土した弥生土器の多くには竹管状工具によって施された文様が見られる。文様は同心円文もしくは斜行しており山形文や菱形文を構成していた可能性が高い。この中で比較的全体が判断できる資料を持って、桜井式土器についてまとめておく。

今回の調査で出土した桜井式土器で全体がわかる状況で出土したものは、くびれ部北側の後方部西斜面下段平坦面付近で出土した壺型土器がある。この壺型土器は旧表土層を掘り込んだ掘方のなかに口縁部を下に向けたいわゆる倒置状態で埋設されたものである。壺の頸部から口縁部にかけて範囲と底部を中心とする範囲については残存してなく、口縁部については埋設する時点ですでに欠損していたものとおもわれ、底部付近においては桜井古墳の墳丘築造の際もしくはくびれ部を横断する掘削によって削平されたものと考えられる。このような桜井式の壺を土坑内に埋設した例は近年の市内の発掘調査によって徐々に確認例が増えてきている。近年の発掘調査では平成11年に実施された桜井古墳群上洪佐支群7号墳の発掘調査では、周溝の外側付近で底部を底に向けた正置の状態で見出されている。また法幢寺跡でも土坑内に埋設された桜井式の壺が見出されている。このように桜井式の壺を埋設する例は新田川を中心とした範囲で確認例が増えており、また鹿島町との行政境に位置する低位丘陵上の南入A遺跡などでも検出例が報告されている。このことは桜井遺跡が新田川南岸に所在していることから当然のことと思われるが、法幢寺跡は新田川北岸の丘陵裾部に位置し、南入A遺跡は標高50mの低位丘陵上に所在している状況を見ると、弥生時代の人々の生活が新田川流域を中心とした比較的広い範囲にわたっていたことを示している。

さて、このような桜井式期において土坑内に壺を埋設する例は橋葉町天神原遺跡で確認されている。天神原遺跡は弥生時代中期の標式遺跡になっており、この遺跡から出土する土器は伊東信雄氏によって天神原式土器として命名されている。天神原遺跡では天神原式土器の壺を土器棺として埋設していることが確認されている。確認された土器棺墓は合計24基を数え、その

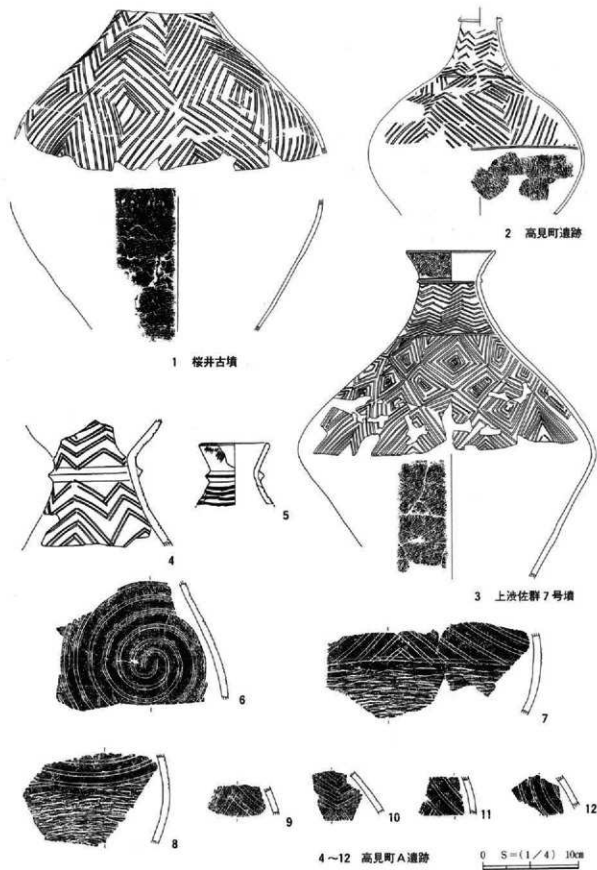


图129 桜井式土器出土例

ほかに47基の土塚墓が発見され、これらの埋葬施設は顕著なまとまりをみせており、意識的に墓域を形成していることが確認されている。このような事例をみると、桜井古墳で検出される壺の埋設は非常に点的なあり方を示しており、天神原遺跡のような明確な墓域の存在を見ることはできない状況にあり、現段階ではこのような壺の埋設を土器棺墓として判断する積極的な根拠は乏しいと言わざるを得ない。ただし南入A遺跡では土坑内に埋設された2个体分の壺型土器を上下にあわせた状態で検出されており、乳児もしくは胎児の墓であると評価されている。今後、桜井古墳近辺の調査によってはこれらの点的なあり方を示していた土器を埋設した遺構が墓域を形成する可能性は残されており、これまで発見された土器埋設遺構と称した遺構が土器棺墓と判断される可能性は残されていると考えられる。

#### (6) 樹形罎式土器

今回の調査で出土した弥生土器の中には弥生時代中期後葉の桜井式土器以外に樹形罎式土器が含まれていた。樹形罎式は1925年に長谷部言人・山内清男両氏によって調査された宮城県多賀城市樹形貝塚出土の土器が標式とされており、また山内清男氏によって日本で最初に初圧痕土器が確認されたことは良く知られていることである。

樹形罎式土器の分布は仙台平野を中心に福島県浜通り地方・阿武隈川下流域・北上川下流域に見られる。器種は、甕・深鉢・鉢・台付鉢・高杯・壺によって構成され、甕・壺にともなう蓋がある。文様構成は非常に多様で、充填縄文手法・磨消縄文手法が発達しており、連結三角文・連弧文・渦巻文・同心円文・鏝形文などが展開する。縄文帯には細かなLR縄文・付加条縄文・擬似縄文などが見られる。

桜井古墳から出土した資料を見ると、文様構成については破片のために判断することは困難であるが、磨消縄文手法によって文様が描かれており、無文帯の部分は丁寧なミガキが行われていることがわかる。現在までの原町市では当桜井古墳並びに桜井遺跡からは樹形罎式併行の南御山Ⅱ式が若干出土しているに留まっており、この時期の集落や社会構造に関してはほとんど判明していないのが現状である。しかし、今回の発掘調査で遺構にともなわないうまでもまった数の樹形罎式土器が出土したことは、この地に樹形罎式期の集落が存在していたことを物語っており、今後桜井古墳の周辺地域で桜井式期以前の集落跡が発見される可能性は非常に高いと考えられる。したがって、この地には弥生時代中期後葉の桜井式期以前の樹形罎式樹形罎式には確実に集落が存在していたと考えられ、弥生時代の社会構造の解明や、後出する桜井式期への変化、弥生時代終末期の十王台式期への変化、しいては弥生社会から古墳社会への時代的変遷を解明するためには非常に重要な発見を得ることができたものと考えている。また、当地から多量に出土する弥生時代の石器群が桜井式以前の樹形罎式にともなう可能性も考えられ、今後の研究に際し大きな成果を得ることができたと評価されよう。

このような成果とともにこの地では縄文時代早期末葉から縄文時代晩期にかけての人々の生活の痕跡や、弥生時代中葉から古墳時代、平安時代、近世まで連続と人々の生活の痕跡が発見されているが、弥生時代前期から中期前葉にかけての人々の生活の痕跡が途絶えている事実がうか



がえる。このことが、原始古代社会のなかでどのような状況を示しているのかについて今後の研究課題として提示し、今後の発掘調査によって解明されることを期待しておきたい。

### (7) 石器

今回の調査では、桜井古墳に供献された底部穿孔壺並びに二重口縁壺の出土に目を奪われがちであるが、それ以外に比較的まとまった数の弥生時代の石器群が出土しており注目に値する。出土した石器群は遺構にともなうものではなく、すべて表面採集ならびに表土から出土しているものであるが、石器とともに出土した土器は埴形甕式から桜井式土器のものであることから、これらの石器群は弥生時代中期埴形甕式もしくは桜井式の土器にともなうものである可能性が高いと考えられる。

桜井古墳が所在する現在の高見町・大字桜井地内からは多量の弥生時代の石器や弥生土器が収集されており、鹿島町天神沢遺跡から採集された資料と比較検討がなされている。この検討では、天神沢遺跡、ならびに桜井遺跡から出土する石器には①石器組成は石庖丁・石鍬・打製石斧・扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・ノミ型石斧などが含まれ、両遺跡間の石器組成については大きな差は認められない。②両遺跡から出土する石庖丁は基本的に「半月形外湾刃」を呈するものであるが、天神沢遺跡から出土する石庖丁は打製のものが多いのに対して、桜井遺跡では打製のもの全く見られない。③石鍬では天神沢遺跡から出土する幅広で、刃部に撥状の角部をもつ石鍬の形態をもつもの、棒状の形態をもつものは桜井遺跡では採集されていないこと。④扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・ノミ型石斧については両遺跡とも研磨が器体全体には見られないなどの特徴が指摘されている。

この鹿島町天神沢遺跡採集品と桜井遺跡採集品の比較研究に基づき桜井古墳の発掘調査で出土した石器群を見ると、まず石器組成の面では収穫具（石庖丁）、農耕具（石鍬・打製石斧）、加工具（扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・石ノミ）が出土しており、天神沢遺跡・桜井遺跡出土の石器組成と全く同じ傾向を示している。各々の石器について見ると収穫具である石庖丁では完形品は1点でその他は未製品1点、破片3点という内容になる。完形品は半月形外湾刃を呈するもので天神沢遺跡・桜井遺跡から出土する形態と同様のものであると考えられる。器面には丁寧な研磨が施され、器面の穿孔は両面からの回転穿孔によって穿たれる。刃部の使用痕については理化学的分析を行っていないためにここでは触れないでおくが、ほぼ石庖丁としての形状が整っていることを考慮すると実際に石庖丁として使用された可能性が高いと判断される。他の破片資料についても、器面の調整・穿孔部の存在・刃部の形成などをみると、石庖丁として使用されていたものが何らかの原因で破損してしまったものと考えられる。ただし、1点であるが未製品と思われる資料が存在している。この資料は、器面に大きな剥離を残しており、器面の研磨並びに刃部の整形は一部の研磨で終了している。また穿孔も確認されていない点は上記資料とは大きく異なる点である。また、石器の厚さも上記の使用されていたと思われるものと比較すると、厚手で未製品であることはほぼ間違いのない。これまでの桜井遺跡で採集されている石庖丁には未製品のもの確認されず、剥離面を残す石庖丁の出土は天神沢遺跡に集中

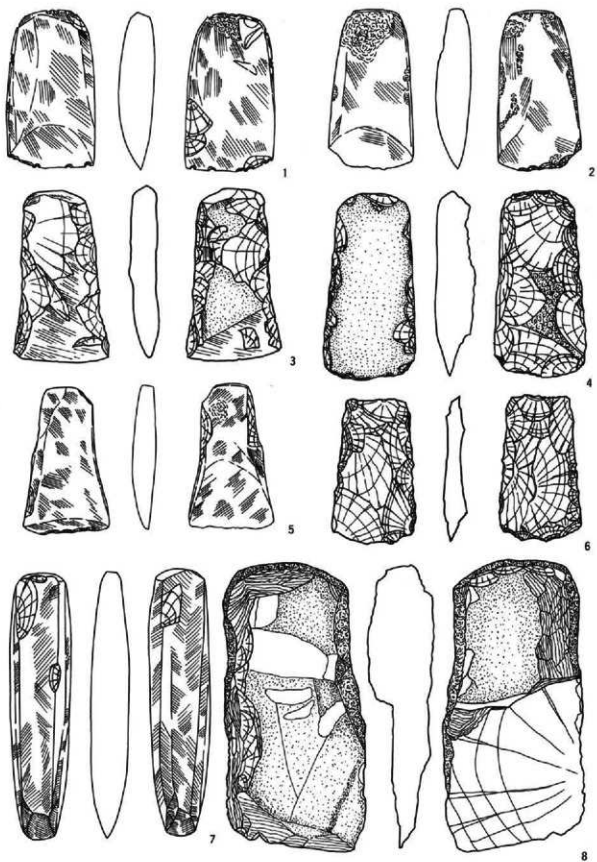


図130 桜井古墳出土石器(1)

する傾向が指摘されており、天神沢遺跡と桜井遺跡には遺跡の性格の相違が想定されてきたが、この未製品の石庖丁が出土したことは、両遺跡の性格について再考しなければならないと思われる。

農耕具である打製石斧並びに石鎌では石鎌1点に対して打製石斧は5点が出土している。石斧では2次加工によって長方形に仕上げられるもので、比較的小型の製品である。天神沢I a 1類・桜井1類に属するものと考えられる。素材は主として粘板岩を使用するものが多いようである。加工具として考えられる扁平片刃石斧・太型蛤刃石斧・ノミ型石斧では扁平片刃石斧が8点、太型蛤刃石斧2点、石ノミ2点・石斧2点が出土している。これらの磨製石器群は天神沢遺跡・桜井遺跡とも基部付近には器面の研磨は器面全体に及ばず、基部付近では剝離を残す傾向があり、今回の調査で出土した資料も類似した状況を示している。

このように、桜井古墳から出土した石器群は、天神沢遺跡、桜井遺跡から出土する石器群の組成や石材などの面で非常に類似した状況にあり、これまでの研究を補強する内容を得ることができたことは大きな成果のひとつであるが、石庖丁の分布においては桜井遺跡内においても未製品の石庖丁が存在している事実を加えることができた点は、今後両遺跡の性格や関係を解明するうえで、重要な知見を加えることができたと考えられる。また、これらの石器群のなかには石鎌のように武器に関するものは含まれず、すべて農耕や生産に関する内容のものである。このことはこの地域から多く出土する弥生時代中期の櫛形甕式から桜井式土器の時代には安定した農耕社会が確立していたことを示しており、この時期の社会基盤のうえに古墳社会が成立していった可能性が高いと考えられる。

上述の磨製石器以外にも縄文時代の 状耳飾が出土している。 状耳飾は、縄文時代前期を中心とした時期に見られる装身具であり、その形態は指貫形・金環形・ 状へと変化し、最も古い形の指貫形は縄文時代早期から前期初頭に出現したと考えられている。桜井古墳から出土した 状耳飾は、後方部東斜面の墳丘流出土中から出土しており、墳丘築造時に墳丘盛土中に混入したものであると考えられる。この 状耳飾の残存率は $\frac{1}{2}$ 程度でありいわゆる 状型を呈するものである。原町市内での 状耳飾の出土は、深野宮平遺跡・馬場滝ノ原遺跡・同原遺跡などの縄文時代の集落跡から採集されているが出土例は少ない。この桜井古墳から出土した 状耳飾は新たに当地方における縄文期における人々の生活を解明するための資料に加えることができたと評価しておきたい。

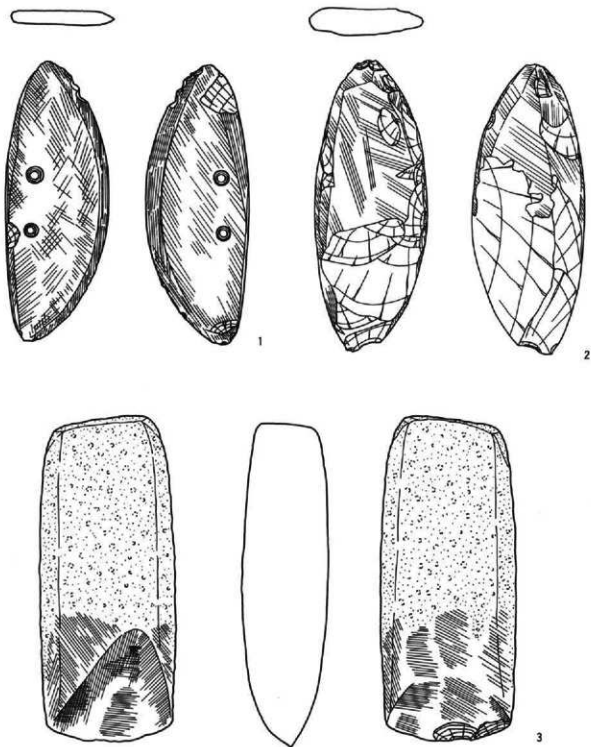


図131 桜井古墳出土石器（2）

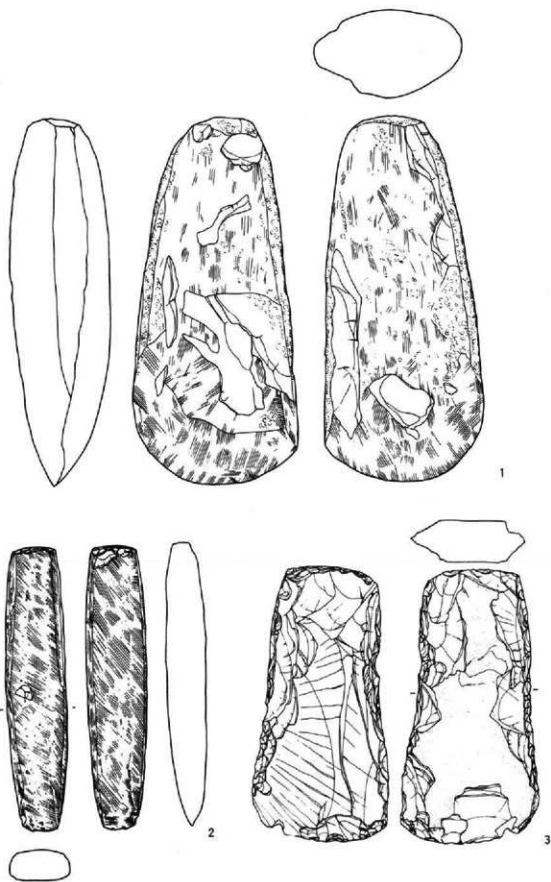


図132 桜井遺跡出土石器（1）

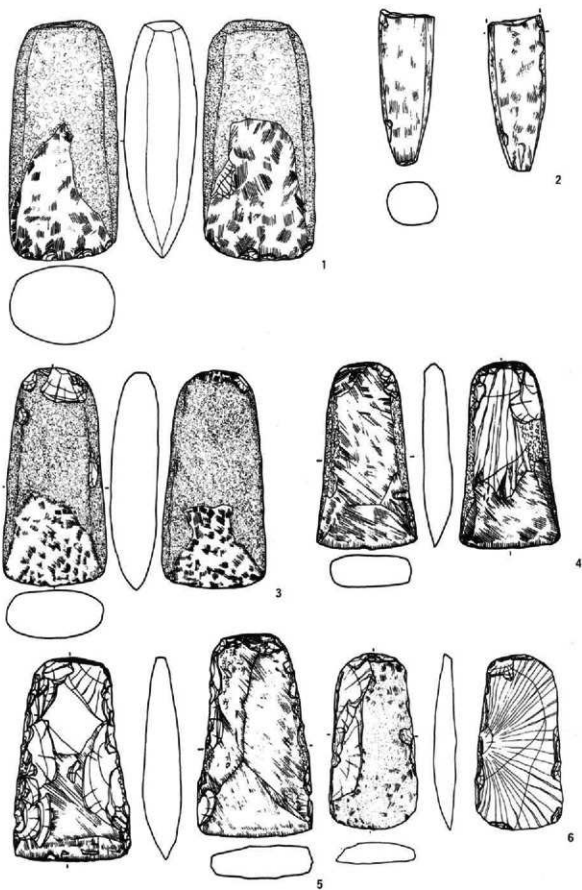


図133 天神沢遺跡出土石器 (1)

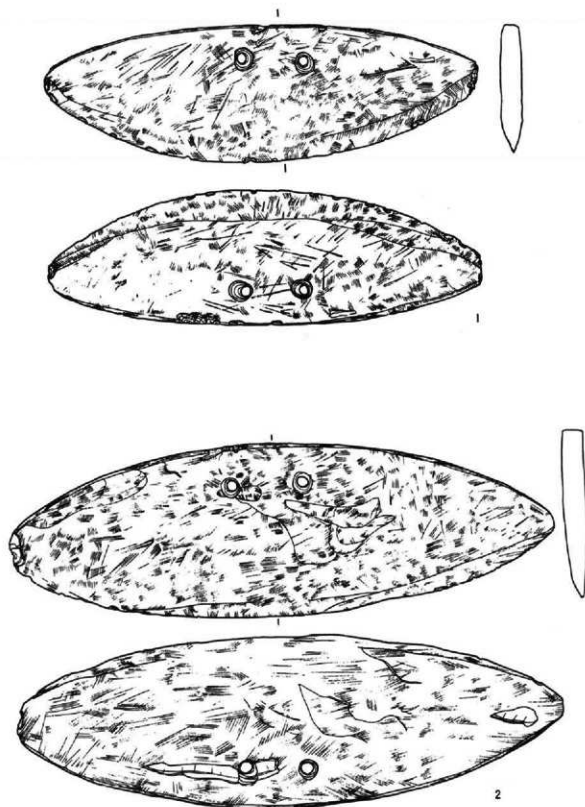


圖134 椽井遺跡出土石器(2)

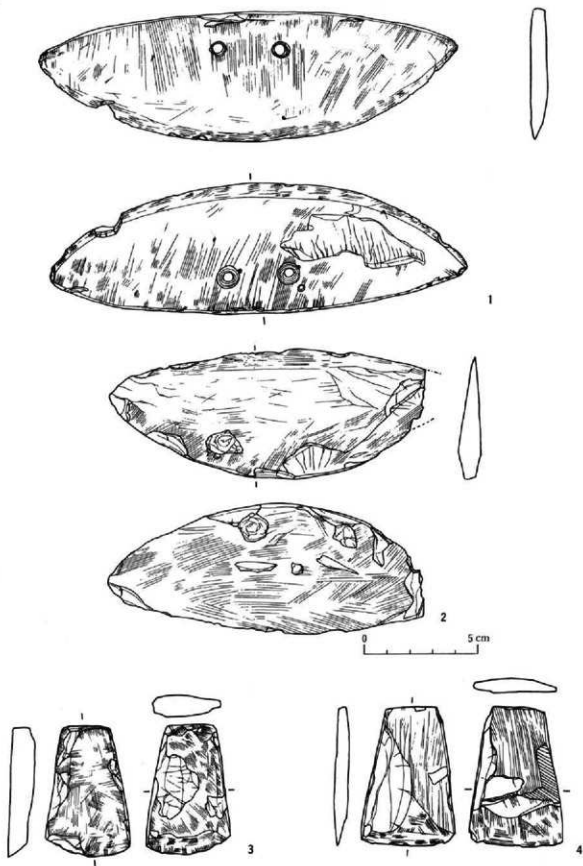


図135 桜井遺跡出土石器(3)



## 第5節 物理探査と発掘調査

今回の桜井古墳の発掘調査においては、調査以前に非接触手法による物理探査を実施することができた。物理探査は委託業務のほかに学術研究による探査がおこなわれ、結果的には2回の物理探査を実施することができたため、これらの物理探査の成果と発掘調査の成果について触れておきたい。今回の物理探査では2回の地中レーダー探査・赤外線カラー空中写真撮影・電気探査が行われている。探査の第1の目的は発掘調査を実施することができない埋葬施設の位置や内容に関する情報を得ることである。

まず、桜井古墳の墳丘構造、周溝範囲の探査は赤外線カラー空中写真撮影、地中レーダー探査で行われている。この探査成果については付章物理探査で詳しく記載しているが、物理探査の成果と、考古学的な手法を用いた調査成果に若干の相違が見られたと言わざるを得ない。

まずは周溝の範囲である。探査では前方部南側、前方部北側の周溝は幅7m前後の周溝が墳丘の平面形に沿うような形で捉えられているが、発掘調査では探査によって周溝外周が位置していると想定された付近では周溝外周は検出されず、北側では段丘崖まで、南側では野馬土手まで広がる周溝が広がっていることが確認されている。

第2に後方部墳頂平坦面に位置する墓壇並びに埋葬施設の位置である。探査では後方部墳頂平坦面のほぼ全域に東西11m×東西16mの長辺を墳丘主軸線に直交した墓壇が位置しており、その内部に2基の粘土施設をともなう埋葬施設が存在していると解析されているが、発掘調査では墳丘主軸線に平行に長辺をもった墓壇と、2基の陥没坑が確認されている。

このように今回の物理探査と発掘調査の成果では、若干の矛盾が生じていることが明確となった。

一方、地中の変化を良好に把握されている箇所も認められている。それは、前方部南側前端付近において周溝が途切れている様子が認められたことである。周溝の幅については相違が認められるものの、発掘調査では、前方部南側で周溝が途切れ陸橋状の施設が存在している様子が検出されたことは、物理探査ではこの付近の地中変化を概ね把握できた証拠であると評価することができる。また後方部北斜面における墳丘平坦面の探査では墳丘の2箇所に平坦面の存在が認められ、発掘調査の結果でもほぼ同じ位置で平坦面を検出することができたことは、後方部北斜面の構造を明確に把握することができたものと評価されよう。

このように、今回の物理探査では地中の変化を明確に把握できた部分と異なる結果が得られた部分が認められたと言わざるを得ない。物理探査は発掘調査が困難な場所や遺跡に対して、地中の遺構の存在や状態に対する情報を得ることを目的に実施される場合や、発掘調査の前段に調査の方向性を決めるための事前調査として用いられることが多く、遺跡の立地や条件、遺跡の性格によって探査結果に若干の相違が現われることがあるとは思われるが、探査の成果が地中の変化を正確に把握されない場合もあると言わざるを得ない。したがって、遺跡に対して物理探査を実施する場合には、物理探査と発掘調査を併用し多角的な検討を行う必要があると思われる。つまり、物理探査によって得られた成果を、考古学的な手法を用いた検証を行えば、地中に存在する遺構の状況をより正確に把握することが可能となり、物理探査の探査成果をよ

り確かなものとして提示することが可能となるであろう。

(荒 淑人)

＜参考文献・引用文献＞

- 大塚初重 1956 「前方後方墳の成立とその性格—東北地方の前方後方墳—」『戦国史学』6号 明治大学  
 氏家和典 1957 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』東北史学会  
 竹島國基他 1965 「原町市高林古墳群調査報告書」原町市教育委員会  
 原町市史編纂委員会編 1968 「第1章先史時代」「第2章古墳時代」『原町市史』  
 目黒吉明他 1969 「第2章 縄文時代」『福島県史』1 原始・古代・中世 福島県  
 渡部一雄他 1974 「羽山装飾横穴冨調査概報」原町市教育委員会  
 高崎市教育委員会 1981 「元島名将軍塚古墳」  
 宮川 渉 1983 「前方後円(方)墳の設計と尺度」『季刊考古学』3号雄山閣  
 綱干善教 1983 「墓地の選定と墳形の選択」『季刊考古学』第3号雄山閣  
 竹島國基編 1983 「天神沢」竹島コレクション考古図録第1集  
 大熊町史編纂委員会編 「大熊町史」第2巻資料 大熊町  
 川西町教育委員会 1984 「天神森古墳」  
 興野義一 1984 「大木式土器について」『宮城の研究Ⅰ』清文堂  
 須藤 隆 1984 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究Ⅰ』清文堂  
 氏家和典 1984 「宮城の古墳」『宮城の研究Ⅰ』清文堂  
 丹羽 茂 1985 「今熊野遺跡Ⅰ—古代編—」『今熊野遺跡』宮城県教育委員会  
 伊藤玄三他 1985 「本屋敷古墳の研究」法政大学考古学研究室  
 玉川一郎 1985 「国指定史跡桜井古墳範囲確認調査報告書」原町市教育委員会  
 福島県原町農地事務所編 1985  
 「原町地盤沈下対策事業誌」福島県原町農地事務所・福島県原町地盤沈下対策事務所  
 三木文雄 1986 「那須駒形大塚」吉川弘文館  
 芳賀英一 1987 「日本への弥生土器の文様」『季刊考古学』第19号  
 田中 敏 1987 「福島県内における古墳時代前期土器群の様相について」『福島県立博物館紀要1』  
 福島県立博物館  
 伊勢野久好他 1988 「東海の前方向後方墳」古代第86号早稲田大学考古学会  
 須藤 隆 1988 「東北地方における縄文と弥生の境」『季刊考古学』第23集 雄山閣  
 植葉町史編纂委員会 1988 「植葉町史」第2巻自然・考古・古代・中世・近世資料 植葉町  
 赤塚次郎 1988 「東海の前方向後方墳」『古代86号』早稲田大学考古学会  
 甘粕健他 1989 「保内山王山古墳群」新潟大学考古学研究室  
 久保哲三 1990 「下野 茂原古墳群」  
 赤塚次郎他 1990 「廻間遺跡」愛知県埋蔵文化財センター  
 和田聡・高橋和 1990 「宮東遺跡・中西遺跡・男境遺跡」会津坂下町教育委員会  
 赤塚次郎 1992 「前方後方墳」『季刊考古学』第40号雄山閣  
 須藤 隆 1992 「弥生社会の成立と展開」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 辻 秀人 1992 「古墳の変遷と画期」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 相原康二 1992 「古代の集落と生活」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 今泉隆雄 1992 「律令国家とエミシ」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 桑原滋郎 1992 「城柵を中心とする古代官衙」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 平川 南 1992 「律令支配の諸相」『新版古代の日本』⑨東北・北海道 角川書店  
 辻秀人・菊地芳朗 1993 「会津盆地の前期古墳」『磐越地方における古墳文化形成過程の研究』

- 利根川章彦 1993 「二重口緑壺小考 上」『調査研究報告 第6号』埼玉県立さきたま資料館  
 利根川章彦 1993 「二重口緑壺小考 下」『調査研究報告 第7号』埼玉県立さきたま資料館  
 吉田博行他 1993 『亀ヶ森古墳』会津坂下町教育委員会  
 菊地芳郎他 『企画展 会津大塚山古墳の時代』福島県立博物館  
 甘粕健他 1994 『東日本の古墳の出現』山川出版社  
 加藤晋平他 1994 『縄文文化の研究』3 縄文土器Ⅰ 雄山閣  
 加藤晋平他 1994 『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣  
 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年 その1」『東北学院大学論集26号』  
 辻 秀人 1995 「東北南部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集27号』  
 吉田博行他 『杵ヶ森古墳』会津坂下町教育委員会  
 比田井克仁 1995 「二重口緑壺の東国波及」『古代100号』早稲田大学考古学会  
 郡出比呂志他 1996 『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会・雪野山古墳発掘調査団  
 大川清他 1996 『日本土器事典』雄山閣  
 野々口陽子 1996 『いわゆる畿内系二重口緑壺の展開』『京都府埋蔵文化財論集第3集』  
 甘粕健他 1996 『堂ヶ作山古墳Ⅲ』会津若松市教育委員会・堂ヶ作山古墳調査団  
 辻秀人他 1996 『大塚森古墳』『1996年度宮城県遺跡調査報告会資料』  
 辻 秀人他 1996 『桜井高見町A遺跡発掘調査報告書』  
 東北学院大学文学部史学科ゼミナール・原町市教育委員会  
 鈴木文雄他 1996 『高見町A遺跡』『原町市内遺跡発掘調査報告書2』原町市教育委員会  
 真保昌弘 1997 『那須八幡塚古墳』小川町教育委員会  
 柳沼賢治他 1997 『大安場古墳群』第1次調査 郡山市教育委員会  
 馬日順一他 1997 『東北地方の弥生土器』『弥生時代の研究』4 弥生土器Ⅱ 雄山閣  
 鹿島町史編纂委員会編 1999 『鹿島町史 原始・古代・中世』鹿島町  
 柳沼賢治他 1998 『大安場古墳群』第2次調査 郡山市教育委員会  
 吉田博行 1998 『鎮守森古墳』会津坂下町教育委員会  
 古屋紀之 1998 『墳墓における土器配置の系譜と意義』『駿台史学104号』  
 青山弘樹 1998 『土器①東北南部』『シンポジウム 前期古墳から中期古墳へ』  
 第3回東北関東前方後円墳研究大会  
 土井健司・吉田博行 1999 『森北古墳群』創価大学・会津坂下町教育委員会  
 柳沼賢治他 1999 『大安場古墳』第3次調査 郡山市教育委員会  
 菊地芳郎・青山弘樹 1995 『東北』『前方後古墳を考える 第1分冊』第3回東海考古学フォーラム  
 宇野隆男他 1998 『象鼻山1号墳-第2次発掘調査の成果-』  
 養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室  
 君島俊行 2000 『関東地方における壺型埴輪の成立過程-伊勢型二重口緑壺を中心として-』  
 『土曜考古学研究会』  
 佐藤祐太 2000 『高見町A遺跡』原町市教育委員会・(株)福建コンサルタント  
 藤沢 敦 2000 『桜井古墳群』『季刊考古学71号』雄山閣  
 比田井克人 2001 『関東における古墳出現期の変革』雄山閣  
 辻 秀人 2001 『東北の弥生土器と土師器』『アジア文化史研究1号』  
 佐藤敏幸 2001 『赤井遺跡』矢本町教育委員会  
 鈴木文雄・吉田陽一 2001 『桜井古墳群上流佐支群7号墳 発掘調査報告書』原町教育委員会  
 山内幹夫他 2001 『馬場前遺跡』第1次調査 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター・  
 日本道路公団  
 (年代順)



1 上空からみた桜井古墳周辺



1 桜井古墳全景（南から）



2 桜井古墳全景（真上から）



1 整備後の桜井古墳（西から）



2 整備後の桜井古墳（西から）



1 平成10年度調査状況 1 (北から)



2 平成10年度調査状況 2



1 平成11年度調査状況（南から）



2 平成11年度調査状況（北西から）





1 平成11年度調査状況（真上から）



2 平成11年度調査状況（北西から）



1 平成11年度調査状況（後方部）



2 平成11年度調査状況（前方部）



1 平成12年度調査状況（真上から）



2 平成12年度調査状況（後方西から）



1 11 T 調査状況



2 11 T 調査状況



1 後方部北東コーナー検出状況



2 後方部北東コーナー検出状況



1 12T調査状況



2 12T調査状況



1 14T 後方部南東コーナー検出状況



2 14T 後方部南東コーナー検出状況



1 18Tくびれ部検出状況



2 18Tくびれ部検出状況





1 15Tくびれ部検出状況



2 15T前方部南斜面



1 15T後方部西斜面（北から）



2 15T後方部西斜面（南から）



1 15Tくびれ部堆積状況



2 15T 礫出土状況



1 16T調査状況



2 16T 前方部西斜面



1 16 T 前方面圆形遺構



2 16 T 野馬土手基底部



1 16T 前方部西斜面



2 16T 前方部西斜面



1 16T 前方部南侧斜面



2 16T 烧土土坑



3 16T 前方部南侧周溝



4 16T 前方部南侧周溝土器出土狀況



1 16T 前方部西侧周溝内周



2 16T 前方部西侧周溝外周





1 17T 前方部北側境丘ケズリ出し



2 前方部北側前端検出状況



1 17T 前方部検出状況



2 17T 前方部周溝外周



1 18T 後方部西斜面下段平坦面



2 18T 後方部西斜面第3斜面



1 18T 後方部北西コーナー



2 18T 後方部西斜面



1 18T 後方部北斜面



2 18T 後方部北西コーナー



1 19T 前方部北側境丘



2 19T 前方部境丘ケズリ出し状況



1 19T 前方部境丘検出状況



2 19T 前方部墳頂平坦面



3 19T 前方部境丘斜面



4 19T 前方部境丘斜面



1 20 T 前方形部南側境丘斜面



2 20 T 前方形部境丘掘削状況



3 21 T 後方形部南側境丘斜面



4 21 T 後方形部境丘斜面





1 21 T 後方部南斜面



2 21 T 後方部墳頂平坦面



1 21 T 後方部墳頂平坦面



2 21 T 後方部南斜面



1 21 T 後方部南斜面



2 21 T 後方部南斜面



1 21 T 後方部南斜面掘削部



2 21 T 後方部南斜面掘削部



1 21 T 後方部南側周溝



2 21 T 後方部南側周溝



1 22 T 後方部北斜面



2 22 T 後方部北側境頂平坦面



1 22 T 後方部北側斜面



2 22 T 後方部北側斜面



1 22T 後方部北斜面上段平坦図



2 22T 後方部北斜面上段平坦図





1 22T後方部北斜面上段平坦図(拡張)



2 22T後方部北斜面下段平坦図(拡張)



1 22T 後方部北斜面



2 22T 後方部北斜面土器出土状況



3 22T 後方部北斜面土器出土状況



4 23T 後方部東斜面



1 23T 後方部東側状況



2 23T 作業状況



1 23T 前方部→後方部



1 23T 後方部→前方部



3 16T・23T 前方部西側周溝



4 23T (A区) 後方部東側周溝



1 境頂平坦面検出状況



2 境頂平坦面検出状況



1 境頂平坦面 掘立柱建物跡檢出狀況



2 境頂平坦面 掘立柱建物跡調查狀況



1 陥没坑と土器出土状況



2 陥没坑と土器出土状況



1 1号陷没坑



1 1号陷没坑堆积状况





1 2号陷没坑



2 2号陷没坑



1 1号陷没坑火山灰检出状况



2 墓坑检出状况



1 墓道検出状況



2 墓道検出状況



1 墓道検出状況



2 墓道断ち割り状況



1 1号陥没坑検出状況



2 墓道検出状況 (H11)



3 1号陥没坑調査状況



4 墓道検出状況 (H11)



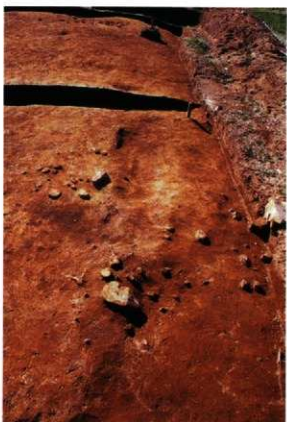
1 墳頂平坦面西邊



2 墳頂平坦面東邊



3 墳頂平坦面北邊



4 墳頂平坦面南邊



1 墳頂平坦面南東コーナー



2 墳頂平坦面北東コーナー



1 墳頂平坦面北西コーナー



2 24T周溝外周検出状況





1 墳頂平坦面墓墟状況



2 24T 周溝検出状況



3 墓坑・墓道検出状況



4 28T 調査状況



1 25T 検出状況



2 25T 検出状況



1 18T 土器埋設遺構



2 18T 土器埋設遺構



1 墳頂平坦面土器出土狀況



2 墳頂平坦面土器出土狀況



1 土器出土状况



2 土器出土状况



1 1号土坑土器出土状况



2 1号土坑土器出土状况



1 縄文土器 (1)



2 縄文土器 (2)



3 縄文土器 (3)・弥生土器 (1)



4 縄文土器 (4)・弥生土器 (2)



5 弥生土器 (3)



6 弥生土器 (4)



7 石器 (1)



8 石器 (2)



1 二重口緑壺(1)



2 二重口緑壺(2)



3 二重口緑壺(3)



4 二重口緑壺(4)



5 二重口緑壺(5)



6 二重口緑壺(6)



7 二重口緑壺(7)



8 二重口緑壺(8)





1 二重口綠壺(1)



2 二重口綠壺(2)



3 二重口綠壺(3)



4 二重口綠壺(4)



5 二重口綠壺(5)



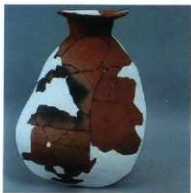
6 二重口綠壺(6)



7 二重口綠壺(7)



8 二重口綠壺(8)



1 二重口緑壺(1)



2 二重口緑壺(2)



3 二重口緑壺(3)



4 二重口緑壺(4)



5 二重口緑壺(5)



6 二重口緑壺(6)



7 壺



8 壺



9 土師器



10 桜井式



11 桜井式



12 桜井式



13 桜井式



1 鉢



2 杯



3 杯



4 器台



5 高杯



6 高杯



7 高杯



8 高杯



9 高杯



10 器台



11 器台



12 器台



13 器台



14 複合口縁壺



15 複合口縁壺



1 墨書土器(1)



2 墨書土器(2)



3 墨書土器(3)



4 墨書土器(4)



5 墨書土器(5)



6 墨書土器(6)



7 土師器杯



8 甕(1)



9 甕(2)



10 甕(3)



11 甕(4)



12 須恵器壺



13 須恵器杯



14 中世陶器



15 弥生ミニチュア土器



1 近世陶磁器(1)



2 近世陶磁器(2)



3 近世陶磁器(3)



4 近世陶磁器(4)



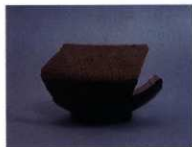
5 近世陶磁器(5)



6 近世陶磁器(6)



7 近世陶磁器(7)



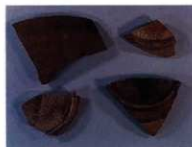
8 近世陶磁器(8)



9 近世陶磁器(9)



10 近世陶磁器(10)



11 近世陶磁器(11)



12 近世陶磁器(12)



13 近世陶磁器(13)



14 近世陶磁器(14)



15 玦状耳饰



16 管玉



17 管玉

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	くにせき さくらいこふん						
書 名	国史跡 桜井古墳						
副 書 名	史跡整備事業に伴う発掘調査						
シリーズ名	原町市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第30集						
編 著 者 名	荒 淑人・鈴木文雄						
編 集 機 関	福島県原町市教育委員会						
所 在 地	〒975-0012 福島県原町市三島町二丁目45番地 TEL. 0244-24-5284						
発行年月日	西暦2002(平成14年)年3月30日						
所収遺跡	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
国史跡 桜井古墳	福島県原町市 上洪佐字原畑	07206	37° 39' 50"	141° 00' 50"	20010507 ～ 20011129	1,920	史跡整備
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
国史跡 桜井古墳	古墳	縄文 弥生 古墳 近世	前方後方墳	縄文土器・弥生土器・打製 石器・磨製石器・土師器・ 須恵器・近世陶磁器		墳丘主軸長 74.5m 後方部3段築成 後方部無段	

---

原町市埋蔵文化財調査報告書第30集

国史跡桜井古墳  
史跡整備事業に伴う発掘調査

平成14年3月29日 発行

発行 福島県原町市教育委員会  
〒975-8686 福島県原町市本町二丁目27番地  
TEL (0244) 24-5284

印刷 株式会社鹿島印刷所  
〒979-0023 福島県相馬郡鹿島町鹿島字町159番地  
TEL (0244) 46-5555

---



R2100

GREEN SOY INK SYSTEM, INC. TOKYO